スティグマ

髪槍夜昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スティグマ

【Ｎコード】
Ｎ８８７２Ｎ

【作者名】
髪槍夜昼

【あらすじ】

赤い髪に赤い目と普通よりやや目立つ容姿の高校生、神無棺は無気力に毎日を過ごす今時の若者。

だが、神無棺は取るに足らない矮小なものではあったが、他人には無いモノを持っていた。

――――――――――

キャラが増えてきたので、混乱しない為に人物紹介を作りました。

第一話　脆弱な超能力者（前書き）

髪槍夜昼です。

バトルシーンがかなり苦手ですけど、どうか読んでください。

バトル系だけれどシリアスが少ないです。

第一話　脆弱な超能力者

「はぁ、面倒臭えな」

赤い髪に赤い瞳をした不良男子高校生、神無棺（カンナヒツギ）は呟いた。

その風貌でそれなりに目立つ棺は、不良の中でも、よく教師に目をつけられることがあり、

今日は授業をサボったことの罰として放課後の校庭の整備をさせられていた。

動かされたサッカーゴールを元の場所に移動させた時は他の人間の力も借りたがその後はずっと一人で校庭の整備をしており、

昨日の風で凸凹になった校庭に土を運び、穴を埋める作業を長い時間繰り返していた。

「しっかし、台風じゃあるまいし、こんな穴が風で空くか？　普通」

穴を埋めながら棺が言う。

「…そういや、サッカーゴールとかが勝手に移動してたことから『ポルターガイスト』だ、とか言ってる奴もいたな」

朝の様子を思い出しながら棺が言う。

奇妙な穴が大量に校庭に空き、物が移動している。

朝の校庭はそのようなことを言い出す者がいてもおかしくない状態だった。

「ま、実際、不明な点が多いが、『それしか考えられないから』そういう結論になるんだよな」

含みのある言い方をすると棺はふと小石を手に取る。

「……」

それを握りしめていると、右腕に青白く光る入れ墨のような傷痕のような紋様が突然浮かび上がった。

それを確認した後、棺は拳を開く。

すると、小石は地面に落下せず虚空を漂い始めた。

「触れたものの重力を一時的に奪う力…下らねえ」

ふざけた調子で言った後、吐き捨てるように言う棺。

そうしてる内に、漂っていた小石は地面に落下した。

「誰かを救う力でも無ければ、誰かを傷つける力でも無い。世界一無駄な超能力だな」

棺は自嘲気味に言った。

棺は昔からこの世に不可思議な現象があることを『知っていた』

触れたものを十数秒、無重力にする矮小な超能力しか持っていないが、

確かにこの世に不可思議な現象が存在することを知っていた。

だが、棺はそれに関わろうとかそれを利用しようと考えたことは無く、

幽霊などと同じで、どこかにはいるんだろうけど、興味は無い。

いてもいなくても一緒と考えており、今までそれを気にしたことも、他人に力を見せたことも無かった。

知ってはいるが、考えることはしなかったのだ。

そうして生きてきたのだ。

「超能力があるんだし、幽霊もいたりしてな…そういえば、ウザイ体育教師が怪我したって言ってたな…」

（やべ、マジで幽霊の仕業に思えてきた。生徒の恨みの生き霊ってやつか？）

少し薄暗くなってきた校庭でぽつんと一人で立っている状況を考え、背筋が寒くなる棺。

「……あ？」

気を紛らわそうと、上を向いた時、何かが棺の視界に入った。

屋上の手すりで何かをしている人影だった。

屋上はフェンスが老朽化で壊れていて危険なので、立入禁止になっていたはずだった。

そして、その人影は老朽化した手すりに触れている。

「…おいおい…」

棺は何となく嫌な予感がして、作業を止め、人影に声をかけられる位置まで行こうと、歩き出す。

（あの手すりはフェンスと同じくらい古いんだぞ、あれに万が一にでも、寄り掛かりでもしたら…）

ベギッと嫌な音が棺の上の方からした。

「こうなるんだよな！　やっぱり！」

音と共に全速力で走る棺。

手すりが壊れたことで落下してきた人影まではそれほど離れていない。

漫画や映画のように落ちてきた者を抱き留めることは現実では不可能だ。

しかし、棺には矮小ながら不可思議な現象を引き起こす力がある。

抱き留めるれば、重さを無くすことが出来るし、最悪でも指の先が触れることが出来れば助かる。

棺の秘密がばれてしまう為本当に『最悪』だが、

「ギリで間に合う！」

棺は叫びながら、落下点に辿り着き、落ちてきた人影をキャッチした。

正に間一髪だった。

「…はぁ、大丈夫か？お前…は…」

「…ありがとう…ございました」

呆然とした様子で手の中の落ちてきた少女が言った。

「……」

何故か棺は手を放した。

「キャン！」

当然、少女はそのまま地面に落下した。

「痛いじゃないですか！　何で手を放すんですか！」

栗色のふわっとした髪をした優しそうな目が特徴的な少女が言う。

「うるせーな、自殺者」

「自殺者じゃありません、江枕衣（エマクラ　コロモ）です。今日、転校してきました」

「ああ、そうかい。屋上には何でいたんだ？」

「学校の見学をしてたんですよ、そしたら、手すりが壊れて…」

「はぁ、真面目だな。学校なんて、どうだっていいじゃねえか」

「何を言ってるんですか、高校生活は人生で一度っきりなんですよ！」

「一度っきり…ね」

学校に特に意味を感じられない。

青春とか言われても自覚が無い。

親身になってくれる教師もいなければ、

同級生も、学校を卒業したら連絡も取らないような薄い関係ばかり、

そんな、今時の無気力に生きているだけの若者が神無棺だった。

「さて、もう学校には誰もいないような時間になっちまったぜ？
オレみたいな奴と一緒にいたら襲われるかもしれねえぞ、転校生」

少し脅かすように棺が衣に言った。

真面目で、自分と合わない衣と早々に離れたくなったのだろう。

「…そうですね、都合よく周りに誰もいません」

辺りを見回しながら衣が言った。

「そうだろう…って、都合よく？」

言い間違い？　と棺は首を傾げた。

瞬間、レーザーのように光る細い縄のようなものが棺に襲い掛かった。

「うおっ！　何だ！」

それを躱しながら棺が混乱しながら叫ぶ。

「すいませんが、大人しくついて来て下さい」

その光る縄のようなものを手から出しながら、衣が言った。

「大人しくって感じじゃねえだろ！　無理矢理連れていく気満々じゃねえか！」

「聖痕（スティグマ）を悪用する人間に容赦はしません！　弁解はありますか？」

「説明が色々足らねえぞ！　大体…」

「問答無用です！」

「矛盾してんじゃねえか！　襲う所か襲われたぜ！チクショウ！」

棺は叫びながら衣から逃げ出した。

「何だってんだよ、何をどう間違えれば、夜の校舎で鬼ごっこなんだよ」

棺は男子トイレに隠れながら呟く。

「…そういや、スティグマがどうとか言ってたな…」

（まさか、あの下らない超能力のことか？　あいつも変な縄を出してたし…）

棺は壁に寄り掛かりながら考える。

すると、

「ようやく見つけました、心理的にここに入りたくは無かったのですが…」

男子トイレに入るのを躊躇いながら衣が言う。

「何なんだ、何故、オレなんだ！」

「貴方がスティグマを悪用したからですよ」

「スティグマ？　超能力のことか？」

「自白しましたね。その通りです、超能力や魔法などの超常現象を引き起こす、『力』、それが聖痕（スティグマ）です」

「……」

「私の聖痕は『観念動力（サイコキネシス）』、超能力の中ではポピュラーな部類で、離れた物を動かしたり、逆に止めたり、様々なタイプがいます」

そういうと、衣は再び手から光る縄を生み出す。

「私は思念を物質化することに特化した聖痕使い（スティグマータ）です、敵を束縛する縄など、簡単な思念（イメージ）を物質化出来ます」

自分の力を誇るように衣は言った。

「…ああ、そうかよ。便利な能力で羨ましいぜ」

そういうと、パチンと棺は指を鳴らした。

「何を？…ハッ！」

衣が何かに気づいたその瞬間、バシャッと衣はずぶ濡れになった。

カランと軽い音を発てて、近くに落ちてきたのはバケツだった。

棺は衣が話をしている最中に水の入ったバケツを浮かばせて頭上に持ってきたのだった。

「……」

「戦意喪失したか？　女を殴るのはあまり気が進まないんで…」

棺が転がっているバケツを蹴飛ばしながら言う。

「…こ…」

「こんなことを…ん？」

俯いていた衣がボソッと呟き、棺が気づいた。

衣の肩がプルプルと震えていることに…

（や、ヤベー、泣かしちゃったか？）

「お、落ち着けって、夜の学校で女子を泣かせたって知られ…」

棺の言葉はズガンと言う音に遮られた。

音の方を棺が見ると、トイレの壁に大きなひびが入っていた。

「……」

だらだらと冷や汗をかきながら衣を見る棺。

「殺します！　絶対殺してやりますよ！　ウワーン！」

衣が泣きながら叫んだ。

先程の光る縄が鞭のように変化し、壁や床にぶつかっては、破壊する。

「し、死ぬー！」

目茶苦茶に鞭を振り回す衣に棺が叫びながら逃げる。

「学校で悪戯する程度ならまだしも、罪を重ねましたね！　許しません！」

後ろから走って追い掛けながら衣が叫ぶ。

「…？…どういう意味だ」

（学校で悪戯？　罪を重ねる…そういえば、スティグマを悪用とか言ってたな）

「まだしらを切るつもりですか！極悪人！校庭を聖痕（スティグマ）で目茶苦茶にしたことですよ！」

（つまり、何だ？　オレが学校の校庭をあんなにしたと思ってるの

か？　馬鹿な、オレにあんなこと出来る訳が無い…）

「いい加減、お縄につきなさい、今なら、鞭百叩きで許しましょう！」

「それは全然許してない……ん？」

逃げ続け、再び校庭に出た時、棺は何かを見た。

机や椅子を手にした怪しげな男だった。

「あいつだー！」

棺が叫んだ。

「え？」

「あいつが犯人だ！」

男を指差して棺が大声で叫んだ。

「チッ、まだ人が…」

男の持っていた机や椅子が浮かび上がった。

「ほれみろ、やっぱりあいつじゃねえか！」

「ええ！　じゃ、じゃあ、貴方は…？」

「いいからさっさと捕まえるぞ！」

「は、はい！」

いつの間にか主導権が棺に移動していることも気付かず、二人は男に向かって走り出す。

「クッ、死ね！」

机と椅子が勢いよく二人に襲い掛かる。

「無駄です！」

バチィンと言う音と共に衣の鞭に全て薙ぎ払われた。

「悪いが、勘違いで襲い掛かられて疲れてるんだ」

男の前に辿り着き、棺が静かに言う。

「ハ…」

「一コマで死んどけ！」

「ガァ！」

棺は思い切り、男を殴り飛ばした。

「…すいませんでした。無関係でしたのに疑ってしまって…」

「…まあ、気にすんな、これもいい思い出だ」

（忘れられない思い出になりそうだが…）

「ありがとうございます、そして、協力感謝します」

「おう……協力？」

「これからこの町にいる聖痕使い（スティグマータ）を私は捕まえないといけないんです」

「そうか、ご勝手に…」

「それには協力者が必要不可欠です」

「…おい」

（この流れは…）

「これからよろしくお願いします。神無棺さん」

「そんな馬鹿なー！」

棺の叫び声が夜の校舎に響いていた。

第一話　脆弱な超能力者（後書き）

どうでしたか？

連載小説なので、次も呼んでくれると有り難いです

出来れば感想お願いします

第二話　拒絶反応

「つまり、聖痕使いを秘匿し、犯罪を犯した聖痕使いを裁くのが、私達『隙間の神』なんですよ」

「隙間の神？」

「…この世には、科学では証明出来ないことが沢山ある。それの総称を隙間の神って言うんです」

「へー」

「科学では証明出来ないことを世に出さない為に秘匿する、それが私達『隙間の神』なんです」

「ほー」

「…話聞いてますか？」

空返事ばかりする棺に苛立ちながら衣が言う。

「興味無いからなぁ…つーか、お前、どこまでついて来るんだ？」

棺がうんざりしながら衣に言う。

「え？　家までついていくつもりですけど？」

衣は首を傾げて言った。

浮遊男の一件の次の日、

棺は学校帰りに突然、衣に話し掛けられ、

延々と衣の所属する組織、『隙間の神』の仕事内容、良さなどを聞かされていたのだった。

棺は手伝う気などさらさら無い為、髪と同じく真っ赤に塗装されたバイクを引きながら、聞き流している。

「なんで家までついて来る気なんだよ」

棺が疲れたように言う。

「そりゃあ、仕事仲間になるのですから、家は知っておかないと…」

「だから、手伝わねえって言ってんだろうが！」

「…ていうか、それ貴方のバイクですか？　趣味悪い」

「人の話を聞け！　つーか、スコーピオンを馬鹿にすんじゃねえよ！」

「…名前まで付けてたんですか…その赤バイに」

「悪いか！」

若干引いた衣に棺がキレて言う。

ひそかに棺は衣のことをマイペースな天然と思っているが、この瞬間、衣も棺のことをマイペースな天然だと思った。

「…えーと、それなら乗せてって下さいよ。目的地は同じなんだし…」

微妙にフォローするように衣が言う。

「……ダメだ」

「何ですか？　今の間は」

「…とにかくダメだ。やむを得ない理由がある」

「…そうですか」

やむを得ない理由に少し興味を持った衣だったが、妙に真剣な顔をした棺を見て黙った。

その後、しばらく会話が無く、段々と暗くなってきた道を二人で歩き続ける。

やがて一つの建物の前に立ち止まった。

「はぁ、結局ここまでついて来たな…」

溜め息をつく棺。

「え？　ここが…？　でも、ここって？」

その言葉に衣が言う。

棺が立ち止まった場所はある施設だった。

そこそこ大きな建物。

庭には幼稚園のような遊具がある。

「…孤児院」

衣が呟く。

その施設は孤児院だった。

「そうだ、オレは孤児院出身なんだ。まあ、もうバイトしながら一人暮らしをしているんだが、今日はここに招かれていてな…」

困ったように頭を掻きながら棺が言った。

「おかえりなさい！　棺！」

「久しぶり棺！」

「一緒に遊ぼうぜ棺！」

扉を開けると同時に待っていたのか、幼稚園生ぐらいの年齢の小さな男の子や女の子が棺に言う。

「お前ら！　年上は敬えといつも言ってるだろうが！　お兄様と呼べ！」

「棺兄ぃ～」

「おお、その響き悪くないぞ鞘（サヤ）」

その中の一人の女の子が言った言葉に笑顔になる棺。

「……」

それを信じられないものを見るような目で見る衣。

赤髪に赤い瞳。

制服は着崩し、真っ赤に塗装したバイクに乗り、

口調は不良。

どう見ても子供が好きそうに見えない棺は、意外にも子供好きだっ

た。

「何だその顔は」

「いえ、少々私には衝撃映像だったもので…」

「人を見かけで判断するんじゃない。オレは意外と面倒見がいいぞ」

「外見が柄悪い自覚はあったんですね」

「うるせえ」

その言葉にふて腐れたように棺が言った。

「なら、髪を染めるのを止めればいいんですよ」

衣がその印象は、赤髪が原因と思い、言う。

すると、棺はその言葉にムッとした様子になり、

「おい、衣、良いことを教えてやる」

「何ですか？」

「これは自毛だ」

「…は？」

「オレは染色したことなんざ、一度もねえんだよ、両親の顔を覚えてねえから確証はねえが、ハーフなんじゃねえか？」

あっけらかんと棺は言う。

「…両親の顔を、覚えていない？」

「ああ、オレは…「棺！　帰って来たなら、早く来て座りなよ！」…また、面倒な奴が…」

棺の言葉を遮り、奥の方から大声が響く。

どうやら、誰かが玄関でずっと話している棺と衣に痺れを切らしたようだ。

「…腹を空かせたあいつが暴れ出す前に行くぞ」

今日何度目かの溜め息をついて棺は歩き出した。

「あっ、話は途中ですよ」

慌てて衣も追いかけた。

「遅い！　お腹空いた！」

「はしたないとか思わねえのか櫛（クシ）」

棺が髪が短く、ボーイッシュな少女に言う。

少女の名前は風夏櫛（カザナツクシ）と言って、棺とは同い年の孤児院での幼なじみだ。

今は棺同様に一人暮らしをしている。

櫛も棺のように招かれていたのだった。

「…って言うか、その連れてる女の子は誰？」

櫛が衣に気づき、聞く。

「ストーカーだ」

「誰がストーカーですか」

テキトーに答えた棺に衣が反論する。

「彼女？」

「それも違います。私は江枕衣と申します。この人とは、昨日出会ったばかりなのでご安心を」

衣が何となく気をきかせて言う。

どうやら、棺と櫛の仲を誤解しているらしい。

「おいおい、気をきかせて悪いが、そういう仲じゃないぜ」

「そうなのですか？　幼なじみは両思いになりやすいと聞いたのですが…」

「漫画と現実を一緒にするな。第一、こいつ『ブラコン』だし…」

棺がさらりと爆弾発言をした。

「うわぁ！　何初対面の人にばらしてんのよ！　違うからね、私、ブラコンじゃないからね！」

それに慌てて、衣に弁解する櫛。

「別に、お兄ちゃんのお嫁さんになりたいとか、思ってる訳じゃないの。ちょこっと、お兄ちゃん子なだけなの！」

「歳が三つしか離れてない兄貴と高校生になってまで一緒に風呂に入ろうとするくせに…」

「いいじゃない別に！　結婚するのは犯罪だけど、一緒にお風呂入るのは犯罪じゃないもん！」

「……」

棺と櫛のやり取りについていけないのかぽかんとしている衣。

「…そんなこと言うなら、あんたの秘密もばらしちゃうもんねー」

「お前！　まさか…」

「幼なじみを怒らせたら、恥ずかしい秘密をばらされるとを思い知りなさい！　衣ちゃん！」

「は、はい？」

突然、ちゃん付けで呼ばれ二重の意味で驚く衣。

「棺と手を繋ぎなさい」

「…はい？」

その言葉に意味不明と言う顔をする衣。

「いいから早く！」

「や、やめろ！」

棺が焦った声を出す。

その珍しい様子に衣は興味を持ち、棺の手を握った。

その瞬間、衣は棺に電流が流れたのかと思った。

「〜〜〜！？」

ぶるぶる震えながら、衣の手を振り払う棺。

手に鳥肌が立っていた。

「あはは、やっぱり直って無かったね、それ」

「今のは？」

「棺はねえ、女の子が苦手なんだぁ。喋る分には大丈夫なんだけど、手とか触れると子犬みたいにぶるぶる震えるの」

弱みを握っていることを勝ち誇るかのように言う櫛。

「……」

それを聞き、震えが収まった棺を見る衣。

「…何だよ？」

「…貴方、異性が苦手なんですか？」

「苦手なんじゃねえよ、これは恐らくトラウマかなんかだ。別に女が怖い訳でも嫌いな訳でも無え」

言い訳するように棺は言うが、微妙に二人から距離を取っている。

「…照れ屋さん」

「誰が照れ屋さんだ！　だから、そういうんじゃねえって言ってんだろうが！」

「分かってます、分かってますって」

「いやその反応は分かってねえだろ！」

「…と言う訳で、私の隙間の神の話を聞いてくれますねよね」

「何がと言う訳なんだ？」

「聞かなきゃハグします」

「この卑怯者ー！」

棺は思い切り叫んだが虚しいだけだった。

衣に弱みを握られた瞬間だった。

第三話　幼なじみ

「棺と仲がいいね、衣ちゃんは」

棺が隙間の神に入ることを再び拒否し、宣言通り、ハグされそうになっていた時櫛が言った。

「そうですか？」

今のやり取りが仲のいいもの同士に思えなかったのか衣が首を傾げる。

棺はその隙をついて逃げ出した。

「棺はね、この孤児院の家族以外の人に心を許さないんだ。そりゃあ、教室で話すクラスメートくらいはいるだろうけど、『友達』はいないの」

棺の逃げた方向を見ながら櫛は言う。

「…何か、理由があるんですか？」

「理由か…」

櫛が呟いた。

「私もここで暮らしてるように、幼い頃、捨てられたんだけどね…棺と出会ったのは、八年前なの」

「棺は違う孤児院からここへ移されてきたのですか？」

「違う違う。八年前、棺が十歳の時に孤児院の前に倒れていたの。見つけたのは私だった」

櫛は思い出すように言う。

「十歳？　なら、棺は両親のことを覚えているのでは無いのですか？」

そうだ。

棺は両親の顔は覚えていないと言っていた。

それ故に、衣は生まれてすぐに捨てられたものだと思っていたのだが…

「覚えてないよ。何も。棺は十歳になり、孤児院の前で倒れるまでの記憶が全く無いの」

「記憶喪失…」

「…よっぽど酷い親だったのかもね…身体には傷がいっぱいあったし、同い年なのに随分痩せていたのを覚えてる…」

「……」

「それで、その酷い記憶は忘れたままにさせることにしたの…」

「…そうだったんですか」

「だから、まあ、それが関係しているのかもね。棺がそう簡単に人に心を許さないのは…」

悲しげな顔で言う櫛。

「……」

「たっく。あのブラコン女め…口が軽すぎるんだよ。オレが女に触れると大変なことになるってあいつに言いやがって…」

（気を取られた隙に逃げて来たが、あのまま抱き着かれていたらと思うと…）

棺は寒気を感じ、ぶるっと身体を震わせる。

「これだからああいうタイプは嫌いなんだ」

（オレみたいに他人との間に壁を作り、一定の距離を保ちながら人と話さないと安心できない人間にも土足で近づいてきやがる）

「……オレは一人でいいんだよ」

（そうさ、組織なんてものに入れるかよ）

（いつからか分からない、記憶に無いガキの頃からかもしれない）

（だが、もう決まってるんだよ。オレはこういう風に生きると、こういう風な人間だと…）

（…だから、絶対に…）

そこまで棺が思ったところでドドドドド…と変な地響きが聞こえてきた。

それは段々と棺に近づいていき、

「棺ーーー！！」

ドバァンとドアを蹴破り、衣がダイナミックに登場した。

そしてそのまま、棺に抱き着いた。

「～～～～！？」

生まれたての小鹿のようにプルプル震える棺。

「貴方のことを考えずに、自分の要望だけ通そうとしてすいませんでした！」

抱き着きながら衣が言う。

「～～～～？！」

棺は振り払おうとするが、尋常じゃない力で抱き着かれている為、逃がれられることが出来ない。

「貴方にあんな過去があったなんて…貴方が集団の中に入ることに苦痛を感じているなんて…」

衣は思う。

他人に心を簡単に許せない人間が、見知らぬ怪しげな集団を見てどう思うか、

力を理由に強引に集団に連れて行こうとする人間を見てどう思うか、

「私は、聖痕使い（スティグマータ）は、皆、隙間の神に入ることが幸せだと思っていました。しかし、それを強制するのは間違いでした」

「……」

「隙間の神に入って欲しいとは私はもう言いません。だから、私のことは少しは信じてくれないでしょうか…いや、違いますね」

「……」

「友達になってくれませんか？　一人でいるより楽しいと思うんです」

そう言うと、衣は棺から離れた。

「……」

棺は黙って衣を見る。

「……」

衣もまた黙って棺を見た。

「…ぶっちゃけ、身体の拒絶反応のせいで何言ったかあんま覚えて無え…」

ボソッと棺が言った。

「えぇ！　酷いです！　私は真剣に…」

「とにかく！」

それにショックを受け、文句を言う衣を黙らせる棺。

「とにかく、あれだろ。何つーか、ここまで恥ずかしい台詞を演技で言える訳、無えから信じてやるよ」

照れ臭そうに頭をかきながら棺が言った。

「本当ですか！」

目を輝かせて衣が言う。

「ああ」

「やった！　なら、まず私達の力の説明ですが…」

「前言撤回！　早速騙しやがったな卑怯者！」

「友達として、教えてるだけですよ。そして、友達として、自分の所属している組織（クラブ）を進めるだけですよ」

「屁理屈だ！　絶対、オレはそんな面倒臭せえのしねえからな！」

「面倒臭い？」

その言葉に衣が反応する。

「まさか、トラウマとか、過去とか、尤もらしい理由を述べておきながら、本当はただ面倒臭さかっただけだったのでは？」

「いやいや、そんなことは無えよ。確かに面倒臭さかったのも事実だが…」

ピクッと、棺がそう言った瞬間、冷静に見えて実は激情家の衣の眉が動いた。

「貴方を心配しましたのに…自分の行動を後悔しましたのに…」

「お、落ち着け、キャラが変わってるぞ。お前はクールな性格だったはずだ」

ゆらゆらと揺れる衣に脳内でデンジャー、デンジャーと鳴るアラームに怯えながら説得を試みる棺。

しかし、

「私の純情を、弄びましたねーーー！！　神無棺ー！」

ガチャッと懐から何かを取り出し、叫ぶ衣。

女性でも持ちやすい用に軽量化されたのか、小柄な衣でも持てるサイズに改良された、

『ロケットランチャー』だった。

「えぇー！　うそーん！　戦闘の時に使って無かったじゃねえか！」

「秘匿が困難になる為、使わなかったんです」

「民家の室内ではいいのかよ！」

「始末書ものですが…致し方ありません」

「嫌ならやめろよ！」

必死で棺は説得するが、衣の意志は固い。

「オレの我が家を吹き飛ばす気か！」

「大丈夫です。これは秘匿しやすいように威力を弱めてありますので着弾点から半径一メートルまでしか影響は及びません。安心して下さい」

「安心出来ねえ！　それってオレは木っ端みじんじゃねえか！」

「…発射五秒前、四、三、二、一…」

小型ロケットランチャーを棺に向けてカウントダウンを始める衣。

「ま、待て！　隙間の神に入る！入ってやるから！」

「…本当ですか？」

「ああ！　オレは友達に嘘はつかねえ！　可愛い女友達なら尚更だ！」

「…可愛いだなんて、おだてても何も出ませんよ」

棺の言葉に照れたように顔を両手で覆う衣。

可愛いらしい仕種だが、何かを忘れている。

「…あ」

手を離されたロケットランチャーは地面に落下する。

地面に当たる瞬間、カチッと不穏な音がした。

ドンッと言う音と共に弾が放たれる。

「理不尽だぁー！！」

ドバァンと言う音と共に棺は黒焦げになった。

第四話　過保護な兄

「で、結局どこへ向かってるんだよ」

「だから、隙間の神の本部と連絡が取れる場所って言ってますでしょうが」

「だから、それがどこかって聞いてるんだよ」

言い合いながら棺と衣の二人が歩く。

ロケットランチャーで棺が焦げた次の日の休日。

棺は衣に約束した通り、隙間の神に入る為に待ち合わせをし、ある場所へ向かっていた。

そこで、ふと衣が棺を見て立ち止まった。

「ところで、貴方のその私服ですが…」

流行の最先端…と言う訳では無いが、時代遅れでも無い服を違和感無く着ている衣が棺を見て言う。

「何だ？」

「まさかとは思いますけど格好いいとか思ってたりします？」

衣が棺の私服をジロジロ見ながら言った。

赤いバイクをスプレーで更に赤く塗った白バイならぬ赤バイ『スコーピオン』の例にあったように、実は棺は趣味が悪い。

と言うか、髪といい、バイクといい赤が大好きだ。

つまり、棺の私服は、

元々は違う色だったのに赤いペンキをぶちまけたせいで色が変わってしまったかのような、不自然な程真っ赤な服を上下に着ていた。

髪と相俟って全身真っ赤で見るものの目をチカチカさせる。

「まあ、趣味は人それぞれですけど…」

「何が言いたいのか気になるが、敢えてスルーしてやるよ」

フンと鼻を鳴らしながら棺が不機嫌そうに言う。

「…なら、その場所に着くまでに聖痕をハッキリさせておきましょうか？」

「スティグマ…か。お前はその縄と鞭だったな」

「はい、貴方は？」

「触れたものを無重力にすること、『モノを無重力状態にすること』…か？」

自信なさ気に棺は言った。

「聞いたことの無い系統（タイプ）ですね。本質は何なんでしょう？」

首を傾げながら衣が言う。

「本質？」

「例えば、私はただ縄を生み出しているのでは無く、イメージを観念動力で加工し、形にする。つまりは、それが本質です」

「なら、オレの本質は重力を消し去ることなんじゃねえの？」

「通常、聖痕使いは生み出すことより消し去ることの方が難しいんですけどね」

（…それだけ才能を秘めてる…ということなんでしょうか？）

「どうした？　人の顔を見つめて…」

「何でもありません、さあもうすぐですよ」

衣はごまかすように明るく言った。

「隙間の神、『第１８５支部』は」

「ここが…」

棺が建物を見て言った。

棺のいた孤児院よりやや大きくて、少し色あせた壁の塗装が目立つ建物だった。

元々はどこかの店が入るところだったのか、駐車場のスペースが大きく取られている建物だ。

「はい、ここが第１８５支部です。表向きは『星を見る会』と言うクラブのようなものなんですが…」

「えらくほのぼのとした名前だな」

「隙間の神は秘匿することが目的な組織なんです」

「秘匿ねえ…」

「魔法少女のように目撃者の記憶をパパッと消したりもたまにします」

「怖っ！　魔法少女って言うより悪の秘密組織だろ！」

「失礼な！　何も知らない一般人を人知れず救っている組織だと言うのに！」

「初対面でいきなり、オレに襲い掛かって来たじゃねえか！」

「そ、それは、勘違いと言うか、誤解と言うか…あーもー、細かいことをうじうじ言わないで下さい！」

「細かくねえ！」

建物の駐車場で棺と衣が叫び合う。

すると、広い駐車場に一つだけ止めてあった車から一人の男が出て来た。

「おや、そんな所で何をしてるんだい？」

「兄さん…」

衣が男に気づいて言った。

「兄さん？　この人、お前の兄貴なのか？」

その言葉に首を傾げながら棺が言った。

「いかにも、私は江枕色雨（エマクラシキウ）…衣ちゃんの兄だ」

ストレートの男にしては長めの髪をした二十代前半くらいの男、色雨が言った。

「……衣ちゃん？」

ちらっと衣の方を見て棺が言った。

「兄さんはややシスコン気味なんです…過保護なタイプの」

「…ブラコンにシスコン…オレの周りの奴は変人だらけだ…」

自称お兄ちゃん子の幼なじみを思い出しながら溜め息をつく棺。

「…その変人に私は含まれていませんよね？」

「自分の胸に手を当てて考えてみろ」

棺に言われて、素直に衣は胸に手を当てた。

「……やましいことは一つもありませんでした」

「…自覚症状無しと見た」

「どういう意味ですか！」

ボソッと呟いた棺の言葉に過剰に反応する衣。

「そのままの意味だと…」

「そろそろ私も会話に参加してもいいかな？」

穏やかな顔をしながら色雨が言った。

「あ、ああ…」

（毒気の抜かれる顔をした奴だな…）

棺はひそかに第一印象でそう思った。

「隙間の神に入りたいらしいね？」

「そうです、兄さん」

棺では無く、衣が答えた。

「…君、もしかして、我が妹に無理矢理入るように脅迫されてる？」

それを見て、事情を察した色雨が言った。

「そんなことは…「その通りだ」棺！」

うろたえた衣の言葉を遮って棺が言った。

衣は棺を睨みつけた。

「はぁ、やっぱりか…我が妹は全く…」

頭を抱えて色雨は言った。

「裏切りましたね！　棺！」

「…ま、友達にはなったが、アレは明らかに脅迫だろうが…」

「アレ？」

「こいつ、人に武器を突き付けて…「わーわー！　何でもありません！　兄さん、貴方の妹はいつも通り、良い子でしたよ！」…」

棺の言葉に反応した色雨に慌てて、今度は衣が棺の言葉を遮る。

「衣…聖痕装置（セイコンソウチ）を使ったね？」

「えーと、えーと、やむを得なかったと言うか…カッとなったと言うか…」

「問答無用。反省分三十枚を明日までに」

「えー！　無理ですよ！」

半泣きで衣が喚く。

「聖痕装置って何だ？」

それをスルーし、棺が色雨に聞く。

「擬似的な聖痕の力を発動させる装置のことだよ。ランチャータイプの聖痕装置『カブリエル』は君も知ってるだろ？」

「ああ、オレがくらったアレか…」

「隙間の神に入る人間が皆聖痕使いとは限らないからね。聖痕使いに対抗する為に作り出された装置さ」

「成る程」

棺が納得して頷く。

「それはそうと、君、まだ学生でしょ？　衣はこの間、聖痕使いを

捕まえる為に学校に潜入したばかりだからいいけど、君には君の日常がある」

「……」

「だから、君、正式には隙間の神には入らなくていいから、協力だけしてもらえないかな？」

「協力？」

「ちょっと、私を無視して話を進めないで下さい」

そこで衣が話に割り込む。

「言うなら、この間みたいに衣のサポートをしてくれればいい。勿論、協力の報奨金は出すよ？」

「…まあ、目茶苦茶忙しい…って訳じゃなければ別にいいけどな…暇だし」

「それじゃあ、このまま立ち話も何だし、入ろうか」

色雨は話していた場所が駐車場だったことを思い出して、中へ入るように促す。

「って言うか、言いそびれいたんだが、オレはぶっちゃけかなり弱いぞ」

今更ながら、不安になり、棺が言う。

「いいんですよ、サポート何ですから、それで。別に変な期待はしてません」

それに衣が微妙なフォローを入れて、三人は隙間の神『第１８５支部』に入っていった。

第五話　聖痕

「うおー…中は意外とハイテクだな、星を見る会」

棺にはよく分からない難しそうな機械が並ぶ室内を見て、感心したように棺が言った。

「その名前で呼ぶのはやめてください」

衣が名前が気に入らないのか、嫌そうな顔をして棺に言った。

「なんでだい？　私は気に入っているんだけど？」

「兄さんがそんな名前付けるから、カモフラージュに天体望遠鏡とか買う羽目になったんですよ！」

「いいじゃないか、私は好きだよ？天体観測とか」

「仕事をサボってまですることですか！　もう少し『権天使（アルヒャイ）』としての自覚を持って仕事をして下さい！」

衣がのんびりとした色雨に怒って叫ぶ。

それを棺は聞き慣れない、業界用語に首を傾げながら聞いていた。

「…ああ、『権天使（アルヒャイ）』って言うのは、隙間の神の階級のようなもののことだよ」

それに気づいて色雨が棺に言う。

「階級？」

「隙間の神は、まず一般隊士として研修、その後、その人間が向いている部隊に配属されるんだ」

「軍隊みたいだな…」

「まあ、適材適所ってやつでね。私は第六部隊、権天使（アルヒャイ）に配属されていて、そこの仕事は、一般隊士の訓練や指導なのさ…全く、私に全然合ってないと思うんだけど…」

第六部隊が不満なのか、珍しく愚痴をこぼす色雨。

「部隊の上下関係は、本部勤務の第一、第二は他の第三から第七に比べて上ですけど、他は特にありません…一般隊士よりも指導する兄さんの方が偉いのは当然ですが…」

「つまり、訓練所も兼ねている訳だよ、ここは。今日は私と衣しかいないけど、いつもは沢山いるんだよ」

「…へー」

途中からよく話が理解できなくなり、空返事をすることにした棺。

「…そういや、漫画とか見てて、いつも思ってたんだけど、そういう秘密結社ってどこから収入を得て、給料払ってるんだ？」

棺はふと疑問に思ったことを口に出す。

「収入…か。政府から秘密裏に払われている…と言いたいところだけど、政府にも秘匿しているからね。詳しくは知らないけど、隙間の神の研究機関が聖痕使いを研究し、研究成果を売ることで稼いでいるらしい」

つまり、違法聖痕使いとの戦闘の詳細を分析し、役立てることが出来ないかを見る組織であるとも言える。

実際、正義感よりも聖痕使いとしての力を発揮でき、金銭を稼ぐことが出来るという理由で隙間の神に入る人間がほとんどである。

「…やっぱり悪の組織なんじゃないのか？」

「違います」

「さて、詳しい説明だけど…何から言えば…」

テーブルの上にお菓子と紅茶を用意し、椅子に腰掛けて、色雨が言った。

「聖痕について詳しく教えてくれ」

単刀直入に棺が言った。

「そうだね…聖痕は超能力とか魔法とか、そういう不可思議な現象を引き起こす未知の力のこと…」

「……」

「一説によると、過去にも英雄などの所謂『選ばれた人間』も聖痕のような力を持っていたらしい」

「選ばれた人間…ねえ」

「詳しいことはまだ分かっていないけど、隙間の神の情報では、聖痕使いは日本でしか発生しないらしい」

「日本だけ？」

「そう、だから、隙間の神の支部も日本にしか無い」

「……」

その色雨の言葉に納得がいかないような顔をする棺。

「聖痕の力については私が説明します」

紅茶を飲みながら衣が会話に入ってきた。

「聖痕は使う時に腕に浮き出て、それ以外の時は消えています…」

腕に青白い入れ墨のようなものを浮かび上がらせながら衣が言う。

「その力は、私の『観念動力（サイコキネシス）』などの比較的有名なものと、貴方の『無重力』のような前例の無い『特殊』なものの大きく二種類ですね」

「……」

「有名なものは扱い易く、数も多いのですが、特殊な聖痕使いは、そもそもどんな本質を持った力なのかも分かり難いです」

「…不便だな」

「まあ、その分、強力な力を持つ者も多い…君は中々いない『特別』なんだから胸を張っていいよ」

「オレはそんなものに関わらず平和に生きたいんだけどな…」

溜め息をつきながら棺は色雨に言う。

「知ってしまったからには見て見ぬ振りは罪悪感を感じてしまう…かい？」

「いやいや、そんな正義感のある人間じゃねえよ、オレは…こいつを放置した方が面倒臭そうだから、協力するだけだ」

衣を指差して棺は苦笑いをしながら言った。

「まあ、君達の基本的なことは調査だけだから安心していいよ。衣も本来戦闘要員じゃないしね」

「戦闘要員じゃない？　縄で縛ろうとしたり、鞭で叩こうとしてき

たこいつが？」

「そこだけ聞くと、どこかの女王様みたいだね」

「ご、誤解です！　兄さん！　私は犯人を捕縛しようとしただけです！」

棺の誤解を招く言い方に、色雨は妹がいつの間にかSになっていないか考え、衣は慌てて言う。

「それは置いておくとして…衣の聖痕、観念動力（サイコキネシス）は比較的有名な力だけど…棺君、君は観念動力（サイコキネシス）と聞いてどんなイメージをする？」

「は？　イメージ？」

色雨の唐突な質問に棺は首を傾げる。

衣は黙ってその話を聞いていた。

「…スプーン曲げとか？」

棺が昔見たテレビを思い浮かべながら言う。

「うん、大体はそんなイメージを持つだろう。実際、観念動力（サイコキネシス）の本質は、直接触れずに物を動かすことだからね」

「…ん？　それだと…」

「気がついたかい？そう、そうすると、衣の観念動力（サイコキネシス）は少しおかしい」

「……」

衣は相変わらず黙ってそれを聞いている。

「衣は直接触れずに、直接触れる思念（イメージ）を物質化して観念動力（サイコキネシス）を使っている…長さは足りてるのに間に延長コードを繋ぐような、かなり遠回しな工程をしているんだ」

「何で？」

「恐いからですよ」

棺の疑問に衣が答えた。

「私は聖痕が恐い、だからわざと遠回しにして、安全性を高めてるんです」

「……」

「無理矢理巻き込んでおいて何ですけど、自分の力も含め、聖痕とは善悪良し悪し関係ない『力』であることは忘れないで下さい」

衣のこの言葉には、実体験が含まれているような説得力があった。

「そうだ、そういえば今日は定期連絡の日だった」

その後、しばらく談笑していると、手をパンッと叩いて色雨が立ち上がった。

「忘れていたんですか？　兄さんの本部での評価と出世が掛かっている重要な定期連絡を…」

のんびりとしていて、出世欲の皆無な兄に呆れたように言う衣。

「丁度いいから、君達も一緒にモニター室に行こう」

「は？　よく分かんねえが、偉い奴と連絡取るんじゃねえのか？」

「そうですよ！　本部って言ったら、第一部隊の人が出るに決まってます、一般隊士の私なんて…」

「本部に顔を売るチャンスだよ？　まだどの部隊か決まってない一般隊士なんだから…さあ、行こう」

そういうと、出世欲は無いが、妹には過保護な、衣曰くシスコンの色雨は二人を連れてモニター室へと向かった。

「お待たせしました第１８５支部、江枕色雨、定期連絡です」

モニター室につき、近くに置いてあった椅子に二人を座らせ、一際大きなモニターの電源を入れて色雨は言った。

そのモニターには、色雨よりは年下、棺達よりは四、五歳上に見える女性が映し出されていた。

顔立ちが整った、清楚な感じで、読書などが似合いそうだと棺は思った。

しかし、そのイメージはすぐに打ち砕かれた。

『遅いですよ！　権天使（アルヒャイ）、江枕色雨！　私がこの日をどれだけ待ったと…じゃなくて、多忙な私を待たせたのだから！』

その清楚に見える女性は、色雨に向かって怒鳴った。

それは、親しい間柄を感じさせた。

『あら？　そちらの二人は、誰ですか？』

衣に続く第一印象の崩壊に呆然としている棺と衣に気づいたモニターの女性が色雨に言う。

「私の妹と、そのパートナーです『智天使（ケルビム）』、繰上炬深（クルジョウキョミ）さん」

『…そうですか、あなたがあの時の』

「お久しぶりです、繰上さん。江枕衣です」

『覚えていたの…あなたに会ったのはまだあなたが幼かった頃なのに…』

「はい」

懐かしむように話す衣と炬深。

そして、この場で唯一、話についていけない棺。

「どういう関係なんだ？」

「昔会ったことがあるんですよ。それから、繰上さんは、兄さんの…」

『…それはそうと、江枕色雨、その他人行儀な呼び方はやめなさいと前に言いましたわよね？』

「本部勤務の智天使（ケルビム）である繰上炬深さんを馴れ馴れしく呼ぶなど、私には恐れ多い…」

『良いのです！　よそよそしい呼び方をやめなさい！　敬語もやめなさい！』

「命令であってもそれには従えません」

『このっ、分からず屋の頑固師匠め！』

怒りのあまり、口調が素に戻った炬深はそう言った。

「師匠だと？」

「ええ、繰上さんは昔、兄さんに弟子入りしていたんですよ」

『全く、師匠は分かっていません！　本部勤務になり、昔のように会えなくなって悲しむ弟子の気持ちを…』

「昔とは立場が違います」

『好きで偉くなったんじゃないやい！』

すっかり最初の清楚なイメージを粉砕して炬深が色雨に叫んだ。

「もしかして、あいつは」

「はい、繰上さんは弟子時代から兄さんに好意を抱いています」

「…お前の兄さん、鈍そうだからな…気の毒に」

同情したように棺が呟く。

『師匠は女心も分かってません！』

「上官の女心も分からないとダメなのですか？」

その噛み合わない会話はしばらく続いた。

第六話　学校一の不良の悪友

「全く、お前の兄貴があんな感じの人だとは…」

口論が白熱する色雨と炬深を放置して、外に出た棺が隣にいる衣に言う。

「言わないで下さい、あれでも昔は熱く、優秀な人だったんですよ」

「熱い…あの人に一体何があったんだ…」

のんびりとした色雨を思い浮かべ、信じられないと言った様子で呟く棺。

「それは…」

それに心当たりがあるのか衣は俯く。

「ま、深くは聞かねえよ。オレも記憶喪失とは言え、自分の過去を話してねえからな」

「ありがとうございます」

笑みを浮かべながら衣は棺に言った。

「で、これからどうするんだ？調査って言っても何をすればいいか…」

「そうですね…基本的には普通にしていて下さい。そして、貴方の学校のポルターガイストみたいに噂が立てば、そこを調査します」

「それ、結構途方も無いことじゃないか？」

「まあ、私達が暇なことは良いことです」

「……」

確かに、その通りだと棺も思う…

しかし、折角、正式に協力者となり、珍しくやる気が出たところでそんなことを言われれば、やるせなさを感じてしまう。

「なら、明日学校が終わったら、先輩に会いに行きますか？」

「先輩？」

「私達のような隙間の神と協力者の二人でこの町の平和をひそかに守っていた先輩ですよ」

「守っていた？　過去形？」

衣の言葉に棺が気になったことを言う。

「そうです、今は引退して病院にいます」

「病院だと？」

「ええ、詳しくは明日、学校で話しますよ」

衣はそれだけ言うと歩いて行った。

「…病院か」

引退して、今は入院中…

何となく、その意味を棺は理解していた。

「……ん？　待てよ、あいつ、『学校で』とか言ってなかったか？」

今までは棺が衣と会うのは学校帰りに待ち合わせをしていて、学校で会ったことは一度も無かった。

何せ、棺は学校で有名な不良少年、衣は最近転校して来た転校生。

「……」

何となく、嫌な予感のする棺だった。

「神無棺君、いらっしゃいますかー！」

「…悪夢だ」

棺の嫌な予感は見事に当たった。

衣と第１８５支部へ行った次の日、いつものように、学校へ行き、いつものように、周りからやや敬遠されながら棺が学校で過ごしていると、

昼休み、突然、ドアが開き聞き覚えのある声が…

「…あ！　棺、見つけましたよ！　ほらほら、お昼休みは短いんですから！」

何故かややテンション高めで衣が言う。

「…悪夢だ」

呼び掛けられた赤髪赤目で有名な不良、神無棺はもう一度言った。

と言うのも、

「ええ！　あれって、この間転校して来た江枕さんじゃない？」

「何であの神無に…って言うか親しげ？」

「あの二人にどんな共通点が…って言うか、羨ましいぜ！　オレ、江枕さんスゲータイプなのに…」

「実はオレも…」

などと言った声が周りからちらほらと聞こえるからである。

「…意外とモテるんだな、お前」

「え？　何ですか？」

「いや、何でもない、さっさと行こう」

これ以上ここには居られないと、棺は教室から出た。

「全く、絶対に誤解されたぞお前。学校でオレなんかと関わって、イジメに遭っても知らねえからな」

人気の無い屋上にやって来て、座りながら衣に言う。

「イジメ？」

「…はぁ、天然の妹は天然だよな…」

「それ私のことですか？」

「他に誰がいるんだ」

棺は呆れたように溜め息をついた。

この屋上は手摺りが壊れかけていて危険な為、滅多に人が来ないので、よく棺はここで昼寝をしていた。

ちなみに、衣はここを調べていて、危うく転落死しかけて、棺と出会った。

「で、何の用だ？」

「先輩ですよ、先輩！　今日の放課後行く予定でしたでしょう！」

「…ああ、そうだったな」

今、思い出したように棺が言った。

「行くのは直接でいいですよね？　また、放課後に迎えに行きますから」

「頼むから、もう教室には来るな。今、どんな噂が流れてるかも分かんねえし、もし、『あいつ』に知られでもしたら…」

「あいつ？」

衣が嫌そうに言う棺のその言葉に首を傾げる。

「もう知ってしまったのであるよ？」

屋上の扉が開く音と、奇妙な口調の声がした。

「はぁ…最悪だ」

棺が魂を吐き出すような深い深い溜め息をついて、その人物に目を向けた。

綺麗な長い銀髪に碧眼と、日本人では有り得ない容姿をした。

端正な顔をした美少女であるが、何故か、棺と同じ、男子の制服を着ていた。

「親友に向かってその態度は何なのであるよ！」

「誰がだ。せいぜいお前は悪友止まりだ『レイヴ』」

そう棺はその女、レイヴに言った。

「えーと、棺のお知り合いですか？」

「その通り！　今話題の棺の彼女（仮）さん！　私はレイヴ・ロウンワード！　棺と愛を誓った許婚であるよ！　この泥棒猫！」

「ええー！」

「今度は許婚か…」

堂々と嘘をつくレイヴと、それをあっさりと信じる、やや天然の衣に棺はまた深い溜め息をついた。

「まあ、こいつは、何だ、知人だ」

「冷たい！　冷たいのであるよ！　一年の付き合いだと言うのに…まさか、もう倦怠期が！」

「棺の友達…ってことでいいんですよね？」

「その通りである！　あれは一年前、私が自分探しの旅をしている途中に個人情報を偽造してこの学校へ入学した時のこと…」

「えーと、どこまでが本当の話ですか？」

「分からん、こいつの嘘は真実を交ぜて言うから、いつもどこまでが本当なのか分からない」

衣の疑問に棺が溜め息をつきながら答えた。

「私が外国人であることと私の素晴らしい会話について来れないと言う理由で、私はいつもイジメられていたのである」

「これはどこまでが？」

「孤立していたのは本当だが、イジメられてはいなかったぞ、確か」

衣に聞かれ、棺がレイヴの嘘を訂正する。

「そんな時、私をイジメていた主犯格を棺は格好よくぶっ倒し、私を助け出してくれて…」

「棺、これはどこまでが…って棺？」

「……」

衣がまた棺の方を向くと、棺は俯き、プルプルと震えていた。

「それから私は…」

「ふざけんじゃねぇー！　捏造にも程があるわ！　それはテメエが勝手にオレの名前で果たし状なんて渋い物を出してオレを嵌めたんだろうが！」

「あれ？　そうだったかな？　最近物忘れが激しくてな」

キレる棺と更におちょくるレイヴ。

「…友達、一人はいたみたいですね」

それを見て、二人の関係がよく分かった衣だった。

第七話　神無棺の日常

「で、結局どんな関係なのである？　幼なじみの私としては聞いておきたい所なのであるよ？」

「一年前に会ったばかりだろうが、このほら吹き女め…こいつは…その、何だ……バイト仲間？」

男装趣味の悪友に棺は衣との関係を棺なりに解釈して言う。

「間違ってはいないですけど、若干どこかおかしいような…」

やや天然の衣はその言葉に首を傾げる。

「ふーん」

聞いた割にさほど興味のなさそうに言うレイヴ。

「それで、お前のその口調はいつものことだからいいとして、今日は男装かよ」

「うん、今日は、男でいって見ようかなと思ったのであるよ」

自分の制服を見ながらレイヴが言う。

「…世界一適当な奴だな、相変わらず…」

「ええと？」

「考えるな衣。あと気をつけろよ、こいつは両刀遣いの変態だからな」

「失敬な！　ただ、私は男も女も愛せる。ラブは地球を救うと思っている聖女なだけであるよ？」

神に祈るような、芝居がかった仕種をしながらレイヴは言う。

「…お前と話していると頭がおかしくなりそうだ」

うんざりしたように棺が溜め息をつく。

レイヴ・ロウンワードと棺は一年前からの仲だが、その頃から妙に好意的なレイヴとは正反対に棺はレイヴを苦手としていた。

何より、若干人間不信な所がある棺に対し、この一体何を考えているか分からないレイヴの性格は相性最悪だった。

「確かに男女どちらでも構わない、でも、今のところは棺にゾッコンラブ！」

「…放せ」

腕に抱き着いてきたレイヴを鬱陶しそうに引きはがしながら棺が言う。

普通なら、西洋風美少女である、レイヴに抱き着かれれば嬉しいかもしれないが、全て冗談だと分かっているので棺は喜ばない。

というか、レイヴの言葉や仕種の一つ一つが嘘臭い。

「…あれ？　棺、平気なんですか？　女の人ですよ？」

抱き着かれた棺が顔色一つ変えないことに、先日棺の幼なじみから教えてもらったことを思い出して言う。

何かのトラウマなのか、棺は異性に触れられるとがたがた震える。

だが、レイヴに触れてもそれがない。

「あー、あれだ。多分、こいつのこと女だと思ったこと無えからじゃねえの？」

詳しくは分かんねえ、と自分のことなのに言う棺。

「はぁ、そんなものなんですか？」

よく分からないけど適当な人ですね、と思いながら衣は言った。

「しかし、意外でしたね、友達がいないって聞いてましたけど」

「友達なんかじゃねえよ。ただの……ストーカーだ」

レイヴを表現する言葉が見つからず、棺が言う。

屋上から出て、とりあえず購買部でパンでも買おうと二人で廊下を歩いていた。

弁当を持って来ない棺は、元々、先に購買部に行って屋上で食べるつもりだったのだが、

衣と一緒にいるところを出来るだけ人に見られたくない為、購買部から人がいなくなるまで待っていた。

別に気恥ずかしいとかでは無く、変な噂が立った時に迷惑するのは衣だろうと、棺なりに気遣かっていた。

ちなみにレイヴは用事が済んだからか、どこかへ消え果てた。

「ストーカーって…」

「大体、素行不良以前にこの髪や目の色で嫌でも目立つからな…」

忌ま忌ましそうに棺は自分の赤い前髪を見る。

「…イジメられてるとかですか？」

「いや、逆だ」

「逆？」

衣が意を決して聞くと予想外の返答が来た。

その意味を衣が考えて頭を悩ませていると、

二人の前から数人の男がやって来た。

金髪やピアスなど明らかに素行の悪そうな男達だ。

男達が衣を見て、その後、棺を見てニヤリと笑った。

そして、

「「「ちわーッス！　神無さん、おめでとッス！」」」

全員そう言って棺に頭を下げた。

衣は声の大きさとあまりの驚きに転びそうになった。

「…声がでかい。つーか、聞きたくねえが、何がおめでとッスなんだ？」

「その隣の…「ストップ、何となく理解した。今よりその話題は禁句にする、話している奴らがいたら、脅しておけ」…りょ、理解ッス、アニキ…「アニキ言うな」…」

近くにいた不良Aを片手で胸倉掴んで持ち上げながら棺は言う。

棺が手を放すと不良達はどこかへ走っていった。

「…今のは忘れろ」

「理解です、アニキ」

「アニキ言うな！」

疲れたように言う棺に珍しく衣が冗談を言い、棺がキレた。

触れられたくない所に触れられたようだった。

「この学校の番長ってやつッスか？」

「番長じゃねえよ、その話し方もやめろ」

「慕われてるみたいじゃないですか？」

「喧嘩売ってきたから返り討ちにしただけだ。馬鹿ばっかりだ」

レイヴの時より疲れたように棺は言う。

「喧嘩強いんですね、これから期待できそうです」

これからのパートナーとして嬉しそうに衣は言う。

「…お前も馬鹿だな」

言葉通り棺は馬鹿にしたような溜め息をついた。

「何でですか！」

「自分と体重の変わらない大の男を片手で胸倉掴むだけで持ち上げる…なんてリアルじゃ結構難しいことなんだぜ？」

「……？」

「聖痕使ったに決まってるだろうが」

「なっ！」

「触れたモノを無重力に…手から離れれば十数秒しか持たないが、触れてる間は無重力のままに…まあ、つまり、相手の重さに関係なく持ち上げることが出来る訳だ」

「イ、インチキです！　大体秘匿するべき力を…」

「言っとくが、思い付いたのは昨日で使ったのは今日が初めてだ。試してみたら思いの外、上手くいった」

「うう…」

手を開いたり閉じたりしながら棺が言うが、衣はあっさり騙されたことに呻く。

別に棺に悪い所は無いのだが、妙な敗北感を感じているのだ。

しかし、今まで自分の聖痕に微塵も興味を示さなかった棺がこのような応用を考えたのは、やはり、衣の手伝いをすることを考えているのかもしれない。

流されて、成り行きですることになった手伝いだが、それなりに責任感はあるようだった。

隙間の神（前書き）

色雨と衣が所属する、隙間の神の構成を説明しておきます。

隙間の神

隙間の神

上下関係は基本的には、

トップ＞部隊＞一般隊士

と言う感じだが、

第一と第二は本部勤務なので少し階級が上。

部隊名は階級名でもあり、部隊内での上下は無い。

熾天使（セラフ）

最終的な決定を全て決めるトップ。

大低は智天使か座天使の中から実力と知力と統治力に優れている者が選ばれる。

第一部隊

智天使（ケルビム）

熾天使の補佐や相談役を任せられている部隊。
戦闘力は重視されず、補佐として優れている者が所属する。

繰上炬深が所属。

第二部隊
座天使（スローンズ）
本部の警護を行う部隊。
隙間の神で最も実力のある部隊で聖痕使いとしての戦闘力が重視される。

第三部隊
主天使（ドミニオンズ）
記憶の操作などの事後処理を行う部隊。
支部に一人から二人割り当てられている。
記憶を消去させる聖痕や暗示をかける聖痕など特定の聖痕を持つ聖痕使いが所属する。

第四部隊
力天使（デュナメイス）
戦闘を主な活動としている部隊。
支部だけでは対応できない違法聖痕使いが現れた時に派遣される。
戦闘力を重視しているが、非聖痕使いでも聖痕装置を上手く扱えることが出来る者も所属する。

第五部隊
能天使（エクスシアイ）
調査や資料管理、聖痕装置の調整など事務的なことを任せられている部隊。
最も多くの一般隊士が所属する。

第六部隊
権天使（アルヒャイ）
支部長など、一般隊士に指導する部隊。
実力よりも指導力が優れている者がここに所属する。

江枕色雨が所属。

第七部隊
大天使（アルヒアンゲロイ）
犯罪を犯した聖痕使いの収容所の管理をする部隊。
基本的に戦闘力が低い聖痕使いや非聖痕使いがここに所属する。

一般隊士
支部で調査や補佐などの研修をする見習い。

江枕衣など

第八話　アグレッシブな怪我人

「さて、今から病院に向かう訳だが…」

「何ですか？」

「どこの病院だ？」

学校が終わり、愛車スコーピオンを引いて通学路を歩きながら棺が衣に聞いた。

「こっちですよ。私が口で案内しますから、乗せて下さいよ」

「だから、無理だって言ってるだろうが」

どうしても乗りたいのか、棺の真っ赤なバイク、命名スコーピオンを指差しながら衣が言うが、棺は即座に断る。

先日も似たようなやり取りをしていたが、棺は女に触れられない。

レイヴのように例外的に該当されない女以外全て。

「あれですよ、女性に慣れる訓練ってやつです」

「……事故る」

簡潔に言い、棺は機嫌の悪そうな顔をする。

「むむむ…」

「そんなに乗りたいなら、観念動力（サイコキネシス）で生み出せばいいじゃねえか」

「単純な思念（イメージ）を物質化するのが私の観念動力（サイコキネシス）なんです。機械みたいに複雑なのは無理です」

「なんだ、つまらん」

自分以外の聖痕に少し期待していたのか、棺は残念そうな顔をする。

「万能じゃないんですよ、聖痕も人間も。だから、人は一人では生きていけないんです」

「…無理矢理良い事を言おうとしてないか？」

「うるさいですね。いいじゃないですか、語ったって…歳の近い友達なんて初めてなんですから」

少し寂しげな表情で衣は言った。

「は？　そうなのか？」

意外そうに棺が聞く。

学校での周りの様子や本人の明るい性格から、自分みたいに孤立するのとは無縁だと思っていたのだろう。

「学校は潜入捜査として、この町の学校を転々としてますし、私の歳で隙間の神に正式に入る人は珍しいので、支部には歳の近い人と

かいませんし…」

「成る程な…」

棺も共感できる所があるのか、頷く。

「そういう面でも、棺が私の協力者になってくれて、とても嬉しいです」

「…フン、何もしてないのに礼を言われても虚しいだけだぜ」

目を逸らして棺がボソッと言った。

「あれ？　ひょっとして照れてます棺？」

「照れてなどいない」

仮面のような表情を作り、棺が言う。

「女性には触れられない訳ですし、周りにはレイヴさん以外に女性はいませんし…もしかして、棺、女性に免疫ありません？」

「マセてるんじゃねえよ、ガキのくせに」

「同い年ですよ！」

棺の言葉に過剰反応する、見た目中学生の衣。

気にしているようだ。

「ちっこくて同い年に見えねえんだよ、お前、高校生になっても映画とか子供料金で通るタイプだろ？」

「むー！」

「ハッハッハッ、面白え、弄りがいあるなお前」

その後、目的地の病院に着くまで間、棺は衣を弄り倒した。

衣に案内された病院は町で一番大きな病院で、棺も来たことのある場所だった。

脇の駐輪場に引いてきたバイクを止めて、二人は入り口から入り、受付へと向かった。

「すいません、軽根間人（カルネマヒト）さんの病室は何号室ですか？」

衣が受付に向かい、その人物の名前を言う。

それを見て棺は訝しげな顔をした。

「何だ、見舞いに来たことがなかったのか？」

棺は知り合いのように話していた衣の口ぶりから、見舞いに何度か

来ているものだと思っていた。

だから、何号室か分からない衣に首を傾げながら言ったのだった。

「前に一度来たことがあるんですけど、結構前のことで、覚えていないのと、もしかしたら、病室が変わっていたりしているかもしれないので…」

受付の人間が調べているのを見ながら、衣が言う。

「成る程な…長期入院なんだな」

「はい」

「どんな人なんだ?」

これから会う人物に興味を持ち、棺が言う。

「男の人で、歳は…兄さんよりも年下と言ってましたけど、私達よりは年上でしょう、性格は…」

そういうと少し考え込むように衣は頭を捻る。

その人物の性格を表すピッタリの言葉が中々見つからないのだ。

「…アグレッシブな怪我人…でしょうか?」

「は?」

思わず棺は素っ頓狂な声を上げた。

珍しく衣がボケをかましたのかと思ったのだ。

しかし、それはボケでも嘘でも無かった。

突然、シャアアアア…とスケート靴でスケートリンクを滑るような爽快な音がした。

場違いなその音は段々と棺達のいる場所にまで近づいてくる。

ついでに、何か声のようなものも聞こえてきた。

「何だ？」

棺は音のする方へ振り返った…すると、

「ヒャッホー！　病院を出られないからって、病院が楽しくない所と誰が決めたんだ！　エキサイティング！」

油でも付けているのか、何故かやけによく滑る車椅子に乗った男がこちらに向かって来た。

その遥か後ろには注意しようと追いかけようと思ったのか、ぜえぜえと息を切らせながら走る白衣を着た初老の男がいた。

「車椅子なのだから、車の役割を持った椅子だとしても何ら不思議は…待てよ、よく考えて見れば、これ、止まる時、どうしよう…」

ギュンギュンと加速しながら進む車椅子に、その運転手が思案顔をする。

「あ」

それを見て、衣が口をOの形にして呟いた。

そしてそのまま、その車椅子はズドンッとロビーにあったソファーに激突した。

「軽根さん…」

「え！　あれが！」

車椅子から振り落とされて床の上で沈黙しているアグレッシブな怪我人を指差して棺が言った。

「どうも、軽根間人というものだ。衣ちゃんは可愛いくなったな」

その後、間人の病室に案内されてから、間人が言う。

「そんなに変わってない気がしますが…」

「ああ、社交辞令だ」

さらりと間人は言った。

「どういう意味ですか！」

「ははは、まあ、病院暮らしで娯楽が無いんだから、付き合ってくれ」

間人は爽やかな笑みを浮かべている。

棺は入院患者に偏見を持っていた訳では無いが、ここまで衣曰くアグレッシブな間人に驚いていた。

「病気じゃないんで、ベットで寝るのも退屈だし、暇で暇で死にそうなんだ」

「足を…怪我しているみたいだな」

「そう、下半身なんとか…ってやつで歩くことが出来ないんだ」

「……」

「あー、マズイこと聞いてしまったとか思うなよ、オレが不幸かどうかは、オレが決めるんだから」

「…凄えな、リアルにそんなこと言うやつ、初めて見たぜ」

その言葉に感心したように棺が言った。

「で、もしかして君は衣ちゃんの彼氏か？」

「え！」

「違う、協力者だ」

驚き、動揺する衣を尻目に棺はあっさりと否定する。

「協力者？」

「…彼も貴方と同じです」

少しも動揺しない棺に何となくやる瀬なさを感じながらも衣が付け足す。

「…成る程ね」

納得がいったように間人は頷いた。

「前に来た時は聞けませんでしたが、やっぱりその足の怪我は…」

「ああ」

間人は今までとは違う乾いた笑みを浮かべて言う。

「『正義の味方』…なんて曖昧なものに憧れて、成ろうとした、身の程知らずなオレが受けた罰だよ」

第九話　黒い影

「えーと…あいつら何を飲むんだ?」

間人の話を少し聞いた後、手ぶらなのはマズイと衣がいい、飲み物を買いに、棺は病院の自販機までやって来ていた。

ちなみに、棺が一人でパシリ扱いされているのは、衣にじゃんけんで負けた為である。

「衣は明らかに子供だから味覚も子供だろ」

独り言をいいながら棺はオレンジジュースのボタンを押した。

「問題はあの車椅子だな…何飲むんだ?」

自販機を眺めながら棺は頭を捻る。

「意外とウケ狙いで変なのをやった方が喜ぶかもしれねえな…」

そういい、『ココナッツおしるこ』と言う怪しげな飲み物を凝視する棺。

よし、と一つ頷き、棺はボタンを押そうと…

「やめといた方がいいよ、それ、前に飲んだけど、凄いまずかったから」

突然、棺は横から声をかけられた。

棺の横には一人の男が立っていた。

その男は、上下黒っぽい服装をしていて、それよりも更に濃い黒髪、そして、棺とは対称的な濃い青色の瞳をしていた。

歳は顔は十代後半ぐらいに見えたが、その雰囲気はそれより上に棺は感じた。

「そうなのか？」

「うん、僕のオススメはコーヒーかな？」

手に持った缶コーヒーを見せて、黒髪の男は言う。

黒髪の男は、その他にも大量の缶コーヒーを手に持っていた。

「…自販機で一気にそんな買う奴、初めて見た」

「それがね、僕はカフェイン中毒ってやつでさ、コーヒー飲まないと落ち着かないんだよね」

黒髪の男は困ったような顔をした。

「ふーん…医者ならその辺にいるぜ？」

「いやいや、それほど酷い訳じゃないよ。僕は見舞いに来たんだ」

「見舞い？」

「こっちの話だよ。それより…」

じっとその青い瞳で棺を見つめる黒髪の男。

「君は、変わった目をしているね」

「…それをお前が言うか？　オレが赤なら、お前は青だろうが」

「僕はただ、ハーフなだけだよ。赤髪や青い目は海外じゃいくらでもいるけど、赤い目ってのは、そうそういないよね」

人間と話をする為に見ている目では無く、棺と言う存在を観察するような目で黒髪の男は言う。

「…人を待たせてるんで、オレはもう行くぜ」

自分すら、よく知らない髪や目について触れられたくないのか、棺はそう言い、黒髪の男を置いて、立ち去った。

「あらら、行っちゃった…まあ、そこまで重要なことじゃないし、いいか」

そう呟き、黒髪の男は棺とは違う方向へ歩き出した。

軽根間人の病室では無い、最上階の隅の、滅多に人の来ない病室のベットに、一人の女が横になっていた。

歳は十代後半から二十代前半ぐらいで、可愛いというより綺麗なタイプだが、飴の包み紙みたいな色の可愛いらしいリボンで髪を結んでいることから、意外に少女趣味なのかもしれない。

しかし、その目には生気が無く、全てを台なしにしている。

「…はぁ、今日も何も起こらずに終わるのかしら」

リボンの女は溜め息をつきながら呟いた。

この世の全てに絶望したような声だった。

「……いよいよ、誰も見舞いに来なくなったわね…白状なものね。人間って言うのは…」

リボンの女はある病気を患っていて、筋肉が衰え、立つことは疎か、電話を取ることも出来なかった。

彼女は、両親は早くに他界したのだったが、それでも前向きに生き続け、両親の遺産で学校を卒業した後、就職をして友達も沢山作って、どちらかと言えば目立つ人間だった。

しかし、この病気を患った後は、会社も辞め、友達も何年も入院する内に見舞いに来なくなってしまった。

いつ治るのかは分かっていない。

急死することは無いと彼女は医者に言われたが、彼女にとっては、もはや、どうでもよかった。

ベットの上から動けない生活など、彼女にとっては死も同然だったのである。

その時、ガチャッと扉が開く音がした。

検診の時間はまだだ。

見舞いなんて珍しいなと思い、リボンの女は入り口を見る。

「やあ、こんにちは」

缶コーヒーを幾つも手に持った、黒髪に青い瞳の男だった。

「…誰かしら？　見舞いは嬉しいけど、ボクみたいな可愛い男の子、会った記憶が無いんだけど…」

リボンの女が頭を捻り、記憶を思い起こすが、覚えが無い。

「僕はこれでも、君より年上だよ」

「嘘！　若いわね、凄く羨ましいわ…」

心底驚いたようにリボンの女は言う。

「…コホン、さて、僕が誰で、君が誰かはとりあえず置いておくよ」

気を取り直すように咳を一つして、缶コーヒーを一つ開けて飲み始める。

「君は今、絶望している。世界の理不尽だとか人間の白状さだとか、その他諸々にね」

「そうね、絶望してるわ。いけないことかしら？」

「いや、絶望は必要だよ。この世に不必要な経験は一つも無い。何事も経験さ」

黒髪の男は、あっさりと絶望を肯定する。

「だけど、君には欠けているものが多い」

「それって、私が無能って意味かしら？」

リボンの女は怒った風では無く、普通な調子で聞き返した。

「そういう意味じゃない。少し話が変わるけど、僕は人間は皆、欠陥品だと思うんだよね。だから、欠けている部分を補う為に、様々な努力や経験をする。向上心ってやつかな？」

「……」

「不必要な物は何も無い、不幸も災難も悲劇も絶望も受け入れろ。そして、完成された完全な存在に近づくんだ」

そういうと、黒髪の男はリボンの女の手を取った。

「君の『欠陥』を僕が『補って』あげよう」

「何だこりゃ」

黒髪の男とのやり取りの後に、自販機から戻ってきた棺は、間人の病室の扉を開いて思わず言った。

「クッキー焼いてきたよ！お医者さんと相談して、栄養のあるやつを」

「いや…」

「あ！　それより先に飲み物だよね！　ごめんなさい、気がつかなくて…」

「あの、だから…」

「分かったすぐに買って来るからね！」

病室の中では車椅子に乗った間人が困ったような顔をしていて、その周りにはバタバタと無駄に慌ただしくしているハイテンションの少女がいた。

衣は今日、初めて間人を見た時のようにぽかんとしている。

「…ん？」

その少女が棺を見た。

と思ったら、すぐに視線を衣に移した。

「あーーー！　間人が病室に女を連れ込んでたーーー！　この浮気者ーーー！」

「いや、だから、たまには人の話を…」

「うわーん！　裏切られた！　君を守るとか言ったくせに裏切られたーーー！」

「人の恥ずかしい過去を暴露するんじゃない！」

「え、お前、そんな恥ずかしいこと言ったのか？」

「聞かなかったことにしてくれ！」

この混沌とした空気はしばらく続いた。

「初和音実（ハツワネミ）って言います。ちなみに間人の婚約者だよ！」

何とか思い込みが激しく、人の話を聞かない、暴走列車のような少女、初和音実が言う。

歳は棺達より少し下ぐらいに見え、笑顔が可愛いらしい少女だった。

「と申しておりますが」

棺が変な口調でちらりと間人を見る。

「……事実です」

「このロリコンが！」

「第一声がそれかい！　って言うか違うわ！」

「中学生に手を出しておいて、何をしらばっくれてるんだ！」

「オレはまだ二十だ！　彼女は十五！　問題無し！」

「成人した大人が中学生に欲情を抱くんじゃねえ！」

「段々とオレの罪が重くなって来てるぞ！オレ達はプルトニウムなお付き合いをだね…」

「そんな危険な付き合いがあるか！　それを言うなら、プラトニックだ！」

棺と間人の二人は大声で言い合う。

音実は、私の為に争わないでー…などと、また的外れなことを言っており、衣はまたしてもぽかんと口を開けていた。

（…話が進まない）

衣がふと思った。

第十話　元正義の味方の男

先程からの騒ぎが落ち着いてから、今、間人の病室には、間人と棺だけがいた。

間人が同じ協力者として話しておいた方がいいかもしれないと言い、衣に音実と一緒に病室から出るように言った。

衣は聞きたがっていたが、刺激が強すぎると間人が譲らなかった。

「君も、協力者だったね、どうして手伝うと決めたんだい？」

「…成り行き？」

頭を捻りながら何となくの答えを棺が言う。

「ふふふ、まあいい。オレはね、協力者と言えるかどうかも曖昧な程、暴走した聖痕使いだったんだ」

「どういう意味だ？」

「サポートでは無く、勝手に悪を探して、勝手に人を助けていたんだ。自分一人で、周りなど無視して」

その事を後悔しているような声だった。

「聖痕使いの聖痕って力はね、聖痕という無色のエネルギーを火や念力に変換するようなものらしい。個々によって変換する物は変わり、その為、超能力、魔法など様々な名前に別れているんだ」

「……」

「つまり、個人個人によって力の在り方は違う……君は自分の力が何の為に自分にあるか考えたことはあるかい？」

「…無いな。今まで、自分に力があるとか、自分が特別だとか思ったことが無いからな」

少し考えるような仕種をした後に棺は言った。

「そうか…オレは、この力は誰かを救う為の力だと思った…」

車椅子に座りながら間人は拳を握った。

「だから、正義の味方とか言うものに憧れてしまったんだ」

何かに後悔しているような顔だった。

「何だろ？大事な話って…のけ者はつまらなーい」

ロビーの椅子に座り、棺の買ってきたジュースを飲みながら音実が言った。

間人にのけ者にされたのが気に入らないのか、不機嫌そうに足をぶらぶらと揺らしている。

十五歳だと間人は言っていたが、その仕種は歳より下に見える。

隣に座っている衣も外見は中学生ぐらいに見えるので揃っていると同年代に見られているかもしれない。

「…多分、事件絡みなんだろうなー」

音実は小声で呟いた。

その表情は今までとは違って、大人びたものだった。

「…音実は知っているんですか？」

「知ってるよ。間人が元、正義の味方だってこと…だって…」

「だって？」

衣が聞き返すと、音実はとても悲しいことを思い出したかのような顔をした。

「だって、間人のその夢を奪ったのは私だから」

見ている方が辛くなるような顔をして音実は言った。

「二年前のことだ。自分で言うのも何だけど、昔から正義感が強かったオレは、力に気づいた時から、軽い使命感のようなものを抱いていた」

「……」

「自分には他人には無いものがある。他人を救うだけの力があると……だから、オレは人を救うことにしたんだ」

間人は思い出すように、言った。

「そして、しばらく、人知れず人助けをしていると、隙間の神に出会い、協力者と言う立場になった」

「…隙間の神」

「だが、協力者になってもオレのすることは変わらなかった。ただ、救う対象…倒すべき対象に違法聖痕使いが加えられただけ…楽なことじゃなかった。だけれど、これはオレの義務だと疑わなかった」

本当にさっきまでの間人か疑うほど、声に力が無く、弱々しく見えた。

「そして、最後に救ったのは、音実だ。違法聖痕使いに出会ってし

まった憐れな少女を救う為に、立ち向かい、結果、聖痕も使えない程、ボロボロにされた」

「違法聖痕使い…」

学校で悪戯をしていた違法聖痕使いしか知らない棺はそこまでの違法聖痕使いがイメージ出来なかった。

そもそも、この間まで不可思議なことがあること以外は何も知らなかった棺に明確な敵、犯罪者がイメージ出来るはずも無かった。

「だが、正義は貫けたんじゃないのか？」

棺は言う。

結果どうなったとしても、それだけ自分の信念に従っていたのだから、後悔はしないだろうと、

その怪我も正義を誓った時に覚悟していたものだろうと…棺は言った。

しかし、

「…そうじゃない。オレは歩けなくなったことを嘆いてる訳じゃない…」

「……」

「…一瞬だったんだ。人魂みたいなものが目の前に現れたと思ったら、オレの戦いは終わっていた……オレは、オレの思い描く正義が

どんなに脆いものかを思い知らされたんだ」

間人は自分が重傷を負って歩けなくなったから絶望したのでは無かった。

自分が今まで信じていたものがあっさりと敗れたことに絶望したのだ。

「正義の味方…成れたと思っていたんだけどなぁ」

弱々しく、間人は言った。

「正義の味方か…」

間人の話の後、閉院時間を迎えたので、二人は病院を出た。

暗くなって来ている道を二人は間人について話しながら歩く。

衣は直接は聞いていないが棺が問い詰められて、大体は話した。

「…オレはそんな曖昧なものは信じないが、成ろうとした間人は素直に凄いと思うぜ」

「…そうですね」

棺の言葉に何故か衣の元気が無い。

隙間の神として、何か思うところあったのだろう。

「…間人さんは間違っていたのでしょうか？」

「結末はどうあれ、間違ってはいないと思うぜ」

棺は、衣を慰める為でも無く、偽り無い本心を言う。

「自分の力だ。どう使おうと間違っていない…まあ、違法聖痕使いを認めるつもりは無いけどな。あいつの生き方は間違っていない」

「…意外に良いことを言いますね」

「意外には余計だ」

棺と衣が笑い合う。

「見直しま…「ああー！　オレの鍵が無い！」…は？」

笑顔で衣が言おうとすると棺が懐に手を入れて後に叫んだ。

衣は呆気に取られた顔をした。

「落としたのか！　よりによって家の鍵！　くそっ、閉院時間過ぎても宿直ぐらいはいるか？」

先程までとは一変して顔つきが慌てたものになる棺。

衣は衣の中で上がっていたものが急降下したことを感じた。

そして、しばらくすると、衣は溜め息をつきながら、

「まあ、棺ですからね」

「そこはかとなく、妥協されたような気がするぞ！」

棺が戦慄したように叫ぶ。

「ほらほら、早く戻らないといけないんじゃないですか？　私のような、か弱い女の子は夜道に一人残して、さっさと戻ればどうです？　ムードのかけらも無い神無棺さん」

「オレそこまで言われる程のことをしたか！　って言うか、鞭を振り回す女をか弱いとは言わねえ！」

「デリカシーも無いんですね、口は災いの元だと言うことを思い知らせ…「さらば！」…あっ！　ちょ！　だから、人の話は最後まで聞きなさい！」

衣が怒りながら手に光る鞭を生み出した所で、棺は引いて来ていた『スコーピオン』に飛び乗って、病院へ逃走した。

第十一話　夜の病院

「ふう、危ない危ない…」

棺は衣から逃げながら病院に辿り着いた。

既に、辺りは大分暗くなっていて、足元に気をつけて歩かなければ転びそうな程だった。

「…真っ暗。消灯時間早過ぎないか？」

棺は明かり一つ付いていない病院を見て呟いた。

時計を見ていないので、正確な時間までは分からなかったが、それでも消灯時間には早いはずだった。

「…一応、確認しとくか」

最悪、孤児院に泊めてもらおうと考えながら、さっきも来た入口へ向かう。

すぐに戻るつもりなので、バイクは適当に入口の近くに止めた。

「あれ？」

しかし、予想外にも、病院の扉の鍵は開いていた。

中は暗く、音もしない。

「……」

それに違和感を感じた棺は暗くて不気味な病院の中へ入って行った。

「ホラーだな、全く」

昔した廃病院が舞台のホラーゲームを思い出しながら棺が病院の廊下を歩く。

棺の言うように、暗い病院の中は、独特の不気味さがあり、ゾンビでも出てくれれば、完全にホラーゲームだった。

「幽霊でも出て来そうだな……いねえよな？」

思わず呟いた自分の言葉に棺は自問自答する。

「いやいや、この歳で幽霊怖がるとかねえだろ……だけど、聖痕は実在するしなぁ…」

暗闇の中、一人で幽霊問答を続ける棺。

「…よし、幽霊はいるかもしれない。だが、今は出てくるなよ」

ポンッと手を叩き、棺の幽霊問答は終わった。

ピピピピピピー！

「うおおっ！……何だ、携帯か…病院では携帯の電源は切りましょうー…」

自分の携帯の音に盛大に驚き、棺は電源を切った。

舎弟を沢山持つ番長は、意外にビビりかもしれない。

「さっさと間人の病室に…つーか、今更だけど、病室の鍵とか閉まってるんじゃねえか？」

棺は根本的なことに気が付いた。

しかし、病院に入ってから何故か一度も人に出会っていない為、どうしようもなかった。

「ん？」

とりあえず人を捜そうと、廊下を歩いていると、棺はあることに気がついた。

「床が…濡れてる？」

棺の歩いていた廊下は何故か水浸しになっていた。

窓から雨が入って来たかのようだが、窓は開いていないし、雨も降っていない。

「夜の病院、水浸し…何か嫌な予感が…」

♪～♪～♪～♪～

「うおっ！」

棺が何かを考えていると、また電話の音が聞こえた。

着信音は聞き覚えの無い、奇妙な音楽だった。

「電源は切ったはず…つーか、こんな変なメロディーじゃなかった…」

ちらっと棺は背後を振り向いた。

「失礼。病院では電源は切るものでしたネ」

携帯を片手に持った奇妙な男が立っていた。

奇妙な男だった。

服装は水に濡れたレインコートを着て、手には何故か青い傘。

歳は棺と同じくらいに見えるが、顔つきはハーフなのか、外人に近い。

「ボクの名前はオーミー・氷咲（ヒザキ）デス」

やや発音が怪しい日本語でオーミーが言う。

「芸人みたいな名前だな」

「ほっといて下さい、気にしてるんデスから」

棺の言葉に機嫌悪そうにオーミーは言った。

自分の名前が嫌いなようだった。

「で、夜の病院でお前は何をしてるんだ？」

明らかに怪しいオーミーに棺は率直に聞く。

「そちらこそ…名前聞いてませんネ」

「ああ、オレは神無棺。忘れ物を探してたんだが…」

やや気恥ずかしいのか、棺は言葉を濁した。

「そうデスか、それは運がありませんでしたネ」

「…そうだな」

「今日、ここに来なければボクに出会うことも無かったのニ」

オーミーはそう言うと、傘を振り回しながら、ゆらゆらと動き出し

た。

「な、何だ？」

「ここだけの話、ボクは魔法使いなんですよ」

困惑している棺にオーミーは告げた。

「魔法使い？」

（…こいつ、不思議な奴だと思ったら、痛い奴だったのか？）

棺がオーミーのことを可哀相な奴に指定していると…

「魔法使いが魔法を行使するには杖が要りマス、これはその代用」

青い傘を振り回しながらオーミーが言う。

「行きなさい！『怪火（ウィルオウィスプ）』」

オーミーがそう叫ぶと、青い傘の先から青白い人魂が幾つも噴き出した。

「なっ、聖痕か！」

それを見て、棺はオーミーには魔法（スティグマ）が宿っていると気づいた。

人魂達は空中を揺らめき、棺に近づいてくる。

「炎の魔法ってか？　なら…これならどうだ？」

棺は廊下の隅に備え付けられていた物を構える。
消火器だ。
「科学の力をナメるなよ、魔法使い！」
ブシューと音を発てて、消火器から中の薬剤が人魂に放たれる。
しかし、
「確かに、炎の魔法なら、反則技っぽいデスけど、それでもよかったんデス。だけど…」
消火器の薬剤は全て、人魂をすり抜けた。
「ボクは『瞬間の魔法使い（タイミング・マジシャン）』…得意とする魔法は、瞬間（トキ）を操る魔法だけデスよ」
「…その二つ名、恥ずかしくないのか？」
人魂に囲まれながらも、棺は呆れて呟く。
「ならば、その二つ名が伊達で無いことを教えて上げマスよ！」
人魂が一斉に棺に襲い掛かって来た。
「熱っちぃ！…くない？」
その人魂の幾つかが棺に触れたが、何故か、棺は火傷しなかった。

「言ったでしょ、瞬間（トキ）を操る力だっテ…」

薄く笑いながらオーミーは抱擁でも交わすかのように両手を広げた。

「『瞬間よ止まれ、汝はいかにも美しい』」

瞬間、棺の時が止まった。

（音が…消えた？）

人魂の燃える音、

水浸しの床を踏む音、

様々な音が消えた。

棺は呆然と立ちすくんだ。

ゴッと右側から頭に衝撃が走った。

「グ…」

何かに殴られた。

ふらつく身体を何とか抑えて、右側を見ると、オーミーが傘を手に立っていた。

さっきまでは前方にいたはずのオーミーが、棺が不可解な現象に困惑している間に移動したのだ。

（だが、数秒と経って無いはずだぞ！）

棺は更に困惑した。

頭を殴り付けたのはあの傘だろう。

杖の代用など言っているのだから、武器用に改造していてもおかしくない。

オーミーが音速に近い速度で加速した訳でも無い。

例え、目で終えない程、速くなろうと、何かしら前兆はあるはずだ。

オーミーが加速した訳では無く、オーミーはただ、歩いてきただけだ。

つまり、

「一撃で気絶するように殴ったんデスけど、案外、石頭デスね」

「お前…何をしたんだ？」

不可思議な現象に理解が追い付かない棺が尋ねる。

「うん？　だから、言ってるじゃないデスか」

何でもないことのようにオーミーは言った。

「ボクは瞬間（トキ）を操る魔法使いなんデスよ」

第十二話　ＶＳ自称魔法使い

「…瞬間を操るだと？」

「水上に揺らめく、幻想的で美しいボクの『怪火（ウィルオウィスプ）』は、魔法の炎デス」

棺の言葉を聞いていないのか、オーミーはそれを無視して、空中を漂う青い人魂を見つめながら、陶酔したように言う。

「人魂、または鬼火は、罪人の魂とされ、それは見る者を誘う力を持ちマス…ボクの力もまた同じ…」

大袈裟な動作で、オーミーが傘を振るうと、更に人魂が生み出される…

「君は既に、ボクの怪火（ウィルオウィスプ）の虜となったんデスよ」

「……」

（何を言ってるのか少しも理解できねえ！）

自称魔法使いのオーミーに頭を抱えたくなる棺。

（つまり、こいつは違法聖痕使いで、この人魂はこいつの聖痕で…）

「待てよ、人魂？」

その言葉に棺が聞き覚えがあった。

（…まさか、こいつが…間人を…）

軽根間人が病室で話した、人魂を操る違法聖痕使い…

それが、目の前の人物にそっくりだった。

「誤算でしたヨ」

その人物が言う。

「ただ、一人の人間を連れて来るだけの任務だったはずなのニ…」

「任務だと？」

「ああ、忘れて下さい。知らない方が良い事デスよ」

「……」

（任務…つまり、少なくともそれを命令した人間がいる。しかも、連れて来るだと？　こいつらが欲しがるような人間って言ったら…）

棺がオーミーの言葉から推測する。

（同じ聖痕使い…だが、間人は聖痕が使えなくなったと聞いた、それを知らないのか？）

棺はちらっとオーミーの方を見る。

「どうしましタ？」

（…助ける義務は無い。だから、オレは…）

「オレも聖痕使いだ。ここを通るなら、オレを倒してから行くんだな」

（オレは、オレのやりたいようにやるだけだ）

「へえ、成る程。お知り合いの方でしたカ」

棺を見ながらオーミーが納得したように頷く。

「ああ、まあ、今日会ったばかりだけどな」

「正義の味方と言うやつですカ？」

「違えよ、それはオレじゃねえ」

車椅子の男を思い浮かべながら棺が言う。

「なら、大人しくしてくれませんか？　ボクには果たさなければならない任務があるのデス」

その言葉には使命感に似た感情が込められていた。

それを聞いて、オーミーも何か譲れない理由があるのだと棺は悟った。

それが、人を救うことが使命だと言った間人の言葉に似ていたからだ。

「お前が間違ってるとは言わないぜ？　力はあくまでも自分の力だ、使いたいように使えばいい。だから…」

棺は言った。

違法聖痕使いを間違ってるとは言わず、

自分を正義の味方では無いと言い、

「オレも自分の力を使いたいように使うとする！」

棺は叫ぶと、オーミーに向かって走り出した。

（触れなければオレの聖痕は何も出来ない。まずは、接近して…）

作戦なんてあったものでは無かった。

そもそも、不可思議な力を持っていても、せいぜい喧嘩が少し強いだけの普通の高校生が、戦いに勝つ為の作戦なんて考えられるはずは無かった。

それでも、見て見ぬ振りは出来なかった。

だが、

「『瞬間よ止まれ』」

すぐに、その足は止まってしまった。

数歩進んだ所で、棺は、足を動かすことが出来なくなった。

「（またこれか！　どういう仕組みだ！）」

棺は何とかこの不可思議な現象について理解しようとするが、

ゴッ！　と、すぐにまた頭を殴られてしまい、思考は中断された。

「ガッ！」

同時に動けるようになり、頭を抑えて床を転がる棺。

「気絶した方が楽で助かるのデスが…喧嘩慣れしてマス？　もしかして」

「…ああ、目立つ容姿のせいで中学は絶賛喧嘩ライフだったからなぁ、身体は丈夫だぜ」

棺の頑丈さに首を傾げるオーミーに立ち上がった棺が言う。

「それは凄い…だけど、君はもう、ボクに魔法をかけられマシた。君はもはや、この怪火（ウィルオウィスプ）に魅了され、虜となったのデス」

「ハッ、また訳の分からねえことを…」

チャリッと、棺がオーミーの言葉に呆れていると、金属音がした。

床に鍵が落ちていた。

どうやら、棺の服のポケットから落ちたようだ。

棺の無くした、そもそもこの夜の病院に来るきっかけとなった鍵だった。

（鍵あったー！　何だよ、それ！　ここに来る必要無かったってことか！　こんな絶賛バトル漫画的展開になる必要も無かったのか！）

口には出さず、棺は心の中で叫ぶ。

口に出さないのは、あまりにも情けないからだ。

「待てよ…」

棺は鍵を握り、思考する。

「いいこと思い付いたぜ」

ニヤリと棺は笑った。

「終わりにしましょう、『瞬間よ止まれ』」

再び、オーミーが言うと、棺の時が止まる。

何も変化は無かった。

「何か考えていたようデスが、失敗したようデスね」

そして、オーミーは傘を振りかぶり、棺の頭部を殴り付けた。

「ガァ！」

頭を抑えながら棺がまた床を転がる。

「本当に頑丈デスね、ウチに勧誘したいぐらいデス」

「ハハハ、悪の秘密結社か…それも悪くねえな…」

頭を抑えながら棺は言う。

「二十五秒…」

棺は呟き、床に転がる鍵を見た。

「…その鍵がどうかしましたカ？」

「お前の聖痕の正体が分かったぜ」

再びニヤリと笑い、棺はオーミーに告げた。

「どういう意味デスか？」

オーミーは聞く。

何かを呟き、鍵を見ただけで棺は聖痕の正体を理解したと言ったのだから、オーミーからすれば意味不明だろう。

「オレの聖痕は無重力にする…つまりは、モノを浮かべることだ。ちなみに名前はまだ無い」

「…それで？」

「だが、オレの聖痕は欠陥なのか、十数秒しか今まで持たなかった。だから、ちょっと最近、舎弟イジメついでに特訓して、一分以上持たせることに成功したんだよ」

「だから、それが何の関係があるのデスか？」

「おかしいだろ？　お前の聖痕をくらう寸前に浮かばせた鍵は、二十五秒しか経っていないのに、床に落ちていた」

「！」

棺はオーミーの聖痕が使われている間に、ずっと数を数えていた、

そして、解除されて一番に鍵の状態を見た。

しかし、二十五秒しか経っていないにも関わらず、一分以上持つ聖

痕は解除されていた。

つまり、棺と周囲とで『ズレ』が生じていたと言うことだ。

「本当に時を止めているなら、思考すら出来ない、そして、周囲の全てに聖痕が影響している訳でも無く、あくまでオレだけ…」

「……」

「体感時間…だろ？」

棺は確信を持って言う。

体感時間。

例えば、楽しい時間が短く感じたり、苦しい時間が長く感じたりするなどの気分が原因で変化する、実際の時間とは異なる時間。

「お前の聖痕は、『体感時間を延長する』こと。言わば、『タイミングをずらす聖痕』だな」

つまり、オーミーの聖痕は世界の法則に干渉するのでは無く、人の精神に干渉して瞬間を止める。

体感時間が延長された人間は、一秒、一瞬が通常より長く感じ、周囲の動きが目で追えない程に遅くなり、何よりその変化に身体がついて来ない為に動けなくなってしまう。

それは、魔法と言うよりは催眠術に近かった。

「…凄い凄い、ボクの魔法が見破られるなんて思っても見ませんでしタ」

「魔法ではなく催眠だろ？　その人魂を見た者に催眠をかけてるだけだ」

「そうデス。ボクの『怪火（ウィルオウィスプ）』の本質は『魅了すること』。その青き炎の美しさは、見る者に『時間を忘れさせる』のデス」

「成る程な。なら、見なければいいんだろ？」

棺はそういうと、目をつぶった。

「…君、馬鹿デスか？　目を閉じてしまえば、どのみちボクの攻撃を避けられませんヨ」

「心眼ってやつだ。オレには全部見えてる」

棺は目を閉じたまま、自信満々に言う。

オーミーはそれを見て、出来るだけ音を発てないように接近して行く。

（どうせ、水浸しにした床を歩く音で大体の場所を探って、ギリギリまで引き付けて目を開く気でショウ）

オーミーも馬鹿では無い。

棺が何か企んでいるのは気づいた。

恐らく、聖痕を使われない状態で接近戦がしたいのだろう。

それの対策に、自分のすぐ傍に、怪火（ウィルオウィスプ）を出現させて、棺が目を開けた瞬間、催眠にかけれるようにしていた。

例の呪文は、魔法に偽装する為に使っていただけなので、無くても催眠はかけることが出来る。

（邪魔なんデスよ！）

ガッ！　と、思い切り棺の頭を傘で殴り付けた。

意外にも、棺はそのまま大人しく殴り付けられ、床を転がった。

頭を切ったのか、少し血が床についた。

「…終わりデスね」

もしかしたら死んでいるかもしれないが、オーミーにとっては関係ない。

オーミーは何よりも、任務を果たさなければならないのだから。

「……狙い通り」

弱々しい声がした。

オーミーが倒れている棺を見ると、棺はニヤリと勝ち誇ったように笑った。

ゴガッ！　と、オーミーの頭から凄い音がした。

「ガァ！」

棺のような頑丈さも無い、オーミーはそれに一たまりも無く、床に倒れた。

それと同時にオーミーの頭に当たったそれが床に落ちてきた。

最初に棺が使っていた消火器だった。

それを確認すると、棺に何かを言う余裕も無く、オーミーは気絶した。

「…ハハハ…石頭対決でもオレの勝ちだったな…」

流石にふらつきながら棺が弱々しく言った。

第十三話　複数の伏線

「で、これどうすっかな」

気絶して倒れているオーミーを見ながら棺が呟く。

夜の病院で、気絶している男と頭から血を流す男…

近くには消火器…

事件性満載の光景だった。

「…本当にどうしよう。多分、宿直はこいつが気絶させたんだろうし…」

ピピピピピピ…

その時、棺の携帯が鳴り出した。

「ん？　電源切れてなかったのか…」

ピッとボタンを押し、耳元に持ってくる。

「もしも…『棺！　今、支部から病院に未確認の聖痕使いがいると…』…」

オーミーについて支部から連絡を受けた様子の、衣からだった。

目撃者がいたのか、探知器のような物でもあるのか、気になる所だったが、それよりも棺には聞きたいことがあった。

「…何でオレの携帯番号を知ってるんだ？」

『それは、レイヴさんから聞きまして…』

「……」

あのお喋りから、オレの個人情報が漏れてる！　と棺は思い、明日口止めをしようと考えた。

（…しかし、言って止めるような奴なら、オレはこんなに苦労しな…）

ピチャッとそこまで考えていた棺は突然聞こえた音に思考を停止させた。

「……」

オーミーが立ち上がった。

「…失敗する訳には…いかないんデスよ…」

ふらつきながら、オーミーが言う。

「お前、まだ戦えたのか」

驚いたように棺がオーミーに聞く。

「…戦えませんヨ。見た目通り、満身創痍デスし、怪火（ウィルオウィスプ）も使えそうにありません」

あっさりとオーミーは自分が満身創痍であることを明かした。

ただ、意地で立ち上がってる訳でも、勝つ為に立ち上がってる訳でも無い。

「それでも、任務は失敗は出来ないんデスよ」

「…どうしてそこまでするんだ？」

目の前の人間の生き方が理解できず、棺は聞いた。

「…ボクは最初、自分は特別な人間なんだと思っていたんデス。特別な『力』を持ち、それを他人に見せびらかしたかっただけだったんデス」

棺とオーミーの聖痕についての捉え方の違いだった。

「そして、結果は予想出来マスよね？　ありがちなストーリーのように孤立して、迫害されて、魔女狩りに遭いました」

「……」

棺は想像した。

他人とは違う力が露見したオーミーを、

その迫害を…

「…そんな時に、『彼』はボクを仲間に迎えてくれマシタ。同じ『違う』者同士の仲間が持てマシタ」

（…彼？）

「彼の為にこの『魔法』を使うんデス。ボクはもう、一人にはなりたくない！」

傘を手に、オーミーは走り出した。

聖痕も使えず、自分のスタイルも全て捨てて、走り出した。

「ッ…」

棺が苦虫を噛み潰したような顔をする。

「うわぁぁぁぁ！」

敵を殴り付ける武器として改造した傘をオーミーは思い切り振るった。

しかし、それはオーミーの戦闘スタイルでは無い。

敵には、催眠はかかっていない。

その振るった傘は棺には避けられ、更にその隙をつかれて左頬を棺に思い切り殴られた。

「ガッ！」

頭がふらついていたオーミーは一たまりも無く、床を転がった。

「…出直して来いよ。任務を果たすにしても、今のお前じゃ無理だろ」

静かに、諭すように棺が言った。

「……」

立ち上がり、しばらく沈黙した後に、オーミーはその場から走り去った。

「どうやら終わったみたいだね」

病院から少し離れた場所にあるビルの屋上で、双眼鏡を手に、棺の出会った黒づくめで黒髪の青い瞳の男が言う。

「そうみたいね」

その隣で同じく双眼鏡を持った、飴の包み紙みたいに派手で可愛いらしい色のリボンをした女が言う。

入院患者が着るような白い服を着ているが、健康そうな顔をしてお

り、自分の足できちんと立っている。

「あれは一体何なの？　あなたが私の身体を治してくれた『力』と同じもの？」

「その通りだよ。僕も、彼らも、そして、君も同じ『力』を持っている」

自分と棺達とリボンの女を順に指差して黒髪の男が言った。

「…本当に今日は驚くことばかりだわ。それも知ってるのあなたは」

「これからは驚くことばかりさ。聖痕とは奇跡を起こす力。それに進んで関わるのなら、不可思議や未知は日常茶飯事さ」

ポケットから缶コーヒーを取り出して飲みながら黒髪の男が言う。

「まあ、それも退屈しないならいいわよ。ところで、これからあなたのことは何と呼べばいいかしら？」

「そうだね。僕の『妹』になる訳だから、お兄様とでも呼んでもらおうかな？」

ニコッと笑いながら黒髪の男が言った。

「はい、お兄様」

リボンの女は、さらりとそれに答えた。

「……い、いや、冗談だからね？兄弟とか言ってるけど、好きな

ように呼んでくれていいからね？」

「では、やっぱりお兄様でいいわ」

少し慌てながら黒髪の男が言うが、リボンの女は呼び方を変えない。

「……まあいいや。じゃあ、紹介もしなきゃいけないから、一度戻るよ」

「分かったわ、お兄様」

何か定着しちゃいそうだな…と思いながら黒髪の男はその場を去った。

「申し訳ありません、任務を失敗しマシタ」

病院から離れ、隙間の神に見つからないように町から出る為に一旦、住家に戻ったオーミーが、電話で報告をしている。

電話の相手は、棺に『彼』と言った人物だ。

『ハッ、そうか』

短く一言、電話の相手は言った。

「…あの」

『まあ、元々お前達に俺様は何の期待もしてねーからなぁ。予想通りと言えば、予想通りだ』

「……」

非情とも取れる言葉だが、実際にこの電話の相手はオーミーに何の期待もしていないのだ。

見放してる訳では無い。

ただ、オーミーを信じていないだけだ。

故に、その過小評価を覆そうと、オーミーは任務を成功させたかったが、失敗してしまった。

『弁解は要らん。特に罰も無い。次の手は考えているから、一度戻って来い』

「はい…」

電話の相手の言葉にオーミーは気分が沈んでいた。

組織を抜けることにはならなかったが、信頼を勝ち取ることが出来なかった。

『そんな落ち込まなくていいぜー？』

電話の向こうから違う男の声が聞こえた。

オーミーはその声に聞き覚えがあった。

「逸谷（イッタニ）さんデスか…」

『さっきの言葉はボスなりの慰めの言葉だって。ボスはあれで結構仲間思い……あれ？　ボス？　何でそんなお怖いお顔をなされていらっしゃるので？』

『俺様の携帯を勝手に取るな！　そして、誰が仲間思いだと？　大体貴様らは仲間では無く、部下だ！』

ドゴォン！　バキィン！　と物凄い音が電話から響く。

「……」

『俺様は今、機嫌が悪い。出来るだけ早く帰って来るんだな』

「は、はい！　了解デス！」

電話越しに伝わる殺気に見えていないのに背筋を伸ばしてオーミーが言った。

第十四話　レイヴの弱点

「…全く、昨日は酷い目に遭った」

病院での長い一日の次の日の朝、

学校へ登校する為に通学路を歩きながら、棺は愚痴を言った。

オーミーとの一件の後、隙間の神の盛大な隠蔽工作であの一件は秘匿され、新聞にも載らなかった。

具体的に何をしたかは、隠蔽する必要が無かった棺と間人は知らなかった。

（それにしても…）

隙間の神が隠蔽の為に色々としている時に、間人が言った言葉が棺は気になっていた。

一応、間人を車椅子にした奴を倒したが、捕まえることは出来なかったと、棺が伝えると、

間人は…

『確かに人魂のようなものを操る聖痕使いだったが、オレが出会った違法聖痕使いは女だった』と、言ったのである。

（最初から勘違いだったってのか…）

ますます、昨日の一件は骨折り損だったと思ってしまう棺。

（じゃあ、一体どんな奴なんだ？　その女は…）

「おや、奇遇であるな」

考え事をしながら通学路を歩く棺に後ろから声がかけられた。

「…何だ、レイヴか」

「何だとは失礼であるな。今日の私はレディであると言うのに…」

棺の反応が気に食わないようで、レイヴが棺に文句を言う。

自分で言うように、今日はちゃんと女子の制服を着ていた。

男女の制服を日によって変えるなど、他人にはよく分からないこだわりが、レイヴにはあるらしい。

「どちらにせよ、お前を女扱いするつもりは無いな」

「そんなこと言って、実は意識してるのであろう？　二人きりの登校…これを衣に見られて…勘違いされ…」

「そんなラブコメするつもりはもっと無い」

楽しそうに言うレイヴに冷めた調子で棺が言う。

テンションが上がる時もあるが、棺は基本的にドライだった。

「…つまらんな。つまらんから、最近メル友になった衣に棺の住所でも教えておこう」

「人の個人情報を勝手に教えるんじゃねえよ！　電話番号の件もだが」

「良いでは無いか。さて、これに焦った棺は、家に急いで帰り、彼女を呼ぶ前の男子校生のように、掃除をして、アンダー・ザ・ベットのブックを…」

「しねえよ！　そして、無えよ！　そんなもん！」

「嘘つけ！　本で読んだぞ、君達のような年頃は頭の中が真っピンクだと！」

いつの間にか取り出した本をバンバン叩きながら珍しく大声を上げるレイヴ。

「どんな本とどんな偏見を持っているのかは知らないが、オレは潔白だ！」

「……なら、これで勉強するといい」

クールダウンしたレイヴがスッと本を棺に渡す。

「あ？…ってこれ、エロ本じゃねえか！　なんて本を持っていやがる！」

「…最近のレディの嗜みである」

「嘘つけぇ！　大体何で登校途中の今、これを持ってるんだよ！　学校に持ってくるつもりだったのか！」

「……あーもー！　学校一の不良が優等生ぶってんじゃねえ！」

レイヴがややキャラを壊しながら逆ギレした。

「素が出たな！　学校一の電波娘が！」

「朝から元気ですね、二人とも」

「うおぉっ！」

段々と熱くなっていた棺が叫ぶと、またしても後ろから声をかけられた。

「でも、あまりのんびりしていると遅刻しま……」

声をかけた衣が何故か固まった。

「？……ゲッ」

棺がその視線を追うと、その先は棺の右手だった。

正確にはその手に持ったレイヴから渡された本。

ヤバイ…と棺は何故か、浮気が見つかった夫のような気分になった。

（レイヴ、説明を…）

何とかアイコンタクトでレイヴに助けを求める棺。

「…レイ、ニホンゴワカラナイヨ」

（テメェー！）

急に外国人になってそれは躱された。

よく見ると、微妙に顔が笑っている。

レイヴは使えない、そう思い、棺はどうにか言い訳をしようとする。

「衣、これは実は「学校に何て物を持ち込もうとしているんですかー！」」

させてもらえなかった。

聖痕でも無意識に使っているのか、とんでもなく速い一撃で、割と鍛えてる方の棺は沈められた。

「同級生の女の子におんぶされて登校する男子なんて初めて見たわ」

学校へ到着し、棺の意識が戻った所で棺の幼なじみで自称お兄ちゃ

ん子の風夏櫛が言った。

同じ学校だが、クラスが違うので、いつもはあまり会うことも無いのだが、

気絶してレイヴにおぶってもらっている棺を見かけて何事かと思い、櫛も棺のクラスに来ていた。

ちなみに、クラスは棺とレイヴが二年一組、衣が二年二組、櫛が二年三組だ。

「うるせー、ちょいと予想外に威力のある攻撃が昨日いい感じにシェイクされた頭に響いただけだ」

「昨日？」

「何でもねえよ、傘で殴られただけだ」

「傘？」

棺の言葉に事情を全く知らない櫛は更に頭の上に疑問符を浮かべた。

「女の子におぶってもらった気分はどうだったであーるか？　ムラムラっとするであるか？」

「気絶してただろうが。今は情けなさと恥ずかしさでいっぱいだよ…ったく」

「意外に大きな背中にドキッと…」

「…それは男女が逆じゃねえか？」

心底楽しそうに言うレイヴに棺が溜め息をつきながら言う。

「相変わらず、ノリが悪いであるな。全く、あのまま放置するか、衣に任せてもよかったのであるよ？」

「その件については助かったぜ。流石に見た目中学生に背負われるのはゴメンだし、何より、お前以外の女子だとトラウマでマッサージチェアみたいになっちまうからな」

「おお！　何かお前以外の女子ではダメなんだ…みたいな感じがグッドである！」

棺の言い回しに何故か機嫌が良くなるレイヴ。

グッと親指を立てている。

「…相変わらず、何言ってんのか理解できねえよ。お前は」

溜め息をつきながら棺は言った。

「ところで、お前にとっては災難だと思うが…」

「な、何ですか？」

昼休みになり、前回に続き屋上に棺、衣、レイヴが集まっていた。

櫛は昼休みは一緒に過ごす友達がいると言ったので、そちらに行った。

そして、何故か気の毒そうな顔をした棺が衣に深刻そうに告げる。

「実は明日、テストがあるんだよ」

「テスト？」

予想外の言葉に呆気に取られた顔をする衣。

「この学校に来たばかりのお前にはきついだろうが…「何だ、そんなことですか」…何？」

「え？　だって私、勉強好きですし…」

「……」

衣の言葉に棺は固まった。

人間、信じられないものを見たり、聞いたりすると、思考が停止するものだ。

「もしかして棺、勉強苦手なんですか？」

「苦手なんじゃねえよ、得意じゃないだけだ」

棺は苦し紛れに衣に言い訳をする。

見た目不良で、中身も不真面目な棺は、やっぱり勉強も嫌いだった。

「どのみち出来ないんじゃないですか。レイヴさんとかに教えてもらったら…」

どうですか？　と言おうと、衣が先程から黙っているレイヴの方をちらっと見て、今度は衣が固まった。

レイヴの様子がおかしい。

いつもの飄々とした、他人を小馬鹿にしたような雰囲気を粉々に崩し、

漫画みたいな冷や汗を大量にかいている。

「あの…レイヴさん…もしかして…」

「ご、誤解であるよ！　レイに実は勉強が出来ないなんて弱点は無いであるよ！」

キャラをまた壊しながらレイヴが叫んだ。

「…こいつは日本語は読めるが、漢字が全く読めないんだよ」

「棺！」

一年の付き合いの悪友があっさりとばらした。

レイヴがこれまた珍しく怒って叫ぶ。

「…放課後、勉強会でもしますか？」

呆れたように衣が言った。

第十五話　意外な好物

「…勉強会をするのは大助かりだし、それ自体には文句はねえよ…」

「…何ですか？」

「何でする場所がオレの家なんだよ！」

結局、転校生の衣よりも、自分達の方がヤバイと棺は悟り、勉強会をすることで纏まった。

放課後、帰り道に場所はどこにするかと言った時、棺の家がいいと衣とレイヴが言った。

「ついさっき、レイヴさんに棺の家を教えてもらいまして…」

「マジで教えやがったな、テメェ！」

「ハハハ、照れるな、純情少年」

ニコニコと嘘臭い笑みを浮かべながらレイヴが棺に言った。

「まあ、実際一人暮らしの棺の家の方が都合がいい理由もあるのであるよ」

「…行ったこと無えが、お前も一人暮らしとか言ってなかったか？」

ふと思い出したかのように棺が言った。

一年の付き合いだが、棺はレイヴには基本的に無関心なので、家に行ったこともなかった。

学校以外で会うことも無いことも無かったが、大低は棺の家だった。

と言っても、棺は特に異性として意識はしていないので何も無かったが…

「来たいのであるか？」

「いや、そういう訳じゃねえけど…」

「一応、兄さんは支部の方に住んでいるので、私も一人暮らしですよ？」

「いや、聞いてねえし」

そんな調子で会話が続き、結局、流されやすく、押しに弱い棺の家に決まった。

「ここですか…」

どこかの漫画に出てくるようなボロアパート…と言う程でも無いが、

浪人生とかが住んでそうな少し安めに見えるアパートに棺は住んでいた。

「悪いか。これでも孤児院育ちで金がねえんだよ。たまにバイトとかしても足りねえから、孤児院に借金してるぐらいなんだよ」

「そうなんですか…」

両親も親戚もいない棺の実情に同情したような顔を見せる衣。

「大丈夫です！　隙間の神は高収入ですから！　卒業後の就職先もバッチリ…」

元気付けようと衣は手で拳を作り、力説する。

「…まあ、この間辞めたバイトの代わりぐらいにはなるだろう」

就職はともかくとして、協力者の礼金を長続きしないバイトの代わりにしようと考える棺。

「隙間の神？」

「い、いえ、何でもありません」

すっかり衣に存在を忘れられていたレイヴが聞くと、慌てて衣はごまかした。

「お前ら、さっさと入れ、こんな所を近所の奴に見られたらオレが困る」

いつの間にか鍵を開け、自分の部屋の扉を開けた棺が二人に言う。
実情はどうあれ、同級生の女子の二人を一人暮らしの自分の部屋に連れ込むのを他人に見られるのは避けたいのだろう。
シャイなのでは無く、面倒事が嫌いなのだ。
「こんな美少女を二人も部屋に連れ込んで何を言うのであるか」
「お前らが押しかけただけだろうが！　今からでも追い返すぞ！」
「失礼します」
レイヴの言葉に棺が怒り、言ってると、衣が棺の前を素通りして入って行った。
「……」
入れと言ったのは自分なのでその行動に文句は言えないが、何となく肩透かしをくらった気分になり、固まる棺。
「失礼するである…プッ」
「今笑ったか？　おい、今オレを笑ったのか？」
「そんな怖い顔したら叫ぶであるよ。助けてー！連れ込まれるー…って」
「グッ…」

この状況で叫ばれたら、色々と棺は終わる。

棺は素行の悪い不良、場所はその家、

レイヴはパッと見は、か弱い美少女、

何よりこういう場合、日本人は男より女の主張を優先する傾向にある。

「男に生まれたことを後悔させてやるぜ…である」

「……」

「さあ、早速、家宅捜索であるよー」

再び固まった棺を無視してレイヴも棺の部屋へ入って行った。

案外、棺が流されやすく、押しに弱いのは、流されにくく、押しに強いレイヴの影響かもしれない。

「意外と片付いてますね」

「それはどういう意味だ。これでもオレは綺麗好きなんだぜ?」

「と言うより、質素と言った方がいいである」

棺の部屋にはベットや洗濯機などの必要最低限の物以外がほとんど無かった。

一応、一般的な高校生らしく、テレビとゲームはあったが、一つや二つで、漫画などは無かった。

「貧乏は辛いであるね、またゲームを貸してあげるである」

「憐れみは要らねえ」

肩をぽんぽんと叩きながらレイヴが言うと、機嫌悪そうに棺が言った。

「…一人暮らしって、ちゃんとした物を食べてるんですか？」

ごみ箱に入ったカップ麺の容器を見ながら衣が言う。

「…茶でも持って来る」

何となく食生活が偏ってる自覚はあるのか、すたすたと冷蔵庫へ向かう棺。

「あ、逃げた」

「まあまあ、それより捜索を続けるであるよ」

衣はそれを目で追っていたが、レイヴに言われ、部屋の物色に加わ

った。

「それで、お前は何をやってる」

襖を開けたり、引き出しを開けたりしている衣に戻ってきた棺が言う。

何故か、レイヴは見当たらない。

「Rな本がどこを探しても見当たらない。こいつマジで健全な男子高校生かよー…である」

棺がレイヴを目で探していると、ニュッとベットの下からレイヴが顔を出した。

「女の子苦手だとか純情ぶりやがって！　まずは一人称を僕にすることと髪を黒く染めることから始めろー！…である」

「よし分かった。いい加減頭に来たぜ」

そういい、不穏な空気を漂わせる二人。

これがこの二人のコミュニケーションなんだと、解釈した衣はそれを無視することに決めたようだ。

「…ん？　棺、手に持ってるそれ、なんですか？」

「麦茶とクラッカーだ」

棺が片手に持ったお盆に乗せてる物に衣が気づき、聞くと、棺がそれを近くにあったテーブルに置いた。

クラッカーと言えば、イギリスの紳士がティータイムなどで紅茶と共に楽しむアレである。

丁寧にジャムもストロベリーやブルーベリーなど様々な物が置いてある。

「「…似合わねー！」」

「うるせー！」

思わず二人とも叫び、棺も叫んだ。

好物なのだから仕方ない。

言われてみればその通りなのだが、

赤髪で赤い瞳の不良がイギリス紳士のようにサクサク優雅にやるのは似合わな過ぎる。

と言うか、各種ジャムまで用意して、気持ち悪い。

「つーか、レイヴは知ってるだろうが！」

「事情を知っても拭えぬ違和感。棺には紳士は無理であるよ」

「誰も紳士になるとは言ってねー！」

「赤髪…まさか、両親がイギリス人だったのでは？」

「…赤髪ってイギリスにいたっけ？」

棺の意外な好物から出た話はそのまましばらく続き、うやむやになった。

第十六話　楽しい勉強会

「…おい、ここはどう解くんだ？」

「ここはですね…」

棺が学校の問題集を広げ、衣に聞き、衣が答える。

いい加減に部屋を荒らすことを棺が止めさせ、勉強会を始めてしばらく経った。

問題がさっぱり分からない棺は度々、衣に解き方を聞いている。

危機感を覚えているのか、棺は明日までに何とかしようと必死である。

ちなみにレイヴは、

「……これは？」

「『驚愕（キョウガク）』ですよ」

教科書を読み、読めない漢字を衣に聞いている。

日本語がぺらぺらなので、忘れられがちだが、レイヴは外国人である。

ひらがなはまだしも、漢字は少し厳しい。

「…漫画は振り仮名が振ってあるのに…である」

「ある意味勉強になりそうだけどな…小説でも読め」

「読み聞かせてくれるなら考えてもいいである」

「幼児か！」

親切に振り仮名が振ってある漫画などは読めるが、それ以外は完全にダメなようである。

欠点があるのが嫌なのか、レイヴは妙に元気が無い。

まあ、色々言っているが棺からすれば英語を読んで、会話しろと言われているようなものなので、

実は棺の方が馬鹿なのだが両者とも気づいていない。

「そういえば、レイヴさんってどこの国、出身なんですか？」

衣が素朴な疑問を言う。

「それは秘密である。私はミステリアスが売りなのだから…である」

レイヴはそれにきっぱりと答えた。

お喋り好きだが、自分のことはあまり話したくないようだ。

「ただの嘘つきだろ」

横でボソッと棺が言う。

「旅をした国は言ってもいいであるよ？　イギリスに、フランスに…あとは…」

「凄いです！　私は日本を出たことなんてないのに…」

羨ましそうに衣が言う。

海外に憧れでも持っているのだろう。

「普通はそうだろ。オレだってそうだ」

棺も日本を出たことが無いと答える。

と言っても、十歳より下の記憶は無いのだが…

「でも、赤髪ですよ」

衣が棺の一番の特徴、赤い髪と瞳を指差す。

「…それが？」

自分の前髪を摘みながら、棺が聞く。

「もしかしたら、外人で、外国から日本に引っ越したのかもしれないじゃないですか」

「…覚えていないので、否定する根拠は無いが、無理があるんじゃ

ねえか？」

オレが外人とか無いだろう…だって納豆も梅干しも大好きだし…などと思いながら棺が言う。

「なら逆に、お前についてはどうだ？」

「え？」

質問されていた棺が質問を衣に返す。

「例えば、両親と何で別に暮らしてるのかとか…」

「…両親はいません。家族は兄さんだけです」

棺が固まった。

（ヤベー、兄妹だけで暮らしてる時点で察するべきだった、どうしよう、かなり気まずい、オレは両親の記憶なんて無いから分からないが、やっぱり、辛いんだろうな、どう慰めるか、いや、いっそ気にせず流した方が…）

ぐるぐると棺の頭の中を言葉と罪悪感が回る。

思わぬ失言で、衣も若干暗い顔をしてしまい、棺の罪悪感が増大する。

「ドゥルルル～、江枕衣ちゃんの好感度が下がっちゃったよ、これは衣エンドは絶望的～」

棺の横でレイヴが棺にしか聞こえないように言う。
かなり楽しそうである。
口調が変わる程に。
「…あ、気にしないで下さい」
「……」
「ここで選択肢、一『これからはオレが家族になってやるよ』、二『悪い、失言だったな…』、三…「黙れ」痛い！」
再び横で小声で楽しそうに言うレイヴに棺が拳をお見舞いした。
「何で殴るであるか～…」
頭を抑えながらレイヴが恨めしそうに見るが、棺は無視した。
「…悪い、失言だったみたいだ」
あ、二番…とレイヴが小さく呟いた。
「いえ、大丈夫ですよ。今の私には兄さんや棺達がいますから」
空元気では無く、心からの笑みで衣が言う。
「今の？」
「はい。実は私、兄さんと血が繋がってないんです」

また失言だ…と棺は思ったが、そのことについては特に衣は何も思っていないようだ。

「家族を無くしてから拾ってもらったんです。書類上では養子なんですが…お父さんと呼ぶよりは兄さんの方がしっくりくる年齢差なんで…」

「はぁ、複雑なんだな」

その経緯も色々あったのだろうが、聞いても薮蛇、失言は避けたかったので、棺は詳しく聞くのを止めた。

つーか、家庭訪問とかの時に先生びっくりするだろうなぁ…と楽観的に棺は考えていた。

その隣のレイヴは、養女かつ義理の妹って、その兄さんを主人公にした方が面白そうである…などと言っている。

「右…いや、左…」

その後、しばらく話して集中力も切れたので、三人は気晴らしにトランプをしていた。

今しているのはババ抜き。

やたら運がよく、最初から二枚しか無かった衣は最初に上がり、棺とレイヴの一騎打ちとなっていた。

次に引くのは棺。

手にはスペードの七が一枚。

レイヴの手にはババとハートの七がある。

「棺、右であるよ。右がハートの七であるよ」

「心理戦か」

カードをゆらゆらと無意味に揺らしながらレイヴが言い、棺がジッとカードを見ながら言う。

「棺、私を信じて！　右を引くのよ！　左を引いちゃダメよ！　きっと後悔することになるわ！」

「…変な声を出すな気持ち悪い」

声優や女優も真っ青な声と演技力でレイヴが言うが、慣れているのか、棺の反応は淡泊。

「…やっぱり信じてくれないのね…分かっていたわ、だってあなたは…「よし、左だ！」って、演技の途中である！」

棺はレイヴの演技を完全に無視して、左のカードを引いた。

あんまりな扱いに珍しくレイヴがツッコミに回った。

「…ゲッ！　ババだと！」

しかし、レイヴの方が一枚上手だったようだ。

「ふう、私を信じないから後悔することになるのよ」

「そのキャラ、いい加減に止めろ！」

そういいながら、棺はカード二枚をシャッフルする。

「そんなことをしても無駄なのです。私には全て分かっているのです」

「今度は何か訳の分からないキャラになったな…」

「このレイ・アイは人の嘘を見抜くことが出来ます」

自分の目を指差して、レイヴが大袈裟な仕種で言う。

「えらく適当に付けた名前だな」

「左です」

「！」

「と見せ掛けて右です」

レイヴは素早く棺の手から右のカードを奪い取った。

「フッ、上がりである！」

それはスペードの七だった。

「くそー、何故分かった」

「棺は焦ると瞬きが多くなる癖があるのである」

「嘘！」

「嘘であーる」

「テメェ！」

いいように弄ばれた棺が怒って、立ち上がる。

それに合わせてレイヴも奇妙なファイティングポーズで立ち上がる。

「かかってこいである。一時間から二時間の間には沈めてやるである」

気合い十分の割に、てこずる予定のようだ。

「上等だ。頭にタンコブを山ほど作って、山脈にしてやる」

こちらもイマイチ決まらない決め台詞。

その後、乱闘は見兼ねた衣に仲裁されるまで続いた。

第十七話　主人公交代

「眠い…怠い…」

「もっと、しゃきっとしましょうよ棺」

勉強会の次の日、

つまり、テスト当日。

朝、棺と衣は通学路を歩いていた。

何故、この二人が一緒に登校してるのかと言うと、理由は単純。

朝、棺が家から出ると、衣が待っていたのだ。

昨日の勉強会で家を知ったからだろう。

パートナーとの交流を深める為らしいが、意外と行動力がある。

いきなり、声をかけられた時は棺も驚いたが、バイクを置いてきて、衣に合わせて徒歩で通学している。

「勉強の成果が出るといいですね！」

「そうだなぁ…はぁ～、努力とか、慣れないことをしたから眠い」

適当に答えて、大きな欠伸をする棺。

律義で責任感がある一面もあるが、基本的に棺は無気力系不良だった。

「…そういえば、今日、兄さんは遠出をするらしいんですよ」

低血圧でテンションが低い棺に衣が話題を振る。

「遠出？」

「はい。だから、何かあったら支部の人に連絡しなさい…って、過保護過ぎますよね」

過保護なタイプの衣曰く、シスコンな兄、色雨を思い浮かべ、苦笑する衣。

「その過保護な兄が、どうして町を離れることになったんだ？」

「仕方ありませんよ、用事なんですから」

まだ苦笑を浮かべながら衣が言った。

「隙間の神の本部に用事があるんですから…」

「着いた…この町も久しぶりだなぁ」

駅に着き、電車から降りて江枕色雨が言った。

棺の町に比べ、都会で人が多い為か、駅にもかなりの人がいた。

棺達の町から少し離れた場所にあるこの町は、隙間の神の本部のある町。

と言っても、隙間の神の主な仕事は不可思議の隠蔽と研究の為、他の町と特に変わった所は無い。

唯一違うのは、研究機関としての技術を売ったりするなど、表に顔を出している隙間の神が、この町の本部な為、色雨の任せられている第１８５支部『星を見る会』のように、存在自体を秘匿しておらず、この研究機関としての『隙間の神』が表向き存在する。

つまり、一般人もその存在を（不可思議はともかく）知っていると言うことだ。

研究成果を売るには表にも顔を出さなければならないからだ。

元々、隙間の神は不可思議を研究するオカルトに近い研究機関であり、それが不可思議（スティグマ）の存在を発見し、やがて、今のような不可思議を秘匿する組織になったと色雨は聞かされている。

研究機関としての側面を持っているのは、その名残だろう。

「師匠！」

色雨が物思いに耽っていると声がかけられた。

清楚そうで読書が似合いそうだが、実は師弟関係を大事にする色雨の元弟子、

繰上炬深だ。

「迎えに来てくれたのですか？　繰上炬深さん」

「だから！　他人行儀は止めて下さいよ！　私の師匠じゃないですか！」

敬語が不満なのか、炬深は言う。

「本部勤めの顔色を伺っている訳ではありませんが、立場が違いますしね」

「…私が一般隊士の時に鍛えてくれたのは師匠です！　大体、師匠の実力があれば最高戦力部隊の座天使（スローンズ）だって…」

「『今』と『昔』は違うんだよ、炬深。ただ、『目につく全ての為に戦っていただけ』の昔とは違い、今の私には『守りたいもの』があるんだよ」

師匠が弟子の間違いを諭すように、色雨は言った。

「『目につく他の全てを見捨ててでも』…ね。そんな人間に、本部勤めは勤まらない」

「…師匠は変わりました。腑抜けました」

暗い顔で炬深が呟く。

全ての為には動かない。

その色雨の言葉にショックを受けているようだった。

「確かに腑抜けたかもね」

「腑抜け！」

炬深が叫ぶ。

「シスコン！　そんなに妹が大切ですか！」

「…それ、関係ある？」

「もういいです！　師匠なんかどっか行って下さい！」

そう叫ぶと、炬深はズンズンと色雨を置いてどこかへ歩いて行った。

「…やれやれ、何をしに来たんだか」

その後ろ姿を眺めながら呆れたように色雨が言った。

（『アレ』以来、どうも、あの子とは距離感を計りかねてしまう…

蔑ろにしてるつもりは無いんだけど）

「それに、『守りたいもの』には君も含まれているんだよ、愛弟子」

「腑抜け！　腑抜けの上にシスコン！」

ズンズンと苛立ちながら歩く炬深が言う。

（全く、あれほど、腑抜けているとは思わなかった！　一体、私が誰に憧れて隙間の神に入ろうと…）

「…って違う！　確かにあの頃の師匠は格好よかったけど…あんなに腑抜けて…」

（…そりゃあ、私だって、『あのこと』は知ってるけど…もう、五年も前のことじゃない…）

炬深は暗い顔をした。

「ようやく着いた、うろ覚えだったけど、意外と何とかなったな」

灰色一色の窓もあまりない巨大な倉庫のような建物の前に色雨は立

っていた。

この建物が日本全ての聖痕使いを秘匿する隙間の神、本部である。

「さて、私が支部に引き込もっている間に色々と変わったらしいが…」

困ったように佇む色雨。

隙間の神トップである熾天使（セラフ）の補佐をしている第一部隊、智天使（ケルビム）、本部の警護をしている第二部隊、座天使（スローンズ）などならともかく、第六部隊、権天使（アルヒャイ）は基本的に自分の支部を離れないので、色雨は本部に来るのは数年ぶりだった。

（トップも数年前に変わってしまったらしいし…どうしようか…）

「あれ？　珍しい人に出会ったであります」

色雨が考え込んでいると、再び声をかけられた。

どこかの国の軍服を学ラン風に改造したような服を着た女が立っていた。

きびきびとした動きや軍人のような口調の割に、顔立ちは若く、歳は二十前後だろう。

第七部隊、大天使（アルヒアンゲロイ）の様士皆代（サマツチ ミナヨ）だ。

大天使（アルヒアンゲロイ）は危険と判断された違法聖痕使いを収容する『収容所』の管理を任せられている部隊なので、違法聖痕使いの引き渡しなどで色雨とは面識があった。

「そちらこそ、どうしたんだい？　君達が収容所を出るなんて…」

「いや、最近護送されてきた違法聖痕使いが奇妙なことを言いましたので、熾天使（セラフ）に指示を求めようと来たのであります」

「奇妙なこと？」

色雨が皆代に聞き返す。

「はい、なんでも…」

皆代は尋問担当からの報告を思い出しながら言う。

「『反隙間の神の違法聖痕使いの組織』が存在するらしいのであります」

第十八話　熾天使

「……」

色雨と皆代は特に会話もせずに本部の通路を歩く。

熾天使（セラフ）の下へ向かう皆代に、色雨も熾天使（セラフ）に用があった為に同行したのだ。

（違法聖痕使いの組織…）

通路を歩きながら色雨は先程、皆代が言った言葉を考える。

通常、違法聖痕使いの組織は有り得ない。

違法聖痕使いをリーダーとした、大半が一般人の不良の集まりのような集団はいないことも無いのだが、元々目覚める可能性の少ない聖痕使いが固まって現れるのは珍しい。

しかも、多くの違法聖痕使いは自己中心的で自分の欲さえ満たせれば、何も目的は持たないタイプが多く、組織には成れない。

それが一つの組織となっているのだとすると…

（分かることは二つ。一つはその組織にはそれだけの目的にあるのだと言うこと…もう一つは…）

「……」

色雨は苦々しい顔をした。

（それだけの組織を纏め上げる、強大なリーダーがいるのだと言うこと）

そして、その目的は隙間の神と敵対することらしい。

違法聖痕使いは隙間の神や聖痕すら知らずに拘束される場合が多い。

自分でもよく理解出来ていない力を、分からないままに振りかざす…

そのような人間は脆い。

隙間の神の存在を知って、尚且つ拘束されていないと言うことは…

自分の力を理解した、強力な人間だと言うこと。

「難しい顔をしてるでありますね。無駄に気負わない方がいいでありますよ？　ただの虚言かもしれないのでありますから」

「いや、君は知らないかもしれないけど、既に隙間の神に敵対する『集団』は動き始めている」

「？」

「支部が幾つか襲撃されてね…この意味は君にも分かるだろ？」

秘匿の為の隙間の神の支部を正確に見つけだし、襲撃をする…

「『元』…隙間の神…」

裏切り者。

隙間の神に入る人間が全て善良とは限らない。

隙間の神に取り入り、陰で犯罪を犯す者、

隙間の神で得た力で暴走しだす者、

そのような、『元』隙間の神の違法聖痕使いは珍しくない。

「『反逆者(レベル)』…って、そういう者のことを言うんだけど、その支部を襲撃した『集団』も『反逆者(レベル)』と名乗ったらしいんだ」

「つまり、その『集団』は反逆者(レベル)のリーダーが統べる、違法聖痕使いの『組織』かも知れないと言うことでありますね」

「反逆者(レベル)でそこそこ腕のある者が犯罪者を集めて追放された復讐でもしているのかもしれない…と言われていたけど…」

ただの犯罪者達と、違法聖痕使いの組織では戦力が桁違いだろう。

しかも、リーダーが隙間の神の特訓を受け、違法聖痕使いより実力のある反逆者(レベル)。

いずれ、脅威になるかもしれない。

「反逆者(レベル)…と言うことは隙間の神に敵対する理由は十分にある」

「それが誰だか分かっていないのでありますか？」

「一応、聖痕などの記録は反逆者達のは全て残っているらしいけど…」

「けど？」

「そもそも、そのリーダーを誰も見たことが無いらしいんだよ」

「用心深いでありますね」

敵ながら感心したような声で皆代が言った。

「その護送されてきた違法聖痕使いは何か言っていなかったの？」

「さあ？　『オレには組織がついてる』…みたいなことを口走っただけでありますから…読心系の方がいれば詳しい話も分かるのでありますが…」

「記憶操作系もだけど、精神に関わる聖痕使いは希少だからね…」

残念そうに色雨が言った。

「ここであります」

熾天使（セラフ）がいるらしい部屋の前で皆代が色雨に告げる。
丈夫そうな扉には何故か『管理室』と書かれていた。
「そのようだね」
（と言うか、炬深はどこへ行ったんだ？）
本部に帰ったはずなのに一度も会わない炬深に色雨は首を傾げた。
「熾天使（セラフ）さん？事前に連絡していた…」
「いや、熾天使（セラフ）さんはおかしいでしょ。名前で呼ばないと…」
コンコンとノックしながら言う皆代に色雨がツッコミを入れた。
「あ、そうでありますね」
ハッとしたような顔をする皆代。
改めてノックをする。
「あの……」
そこで何故か皆代の動きが止まる。
「どうしたの？」
「…名前、何でありましたっけ？」

「え？」

熾天使（セラフ）の本名を知らないらしい。

しかし、本部には滅多に来る機会などなく、連絡も智天使（ケルビム）を通して行われる為に顔を見たことすら無い。

変わったらしいことは炬深に聞いて知っていたが、色雨も本名を知らなかった。

「……」

「……」

無言。

自分達は名前すら知らない人間の下で働いていたのかと二人は思う。

「やっぱり、もっとアットホームに行かなければいけないかね…」

いつの間にか二人の後ろに立っていた人物が言う。

男の割に長い髪の色雨より長い髪を持つが、中性的な顔の為、性別はよく分からない。

歳は色雨と同じか、それ以下に見える。

「…もしかして」

皆代が呟いた。

「はい、私が熾天使（セラフ）の天之原天士（アマノハラ ソラシ）です」

現、熾天使（セラフ）

天之原天士。

通常、熾天使（セラフ）はその補佐を担当する『智天使（ケルビム）』か、

本部の守護をする『座天使（スローンズ）』から選ばれる。

言わば、統括力か、戦闘力で選ばれる。

当然、人格などが前代『熾天使（セラフ）』に認められる必要もある。

しかし、現在の熾天使（セラフ）である、天之原天士は違った。

見習い…つまりは色雨のような、権天使（アルヒャイ）に指導された後、いきなり熾天使（セラフ）に推薦された、異例だった。

「紅茶と緑茶…どっちが好きかね？」

その異例のトップが気さくに言う。

場所は『管理室』。

何の管理しているのかは不明だが、電源の入っていないモニターが幾つかあること以外は普通の部屋だ。

高級そうなソファーやテーブルもあり、色雨達はソファーに座っている。

「あ、先手を打っとくと、私がやりますとか言って断るのは無しだから～」

本当に気さくに天之原天士が言う。

色雨達はどうしていいのか戸惑っていた。

「楽にしていい。私はアットホームな職場を目標にしているからね」

そういいながら、天士はソファーに座った。

いつの間にか、色雨の前には紅茶、皆代の前には緑茶の注がれたコップが置かれていた。

「あ、また先手を打っておくと、私はお世辞とか社交辞令とかが大嫌いだから。気をつけて」

紅茶を飲みながら天士が二人に言う。

まだ二人は戸惑っていた。

「それで？　結局、何の用があって来たのかね？」

「あ…あの、実はお耳に入れたいことがあるのであります…」

そう言われて、辟易しながら皆代が語り出した。

第十九話　反逆者

「組織…かね。ガセネタだとしても、一応確認した方がいいかもね」

難しい顔をしながら天士が言う。

若くて気さくだが、この辺りがトップに推薦された証拠に思える。

「未だに捕らえられていない反逆者（レベル）のデータでも見直すかね」

ふぅ…と溜め息をつきながら天士が言う。

「反逆者（レベル）って、そんなにいるものなのでありますか？」

それを見て、皆代が天士に尋ねる。

収容所の管理しか任されていない部隊だからか、まだ若いからか、皆代は隙間の神の内情にあまり詳しく無いようだ。

「戦闘系の座天使（スローンズ）や力天使（デュナメイス）からはしょっちゅうだよ。まあ、大体はすぐに捕らえられるのだけど…」

近くの棚からノートパソコンを取り出しながら天士が言う。

「『強烈な奴』は中々捕まらなくてね。国外に逃げられたらお手上げだしね」

「『強烈な奴』…でありますか？」

「色々いるよ。聖痕名や経歴が載っている…」

パソコンを操作しながら天士が言う。

軽い言葉とは裏腹にうんざりするような声だった。

「やはり、所詮、金銭で集めた組織では限界があるのかね…」

その言葉に色雨達は何も答えられなかった。

色雨達のように心から人を救おうと考えているのは一握りであり、仕事として仕方なく人を救っている人間がほとんどだと言うこと。

警察が皆、正義を志しているとは限らないことと同じことだ。

「とりあえず、その捕まった違法聖痕使いを…」

ピピピピピピー

天士が言いかけた時に、携帯の着信音がなった。

「す、すみません！」

「いいよいいよ。大事な用だと困るからね」

慌てて皆代が携帯を取り出して謝るが、天士は気にしていないようだ。

電話だったようなので、天士に言い、皆代が申し訳なさそうに電話に出る。

だが、どうも電話の相手は慌てているようで、会話にならない。

「落ち着いて下さい、どうしたのでありますか？」

落ち着かせるようにゆっくりと皆代が言う。

相手は同僚のようだ。

「…え？…わ、分かりました！　すぐに！」

そして、何かを聞くと、慌てて電話を切った。

「どうしたのかね？」

ただ事では無いと思い、天士が尋ねる。

「大変であります！　例の違法聖痕使いが、その仲間と思われる者と共に逃げ出しました！」

「危ねー、もう少しで尋問と拷問のフルコースだったぜ…ありがとうございました逸谷さん」

隙間の神の本部から少し離れた古びた公園で、耳と鼻にピアスをしたチンピラ風の男が言う。

「聖痕があると言っても、所詮は人間だからなー、油断すりゃ、あっさり捕まるわなー」

その隣の男が言う。

その逸谷と呼ばれた男は、特に目立ちそうにない外見をしていた。

どこにでもいそうな顔に、どこにでもありそうな服、

殺人犯として報道されたら知人にそんな風には見えなかったなどと言われそうなタイプだ。

だが、周囲に転がった死体を見ても、表情が変わらない点が、異常だった。

「いやぁ、聞いて下さいよ逸谷さん。オレ、適当に女を見つけては襲って、殺したりしてたんだけどよぉ。まさか、あんな美人が隙間の神だったなんてよぉ、姦計ってやつだぜ！」

下品な笑みを浮かべながらチンピラ風の男が言う。

「いやいや、気持ちは分からないでもねーが、無理矢理組み伏せたってつまらねーだろ。女は口説くのが楽しいんだよ」

考えが合わないとでも言いたげに逸谷が言う。

「へっ、オレは逸谷さんと違って不細工だからよぉ、無理矢理やるしかねえんだよ。ハハハ、結構楽しいもんですぜ？」

「…理解出来ねーな。つーか、暴君（ボス）には言うなよ？　あれで結構潔癖だからなー」

「そうなんスか？」

「ああ、性犯罪とか快楽殺人とか大嫌いでなー、仲間でも殺しかねない」

「マジですか…」

今まで浮かべていた下品な笑みを止めて、青ざめるチンピラ風の男。

それだけ、自分達のリーダーの怒りを恐れているのだろう。

「それぐらいは把握しとけよ。はぁー、オーミー程、従順になれとは言わねーからよ。とりあえず、ボスの機嫌は損ねるなよ」

溜め息をつきながら逸谷はごそごそと懐を探る。

やがて、見つけたらしく、それを右手に持つ。

錠剤の入った瓶だった。

「あれ？　逸谷さん、ヤクやってましたっけ？」

「馬鹿ヤロー。違う、誰が麻薬なんかするかよー。これは医者に処方された、れっきとした薬だ」

そういいながら、逸谷は手に錠剤を出し、飲み込む。

「それにしても、最悪だ。出来るだけ静かに動いてるつもりだが、隙間の神にはほとんどバレてやがる」

「捕まって自白する奴がいるんじゃねえですか？」

自分もべらべらと喋ったことは隠して、チンピラ風の男が言う。

「だから、余計なことを言う前にオレが出てきたんだろーがよ」

「ああ、逸谷さん、ボスの『右腕』ですからね」

「右腕なー、左腕も決めた方がいいかもなー…」

溜め息をつきながら疲れたような顔をする逸谷。

すると、

「見つけたよ」

古びた公園に人影が入って来た。

皆代に連絡が入った後、すぐに天士は、本部の人間に捜索と、念の為に一般人を誘導し、避難させた。

この本部のある町では、違法聖痕使いが暴れることはよくあることなので、他の町より特に秘匿に力を入れている為、町中の人間の記憶操作も可能だった。

しかし、のんびりしていては町の外に逃げられてしまうので、先に色雨や皆代達が捜索に出ていたのだ。

「テメェ、隙間の神か！　どうしてここが分かった！」

チンピラ風の男が焦りを隠さずに言う。

「…登録していない聖痕を探知する聖痕装置…最近開発された物さ」

「成る程な、さっきこいつらを殺した時に感知されたのか」

チンピラ風の男のように焦らずに逸谷が言う。

「その人達を殺したのは君だね？名前は何だい？」

「逸谷不戒（イッタニ　フカイ）」

逸谷は簡潔に言った。

「そうか、私の名前は江枕色雨だよ」

「座天使（スローンズ）？　いや、力天使（デュナメイス）か？」

逸谷が聞く。

色雨の実力を知る為に聞いたのだろう。

「反逆者がリーダーをしていると言うのは間違いではなさそうだね…でも、私はただの権天使（アルヒャイ）だよ」

「権天使（アルヒャイ）？　人員不足かよ」

それが予想外だったように逸谷が言う。

「まあ、そんなところ」

「フン、何だろうと関係無えよ！」

チンピラ風の男がそう叫ぶと同時に、男の手元に燃え盛る炎が現れる。

「……」

色雨はそれを見て、無言でステッキのような聖痕装置を構える。

「くたばれ！」

炎が爆音を発てて、色雨の下へ向かう。

瞬間、バァン！と爆発音が響いた。

「ガハッ！」

しかし、吹き飛ばされたのは色雨ではなく、チンピラ風の男の方だった。

「聖痕装置『ウリエル』。自然発火系（パイロキネシス）の聖痕を参考にした炎を撃ち出す銃だ」

煙を吹いているステッキのような聖痕装置をくるくる回しながら色雨が言った。

第二十話　殺人鬼

「何！　まさか、こいつが倒されるとは！…とは言わねーぜ？　どーせモブだし」

「い、逸谷さん酷えー」

ふざけたようにそう言う逸谷に倒れていたチンピラのような違法聖痕使いの男が言う。

色雨が加減して撃ったようで、少し火傷をしている以外は怪我もなさそうだ。

「さて、大人しく投降する気はあるかい？」

とてもそうは思えないが、色雨は一応聞いておく。

「悪いが、ねーよ。ボスは裏切れねーからなー」

両手をひらひらとさせながら逸谷が言う。

「君達のリーダーは随分と信頼されているんだね」

「信頼？　そんなもんなんかねーよ。あいつは多分、必要とあれば、オレの命なんか簡単に使い潰すぜ？」

何でもないことのように、それが当然だとでも言いたげに逸谷は言う。

「…ならば、どうして君はその人物に従う？」

「そーだなー、忠誠じゃねーんだよ」

訳が分からないと言う表情の色雨に逸谷は考えながら言う。

まるで、当たり前過ぎて、自分でも理由を考えたことも無く、言葉にするのを悩んでいるかのようだ。

「忠誠でも、信頼でも、友情でも無い…敢えて言うならば、崇拝に近いかもしれねーなー」

「崇拝だって？」

「近いだけだ。別にボスのことを神だとか思ってる訳じゃあねーよ」

誤解はすんなよ？と言いながら手を振る逸谷。

「まー、難しいことは考えるなよ。ようはテメェは問答無用で武力行使で来ればいいんだよ」

会話が飽きたのか、左腕をスッと持ち上げた構えを取る逸谷。

「！」

それに反応し、色雨もステッキのような聖痕装置を構える。

「先に言っとくぜ、聖痕（スティグマ）は、与えられた力だとか、神の恩恵だとか、言われることもあるらしいが…」

グッと逸谷は左手で虚空を掴むようなパントマイムをしながら言う。

「オレの聖痕（コレ）は間違いなく、人を害する為だけの『モノ』だ」

「ゲヒュッ！」

掠れた声のような、悲鳴のような音が聞こえた。

死ぬ間際の動物のような弱々しさも含んだ音だった。

「な…」

しかし、それを発したのは色雨では無かった。

「ゲホゲホッ！…逸…谷…ゲホッ！…さん…」

苦しんでいたのは、逸谷の背後で倒れていた、違法聖痕使いの男だった。

喉を両手で押さえて苦しんでおり、首には絞殺体のような模様が浮かび上がっている。

「悪いが、テメェはもう、組織には要らない」

逸谷が仲間だった男を見ながら言う。

冷酷な目つきをしているだとか、豹変したりなどはしていない。

先程まで普通に話していたのとまるで変わらない。

どこにでもいそうな男のままだ。

それ故に異常だ。

「…な…あ…」

「初めからこの為にオレはわざわざやって来た。勝手に捕まって、べらべらと機密事項を話す雑魚はいらねーとのボスの命令だ」

すらすらと答える逸谷。

組織に見捨てられた違法聖痕使いの男は理解が出来なかった。

組織に見捨てられたことも仲間を殺すことに躊躇しないボスもまだ、理解は出来たが、

自分が殺す予定の人間と普通に会話をして、普通に接して、殺意すら持たずに凶器を翳せる逸谷が理解出来なかった。

同情や躊躇があるとは思わなかった、自分にだってそんなものは無い。

しかし、殺意すら抱かずに人を殺せるものなのか…

そこまで思考した後、違法聖痕使いは倒れた。

「…君は一体…何を…」

戦慄したように色雨が震えた声で言う。

目の前の人間が信じられないかのようだ。

「オレの聖痕の名称は『薬剤耐性（ドラッグ・レジスタンス）』。触れた相手に病原菌を感染させることが出来る…言わば、オレ自身が病原体なのさ」

「……」

「オレが手を動かすだけで潜伏期を終え、発症する。喉を塞ぎ、まるで絞殺されたかのように窒息死させる殺人ウィルスだ」

それが人を害する為だけのモノと自分で称した逸谷不戒の聖痕（キョウキ）。

「違う！」

しかし、色雨が言ったのはそれのことでは無かった。

「何故、そこまで平然と人を殺せるんだ！」

色雨は思わず叫んだ。

色雨も違法聖痕使いの中で人殺しを見たことはある。

戦ったことさえある。

しかし、後悔にしろ、快楽にしろ、その人間にとってそれは必ず意味のあるものだった。

そうでなければならない。

人の命は軽くは無い。

顔色一つ変えずに人を殺せる人間など存在してはならない。

「ああ、悪いがオレはこういう人間なんだ」

簡潔に逸谷は言った。

「…何を」

色雨にはその言葉の意味が分からなかった。

「だから、『こういう人間』なんだよ。生まれた時から価値観が違う」

そういいながら、逸谷は懐から錠剤の入った瓶を取り出した。

「これはハイになる為の薬じゃねー。オレをクールダウンさせてくれる『精神安定剤（トランキライザー）』さ」

逸谷は錠剤を手に出し、飲み込んで言う。

クールダウンする為に服用している。

つまり、今の異常な精神状態もクールダウンしている状態だと言うこと。

「これでも常人の思考に近づいてきた方なんだぜー？　前は他人を見ると、気づかない内に殺してしまっていたからなー」

「君は…何が目的なんだ？　何の為に生きている？」

「最近では、ボスの為に生きているぜ？」

色雨の質問に、またしても逸谷は簡潔に答えた。

「…分からない。君は殺人鬼だ。なのに、何故他人の為に動く」

「……」

今度の色雨の質問には、逸谷は黙った。

「…殺人鬼が皆、殺人が好きだと思うんじゃねーよ」

しばらく黙った後に呟くように逸谷は言った。

表情は変わらず、何を考えているのかは読み取れないが、微かだが、狂人的な思考では無く、もっと人間らしい苦悩が見えたように色雨には見えた。

「あいつは『麻薬』だ。あいつの強さには、人格には他者を魅了する『依存性（カリスマ）』がある…あいつの近くにいる内だけはこの狂気を忘れられる」

「…？」

「さて、話はこれまでだ。裏切り者は始末したし、オレは帰るぜ」

そういいながら、錠剤の入った瓶とは別の瓶を取り出す逸谷。

「…ここまで話を聞いて、逃がすと思うかい？」

聖痕装置を構え直す色雨。

「狂気を抑える為に、殺人の数はボスに許可してもらった数だけでなぁ…今日は定員オーバーだ」

パリン！　と錠剤の入っていない方の瓶を地面に落として踏み砕く。

すると、濃い霧のような物が周囲にたちどころに吹き出して、逸谷の姿を覆い隠した。

「クッ……逃がしてしまったか」

霧が全て晴れてから色雨が呟いた。

第二十一話　非日常と日常

「残念ながら連中には逃げられてしまったが…無事で何よりだよ江枕色雨君」

本部にて、天士が色雨に慰めと労いの言葉をかける。

色雨はそれに感謝の言葉を言いながら、逸谷不戒の言っていた言葉を思い出していた。

「依存…か」

忠誠でも、信頼でも無く、依存。

故に誰も組織を…ボスを、裏切ろうとは思わないし、それでも不利益になる人物は逸谷が始末する。

そうして成り立っている組織『反逆者（レベル）』。

『麻薬』と逸谷が言う程に周囲を魅了し、依存させるカリスマを持った暴君（ボス）と言う存在。

隙間の神の存在に詳しく、支部を的確に狙い、隙間の神に敵対心を抱いている。

そのボスとやらが隙間の神に過去、所属していたことがあるのは明らかだ。

（…一度は同じように人々の為に働いていたはずだったのにね…）

色雨は何とも言えない気分になった。

それだけのカリスマがあるのなら、当然、実力もあるのだろう。

その実力で一時期は人々の為に働いていたはず…

色雨も、何も世界中の人々の為に犠牲になれとは思わない。

色雨自身も、世界中の人々よりも大切なものはある。

しかし、一時期にしろ、思惑は何にしろ、誰かを救ったと言う実感があったにも関わらず、放棄するのは、色雨には考えられないことだった。

「…願わくば、私の大切なもの達には彼らのような存在を知らないで過ごしてもらいたい」

色雨は小さく呟いた。

「はぁ…テスト…」

机に突っ伏してうなだれながら棺が呟く。

「どうでしたか？」

それを見ながら、横から衣が聞いた。

二日間のテストの内、今日の分のテストが終わり、棺のクラスメートが様々なリアクションをしながら教室から出ていく、放課後…

最近もはや恒例になりつつある、一緒に登下校を今日もしようと、衣が棺の教室にやって来ると、棺は机に突っ伏してうなだれたままだった。

「……察しろよ」

小さく棺が言う。

「あー…ダメだったんですか…勉強したのに」

「むしろ、いつもより出来なかったぜ…慣れないことはするもんじゃねえな」

「そういうことは慣れるまでするんですよ」

努力家で真面目な衣がきっぱりと言う。

「…お前が眩しいぜ」

不良で不真面目な棺にはそれは耳に痛い言葉だった。

大袈裟に目を手で隠す仕種までしている。

「もう、どうでもいいですから帰りますよ」

呆れたようにため息をついた後、棺に早く帰るように促した。

いつの間にか教室に残っているのは棺達だけになっていた。

そのことに気づき、棺も、のんびりと鞄を持って、衣と共に廊下を歩く。

「つーか、お前、オレ以外の友達いないのかよ」

毎回毎回、自分の所へ来る衣に棺は聞く。

それが迷惑そうな言い方では無く、同性の友達を作っていないか純粋に疑問に思ったようだ。

しかし、それを衣は嫌みに取ったらしく、少しムッとした表情をする。

「まだ学校に馴染んで無いだけです！　コミュニケーション能力がアレな棺とは違います！」

「何でオレを例に出した？　大体アレって何だよ。はっきりと言え！」

衣の発言にこちらも少しボルテージが上がる棺。

「趣味が悪いと他人と感性が違うから友達ができないんでしょうね」

「おい、それはオレか？　その趣味が悪いってのはオレのことか？」

ボルテージ急上昇の棺。

「大体何で赤なんですか、目に悪いですよ」

「……」

「前に私服だった時に思ったんですけど、隣に立ってると、光を反射して目がちかちかするんですよ全く」

「……」

「まず、その髪を黒く染めて…あれ？　何で私の頭を掴んでるんですか？」

衣が今までに溜まった不満を吐き出すのに夢中になっていると、棺がガシッと衣の頭を掴んだ。

「なら、テメェの髪を真っ赤に染めてやるよぉ！」

「キャー！　髪をグシャグシャにしないで下さい！　頭をぐりぐりしないでー！　っていうか拒絶反応はどこに行ったんですかー！」

その後しばらく、棺は衣の髪を目茶苦茶にした。

「うう…酷い」

海藻みたいなグシャグシャ頭になった衣が言う。

「レイヴに便乗してるのか知らねえが、オレを馬鹿にするには百年早えよ」

ヘッと棺が気分が晴れたのか少し満足そうに笑った。

「…少しトイレで髪を直して来ます。これでも女の子ですので」

そう言うと、衣はふらふらと近くの女子トイレに入って行った。

「もたもたしてると校舎閉まるから、早くしろよ」

その後ろ姿に棺がそう声をかけた。

誰のせいで…とか恨み言がトイレから聞こえる。

（…そういや、静かだと思ったら、レイヴに今日は会ってないな）

壁に背もたれながら棺が考える。

（勉強会したくせに今日はサボったとかねえよな…）

基本的に気分屋で面白そうなことは率先してやり、面倒臭いことはしないのがレイヴだからだ。

大体は棺にそのしわ寄せが来て損するのだが…

「あいつが静かだと、後々ろくな目に遭わない…」

本当にそれが迷惑そうに棺が言う。

これだけ迷惑をかけられてもつるんでいるのは腐れ縁故か…

「女子トイレの前で何をぶつぶつ言っているのだ?」

「あ?」

考えに夢中になっていて、棺は目の前に立っていた人物に気づかなかった。

両手首に赤と青のミサンガを付け、べたな新聞記者のように右手に手帳、左手にシャーペンを持った、棺と同い年か、一つ上くらいの歳の少女だった。

「…何だ? 取材に来たとか言うんじゃねえだろうな」

嫌な予感を感じて、棺が先に言う。

何となく、レイヴのような他人の迷惑を考えないマイペースさを感じたのだ。

「おお! よく分かったな。筆者は驚きを隠せないよ」

少女は自分のことを筆者と呼び、新聞記事のように言った。

「…また面倒臭い奴が出て来やがった」

（レイヴだけでお腹いっぱいだっつーの…）

心の中と外で愚痴る棺。

「おっと、自己紹介がまだだったな。筆者の名前は落河揺祇（ラクガワ　ユラギ）、しがない作家だ」

レイヴ並にキャラの濃い、作家、落河揺祇は言った。

第二十二話　ナイーブな作家

「質問が幾つかあるのだ、答えてくれないか？」

「記者みたいなことを言う奴だな」

「記者では無く、筆者は作家だ。イメージを湧かせる為に、ネタ集めをしているのだ」

きっぱりと断言する自称作家の落河揺祇。

手に持った手帳やシャーペンはマスコミか何かに見えなくもない。

「…まあ、どうでもいいけどよ。お前は…えーと、先輩か？」

棺は揺祇の顔に見覚えが無かったので違う学年だと思い、聞く。

「いや、歳は君より一つ上だが、一年留年したので、学年は同じだよ」

「留年？　初めて聞いたな」

「生まれつき、メンタル的に弱くてね、去年は休学をしていたのだよ」

「ふーん…」

（通院でもしていたのか…いじめとかに遭うタイプには見えないか

ら、鬱病ってやつか？）

そのような体験が無い棺にはその気持ちはよく分からなかったが、好奇心で聞いていいようなことでは無いことは分かった。

「それで？　作家つーことは何か作品があるんじゃねーのか？評判はいいのか？」

「……」

棺の質問に何故か黙り混む揺祇。

「どうした？　あんまり評判はよくないのか？」

「…いや、と言うよりは評価をされたことが無いと言うか…えーと」

はっきりと言いたく無いようで、曖昧に揺祇が言う。

その様子に棺はしばらく考え、

「ああ、休み過ぎて友達がいねえのか」

納得がいった…とでも言いたげにあっさりと言った。

配慮ゼロである。

「…そんな…はっきりと言うなくても…」

気にしていたのか、みるみる暗くなっていく揺祇。

取材取材と興奮していた先程までとはえらい違い…

「あれ？　おい…」

ようやく揺祇の異変に気づいた棺。

トラウマ故に女性関係の免疫は無く、かなり鈍感なのである。

「…グス」

既に泣きが入ってる揺祇。

棺より年上だが、メンタルは弱い。

「…あー、何と言うかー」

鈍感な棺にもこれがマズイ事態なのはよく分かった。

この場を衣やレイヴに見られでもしたら…

正義感の塊である衣は、棺に謂れの無い罰を与え、

悪戯好きのレイヴは、面白おかしく話を学校中に広めるだろう。

「あ、あれだ。オレも友達いねえから、お前は大丈夫だ！　大丈夫！」

何が大丈夫なのか、そもそも慰めになっているのかは棺自身も分かっていなかったが、とにかく泣き止ませようと必死だった。

「…そうだな。筆者は大丈夫だ。うん、問題ない」

ようやく暗い雰囲気の無くなった揺祇。

「…それはよかった」

疲れる相手だとか、疲労感を感じる点や迷惑をかけられる点もレイヴに似ているなどと内心思いながらも、棺が答える。

「何をしてるんですか？」

そこで、ようやく棺にぐしゃぐしゃにされた髪が元に戻ったのか、衣がトイレから出てきた。

「あ、ああ、こいつが……あれ？　そもそも何しに来たんだっけお前？」

「だから、色雨に聞いて興味が湧いたから、取材をしに来たと…」

（ああ、そうだった取材だったな。こいつの出す面倒くさい雰囲気で忘れていたな……あ？　今、何か妙なことを言わなかったか？　こいつ？）

揺祇の言葉に何か引っ掛かることがあった棺。

その疑問はすぐに晴れることとなった。

「あれ？　もしかして揺祇さんですか？」

「ん？…ああ、久しぶりだな、衣」

「知り合いか？」

その様子を見て、棺が衣に聞く。

「ええ、同じ隙間の神で、あの支部に来ている人なんですよ」

あの支部とは、例の『星を見る会』の支部である。

どうやら、知り合いなだけでは無く、隙間の神の同僚でもあるらしかった。

「…ハッ！　神無棺！　見ろ！　筆者にも友人はいるぞ！」

何かに気づいたかのような顔で衣を指差し、棺に叫ぶ揺祇。

「…それはよかったなぁ」

（こいつ、本当に友達いねえんだな）

その様子に少し切ない気持ちになりながらも、棺が答える。

「話が読めませんが…揺祇さんはどうしてここに？　一年前から支部にも来てませんでしたから、心配しましたよ」

「支部には顔を出さなかったが、仕事はしていたぞ？　まあ、先日の病院での件以外はそれほど忙しいことはなかったが…」

「それはそうですよ、揺祇さんがいないと、私達は成り立ちませんから」

「いやいや、筆者の代わりなどいくらでもいるよ」

衣の話では、揺祇はかなり重要なポジションにいるようだが、揺祇自身はそれを誇るどころか、むしろ、代わりがいれば、任せていたい様子に見える。

「今度はオレが話が読めねえんだが…」

二人の話についていけない協力者、棺が言う。

「揺祇さんは私のような見習いでは無く、ある意味、隙間の神で一番重要とも言える、『主天使（ドミニオンズ）』なんです」

「…それは何をする部隊なんだ？」

いまいちまだ隙間の神を完全に把握出来ていない棺が再度聞く。

「秘匿をする部隊だよ。部隊と言っても、聖痕使いのカテゴリーのようなものだけどな」

自分のことだからか、衣の代わりに揺祇が答えた。

「他人の記憶を消す、操作する。そんな特殊な聖痕を筆者は持っているのだよ」

決して自慢げではなく、むしろ、友達がいないことよりも言いにくそうに、揺祇は言った。

第二十三話　記憶操作者の苦悩

「記憶を消す？」

棺が揺祇に聞き返す。

「より厳密には記憶の消去では無く、記憶の偽造だ」

「どういう意味だ？」

「初期化では無く、上書きをすることで記憶を失わせる…それが筆者の聖痕『虚偽記憶（フォールス・メモリー）』だ」

記憶を欠落させるのでは無く、記憶を偽造することが落河揺祇の聖痕。

本人の気持ちとは無関係に隙間の神で重要視されている希少な聖痕である。

「へえ。オレと違って便利で羨ましいな」

軽い口調で棺が言う。

しかし、揺祇はそれに少し嫌そうな顔をする。

「…羨ましがられるようなものでは無い」

「？」

「違法聖痕使いを相手にする聖痕ならまだしも、筆者が相手にするのは一般人…何も知らない一般人の記憶を弄くるんだ…」

暗い声色で揺祇が言った。

揺祇の聖痕は衣の観念動力などとは違い、とても希少な聖痕だ。

また、違法聖痕使いの撲滅では無く、あくまで『聖痕の秘匿』を目的としている隙間の神にとって、どんな強力な聖痕を持つ聖痕使いよりも重要な存在だ。

それは、優遇されると同時に一般的な聖痕使いよりも活躍する場面が多いことも意味する。

何も知らない一般人に聖痕を使うことに抵抗がある、落河揺祇は、今までに一体何人の記憶を操作してきたのだろうか。

「筆者の創った偽りの記憶とも知らずに、日々を過ごしているのだ。筆者の仕業とも、筆者が何をしているのかも知らずに…」

罪を犯した時に本当に苦しい時は、罪が発覚して人に責められる時では無く、罪が発覚するまでの時間だ。

罪悪感と後悔に苛まれ、被害者が知らない為に、償いも出来ない。

落河揺祇はただ、記憶を消すだけに留まらない、記憶操作のスペシャリストだ。

だが、逆に言えば、それしか出来ない。

隙間の神として、人々を救う為に働きたい、
何も知らない人々の記憶を操作したくない、
落河揺祇はその二つの狭間で苦しみ、鬱病にもなってしまい、精神的に脆くなってしまったのだ。

「筆者は…」

「…チョップ」

「痛っ！」

まだ何か言おうとした揺祇に棺が突然チョップをして止める。

「な、何を…」

「暗いんだよ！　こっちまでナイーブになるわ！　見ろ！　影響を受けて衣も涙目じゃねえか！」

揺祇の言葉で涙目になっていた多感な衣を指差して棺が叫ぶ。

「…泣いてません」

「まあ、いい。こいつは放置するとしてだ」

涙ぐんでいた衣を放置して揺祇の方を向く棺。

先ほどから静かだったのは涙を堪えていた為か…

「ぶっちゃけると、オレは衣ほど多感じゃねえから、お前の気持ちはほとんど理解出来ねえが…」

「え？」

「それは違うと言うか、何つーか…あー、オレのキャラじゃねえ…」

人を諭すなんて自分に似合わないと思いながら棺が揺祇に言う。

「何と言うか…お前がいなければ、オレみたいに巻き込まれた一般人もかなり増えたんじゃねえのか？」

一般人から協力者になった神無棺は言った。

「……」

「あー。つまり、何が言いたいかと言うと…お前はお前で人を救っていたんじゃねえのか？」

神無棺は正規の隙間の神では無い。

違法聖痕使いや衣に出会ったことで、巻き込まれた一般人だ。

棺は一般人として扱って欲しい訳ではない。

色々あったが、別に棺は後悔はしていないし、大体、棺は聖痕使いであったので聖痕と全くの無関係とも言い難い。

だが、聖痕と本当に無縁の一般人の場合はどうなるだろう。

聖痕と言う不可思議の存在を知ってしまった。

ただ、それだけでその一般人の日常と常識を壊してしまうだろう。

隙間の神は組織の存続の為だけでは無く、非日常と非常識の世界、現実の『隙間』に一般人を巻き込まない為に記憶を操作している。

故に、揺祇の行為は罪ではなかったのだ。

「…ありがとう。まだ、記憶を操作することに抵抗はあるかもしれないけれど、悩むことはもう無いかもしれない」

「どうだが、お前のことだから、また悩み事を見つけてくよくよ悩んでいそうだけどな」

揺祇の苦悩が棺の軽い言葉などで解消された訳ではなかった。

揺祇が何年も悩んできた苦悩は、そう簡単には無くならない。

しかし、棺の言葉で揺祇の気が楽になったのも事実だった。

「…たまにはいいこと言いますね」

「お前はまず、その涙を拭けよ」

また涙目になっていた多感な衣に棺はため息をつきながら言った。

「うぅ…風邪で頭がふらふらするである～」

棺が衣と揺祇の二人を感動させていた頃、レイヴは商店街にいた。

風邪をひいて学校を休んでいながら、服装はいつも通り制服だった。

「今日は一日中寝ていたかったのに、冷蔵庫が空っぽとは…一人暮らしは辛いである～」

高熱の為か、ふらふらと揺れながらレイヴは商店街を歩く。

「棺めぇ～、私がこんなに弱って看病イベントフラグを立てていると言うのに、何故、学校を休んで来ないのであるか！」

ほとんど八つ当たり気味に叫ぶレイヴ。

棺はレイヴはテストだからサボったと思っているし、そもそも、棺はレイヴの家を知らないので、無茶な話なのだが、熱で妙なテンションになったレイヴは全く気がつかない。

「…ああ、ダメである。死にそう。早く何か食べ物を買って…」

早く家へ帰ろうと、食べ物を扱っている店をふらふらする頭で探すレイヴ。

「んん？」

辺りを見回すレイヴの視界に妙な物が入った。

いや、妙な物と言っても、熊とか違和感がある物では無く、辺りにはたくさんいる人間である。

人間ではあるのだが、レイヴは何故かそれに違和感を感じた。

それは筋肉が無く、細身の為か、女にも見える男で、色白、

髪は日光をあまり浴びていないかのように、やや灰色にも見える黒色。

そして、最大の特徴は左目を覆う大き目の白い眼帯。

全体的に不健康そうな印象を受けるが、それ以上に、何か違和感を覚える。

ぼんやりとしており、横断歩道をゆっくりと前進している。

「何か…！」

何となくそれを眺めていたレイヴだけが気づいた。

居眠り運転か何かか、明らかに止まりそうに無い車が走ってきていることに…

「ちょ、ちょっと！　そこの顔色悪い眼帯の人！」

慌ててレイヴが叫ぶが、眼帯の男には聞こえていないのか、ゆっく

りと歩き続けている。

キィィッ！　とブレーキを踏む音が聞こえたが、もう手遅れだった。

車は男を撥ね飛ばした。

「…え？」

撥ね飛ばしたはずだった。

レイヴは熱も忘れて目を疑った。

確かに、眼帯の男がそこにいて、車に接触する所まで見ていた。

だが、その瞬間、男は消えてしまった。

比喩でも無く、霧のように煙のように…

「…幽霊？」

その男は存在が希薄で、顔色が悪く、消えてしまう、『幽霊』のようだった。

第二十四話　新興宗教

テストの二日目、風邪の治ったレイヴに棺は声をかけられていた。

「そうである！　幽霊を見たのであるよ！」

「つーか、やっぱりサボりだったんだな」

昨日見たことを興奮して話すレイヴに対し、棺のテンションは低い。

と言うより、レイヴと会話している時に棺がテンション高い時の方が珍しい。

「違うである！　昨日は風邪で寝込んでて…」

「何で寝込んでて幽霊が見えるんだよ」

「それは食べ物を買いに…って、さては信じてないであるな！　何で私の言うことを一つも信じてくれないのであるか！」

その棺の様子にハッと気付き、レイヴが叫ぶ。

「オオカミ少年…と言う話を知っているか？」

「知っているであるよ？」

「幽霊？」

「そうか。ならいいんだ」

「どういう意味であるか！　それは！」

暗に、レイヴの普段の行いが理由だと言う棺。

「今回は本当に本当であるって！　この間、棺にあげたゲームがプレミアム版だと言うのは実は嘘であったけど、今回は絶対に本当である！」

「あれ嘘だったのかよ！　この野郎！　やっぱテメェは信じられねえ！」

「おかしいな…昨日、本当に反応があったのかい？」

隙間の神、第１８５支部、

江枕色雨が機械を見ながら近くにいた見習い隊士に言った。

「ええ、昨日は微かにですが、私達隙間の神や協力者の神無棺さんを除いた登録されていない聖痕の発動をキャッチしたんです」

見習い隊士の女が機械を操作しながら言う。

この機械は聖痕装置の一種であり、この町の中で登録されていない聖痕の使用が確認されると即座に反応する探知機だ。

最近導入されたばかりの試験品であり、欠点は聖痕を使わない限り、違法聖痕使いを特定出来ないこと、

そして、違法聖痕使いのように聖痕を何度も使わない者…例えば、棺のように極稀にしか使わず、長時間使わない者は探知しにくい。

昨日は確かに反応があったのだが、長時間使用した訳ではなかったようで、後者の欠点の為に反応を見失ってしまった。

「まあ、私がいない間に何も起こらなくてよかったと言うべきかな…」

「しかし、違法聖痕使いが町に入り込んでいる可能性もありますよ」

「だけど、それだけとは限らないよ、もしかしたら、新たに聖痕に目覚めた聖痕使いが現れただけかもしれないじゃないか」

「それはそうですけど」

とは言うものの、色雨は十中八九、違法聖痕使いでは無いかと思っていた。

何故なら、数日前にオーミー＝氷咲によって、病院での騒動が起こされたばかりだったからだ。

居合わせた棺が襲われたのは偶然だとして、病院に現れたと言うことは病院にいる人間が目的なのかもしれない。

一応、色雨はあの時に病院にいた全ての人間を調べたが、聖痕使いは軽根間人を除いて一人もいなかった。

だが、連中にとってはただの一般人ではない人間がいたのかもしれない。

だから、再びそれを狙いに何者かが町へやって来ても不思議ではない。

（…病院に誰かを配備するべきか。私が行くなのかもしれない…だけれど、そうすると、衣が…）

「あの…江枕さん？」

色雨が悩んでいると、見習い隊士の女が声をかけた。

「ん？　どうかした？」

「えと、その手に持ってるのは何ですか？」

悩んでいる色雨の気を紛らそうとしたのか、色雨が手に持っていた物について聞く見習い隊士の女。

「ああ、これね…さっき外に出た時に貰ったんだよ。新興宗教ってやつかな？　隙間の神が神を信じるってのもおかしいけど…」

苦笑しながら言う色雨の手には『神の導き』と表紙に書かれた小さな本が握られていた。

「それで、布教は上手くいってるのか？　旦那？」

ある建物内で、灰色に近い色の黒髪、不健康な色白、左目に白い眼帯をした男が言った。

体型はやせ形で、女にも見えるその顔は年は二十歳にも満たないだろう。

存在が希薄と言うべきか…触れたら消えてしまいそうな脆く儚い雰囲気を持った男だった。

「昨日の今日で信者が集まる訳も無いじゃろう」

その隣に立っていた男が答えた。

こちらは眼帯の男とは逆に歳を取り、黒髪に混じった白髪が目立つ初老の男だったが、弱々しさは無く、むしろ、眼帯の男よりも生気が溢れていた。

「まあ、人は見えないものはいないと決めつけるものって誰か言ってたし…仕方ないじゃないのか？　言伝の旦那？」

「黙れ、桐羽由来。じゃから、これからワシがこの町に布教をしようとしているのじゃろうが…」

初老の男、御開言伝（ミカイ　コトヅテ）が言った。

「布教ね…まあ、旦那がやりたいならやればいいよ。オレはあくまで、手を貸すだけだから」

眼帯の男、桐羽由来（キリバネ　ユライ）が答える。

「相変わらず貴様は何を考えているのか分からんな。真に恐ろしきは、心の読めない味方か」

「何を考えているのか分からないんじゃなくて、何も考えていないだけさ」

「フン、計画は分かっているのじゃろうな？」

「分かってる。それじゃあ手筈通りに」

言伝の言葉に頷く由来。

「よし、この町は全ての始まり、今日こそは我が布教の革命の日となるのじゃ！　『世界布教』の為のな」

建物内に言伝の叫ぶ声が響いた。

「…『今時世界征服を野望にするなんて旦那は夢見がちだね』って普通の人は言うだろうな」

「黙れぃ！　貴様まだ居たのか！　さっさと行け！」

「アイアイサー」

そう呟くと由来は煙のように虚空へ消えた。

「新興宗教『神の導き』？　何なんだ、その胡散臭そうな名前は」

「いえ、学校へ来るときに貰いまして…」

いかにもなタイトルの新興宗教に心底下らなそうな顔で言う棺に衣は困ったように答える。

それは色雨が貰ったものと同じ小さな本だった。

「そういや、今日の朝は待ち伏せしてなかったな」

「ええ、支部の方によってから来たので」

「なるほど、それでか…にしても、宗教なんて興味ねえけど、これはまた強烈なやつだな」

衣の持っていた小さな本を取り、中をパラパラと捲りながら言う棺。

「『神の言葉は唯一絶対の導きであり、それに従うことこそが人の取るべき道』…うへぇ、無神論者のオレには理解不能だ」

「聖痕使いが何を言ってるんですか…」

「いや、むしろ、不可思議を知っているからこそ、逆に信じられねえんだよ」

聖痕が存在するのだから、神も存在するかもしれない…では無く、所詮、現実の不可思議は聖痕程度で、神はそれを大袈裟にしているだけ…と棺は考えているのである。

不可思議を知っているからこその感性である。

「そうとも言える…のですかね？　私も神様を否定するつもりは無いのですが」

「それはそうと、もうそろそろテストが始まる時間だぜ、戻った方がいいんじゃねえのか？」

「そうですね。早めに戻って勉強をするとします……そういえば、先程レイヴさんが泣きながら走っていきましたが、棺、何かしましたか？」

「ああ、十中八九、嘘泣きだから別にお前は気にしなくていいぞ」

大方オレを困らせる作戦だろう…と何か悟ったような顔で棺は言った。

「はあ、棺に任せます。テスト頑張りましょうね」

そういい、衣は自分のクラスへ帰って行った。

「……あ、この本を返すの忘れてた」

ふと、新興宗教の本を手に持ったままだったことに気付き、棺が言う。

『信じるものは救われる。人間は全て、神の傀儡であるべきだ』

御開言伝

そうその本の最後には書かれていた。

第二十五話　幽霊少年

「…まだ探知は出来ないのかい？」

「す、すみません！　探知機の故障か分かりませんが、反応が弱い上に出たり、消えたりしまして…」

色雨の言葉に謝りながら急いで探知機を操作し続ける見習い隊士。

何やら予想外のことが起こっているらしく、焦りながら操作している。

「いや、別に君を責めている訳では無いんだ。機械の故障なら、メンテナンスを怠った私が悪いのだし」

未確認の聖痕使いに焦っていた為にきつい言い方をしたことに気付き、色雨が宥めるように言う。

（しかし、昨日までは正常に動いていたはずなのだけど…何かおかしい）

「…次に微かにでも反応があった場所に私が行くよ」

（理解出来ない力、存在、それが聖痕使い同士の戦いで一番怖いことだ）

「それで、旦那のジャミングはまだ効いてるのか？」

『ああ、この間使われたあのおかしな機械は今も使えていないじゃろう』

由来が道を歩きながら携帯電話で会話をしている。

相手は御開言伝であり、『計画』の最終確認をしているようだ。

『フン、神の祝福を受けた身でありながら、神の奇跡に似せた機械を作るなどと…本当に罰当たりな奴らじゃと思わんか？』

「オレに意見なんか求められてもしょうがないよ」

言伝の共感を求める言葉に困ったように由来が言う。

『ああ、そうじゃったな』

その言葉に何故か納得したかのように言伝が言う。

「そうそう、オレは意見も主義も主張も一切持たないって言っただろ？」

意見も主義も主張も一切持たない。

そんな『不可解』なことを由来はまるで当然のことのように言った。

「オレは金で雇われる便利屋であり、都合のいい道具であり…」

『……』

「ただ、他人に力を貸すだけの『奴隷』さ」

何故かそれを誇るように由来は言った。

『…フン、人間味の無い…されど、それこそが神の忠実なる下僕、神の傀儡なのかもしれんな』

「これを言って、気味が悪いと言われなかったのは初めてだよ。オレと同じ力を持った人間に出会ったのも旦那が初めてだけど…」

『フ、同じ神の祝福を受けた者、『共感』出来るに決まっているじゃろう』

言伝の好きな言葉なのか、共感と言う言葉を強調しながら由来に言う。

「やっぱり、平和が一番だよな。同類同士、争うなんて間違って…うん？」

道を歩きながら電話をしていた由来が首を傾げた。

『どうした？』

「同類を見つけたみたいだ…さて、やるとしますか」

『そうか…油断するな』

「アイアイサーっと」

そう呟くと、由来は再び、煙のように消えた。

「ようやくテストが終わったな…」

「そうですねー」

同じ頃、棺と衣は会話をしながら歩いていた。

今日で全てのテストが終わったので、いつものように二人で家に帰っている途中である。

苦手なテストから解放された為か、棺はいつもよりテンションが高めだ。

「いやぁ、結果はまだ分からねえが、この解放感は気持ちがいいぜ」

「それは同感です。勉強は嫌いじゃないですけど、緊張しますからね」

「そうだな、打ち上げみたいな感じでカラオケにでも行くか？」

「カラオケ…ですか？」

棺の誘いにキョトンとした顔で衣が言う。

「オーケーオーケー、何となく予想してたぜ。カラオケにも行ったことないんだろう？　今から連れて行ってやるよ」

いい加減、衣の生真面目なところを把握してきた棺が言う。

しかし、

「はぁ…あまりお腹は空いていないのですが…」

「……はぁ！？」

衣は棺の予想以上だった。

そもそも、カラオケの存在を知らなかった。

「お前、本当に今時の若者かよ！　実はまだ小学生なんじゃねえか！」

「だから、同い年だと言ってるじゃないですか！」

割りと本気で実は小学生なんじゃないかと、棺は言ったが、衣は全力否定。

「あー、今度お前の兄さんに教育方針について聞く必要があるな」

「何でですか。と言うか、カラオケって本当は何なんですか、レストランとかじゃないんですか？」

「説明が面倒臭え！　それこそ兄さんに聞けよ！」

最初はテンション高めだったが、衣とのやり取りで、いつの間にか、いつものテンションに棺は戻ってしまった。

「…もしもーし、そこのお二方ー」

「ん？」

またいつものように言い争いになる寸前で、棺と衣は声をかけられた。

棺が声のする方を向けば、少し先の塀の上に眼帯を付けた女顔で細身の男が座っていた。

「ああ、やっと気付いた。待ってたよ」

眼帯を付けた男、桐羽由来は朗らかで儚げな笑みを浮かべて言う。

「棺の知り合いですか？」

「いや、オレの知り合いにこんな今にも死にそうな奴はいない」

衣の質問に棺が率直に由来の第一印象を言う。

何気に酷い。

「自己紹介をしよう。オレは桐羽由来。こう見えても十九歳」

十七歳の棺よりも下に見える童顔かつ女顔の自覚はあるのか、そう言う由来。

「江枕衣。十七歳、現役高校生」

十七歳と高校生を強調しながら衣も自己紹介をする。

「…神無棺だ。それで、お前は誰だよ」

（またどっかの不良か？　にしては喧嘩が弱そうだが…色雨関係か？）

「自己紹介は済んだよ？」

「名前じゃねえよ、何者で何用だって聞いてんだ」

「ああ、そういう意味」

手をポンと叩き、納得した仕草をする由来。

「……」

（何だこいつ？）

儚いと言うべきか、現実味がないと言うべきか、独特な雰囲気を持つ由来に棺は困惑していた。

「自分のことを話すのは苦手なんだよね…そうだな、職業は便利屋。

報酬を払えば何でもする何でも屋」

「便利屋？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる棺。

しかし、それを気にせず、由来は自分について考えている。

「後は、何だろう…」

「！」

フッとそこまで話していた由来が棺の目の前から消え失せた。

何の予兆も予告も無く、瞬く間に、まるで元からそこにはいなかったかのように消えた。

「この力とか？」

「は？」

唐突に消え失せた由来に棺が目を凝らしていると、すぐ後ろから声がした。

振り向くと、元からそこにいたかのように、由来が平然と立っていた。

音もなく消え、音もなく現れた。

「お前、一体…」

一瞬、棺の脳裏にレイヴの言っていた『幽霊』と言う言葉が過った。

「そんなに驚くなよ、『お化け』を見た訳でもあるまいに…」

棺を安心させるように由来は言った。

「オレはただの『霊能者』だよ」

第二十六話　ＶＳ霊能者

「霊能者？」

「霊能力…と言う力を持つ者のことですね」

棺の疑問に横にいた衣が答える。

「有名なのは霊視、『幽霊を見ることが出来る力』や徐霊、『幽霊を祓う力』などで、主に徐霊師や霊媒師などがこの力を持っているとされます」

「成る程な…」

（まあ、と言っても、あの自称魔法使いと同じで聖痕を自分なりに解釈しているだけなんだろうが…）

隙間の神以外の人間は不可思議な『力』のことを聖痕とは呼ばない。

と言うより、聖痕と言う名称も隙間の神が決めただけであり、本来の名称は違うのかもしれない。

それ故に、オーミーはこの力を『魔法』と、由来は『霊能力』と、言伝は『神の祝福』と解釈している。

力は同じでも、使い方も解釈の仕方も十人十色だ。

「まだ色々分からねえことはあるが、取り敢えず、こいつをぶっ飛

ばせばいいんだろ？」

「ええ、恐らく違法聖痕使いです。支部へ連れていきましょう」

そう会話し、由来に身構える二人。

何しろ、一度は見せられたとはいえ、由来の聖痕は未知数…

油断は禁物だ。

「何かやる気みたいだな。はぁ、オレの霊能力（チカラ）は『見えない者』専門の力だから、人間を相手にするのは苦手なのに…」

二人を挑発する気は無かったのか、ため息をつきながら由来が言う。

「行くぞ」

その声と共に棺が由来に向かって走り出す。

「暴力は嫌いだ。旦那なら『人間同士が傷つけ合うのは愚かなことじゃ』って言うだろうさ」

そういいながら、スッと身体の力を抜く由来。

「また消える気か！」

それを見て、棺が叫ぶ。

消える前に辿り着こうと走る速度を上げる。

「いや、そうじゃない」

それをキッパリと由来は否定した。

その瞬間、フワッと由来は浮かび上がった。

跳んだのでは無く、煙が立ち上るかのように浮かび上がった。

「なぁ！　マジで幽霊なんじゃねえのか！」

それを見て、棺が叫ぶ。

「幽霊じゃないよ、ちゃんと足あるし…」

細い華奢な足を空中でブラブラと揺らしながら由来が言う。

由来の方に挑発しているつもりは無かったかもしれないが、それを棺は挑発と取った。

「このもやしっ子め…」

そう言うと、棺はグッと足を曲げる。

丁度、屈伸をするような感じに膝を綺麗に曲げる。

「？」

突然、準備運動を始めた棺に首を傾げる由来。

「飛べるのが自分だけだと思うなよ！」

瞬間、棺は地面を思い切り蹴飛ばし、飛翔した。

「なっ！」

「ハハハ！　触れた物を浮かせる力、手から離れて数十秒間浮遊させ続ける力！　ならば！」

重さを感じさせないかのように、凄まじい速度で由来に向かっていく棺。

「オレ自身を浮かばせることに限界は無え！」

自分自身の重さを奪った棺は風船並みに身軽だ。

一度、地面を蹴った程度の衝撃でもロケットのように加速する。

「ッ」

その速度に慌てて由来が空中で回避行動を取る。

それでも棺は止まらない。

「うおおおおおお！……お？」

だが、それには致命的な、それでいて、間抜けな欠点があった。

そうだ。

どれだけ速くても身軽でも何もない空中で方向転換など出来るはず

がない。

『直進しか出来ない』。

「しまったー！」

由来の横を通り抜け、そのまま棺は大空へ向かって飛んでいった。

「……こんな時、旦那なら何て言うだろ？」

あまりの事態に呆然とする由来。

「…全く、たまに真面目になると馬鹿なミスばっかりですね！」

憤慨しながら、衣が両手で何かを掴むような動作を始める。

「何それ？」

段々と光り始める衣の手を見て、由来が聞く。

「投げ縄です」

ヒュッと手の中に作り出した光る縄を投擲する衣。

その長さも自在に調整出来るのか、それはぐんぐん伸びていき、由来に迫る。

しかし、棺とは違い空中を自在に動き回れる由来に、あっさりとかわされてしまった。

「面白い霊能力を持っているね。いや、旦那なら『神の祝福を受けている』と言うだろうな」

癖なのか、再び他人の意見を例に出しながら、由来が言う。

「まあ、安心してよ。怪我をさせるつもりは…「今です棺！」…は？」

由来の言葉を遮り、衣が合図を出した。

「馬っ鹿！　奇襲中に叫ぶんじゃねえよ！」

「な…」

由来がその声に気づき、後ろを振り返ると、衣の投げた光る縄を掴んだ棺が迫ってきていた。

（投げ縄ではなく命綱…）

「くらいやがれ！　もう向きとか関係無え！」

そう叫ぶと棺は聖痕を解除した。

風船のように身軽のまま衝突しても意味は無い。

綿で殴るようなものだ。

だから、棺は重力を元に戻した。

丁度、由来の頭上辺りで…

「重力ダイブだ！」

元の重さに戻った棺が由来に迫る。

それに対して由来は…

「……」

特に構えは取らなかった。

「くらえ！」

妙に余裕があるのが少し気になったが、構わず、向かっていく棺。

瞬間、『するり』と、

まるで幽霊とか煙とか、触れられないものを無理矢理掴もうとしたかのように、

棺は由来の身体を『すり抜けた』。

いや、より正確には『触れた衝撃で由来の身体が崩れたようでもあった』。

「何…」

「また会うことになると思うよ。棺」

顔も口も無い白い煙のような姿のまま、由来はそう言い残すと、消

えた。

最初から存在しなかったかのように、

その不気味さだけを残して消えた。

「戻ったよ、旦那」

言伝の隣に突然現れた由来が言う。

いきなり現れたが、隣の言伝は、さほど驚いた様子はない。

「ほう、この町の神の祝福を受けた人間は全て把握したのか？」

「当然。オレの視力をなめないでくれよ」

自分の眼帯をしていない右目を指差しながら珍しく自慢げに言う由来。

「フン、ならば眼帯も外した方がよいじゃろう」

「コレは外せないんだよ。…と言うか、もしかして、そこの人達が旦那の口説き落とした信者？」

「…俗な言い方はやめろ。説き正した…とでも言えばよいか」

建物の中には由来と言伝以外にも人がいた。

数は三人。

若い男が二人に、女が一人いる。

共通して、首に何かを象徴するかのようなペンダントを付けている。

そして、共通して、表情が無い。

「このペンダントを高値で売ったりするの？」

「阿呆。ワシは宗教を統一することが目的じゃ。金銭など要求する訳ないじゃろうが」

「ほほー、じゃあ一つ貰っていい？」

近くに置いてあったペンダントを一つ取り、由来が言伝に聞く。

「入信するならな」

「ん。ならいいや」

「即答か」

「オレ、霊能者だからさ、幽霊とか見える訳で。なおさら、見たことないものは信じられないと言うか…」

「分かった分かった。さっさと行け」

「アイアイサー、将軍」

「誰が将軍じゃ」

妙に緊張感が無い、調子の狂う相方にため息をつきながら言伝は言った。

第二十七話　霊的存在

「それで、違法聖痕使いの居場所の特定は出来ないんですか、兄さん」

由来に逃げられた後、とりあえず衣はこのことを色雨に報告することにした。

棺は由来を今すぐにでも探しに行きたそうだったが、大人しく衣の隣で電話が終わるのを待っている。

『うん。元々この探知機はこの町に侵入してきた違法聖痕使いを探知するものだからね…』

探知機と言っても万能では無い。

最近出来たばかりなので、欠陥は幾つもある。

外からやって来た違法聖痕使い、もしくは、突然発生した違法聖痕使い。

正確には、探知機に登録されていない聖痕を使い、暴れている者を探知する。

だが、逆に言えば、それ以外は探知出来ない。

例えば、棺のように登録されていない聖痕を宿していながらも、聖痕を使い、暴れなかった…つまりは長時間聖痕を使わない者は探知

することが出来ない。

その為、『自称魔法使い』の時には棺が倒すまで探知が遅れた訳だ。

『それに、どういう訳か、今日は調子が悪くてね』

まるで、誰かに阻害されているかのように正しく機能しない探知機に頭を悩ませながら色雨が言う。

「…分かりました。では、私と棺で引き続き、捜索を続けます」

『…見つけるだけでいいからね衣ちゃん。君は非戦闘員なんだから、戦うことは考えずに…』

「…分かりましたよ」

やや過保護な程、色雨が衣に心配そうに言い、それに衣は呆れながら適当に返事をして電話を切った。

「で、何だって？」

電話中、黙っていた棺が衣に聞く。

「…探知機は使えません。兄さんの方でも何人か捜索に出しているらしいようですし、私達は私達で探しましょう」

衣は探知機に期待をしていたのか、少し沈んだ声で棺に報告する。

「ハッ、まあ元からそのつもりだがな」

棺はさほど期待していなかったようで、それほど残念そうではない。

「…珍しくやる気満々ですね棺」

面倒なことは嫌い、トラブルを出来るだけ遠ざけようとする棺にしては意外な言葉に衣は言う。

夜の病院での一件は、偶然出会って棺が返り討ちにしただけであり、本来なら自分から積極的に倒しに行こうとはしなかっただろう。

今回も由来に偶然出会った訳だが、どうも、積極的に見える。

「はぁ？　そりゃあ、あいつが『敵』かもしれないからだろ」

「敵？」

「かもしれない…だがな、『敵』になるかもしれないなら、一応、挫いておくものだろ？」

「？」

『敵』と言う言葉を重要そうに使う棺。

衣にはイマイチ理解出来なかったが、棺にとって『敵』とは、それだけ重要な言葉で、敵かもしれないと言うだけで全力で倒すと言う意味になるのだろう。

不良として、一時期喧嘩ばかりをしていた棺なりのモットーやポリシーなのかもしれない。

「とにかく！　あいつは……おい！　衣！」

何かを言いかけた棺が何かを見て、衣に叫ぶ。

「え？　…あ、どうして」

困惑気味に衣が言う。

「どうしてって、呼ばれてるみたいだから、それに答えただけだけど？」

三人目が言う。

「オレは他人の願いに答える便利屋だしね」

虚空に桐羽由来が浮かんでいた。

「探知機はもうダメだな」

色雨は未だに機能しない探知機を見て呟く。

既に支部の色雨以外の人間は由来の捜索に出払っている為に、それに答える者はいない。

（しかし、やはり何かおかしい…まさか、何者かに妨害をされている？）

「…そうなると、どのみち探知機は使えない。なら、私も捜索に出た方が…」

ザリッと、何か土足で床を歩くような音が色雨の背後からした。

「…誰だい？　ウチの教え子の中に、土足で室内を歩くような子はいなかったはずだけどな」

色雨はそう言い、背後を振り返った。

「どういうつもりか知りませんが、こちらとしても、丁度よかったです」

「何が？」

「あなたの力について、私なりに推測が出来たので、答え合わせをして頂きたいと思いまして…」

衣が空に浮かび続ける由来に言う。

それに対して由来は相変わらず現実味と人間味の薄い表情だが、ど

こか面白そうに笑う。

「いいよ。別に隠してるつもりは無いけど、推測を聞こうか？」

「まず、あなたは霊能者、霊能力を所有していると言いました」

「うん」

「霊能力は霊視、徐霊など霊に関係するものが多く、つまり、あなたのソレも、何かしら霊に関係するものだと言うことになります」

「……」

「次にあなたの力の特徴は消えたように移動する、空に浮かぶ、物体を透過する…まるで、霊的な存在かのように」

棺や衣が感じた由来の現実味や人間味の無さ、存在自体の違和感の正体。

「あなた、本当に『生身』ですか？」

衣が尋ねた。

答えを確信しているかのように言った。

「おいおい、本当に幽霊だって言うのかよ」

黙って成り行きを見守っていた棺が言う。

信じられないとでも言いたげに。

「違います。霊的な存在に近いですけど、霊媒体質なんかでもない私達にも見えると言うことはやはり、別物…」

『見えない』と言うことは『いない』と言うことではないが、『認識はされない』と言うこと。

幽霊は存在するのかもしれないが、棺や衣に見えないのでは意味がない。

誰にも触れられず、見えない存在になっても、何の意味も無いのだ。

「そう、例えば、『幽体離脱』と言う霊能力がありますよね」

幽体離脱。

肉体から魂が離れる現象、もしくは力。

それによって肉体から離れた魂だけの存在なら説明がつく。

「どうです？　採点は？」

衣が黙って聞いていた由来を見て言う。

「…おしい、七十点だよ」

由来が言った。

同時に『何も見えていない』のに、衣達は何故か何かの前兆が見えた気がした。

「何が…」

何も目から情報は入って来ないのに、本能的なもので何かを感じ取る衣達。

グニャリと景色が歪んだようにも、ぐるぐると回るようにも衣達には見えた。

実際の景色の『色』の変化は由来の回りに白い煙のようなものが出現した程度だと言うのに…

「…う」

ようやく、視界と頭が元に戻り、衣達が由来の方を向いた。

「これが解答だよ」

由来は短く言った。

由来の周囲には由来の全く同じ姿形をした『存在』が存在していた。

「オレの力の名は『重複所在（バイロケーション）』だよ」

由来は特に自慢する訳でも無く、間違えられた名前を正すような感じで言った。

「分身…した？」

棺が呆然とした顔で言う。

「分身と言うのはやや語弊がある。眼通力と言う言葉を知っているかい？　透視の遠隔透視（クレヤボヤンスモート・ビューイング）…うーん、『千里眼』と言った方が分かりやすいかな？」

「どういう意味だ？」

言葉の意味が分からず、棺が由来に聞く。

「つまり、『重複所在』は分身よりもそれで『見る』ことの方がメインな力なんだよ」

「？」

それでも理解が追い付かない棺。

「だから…」

少し呆れたように由来は言った。

「この町の全てを見て、計画の邪魔になりそうな者の足止めくらいなら簡単に出来るってこと」

第二十八話　便利屋

「足止めだと？」

「あ、余計なことまで話したかも…」

棺の言葉に由来が言う。

言葉の割りに特に気にしてはいないようだ。

ピピピピピ…とその時、衣の携帯電話が鳴った。

「兄さん？」

相手が先程、切ったばかりの色雨であることを不思議に思いながら、衣が電話に出る。

『衣、　そっちの方は大丈夫かい？』

少し焦ったような口調で色雨が言う。

『桐羽由来と名乗る違法聖痕使いが支部に現れた。どうやら戦闘目的ではなかったようで、すぐに消えたが…そっちはどうだい？』

「えっ！」

衣は思わず、目の前で浮かび続ける複数の桐羽由来を見る。

「この場所にいるのが全てとは言っていないよ。オレの『重複所在（バイロケーション）』は町中にいる。この町にいる君達の仲間は全て『オレの視界に入っている』」

由来はつまらなそうに衣に告げた。

まるで、今更気づいたのか…とでも言いたげに。

由来の『重複所在（バイロケーション）』は千里眼のような力だ。

千里眼のように二つの目で遠距離と近距離を見通すのでは無く、自身の目とは別に遠距離に別の『目』を作って見通す力だ。

カメラとモニターで例えるなら、カメラで取った映像を巨大なモニターに映し出すのでは無く、複数のカメラとモニターを用意し、纏めて映し出しているのだ。

視界を広げるのでは無く、視点を増やす。

言わば、動いて話す監視カメラを複数同時に操ることが出来る。

「少し時間稼ぎをしなければいけなくてね。足止めさせてもらうよ」

由来は棺と衣に告げる。

恐らく、捜索していた色雨の部下も全て足止めされているのだろう。

「…兄さんからの電話が切れました。兄さんの所にもあなたの分身が？」

「その兄さんと言うのが、長髪で穏やかな容姿の男だと言うなら、イエスと答えるよ」

目を瞑り、共有している視界から読み取りながら由来が答える。

「…何が目的なんだ？」

「オレに目的は無い。オレは協力しているだけだよ」

棺の言葉に由来は簡潔に言い切る。

「旦那に目的がある。その為に足止めを任せられた。だから、足止めをしているだけ」

「なら、どうして、その旦那って奴に協力している。そんなに信頼している奴なのか？」

一瞬、棺の脳裏に孤独を恐れて、ある人物の役に立とうとしていた男が過る。

「いや、旦那とは少し前にあったばかり。少ないお金で雇われた、薄い関係」

それだけ危険なことをする程に協力する割りに、薄い関係と言う由来。

「訳わかんねえよ、ならどうしてだ？」

「オレは便利屋だから」

由来は簡潔に言った。

簡潔だが、桐羽由来と言う人間の行き方の全てを表していた。

「助力を求められればそれに答える。拒否するとか、拒絶するとか、そんなことは『知らない』」

「？」

言葉の意味が分からず、首を傾げる棺。

その時だった。

キィィィィンと、飛行機が飛び立つ時の高い音のような、人の悲鳴のような、気味の悪い音がした。

声とかそういうレベルでは無く、雷鳴のように町の端から端まで聞こえそうな音だった。

長く聞いていると発狂しそうな程の不快な音。

「一体…何ですか？」

「……」

「始まったようだね」

この場で由来だけは冷静に言う。

「まあ、オレは旦那が世界を征服しても、力を貸し続けるつもりだ

けど」

「今のところは順調のようじゃな。奴も、上手くやってくれたようじゃ」

ある建物の中で御開言伝が言う。

その周辺には虚ろな顔をした者が三人立っている。

「じゃが、ここからが肝要じゃ。この騒ぎでワシの居場所が捕まれては困る」

（その為にジャミングや、奴に錯乱させた訳じゃ）

そう考えながら、自分の書いた本を取り出す言伝。

そして、その中で最も自身が重要視している部分を読んだ。

「『人は神の傀儡であるべきだ』」

「棺、ここにいる桐羽由来は皆、空に浮いています」

「ああ」

「つまり、それは全て分身であり、浮かぶことの出来ない本体は別の場所にいると言うことです」

あくまで視点を増やすだけの聖痕使いである由来に、直接的な攻撃手段は無い。

故に、分身に任せてどこかへ隠れているのだろう。

「成る程。だが、どうするんだ？　そしたら、二人とも居場所が分からねえじゃねえか」

「それでも仕方ありません…棺、ここは私が食い止めますから、頼みます」

「格好いい台詞を言ってるが、ただ、オレに面倒臭い捜索を押し付けているだけじゃねえか？」

「早く！　時間がありませんよ！」

「…分かったよ。仕方がねえなぁ」

諦めたように言うと、棺は走り出した。

「…止めないんですか？」

「いや、ぶっちゃけ、ほとんど実体の無い『目』で、二人共足止めする自信が無いんだよ」

困ったような顔をしながら由来が言う。

広範囲に複数生み出すことが出来るようだが、そこまで戦闘力は無いようだ。

「そうですか…なら、好都合です」

「ん？」

「私があなたを足止めできるんですからね！」

両手に光る縄を生み出しながら衣が叫んだ。

それを鞭のようにしならせて虚空に浮かぶ由来を捕らえようとする。

「幽霊は捕らえられない。彼らは自由だ」

ゆったりとした動きで『由来達』はそれをかわした。

虚空で自在に動き回ることが出来る由来の分身にはそんなものは通用しない。

「捕らえようとは思ってませんよ」

「え？」

由来が疑問の声を上げた。

言葉の意味が分からなくて言った訳では無く、目の前の光景を見て、思わず呟いてしまった。

衣がいない。

「あなたを倒そうと思っているんです」

声に気づいた由来がそちらを向く。

衣がいた。

「今からあなたを『攻撃』します。手加減はいりませんよね？」

周囲に衣は看板やゴミ箱など、様々な物を浮かばせていた。

いや、よく見ると、浮いている訳では無く、光る縄によって吊り上げられているようだ。

「観念動力（サイコキネシス）の本質は『触れずに物を動かすこと』。これが本来の使い方です」

衣はほとんど手を動かさずに縄を操作しながら言う。

あの光る縄は衣の聖痕にとって、『延長した手足』に過ぎない。

その本質はそれによって物を操ること。

それは当然、ただ『手足』で殴るよりも強力だ。

「君の『延長した手足』とオレの『第三の目』…か。面白そうだね」

「すぐにその目を塞いであげますよ！」

第二十九話　戦闘

「クソッ、一体どこに居やがるんだ」

町を走り回り、息を荒げながら棺が叫ぶ。

そもそも、あてもなく町中を走り回って見つけることは無謀に近い。

大都市に比べれば、それほど広くは無い町とはいえ、一人の人間を見つけ出すのは簡単じゃない。

しかも、今の町は謎の不快音のせいで軽い混乱が起きており、いつもより人混みが多い。

「大体、オレはどこへ向かえばいいんだよ！　チクショウ」

どこかに隠れている由来の本体か、もしくはこの事態を起こしている言伝のところか…

いずれにしても、手掛かり一つない。

「…段々気分悪くなってきたぜ。このやたら不快な音が原因か？」

頭を押さえて立ち眩む棺。

やはり、この不快音は人体に何か悪影響を及ぼすもののようだ。

「…クソッ！」

そう棺は叫んだ後、再び走り出した。

「ハッ！」

光る縄を操り、衣が由来に向けて物を飛ばす。

しなった縄から放たれる様々な物は砲弾のような速度で由来を狙う。

空中で漂うだけの由来は、その全てをかわすことが出来ず、直撃する。

しかし、

「…いい加減無駄だと思わない？　君がさっき言っていた通り、ここにオレはいない。無駄な努力と言うやつじゃないか」

それは由来の身体をすり抜けた。

ここにいるのは『重複所在（バイロケーション）』。

幽霊にも近い、虚ろな存在達だ。

直接的な攻撃力は高くなさそうだが、それを打ち払うのは容易なこ

とではない。

「いいんですよ。ただの足止めですから。この間に棺があなたか、この事態を起こしている人間を捕縛すれば終わりですから」

「ふーん。それで？　じゃあ隠し持っているその武器は使わないつもり？」

「！」

（聖痕装置の存在に気付かれましたか！）

懐を思わず押さえながら衣が驚愕する。

「オレの『重複所在』は透視の亜種だからね。通常の『隠されている物を見透かす目』である透視を使うことも出来るのさ。君が物を動かすだけでなく、延長した手足で敵を縛れるのと同じようにね」

「成る程、文字通り貴方の前では私は丸裸も同然と言うことですか…」

「そうそう…あー、オレに性欲とかそういうものは無いから安心して、やらしいことなんかしないから」

脆く儚過ぎる笑みを浮かべながら由来は言う。

「……前々から思っていたのですが、どうして貴方はそこまで人間味が無いのですか？」

衣は由来に出会った時から感じていた疑問を言う。

「誰かの為に生きている…と言うより、受動的にしか生きられないと言った感じですか」

「……」

「…自分の為に生きられない人間は『人間としておかしい』。だから、貴方には人間味が無い。どうして、そのような…」

「ハハ。なら、君の場合はどうなるんだい？　江枕衣さん？」

「え？」

「オレは自己分析は苦手だけど、人間観察は得意でね…君がどういう人間が分かってきた」

相変わらず、人間味の無い儚い笑みを浮かべながら由来は言う。

「君は他人を助ける為に自分を犠牲にすることに何の躊躇いも無い。それは人間らしいと言えるのかな？」

「な…」

「自己犠牲の君と、自己の無いオレ、どこが違う？　他者を優先すると言う意味では何の違いも無い」

「違います！　私は犯罪者に手を貸したりは絶対にしません！」

「犯罪者に手を貸してはいけないのか？　イエス・キリストは救いを求める者は誰であろうと手を差し伸べたらしいよ？」

誰であろうと力を貸す。

善人であろうと、悪人であろうと、助力を求められれば力を貸す。

その由来の生き方は、救いの手を求める者を救うキリストに似ていた。

「慈悲と共犯は違います！　悪人は正しい道に正すことが情けです！」

「…その悪人が本当に悪人かどうかなんて人間に判断できるのかな？　まあ、いいよ。別にオレは人を救っている…なんて聖人みたいなことは言わない」

由来は言い切った。

由来は別に誰かを救いたい訳でも、誰かを救う自己満足を得たい訳でも無い。

「『誰かに力を貸す』……それだけだよ。ただ、それだけなんだよ」

自分を奴隷と称した由来はそう言った。

薄暗い建物の中で御開言伝は佇む。

その手には自分の記した本を持ち、中身を読み、自分の教えを再確認していた。

「……」

（計画の全ては順調に進んでいる。これで…）

「ようやく見つけた、廃墟を教会にするなんて、何て新興宗教だ」

言伝のいる建物の入り口に若い男が入ってきた。

男にしては長いストレートの髪に、人畜無害な穏やかな顔の男。

江枕色雨だった。

「初対面…では無いね。この本を受け取ったし」

「…どうしてこの場所が分かった？」

静かに言伝が聞く。

特に焦った様子は無く、疑問に思ったことを口に出しただけのようだ。

「探知機…違法聖痕使いである貴方は既に知っているよね？」

「ああ、知っているとも。じゃから、ジャミングをかけていた。今は解いたが、代わりに桐羽由来が撹乱しているはずじゃ」

登録していない聖痕の反応を全て表示する探知機は、由来の『重複所在』の全てに反応してしまい、使い物にならなくなっていた。

雇われた由来とは違い、言伝は予め、隙間の神について調べ上げて、探知機の存在も妨害する方法も知っていた。

「桐羽由来を先に捕まえる必要は無い。貴方さえ捕まえれば終わる」

「質問に答えろ。どうやってワシの居場所を…」

「簡単なことだよ、桐羽由来の聖痕を登録した。そうすれば、残るのは貴方一人だよ」

例え百人に増えようと、由来本人は一人。

聖痕も全て同質。

「フン、そういうことか。じゃが、一人で来たのは間違いじゃったな」

言伝が周囲の人間に合図をする。

その合図に反応して、表情の無い、人形のような人間が色雨に近づく。

「…洗脳か。残酷なことをするね」

「説き正しただけじゃ。『心を入れ換えた』とも言えるな」

言伝は当然のように言う。

神の教えの為に従順で狂信的で、正に『傀儡』。

心などは無く、教えに忠実な人形。

敵対する組織の中で厄介なのは、金で集まった傭兵では無く、狂信で集まった宗教団体だ。

傭兵は戦いに恐怖は感じないが、死に対しては保身になる。

しかし、狂信者にはそれが無い。

死後の世界が約束されていると信じていれば、自害すらも救いと信じる。

洗脳された狂信者程、厄介な敵はいない。

「そのまま大人しくしているがいい。ワシの教えを聞けば、いずれ改心することだろう」

洗脳された信者の前に黙り込んだ色雨に言伝は静かに告げた。

洗脳された人間の戦力に期待しているのでは無く、その人間を色雨が攻撃出来ないと確信していることからの余裕だ。

「…確かに、私は操られた人を攻撃する程、残酷なことは出来ない」

立ち塞がる者に悲しげな目を向けながら色雨は言う。

「しかし、隙間の神をただの戦闘集団と思わないことだね」

バチッと強烈な光が薄暗い建物の全てを照らした。

色雨の聖痕装置『ウリエル』から放たれた光だ。

攻撃の為では無く、威力を最小限まで抑えて、目眩ましの為の光のみを放った。

「…無駄なことを」

目を眩ませたのは僅かな間だけ、すぐに言伝は洗脳された信者を…

「…何」

操ろうとして、色雨の横に立つ少女に気づいた。

手にシャーペンと手帳を持った記者風な高校生くらいの少女だ。

「操ろうとしても無駄だ。洗脳なら、筆者が全て『書き換えた』」

少女は言う。

周囲には先程まで人形のようだった信者達が穏やかに眠っていた。

「お前などにあったことなど忘れさせて、穏やかで平凡な記憶（ストーリー）を上書きしておいた」

「精神系の力を…」

忌々しそうに舌打ちをする言伝。

「もういいだろう？」

それを遮るように色雨が穏やかに言った。

「可愛い妹が心配なんだ。早々に捕らえて帰らせてもらうよ」

ステッキのような武器『ウリエル』を言伝に向けながら色雨は言った。

第三十話　神の導き

「一般人を洗脳してまで盾にすることから、貴方は直接的な戦闘は苦手と見た。素直に捕まることをお勧めするよ」

「フン、本来『神の祝福』をそのようなことに使う方が間違っている」

「なら、他人を洗脳して、自分の思い通りに操ることは正しいと？世界征服でもするつもりかい？」

色雨が言伝に言う。

聖痕を得て、気の大きくなった違法聖痕使いの中には世界を支配するだとか、世界を滅ぼすだとか言い出す者もいる。

言伝がその類いの人間だと色雨は判断したのだろう。

「ハッ、世界征服だと？　そんなものに興味はない」

色雨の予想とは裏腹に言伝はそれを否定した。

「ワシが欲しいのは『統一』だけじゃ」

「……」

「かつて、人間は一つの言葉を使い、争いも無く、団結して天まで伸びる塔を築こうとした。しかし、それが神の逆鱗に触れ、天罰と

して全ての人間の言葉はバラバラになってしまった」

言伝は教えを語るかのように静かに言う。

「バベルの塔の話だ。それ以降、人は団結して何かを成すことが出来なくなり、争いは無くならなくなった…ならば、再び『統一』すれば、争いは無くなるのではないか？」

「…統一」

「…価値観の違い、言語の違い、宗教の違い、様々な違いが人を団結させない。じゃが、一つの教えに全て統一すれば、例えば『神の教えを忠実に守る傀儡』に世界中の人間がなれば、世界は平和になるとは…思わないか？」

「……」

御開言伝は世界征服がしたい訳でも、世界を滅ぼしたい訳でもない。

世界を平和にしたい。

そんな誰でも思うようなことを自分なりに成し遂げようとしているだけだった。

だが、

「尚更、貴方を捕まえなければならなくなった…」

「何？」

「ただの悪党なら、閉じ込めておけばいい。だけど、貴方のような間違った正義は正さなければならない」

色雨はウリエルを握り締めながら言う。

心境の変化があり、腑抜けたなどと言われることもあったが、色雨は自分なりの正義を持ち、隙間の神に入った人間。

道を踏み外した正義は正さなければならない。

「正義だ、悪だと論ずるつもりは無い。この町の人間を洗脳し、いずれ世界中の人間を洗脳することが強引な方法である自覚もある。じゃが、平和を作るとはこういうことじゃ」

「……」

色雨はウリエルを素早く構えて、炎を放つ。

通常の炎を扱う聖痕使いをモデルにした聖痕装置から放たれた炎は勢いよく、言伝へ向かっていき…

言伝の右側にあった机に衝突した。

「…？」

（外した？）

首を傾げながら色雨がもう一度炎を放つ。

しかし、炎は再び言伝には当たらず、今度は左にそれてしまった。

「不可解か？　自分の力が当たらぬことが」

「貴方の力か…」

「その通り、ワシが神から受託した祝福は『言葉を相手に伝える力』だ」

（…『意志送信（テレパシー）』タイプの聖痕）

色雨は薄々気付いていた言伝の聖痕を確信する。

意志送信（テレパシー）。

他人に自分の意志を送信する力。

意志受信（サイコメトリー）とは違い、人の心を読み取ることは出来ない、自分の意志を送ることに特化した力。

精神系の聖痕とは言え、それほど強力とは思えないポピュラーな力だが…

「祝福の名称は『精神工学（サイコトロニクス）』。本質は『他者との共感』。ワシの意志、思想を他の迷える子羊に道しるべとして送ることが出来る」

「……」

色雨は絶句した。

精神工学（サイコトロニクス）。

直接的な破壊力は無いが、炎を放つなどの聖痕より、よっぽど強力で凶悪だ。

強制的な共感。

言伝の意志を送信された者はそれを自分の意志と誤認してしまう。

それは恐ろしいことだ、自分の意志をねじ曲げられるのだから…

どうやら、色々と準備や条件が必要なようだが、それでも危険なことには代わり無い。

精神タイプの聖痕の中ではトップクラスの聖痕かもしれない。

「ワシの『精神工学（サイコトロニクス）』は精神を自在に操る力では無く、ワシの意志、思想、『価値観』と『共感』させる導きの力だ」

あくまで共感させるだけ。

ただ、神の導きに忠実になるだけ。

御開言伝の傀儡になるのでは無く、神の傀儡になる。

自分の利益は考えず、全ては神の、世界の為に…

「…やはり貴方は行き場を間違えた正義だね」

「なら止めて見ろ。口先だけでは、綺麗事だけでは、平和は生み出せないと言うことを教えてやろう」

「……」

再び、色雨はウリエルを構える。

（恐らく、先程のはジャミングと同じ、共感の強制による『混線』）

ウリエルから炎を放ち、対象に当てる。

その為に必要な集中力や精神力を乱す。

それだけでウリエルの狙いは逸れてしまう。

（…ならば、乱す隙を与えない！）

バァン！と破裂音、爆発音が響く。

一度では無く、マシンガンのように連続して響く。

「チッ！」

乱すだけでは防げなくなったのか、舌打ちをして、言伝が炎弾をかわす。

しかし、意志の強さは強靭でも、所詮はただの老衰した老人に過ぎない言伝がそう長くかわしていられる訳がない。

「グッ！」

決着はあっさりと着いた。

一撃被弾しただけで、言伝は動けなくなり、地面に倒れた。

「ク、クソ…」

「…この町に行っている洗脳を解除するなら、これ以上の攻撃は加えない」

「は、ハハハ。我ながら無様だ。長々と語っておきながら、この程度とは…」

言伝は自分を嘲るように笑い始めた。

理想だけ高い、神に憧れるだけで何も成長しない自分を恥じるように…

「……」

「まあ、そんなことを言うなよ旦那。オレが味方になってあげるからさ」

唐突にそんな声がした。

「「なっ！」」

色雨と揺祇が驚きの声を上げる。

言伝に集中していた色雨はともかく、それを見守っていた揺祇すらもその存在に気付かなかった。

存在感、現実感が無い人間らしくない人間。

白い眼帯に灰色に近い色素の薄い黒髪。

女にも見える童顔、華奢な色白の身体。

桐羽由来。

現在、この町の全ての隙間の神を『一人』で足止めしている者。

「お前…本体か」

「ああ、旦那のピンチなのに分身だけが駆けつけたんじゃあ、誠意が無いかな、と思ってさ」

「フン」

ふざけた調子の由来に言伝は鼻を鳴らす。

「さて、オレは何をすればいいかな旦那？」

「倒す必要はない、足止めをしろ。どのみち、もうじき全て終わる」

言伝は由来にそういい、薄く笑った。

第三十一話　ＶＳ霊能者２

「…おや？」

「？」

衣を足止めしていた由来の分身が動きを止めた。

衣はそれに首を傾げる。

「我らが本体様が、何故か前線に出ているな…日光が苦手だったはずなのに大丈夫か？」

他人事のように自分のことを言う由来（分身）。

記憶と視界は共有しているようだが、不思議なことは不思議だと思うのだ。

「…珍しく張り切っているようだ…そろそろ合流するかな」

「待っ…！」

「大丈夫だよ。君がオレに追い付く頃には全部終わった後だと思うから」

慌てて捕まえようと衣は縄を伸ばしたが、分身のいた位置に届く頃には既に分身は姿を消していた。

「……」

現実感の無い、

人間味の無い、

儚くて脆くて虚ろな煙や幻のような少年。

（この少年が、本物の桐羽由来…）

分身と瓜二つであり、その分身以上に虚ろな雰囲気を持つ少年だ。

「…拘束させてもらうよ。これ以上、町を危険に晒す訳にはいかない」

ウリエルを握り締めて色雨が決意するように言う。

「そればかりだな。流石に飽きた」

由来のその言葉が終わった瞬間、色雨はウリエルを素早く由来に向けた。

「ッ！」

だが、炎弾はウリエルから放たれなかった。

いや、それだけではない。

突然、色雨は身動きが完全に出来なくなった。

「…何をしたんだ？」

「不思議そうな顔をしているな。まあ、聞かれたからには素直に答えよう。何てことはないさ、ポピュラーな心霊現象だよ」

手品の種を明かすように由来は言う。

「『金縛り』さ。科学的には睡眠中に起きたりするらしいけど、まあ、それの非科学バージョンだよ。ちなみに、そちらの女の子も、身動き出来なくしといたからね」

「……」

よく見ると、色雨の身体には白い煙のようなものが纏わりついていた。

実体か幽体かを曖昧にした『重複所在（バイロケーション）』だろう。

「…私には君と言う人間が理解出来ない。確固たる目的もなく、何故こんなことが出来る？　良心が痛まないのか？」

色雨は静かに由来に言う。

それは説得と言うよりは、疑問を尋ねるような言い方だった。

「理解が出来なくて当然だと思うよ…そうだな、例えるなら…オレは『零』なんだよ。正でも負でも無い、ただの零」

「……」

「邪心と良心が無いんだ。零（カラッポ）だから、悪行も善行も自主的にはしないし、することに躊躇いも無い」

由来は零と自分を例えた。

色雨はそんな人間がいる訳が無いと否定したかったが納得した部分もあった。

儚くて脆くて虚ろな人間らしくない雰囲気。

あれは中身が空っぽで人間として必要なものがほとんど無かったから、そう思わず感じてしまったのでは無いだろうか…

空っぽで空洞。

邪心と良心が無く、そもそも心が無いかもしれない。

それは虚ろな幽霊によく似た少年だった。

「分かってもらえた？　説得なんか出来ないんだよ。説得は無駄、理解は不能」

何を考えて、何をして生きているのか、まるで分からない少年だ。

ただ、一つだけ言えることは由来は言伝に手を貸しており、何が起ころうと、それを自分からやめることは無いと言うこと。

破壊力を持っている訳では無いが、掴み所の無い、その力と人格は脅威だ。

時間を稼ぐ、広い範囲で監視をする、と言う点では、どんな聖痕よりも優れているだろう。

広範囲を遠隔透視し、実体化も出来る分身を自在に生み出す力。

「…！」

それ故に、由来が最初に気付いた。

「？」

色雨が表情が変わった由来に首を傾げる。

今まで一度も出さなかった困惑したような、驚愕したような表情。

まるで、

「…よう、白いの。やっと見つけたぜ」

いないはずの存在を見たような、幽霊でも見たような表情だった。

「…棺。どうして、この場所が分かった？」

「ハッ、これだけザーザーとうるせえんだ、大体の場所は

分かる…ま、見つけるのには手間取ったけどな」

神無棺は忌々しそうに耳を抑えながら言った。

「……」

（薄々だけど、旦那の力を感じ取った？　いや、そんなことは…）

由来は眼帯のついていない方の目で棺を見つめる。

「弱い者いじめは好きじゃねえが、これだけ、好き勝手やってくれたんだ…別に報復されても、文句はねえよな！」

「…ッ」

棺は薄暗い建物中に響く程の声で叫ぶと、由来に向かって走り出した。

由来もそれを見て、思考を止め、色雨達と同様に『金縛り』に遭わせようと、力を使う。

しかし、

「ッ！…ウラァ！」

「！」

一瞬だけ足を止めただけであり、すぐに棺は再び走り出した。

由来の言う『金縛り』とは実際の金縛りに似た現象を由来の力で起こすことだ。

簡単に言えば、ほとんど重さの無い、分身のなり損ないのようなものを敵に纏わりつかせ、動きを鈍らせることだ。

幽霊に取り憑かれた人間が体調を崩したりするように『精神的な重圧（プレッシャー）』を浴びせる。

だが、由来は知らなかったが棺には『重さを消し去る聖痕』が宿っている。

具体的にどんなもので、限界はどれくらいなのかは棺自身も分かっていないが、どうやら、無効化出来る『重さ』には精神的な重圧も含まれるようだ。

金縛りを全て無効化した棺が由来に迫る。

距離を詰めれば由来はそれまでだ。

今回は本体であり、逃げることは出来ず、その華奢な身体では喧嘩慣れした棺の攻撃は到底かわすことは出来ないだろう。

棺は拳を振りかぶる。

「…クッ！」

由来は辛うじてそれをかわした。

棺はかわされたことに少し驚いたが、気にせずもう一度拳を振りかぶる。

「何？」

由来はそれをもう一度かわした。

おかしい、と棺は思った。

誰にでも勝てるとは思っていないが、ある程度の不良なら一撃二撃で仕留める自信がある程に喧嘩慣れした棺だ。

流石に棺の目の前の由来が喧嘩慣れしているようには思えない。

むしろ、力の性質上、本人は安全な場所にいて、直接的な争いは初めてのような雰囲気でもある。

「…重複所在の本質は分身を生み出すことでは無く、『違う視点でモノを見ること』だよ」

由来が呟いた。

「分身はあくまで備品に過ぎない。その真価は透視、『目』さ」

「……」

棺が辺りを見回すと、建物内に寒気のする不気味な気配が幾つもあった。

「草食動物の目は側面についているから、視界は広いけど、距離は掴みにくい、逆に肉食動物の目は距離は掴みやすいけど、視界はそれほどでもない…」

由来は淡々と語る。

「動物の目が何故二つもついているかは知ってる？　それは片目では視界は狭くなり、距離も掴めなくなるからさ」

「何の話だ？」

「よって、その結論を出すとね」

棺の言葉は聞こえていないかのように由来は言う。

「『目は多ければ多い程、便利なんだよ』」

ゾワッと何とも言えない気持ち悪さが棺を襲った。

『見られている』

「……」

再び周囲を見渡すとさっき見た時には無いモノが存在した。

『目』だ。

十、二十…いや、百も軽く越えてしまう程の眼球が気味悪く浮き、由来を見つめている。

「視界は共有している…君の動きは初動から、前兆から全てお見通しさ」

「悪趣味な奴…子供が見たらトラウマ確定だぜ？」

「大丈夫、人前で使ったのは今日が初めてだよ」

ギョロギョロと動く眼球を見ながら由来が言う。

「そうかい、だが、あんまり見てるとオレも夢に出てきそうなんで、さっさと、消してもらうぜ！」

棺が再び由来に向かい、拳を振りかぶる。

今回は一度や二度で休めずに当たるまで棺は連続して続ける。

「……」

それを見抜いた由来はかわし続ける。

決して、反撃はしない。

由来の目的はあくまで言伝の為の時間稼ぎ。

撃退する必要は無い。

「チッ！」

棺は床を蹴り、由来の背後に回る。

由来が振り返る隙を与えずにすぐに拳を振りかぶる。

しかし、あっさりと由来にはかわされた。

当然だった。

由来に死角は無い。

周囲の気味の悪い眼球が棺を常に見つめている。

「くそっ！」

棺は近くに落ちていた古びた椅子を思い切り蹴り飛ばした。

相当脆かったのか、椅子は砕けて、木片が浮かぶ。

「視界を覆おうと思っても無駄だよ。オレの目は透視も出来るんだ」

「そんなつもりはねえよ。ただ、イラついて八つ当たりしただけだ」

再び走り出す棺。

（一撃だ。あれだけ弱々しい体格をしているんだ、オレなら一撃で確実に意識を絶てる）

そう考えるが、その一撃が難しい。

全方位、建物全てを見渡す視界を持つ由来に攻撃を当てるのは至難の業だ。

再び愚直に棺は拳を振り続ける。

だが、やはりその全ては回避される。

「オレに君を倒す力は無いけど、君もオレを倒すことは出来ない」

「うるせえ！」

由来が挑発するようにそう言い、棺が叫ぶ。

「それなら……ッ！」

突然、由来が棺が拳を振りかぶる前に何故か回避行動を取った。

棺がそれに首を傾げようとした時、

バァン！　と爆弾が爆発したかのような破裂音が辺りに響いた。

「な…」

由来が先程までいた場所を炎弾が炭にする。

「金縛りは解けた。援護するよ、棺！」

江枕色雨がウリエルを構えて言う。

「了解！」

棺が叫び、由来に向かう。

「クッ…」

棺が拳を振りかぶるのに合わせて回避行動を取ろうとする由来。

しかし、色雨が合わせて炎弾を放つ。

由来はそれを完全に見切り完全にかわした。

だが、

「ウラァ！」

目の前には拳を振りかぶる棺がいた。

由来はそれも見切った、完全にかわす動作も頭に浮かんでいた。

先程までなら余裕でかわしていたであろう一撃。

しかし、色雨の攻撃をかわしたばかりの体制ではかわすことが出来ない。

目で見えていても身体が追い付かなかった。

ゴッ！　と鈍い音を発て、由来は飛んだ。

第三十二話　監獄にて

「うっしゃー、今日から三連休だぜー」

「なら、三人でどこか遊びに行くであるか？」

「あ、それなら、私は前に言っていたカラオケ…と言う所に行きたいです」

「お前、カラオケが何か分かってるのか？」

祝日を含む三連休の初日、待ち合わせをした棺とレイヴと衣が談笑しながら道を歩いていた。

霊能者達との一件は全て解決し、後のことは色雨達に任せて棺は再び日常へ戻ってきた。

霊能者達が何を考えてあんな行動に出たのか、まだ分からない点はいくつかあったが、それは棺の関わることではない。

敵対するから、撃退しているだけで、敵も味方も救う正義の味方になるつもりは無いのだから…

「…神無棺」

「うおぁ！」

考え事をしていた時、いきなり背後から声をかけられて棺は飛び上

がった。

聞き覚えのある声に気づいて振り返ると、

「……」

目の下に濃い隈を作った落河揺祇がフラフラしながら立っていた。

「お、おい、どうした？」

尋常じゃない様子に棺は心配して声をかける。

「…この町の人間の記憶操作をしているのは誰だと思っている」

ボソボソとした声で恨み言のように揺祇が言う。

そうなのだ、この町の担当の記憶操作の隙間の神は揺祇一人。

記憶操作系は希少な為に、さほど大きくも無い町には一人ぐらいしか派遣されない訳だが、流石に今回は仕事が多すぎた。

町の人間のほぼ全員だ。

記憶を残していても大丈夫そうな人間は除いたとしても多すぎる。

結果。

「徹夜三日目だ。今にも倒れそう…いや、むしろ倒れたい、倒れて寝たい」

末期だった。

「あー…応援してるぜ」

苦笑しながら棺が言う。

「…次に事件があったら出来るだけ迅速に解決して、筆者の仕事を増やさないでくれ」

そう伝えると、またフラフラとしながら揺祇は去っていった。

「…衣」

「何ですか？」

「あいつ、また休学したりしないよな？」

「…どうでしょう？」

二人はそう言い、ため息をついた。

「…暇だな」

桐羽由来は呟いた。

狭い部屋。

家具は机と椅子に、固いベッドだけ。

小さな窓と、鉄格子…などでは無く、小さいが、頑丈そうな扉。

「……」

桐羽由来は隙間の神、特別収容所にいた。

そこは監獄のような場所であり、隔離施設だ。

違法聖痕使いの中で更生する可能性が無い、もしくは聖痕を秘匿する気が無い者を隔離する収容所だ。

言わば、監禁である為、そう簡単には見つからない場所に存在するらしいが、ここの担当である『大天使（アルヒアンゲロイ）』と言う部隊に所属する人間以外は隙間の神でさえ、知らない者が多い。

極悪な違法聖痕使いの存在そのものを秘匿する極秘、隔離施設。

それが隙間の神、特別収容所だ。

そこに収容された者は、一部の例外を除いて永久的に収容される。

故に、そこは違法聖痕使いにとっては刑務所よりも恐れられている場所で、地獄と称されることもある。

あるのだが…

「…暇だな。ねえ、何か話してよ」

「……」

由来が閉じ込められている部屋の前に座っている女に声をかける。

どこかの国の軍服を学ラン風に改造した、戦闘用と言うよりはコスプレのように着て楽しむ実用的じゃない服を着た女だった。

女はパイプ椅子に座り、小説を読んでいる。

「オレさ、一人で話すのは苦手なんだよ。誰かと自己が薄いから会話も自分が楽しむと言うよりは他人を楽しませる為にすると言うか…ね？　分からないこの気持ち？　分からないかな？旦那なら何て言うだろ？　例えるなら、興味の無い会話を相手に合わせて話しているような…」

「えーい、うるさーい！　囚人はもっと静かに、自分のしてきたことを悔いるものであります！」

長々と喋り続ける由来に、いい加減頭に来たのか、女が叫ぶ。

女の名は様土皆代（サマツチ　ミナヨ）。

色雨とも面識のある、若い隙間の神の一員だ。

隙間の神として任されている仕事は囚人の様子を観察すること。

監視もそうだが、観察し、更生の色が見え始めたら、条件付きで解

放することもある。

だが、実際はこんなところに閉じ込められた時点で極悪人であり、ただ、恨み言を聞き流すことだけが皆代の仕事だった。

そう、この変な囚人がやって来るまでは…

女顔で童顔で華奢な身体、眼帯に白い肌に色素の薄い灰色の髪。

最初はこんな若い歳でどうしてここに来たのかと皆代は疑問に思ったが、しばらく観察して、すぐに理由に気づいた。

この男は人間としてどこかがおかしい。

「後悔はしないよ、それよりは貴女みたいな人と話す方が有意義だ。カミングアウトすると、オレ、年上好きなんだ。オレは十九歳、お姉さんは幾つですか？」

「……二十歳であります。ですが、女性にいきなり歳を尋ねる人と恋仲になるつもりはないであります」

「厳しいな…」

無表情の割にやたら嬉しそうな声を上げる由来。

表情や感情表現に乏しいが会話好きらしい。

「そういえば、今日は妙に騒がしくない？　何かあったのか？」

「どうしてそれを…ああ、あなたは透視が出来るのでありましたね」

「ま、捕まった時にイロイロされちゃって、今じゃ、『目』の一つも生み出せないけどね」

「……」

「ね、教えてよ。何があったの？」

興味を持っていると言うよりは、会話の話題にする為に由来が聞く。

「…大したことではないであります。また、反逆者が出ただけであります」

「反逆者？」

「何を考えているのだか、しかも逃げられてしまったようであります」

「成る程…それで騒がしかったのか」

「興味は無くなったでありますな？　なら、静かにしているのであります」

「うーん…」

皆代に言われて素直に黙り混む由来。

しかし、無表情ながら、どこか不満げで退屈そうに見える。

「…はぁ、まあこれも看守の仕事の内でありますか」

皆代がため息をつきながら言う。

「？」

「暇なら会話の相手を務めてあげるのであります」

渋々と言った様子で皆代が由来に言う。

割と他人には甘い性格のようだ。

「でも、私もあまり話上手では無いでありますから、聞き手のみでありますよ」

「了解。それで、どんな話に興味があるかな？」

話すからには相手の退屈しない話をしようと、皆代に聞く由来。

「そうでありますね…取り調べがてらあなたの身の上話を聞くのもいいかもしれないであります」

ふと、由来についての情報が何一つ無かったことを思い出して皆代が言う。

違法聖痕使いだって、表の世界の顔を持っている。

世界的にも有名な人物だったり、ごく普通の人間で、裏でだけ犯罪を犯していたりと様々だ。

だが、由来には表の顔と呼べるものがなかった。

戸籍などは存在せず、どこで生まれたのかすらも分かってはいなかった。

『便利屋』と言う金を払われれば何でもする何でも屋をして金を稼いでいたことしか分かっていない。

その便利屋も不思議なことに少額の金しか取らず、ほとんどボランティアのような感じで、御開言伝のような手段を選ばなくなった人間に力を貸していた。

ボランティアと言うと聞こえはいいかもしれないが、こんな人間を利用するのは大抵が悪人。

言わば、悪事の片棒を担ぐことをしているだけだ。

何を考えてこんなことを始めたのか、皆代は好奇心から気になっていた。

しかし、当の本人は…

「面白く無いと思うけど…聞きたい？」

話したくなさそう…と言う訳でも無いが、少なくとも進んで話すようなことでは無いと由来は思っているようだった。

「聞きたい」

その様子にますます好奇心が湧いたのか、皆代が即答する。

表情に乏しいくせによく喋る由来が消極的なことが気になったのだろう。

「なら、話そうか。頼まれたら断らないのがオレだからね」

そういい、由来は薄く笑った後、語りだした。

第三十二話　監獄にて（後書き）

おまけ

定食屋にて

衣「ここがカラオケですか？」

棺「違う、ここはただの定食屋だ」

レ「遊ぶ前に昼食を取ろうと思ったのであるよ」

衣「なるほど。これがメニューですね」

棺「ああ、流石にそれくらいは知っているよな？」

衣「失礼ですね！　ここではないですけど、定食屋は行ったことあります！」

棺「そうか。で、何にするか決まったか？」

衣「えーと、洋風定食……いや、和風定食…うーん」

棺「……お子さまランチにでもしておけよ」

衣「聞こえてますよ！　流石にそこまで小さくないですよ！」

棺「分かった、分かった。じゃあ、オレはＡランチでいいや」

衣「あ、じゃあ私もそれでお願いします。レイヴさんは何にします？」

レ「……」

棺「さっきからずっとメニュー見てるが、まだ決まらないのか？」

レ「……」

棺「……お前、まさか」

レ「……漢字が読めない。一番上から読み上げてくれである」

棺「……はぁ」

第三十三話　ある霊能者の話（前書き）

例えば、誰かの都合のいい道具になるように育てられた人間がいたとする

彼は何も知らない、幸福も不幸も欲望も邪心も良心も保身も…誰かの役に立つこと以外、何も知らない。

故に他人がどれだけ傷つこうと、自身がどれだけ傷つこうと、気にせず、誰かの役に立つことが出来た

だが、人間味さえも失ってしまった彼はその『誰か』にさえ、必要とされなくなってしまった。

フランケンシュタインと言う名の科学者は死体から化け物を生み出したが、それに恐怖して捨てた。

それを生み出した親でありながら、拒絶した。

望まれて生み出されたはずなのに、『居場所』を用意してもらえなかった。

ならば、彼はどこへ行けばいい

生みの親にさえ、居場所を貰えなかった彼の居場所はどこにある。

彼は、どこへ行けばいい。

第三十三話　ある霊能者の話

ある所に『里』があった。

この科学の発達した日本の山の中にひっそりと隠れ住む人里があった。

誰も知らないその里に住む一族は、外の世界に興味は無く、ただ自分達の信じている世界が無事ならそれでよかった。

その里は『霊能者』の里だった。

幽霊に近い力を代々持っていた里の者は、時に悪霊として封印し、時に神霊として崇拝し、幽霊と共に生きてきた。

しかし、里の全ての人間が特別な力を持っている訳では無い。

むしろ、そんな力を持っているのはごく一部だけで、この里にいながら、幽霊を見ることすら出来ない者もいた。

力を得ても、一時的なものに過ぎず、数年と経たずに霧散してしまう者もたまにいた。

故に里は自分達の『象徴』となるべき霊能者を欲していた。

ある時、象徴となる霊能者を選び出すことになった。

才能ある霊能者を集め、誰か一人を決める為に様々なことをさせられた。

一人で悪霊退治、餓死寸前までの断食など、拷問に近いことをさせられた。

霊能者だって人間だ。

苦しいことは苦しいし、辛いことは辛い。

霊能者達は既に限界を迎えていた。

そんなある日、その中の一人の霊能者が象徴に『立候補』した。

何を考えて立候補したのかはその霊能者にしか分からない。

だが、それによって他の霊能者が救われたのは間違いではなかった。

その霊能者の名前は『桐羽由来』。

誰かの為に行ったその行為によって、

彼は里の象徴（道具）として生きていくこととなる。

「悪霊が現れた。またお前を使う」

食料を届けてくれる無口な担当者以外の人間が数ヶ月ぶりにここへ訪れた。

古びた鉄格子と岩の壁で囲まれた狭い空間。

洞窟の中に作っている為か日当たりが悪くてしょうがない。

お陰で自慢の黒髪が日光不足で灰色っぽくなっちゃったよ。

肌も自分でも気持ち悪いくらい白いし、最近では左目がなんかおかしい。

日光が目に染みるって言うか…眼帯でも付けさせてもらおうかな…

「おい、桐羽由来！　聞いているのか！　お前の出番だと言っているだろう！」

ああ、そうだった。

寝過ぎて頭が鈍くなっていたようだ。

「了解。場所は？」

言いながら身体を起こす。

痛たた…しばらく座ったままだったから全身が痛い。

「ついてこい」

素っ気なく、数ヶ月ぶりの来訪者はいい、手早く鍵を開ける。

さてと、では行くか…

こうして今日も、オレは道具として使われた。

何と言ったかな…

そうそう、どうやら霊能者の力を霧散させる要因は外的な刺激にあるらしい。

だから、里の象徴となるオレは外的な刺激を受けないように隔離されている。

まあ、別に、不満は無い。

里の為に、誰かの為に何かをするのはそれなりに気分が良いし…

何より『オレにしか出来ない』ってのがいい。

何と言うか、こんなオレでも『誰かに必要とされている』って言うのがすごく気分が良い。

そう考えて生きてきた。

数年が経った。

相変わらず、この牢獄にオレはいた。

寝心地は最悪だが、霊能者の力には最適らしく、力は年々、増大していった。

それは中々、嬉しいことであり、力の具合を確かめることはオレの日課となっていた。

まずは透視。

次に遠隔透視。

その次に悪霊に触れられる自分の分身。

その次にその分身の数が増える。

そして、ある程度の範囲なら自分の視界に入らない場所でも分身を作れる程度に力が増大したところで…

オレの処分が決まった。

無論、それを直接聞いた訳では無く、力を使って盗み聞きした。

どうやら、里の者はオレからの報復を恐れているようだった。
人間扱いしなかったことをオレが恨んでいて、オレが報復の為に力を蓄えているのだと思っているようだ。
勘違いなのだが、今更言っても仕方がない。
ここに居場所は無い。
ここの人間はもう、オレを必要としていない。
「…仕方がないよな」
次の日、オレはその里を抜け出した。

～～～～～～～～～～～～～～～～

「まあ、そんな感じで現在に至る…と」
長々と割とブラックでディープな話を語った由来は、そう簡潔に締めた。
「…その後は？」
黙って話を聞いていた皆代が尋ねる。

「便利屋のこと？　いや、実際ね。道具のような人間と言うやつは、言われたことしか出来ないものだったんだよ」

道具のような人間と自分のを例えて由来は言う。

「自分から行動できない。自主性が無く、何事も受け身でしか無く、言われたことしか出来ない…だから、だよ」

自由を手に入れたところで自分が何をしたいのかさえ分からない。

だから、仕方がないので、前と同じように、いままで通り、他人の為に働いていたのだ。

道具として育てられ、捨てられた『持ち主不在の便利屋』はこうして生まれたのだった。

「ふぅ…人に自分のことを話したのは初めてかな？」

「……」

ため息をつく由来に皆代は何も言えなかった。

隙間の神と言う特殊な役職についているが、皆代は、由来程、特殊な境遇で育った訳でもなければ、自分で選んでここへ来た。

由来は何一つとして選べなかった。

周囲の身勝手に振り回されながら生きてきた。

自己が、主張が、主義が、無い。

それは元から無かったのでは無く、振り回される内に無くなってしまったのでは無いか…

何一つとして…

「選べなかった訳では無いわね～」

突然、この場にいる二人以外の声が響いた。

穏やかで、それでいて子供っぽい声だった。

「…誰？」

由来がその声に気づいて、聞く。

その人物は、コスプレのような軍服の皆代とは違い、ファッション雑誌から出てきたかのような服装に、整った容姿をした女だった。

だが、それもファッションなのか、何故か頭にはピンクのシャンプーハットを被っていた。

シャンプーハットの女は少なくとも皆代よりは年上に見える外見とは裏腹に、子供っぽい笑みを浮かべて由来を見る。

「私は端橋寧利（ハシバシ　ネイリ）。隙間の神所属の意志受信（サイコメトリー）の聖痕使いよ」

由来にニコニコと笑いながら言う寧利。

「いつの間に来ていたのでありますか？」

驚いたように皆代が聞く。

「んー。まあ、この間捕まった違法聖痕使いが、私好みの童顔君だったって聞いたから」

由来を意味深な目で見つめながら寧利は言う。

由来はそれには特に反応せずに無表情だった。

「…流石、『ハッカー』と呼ばれる意志受信（サイコメトリー）なだけあって、情報が早いでありますね」

「そうでもないわよ。それはそうと、今、面白そうな話をしていたわよね～」

寧利は皆代に言った後、再び由来に目を向ける。

「もしかして盗み聞き？　まあ、別に聞かれて困る話をしていた訳では無いから構わないけど…」

由来が肩を竦めながら寧利に言う。

「そうよ。それから一つ質問があるのだけど、構わないかしら？」

「別に構わないよ。何？」

寧利の言葉に少なからず興味を示した様子で由来が聞いた。

「あなたは今の生き方を、里を追い出されたことを、後悔している？」

「……」

それは核心をついた質問だった。

由来は過去は語ったが、それについて自分がどう感じたかは語らなかった。

ただ、桐羽由来と言う人間の生い立ちを語っただけであり、自分の話をしている風ではなかった。

それについて、由来はどう思っているのか…

「…何も」

短く由来は答えた。

「特に何も思ってはいないんだ。利用されたことも、裏切られたことも、何も思っていない。ただ、彼らがオレを必要としていたから近くにいただけで、必要としなくなったから、離れただけ…」

心が無い道具のように由来は語る。

やはり、この人間はどこか決定的におかしい…と皆代は思った。

だが、寧利は特に表情を変えずに監獄に入れられている由来の手を握った。

「私はね～。馬鹿正直で、嘘がつけないの。だから、人の心を読んでも、それを暴露してばかりだから、よく嫌われるのよ」

ニコニコと笑いながら由来を見つめて話す寧利。

「心が無い人間なんていないわ。あなたは心が無いから後悔しないんじゃない、自分で選んで末に辿り着いた場所だから、後悔がないだけよ」

そう言い、寧利は由来の手を離した。

「身勝手な者の道具として動くだけだったのかも知れないけど、最初に、自分と同じ境遇の人達を救おうとしたことは、自分で決めたことだったんじゃない？」

「……」

全ての始まり、由来がこのような生き方をする始まりの出来事。

それはただ、人並みに誰かを救いたい、誰かの役に立ちたいと願っての行動。

悪人だろうか、犯罪者だろうが、手を貸す。

それは、その願いが変質してしまった結果では無いだろうか。

「ま、あとは自分で答えを出してね～。私は人を諭したいんじゃなくて、ただ、人の心中を暴露したいだけなんだから」

そういって、本当に満足そうに寧利は去っていった。

「…相変わらず嵐のような人だったであります」

呆れたように皆代が呟く。

「……」

「…ん？」

先程から何故か黙り込んでいる由来を見て、皆代は首を傾げた。

何かを考え込んでいるような顔だった。

だが、その顔は苦悶に満ちたものでは無く、由来にしては珍しく、穏やかで優しげな人間らしい顔だった。

「……」

（何を考えているのかは知らないのでありますが、存分に考えて答えを出すのがいいのではあります…）

「時間なら、たっぷりとあるのでありますから」

穏やかな声で皆代は小さく呟いた。

第三十四話　濁り酒侍

「ふぅ…ようやく資料整理が終わった。記憶操作も概ね終わったし、とりあえずこれで、神の導きの一件は完全に解決かな」

色々な資料を片付けて色雨が呟く。

「タイミングがタイミングだし、雇われた桐羽由来はともかく、御開言伝の方は『反逆者』と関係があるかと思って調べたけど、無関係だったな…」

（結局、反逆者については分からず仕舞いか…）

ため息をついて、色雨は椅子に深く腰かける。

その時、電子音が響いた。

「…ファックス？　本部からだな」

送られてきた紙を抜き取って読む。

「新たな反逆者？」

驚いたように色雨が言う。

反逆者とは本来、隙間の神を裏切った違法聖痕使いのことを言う。

組織名の方はその指導者が反逆者だから、つけられているだけだ。

本来の意味での反逆者が出るのは、それほど珍しいことでは無い。
魔がさす人間など、幾らでもいる。
だが、
「このタイミング…例の組織と関係あるのか？」
色雨は頭を捻る。
しかも、その紙にはその反逆者の逃げた可能性がある場所の一つにこの町の名前があった。
理由は大きな事件の後で、支部が疲弊しているから…と書いてある。
「…どのみち、確認する必要があるね」
そう色雨が呟いた時に再び電子音が響いた。
今度はファックスでは無かった。
色雨が目を向けると、『探知機』に反応があった。

「暇であるな…」

そう言い、レイヴは公園のベンチでため息をついた。

昼食を取った後は棺達と少し遊び歩いていたのだが、用事を思い出し、棺達と別れたのだ。

思いの外、早めに用事は終わったのだが、今更棺達と合流する気にもなれず、暇を持て余していた。

「…ん？」

レイヴは首を傾げた。

この小さな公園のベンチは二つある。

レイヴが使っている物と、少し離れた所にもう一つ。

そのもう一つのベンチに誰かが座っていた。

レイヴが公園に入る時には誰もいなかったのに、いつの間にか人が現れたことを不思議に思い、レイヴはその人物を見る。

着物に草履を履いた侍のような男。

時代劇に出て来そうな格好だが、主役と言うよりは、敵側の用心棒のような雰囲気の男。

歳は大人びた冷静な顔立ちだが、未成年に見える。

右手に持った酒ビンが妙に似合っている。

（…ん？　酒？）

「昼から酒であるか…未成年の飲酒行為はいけないであるよ？」

レイヴがつかつかと男の近くに歩いていき、言う。

正義感で注意したと言うよりは面白半分で言ったようであり、特に咎めるような声ではなかった。

「……」

それを無視して酒ビンを口にする男。

「ちょっとちょっと、酔ってて聞こえていないのであるか？」

暇なので更にしつこく声をかけるレイヴ。

「…酔ってないさ。これは甘酒さ」

冷静とも冷血とも取れる、とにかく冷たい声で男が言った。

「…甘酒？　あの初詣とかで飲むアレであるか？」

「…ああ」

相変わらず冷めた声で男が言う。

「通りで甘ったるい臭いがすると思ったである……私はレイヴ・ロ

ウンワードである。そちらは？」

「…銘式濁里（メイシキ　ニゴリ）」

「濁里？　変わった名前であるな」

「お互い様さ」

「…まあ、それもそうであるか」

苦笑しながらレイヴが濁里に言う。

濁里は特に反応せず、甘酒を飲んでいる。

「……」

「…何だよ」

「こんな若くてピチピチの女の子が話しかけてきたというのに、その冷めた反応は何であるか？」

本当に暇なので、責めるように言うレイヴ。

「……」

心底、レイヴに興味が無さそうにしている濁里。

「だから、無視を…」

「おお？　おい、お前ら！　見ろよ、結構可愛い外人がいるぞ」

レイヴがまた文句を言おうとした時、公園の外から声が聞こえた。
どうやらそれは、数人の不良達らしく、レイヴの容姿が珍しいのか、公園に入ってきた。
「やべー、同い年の外人とか始めてみた！」
「しかも可愛い！」
下品な笑い声をあげながらレイヴに段々と近づいてくる不良達。
「…何であるか？」
「ある？　日本語覚えたてなのか？　まあいい、とにかく日本について教えてやるから、オレ達について来いって…」
「遠慮しておくである」
「いいからいいから」
拒否は許さず、無理矢理にでもレイヴを連れていこうとする不良達。
（…はぁ、明らかに人の話を聞かないタイプであるな…仕方ない、ここは悪名高い神無棺の名前を出して、虎の威を借る狐作戦で…）
レイヴは作戦を頭の中で考える。
銀色の髪で碧色の目と、かなり目立つ容姿をしたレイヴは、こんなことは何度も経験していた。

なので、適当にあしらうなど訳なかった。

ふと、レイヴは気になって濁里の方を向いた。

何となく、この場にいた人物を思い出して向いただけだったが…

（あれ？）

濁里はベンチに座っていなかった。

おかしいな…と首を傾げながら、次はレイヴは前を向いた。

地に伏した不良達の中に濁里が立っていた。

左手には甘酒。

右手には日本刀を持って…

「…峰打ちさ」

「……おおー」

呟いた言葉と日本刀がやけに似合う姿に思わず、レイヴは感嘆の声をあげた。

無意識の内に拍手なんかをしていたりもする。

「凄いであるな！　時代劇みたいであるよ！」

いつの間にか握っていた日本刀が本物か…とか、どこから出した…とか、気になることは幾つかあったが、あまりの違和感の無さに、レイヴは全て気にならなくなった。

「…努力すれば誰にでも出来ることさ」

変わらず、冷静に言うと濁里は、またベンチに座る。

「努力…であるか」

「ああ、努力さ。努力すれば必ず報われる…なんてことは努力すれば達成できる程の低い目標を立てた人間の言うことさ」

「？」

「つまり、そいつらは目標を達成する程の努力をした訳では無く、結局は『努力で達成出来そうな程に低い目標を立てた』だけだってことさ」

先程までとは違い、長々と話す濁里。

そこには何かしらの感情が見え隠れしていた。

「…本当に成し遂げたい目標ってやつは、努力程度ではどうにもならないのさ」

「その、成し遂げたい目標って？」

「……」

クールダウンしたかのように再び、黙り込む濁里。

「教えるであるよー」

濁里の前に移動してレイヴが言う。

「…オレは何も分からない子供の頃から、誰かを助けてみたかったのさ」

「ほう…」

「だから人を助ける組織で人を助ける努力をした。個人よりも組織で動いた方がより多くの人を助けることが出来ると思ったのさ」

（人を助ける組織？……警察？）

少し首を傾げたが、レイヴは濁里の話を聞く。

「努力はしたさ、言い訳っぽいけど、努力だけは人一倍した。だけど、人を助ける組織の人間は、それ程、人を助ける気は無かったようだった」

「え？」

「…だからオレは組織を抜け出した。出来るだけその組織に脅威を与えるようにしてさ。『焚き付け』さ」

濁里が初めて笑みを浮かべて話す。

それは氷のように冷たい笑みだった。

焚き付け…と言うのがどんな行為かはレイヴには想像できなかったが、それが良くないことであることだけはよくわかった。

「目標を達成するのに必要なのは、ただ単純な努力じゃない。より効率的に行うことさ。なりふりなんて構わずに…さ」

「……」

冷たい笑みを浮かべながら濁里は言う。

それをレイヴは話が終わるまで静かに聞いていた。

そして、

「…馬鹿であるなぁ」

きっぱりと断言するように言った。

「何？」

「はぁ、どんな悩みかと思えば、つまらない。あからさまな作り話の方がよっぽど面白いである」

失望したようにレイヴが額に手を当てて言う。

「周囲の人間がどうとか、効率がどうとか言う前に、そもそも、濁里は何がしたかったのであるか？」

「……」

「結局は人を助けたかっただけ、元々一人で行ってきたことに、他人の手を借りるとか効率とか、そういうものが混ざって本質が見えなくなってきていただけであろう？」

諭すようでも、説教をするようでも無く、ただ、呆れたようにレイヴが言う。

そもそも、レイヴは人を諭すようなタイプでも、人に説教をするようなタイプでもない。

だから、これは当然のことを至極当たり前のことを教えているだけ。

話を聞いただけのレイヴにも分かった、隠しきれていない濁里の本質。

「詰まる所、濁里はただ単純な努力ばかりする、愚直な努力家だったのである」

再び断言するようにレイヴは言い切った。

「……」

何かを考えるような表情のまま、濁里はベンチから立ち上がった。

「…どこに行くつもりであるか？」

濁里にレイヴが言う。

「…どこでもいい」

簡潔に濁里は答えた。

「どこでだって、一人でだって人を助ける努力は出来るのだから」

そう最後まで冷静に答えると濁里は公園から歩いて出て行った。

「銘式濁里…だね」

しばらく歩いていた濁里の背後から声がかけられた。

「……」

歩いていた足を止めて振り返る濁里。

相変わらず甘酒を左手に持っており、日本刀はどこかに仕舞ったのか、持っていなかった。

「違法聖痕使い絡みの事件で両親を失い、隙間の神に引き取られ、人一倍仕事に忠実だったようだね」

江枕色雨が資料に目を通しながら言う。

「……隙間の神か」

冷静に呟く濁里。

フッとその瞬間、濁里が消えた。

「「！」」

ガギッ！　と鉄と鉄のぶつかり合う音が響く。

突然、色雨の背後に移動した濁里が日本刀によって放った斬撃を色雨がステッキのような聖痕装置、ウリエルで防いだ音だ。

片方はその速さに、片方は防がれたことに、驚愕していた。

「…日本刀の形をした聖痕装置？」

「ああ、特注で、銘は『鬼丸』さ」

地面を蹴り、距離を取りながら言う濁里。

その隙に色雨はウリエルを構える。

ドォン！　と爆発音が響かせながらウリエルから炎弾が放たれる。

テニスボール程度の大きさはある、火球が数発濁里に迫る。

「……」

しかし、それは全て濁里に触れる前に消えた。

「！」

「…返すよ。自業自得って言うやつさ」

濁里がそう呟いた瞬間、炎弾が消えたのとは全く別の角度の位置から色雨の方を向いて現れた。

「クッ…！」

何とか紙一重でそれをかわす色雨。

「…厄介な聖痕を宿しているね。瞬間移動（テレポート）系の聖痕使いか」

「少し違う。瞬間移動のように『物を飛ばす』のでは無く『物が通過できる通路（ワームホール）を作っている』だけさ。それがオレの『湾曲通路』さ」

そう言うと、濁里は日本刀を構える。

自分の後ろ側に日本刀を向けた、居合のように一気に振り抜くような構えだ。

しかし、濁里と色雨の距離は三メートル以上は確実に空いている。

「シッ！」

濁里が目にも留まらぬ速度で日本刀を振る。

「…！」

それを見ていた色雨が何かに気付き、その場から飛び退いた。

ギャリギャリ！　とアスファルトを刃物で引っ掻くような音が響く。
色雨の先程まで立っていた地面のアスファルトが切り裂かれていた。
「斬撃を飛ばしたとか、空間を切り裂いたとかそう言う勘違いはするなよ？」
「種は分かっているよ。空間を繋げて剣の先をここに持ってきたのだろう？」
「正解さ。湾曲通路（ワームホール）の本質は『障害を避けること』さ。オレがお前との『距離』を障害と認識すればオレの刃はそれを壁抜けのようにすり抜けてお前に届く」
喋りながら濁里は日本刀を振る。
そして、湾曲した通路を潜り抜けた日本刀の刃は色雨を襲う。
「グッ！」
背後に現れた刃を何とかかわす色雨。
「…悪いけど、やるべきことが見つかったのさ。そう簡単に捕まる訳にはいかないさ！」
日本刀を目にも留まらぬ速度で操る濁里。
濁里がした動きは自分の前で空気を二、三度切り裂くように素振りをしただけだったが、それは湾曲通路によって色雨に届く。

丁度、囲むように時間差で色雨に刃が襲いかかる。

一閃目をかわし、二閃目をかわし、三閃目は…

「ッ！」

紙一重でかわした後、何故かウリエルで発砲した。

「…！」

何を…と濁里が言葉に出す前に理由が分かった。

湾曲通路（ワームホール）は空間と空間を繋げて作った新しい通路（ルート）。

それは濁里本人以外も潜り抜けることが出来る。

何故なら、それは新しい道を作り出すと言うより、既存する道と道を結ぶ近道を作り出すようなもの。

道を通れるのなら、何でも通り抜けられる。

生物とは限らない。

動いている物体なら何でも通れる。

例えば、弾丸だとしても…

ドォン！　と濁里の傍で爆発音が響いた。

「……」

パラパラと降ってくる埃を払いながら、色雨が濁里のいた方を見続ける。

「…ケホッ、ケホッ」

巻き上げられた埃を日本刀で振り払いながら濁里が現れた。

湾曲通路で回避したのか、外傷はあまり無い。

「…これ以上は無駄だね」

それを無言で観察していた色雨が言う。

「何を言っているのさ？」

「君は人を害する力は持っているが、害意が無い。君は無害だ」

構えを止めて、ウリエルを片付ける色雨。

完全に戦意を失ったようだった。

「……」

色雨の反応に濁里の方も戦意を失ったようで、こちらも日本刀を仕舞う。

「本部には私から言っておくよ。隙間の神には戻れないだろうが、指名手配されるようなことは無くなるように」

「お人好し。お前、これから苦労するさ」

「それはお互い様のような気がするよ」

「そこまで気付いてるのか…侮れない奴さ」

「それもお互い様のような気がする」

笑いながら色雨が言う。

「……」

戦闘時にテンションが上がっていたのが急に冷めてきたのか、再び静かになり、歩き出す濁里。

「この町でしばらく過ごすのなら、一人の聖痕使いとして支部を手伝ってくれると助かるよ」

「…考えておくさ」

そう呟くと濁里は再び歩き出した。

第三十五話　指名手配

「ところでよー。オレってなんでこんなことしてんだっけ？」

資料に埋め尽くされ、床の色も分からない乱雑した部屋に、違法聖痕使いの組織『反逆者』のボスの右腕、逸谷不戒（イッタニ　フカイ）はいた。

資料を適当に見ては捨て、見ては捨て…と内職のようにしている姿は右腕と言うより雑用係のようで、肩書きに負けている。

「……オレってなんでこんなことしてんだっけー？　オーミー！」

無視されたのが気に入らなかったのか、再度繰り返す言う逸谷。

「知りませんヨ。逸谷さんがこの隙間の神の支部を調べろって言ってきたんじゃないデスか」

逸谷の隣にいた濡れた雨合羽を着て、傘を持った男、オーミー・氷咲（ヒザキ）が言う。

「オーミー！　このオレは誰だー！」

「…逸谷さんデスね」

「そうだ！　ボスの右腕、逸谷さんだ！　ボスの次に偉いんだ！　だってのに、何だってんだよ！」

嘆くように叫ぶ逸谷。

相当参っているのか、おかしなテンションになってしまっている。

「ぜってー、ボスの奴、『右腕』のことをよく使う手とかそういう解釈してやがるぜー」

「間違ってマスか？　その解釈？」

「メシの時に右腕ばかり使うなって言われなかったのかお前は！左腕だよ、左腕ぇー！」

バンバンと机を叩きながら逸谷が言う。

「腕は二本だろー、隻腕は大変だよ。うん、超大変、マジ大変。だから、ぶっちゃけオレもパシりが欲しいんだよー！」

「ぶっちゃけましたネ」

呆れたようにオーミーがため息をつく。

結局のところ、逸谷は楽がしたいだけだった。

「…それにしても、逸谷さんに同意する訳では無いデスけど、こんな支部に彼の探している資料があるんデスか？」

「さぁーな。まあ、無かったとしても、ここの支部の人間が殺されてることが本部にバレるまでに、何か機密情報でも見つかれば儲けものだ…ってボスは言ってたぜー」

「…それこそ、こんな小さな町の支部には無さそうデスが…」

「だよなー…おーい、そっちはどーだ？」

逸谷が二人とは少し離れた場所に座っていた人影に声をかける。

その人影は中学生くらいの体格の少年だった。

日本人には見えない顔立ちをしており、サファイアのように鮮やか過ぎて不気味な青い髪に、銀色に輝く瞳をしている。

クリスチャンなのか、首からは瞳と同じ色の十字架のネックレスを三本も下げている。

「……」

「へーレム、無視か？」

「……気が散る。成果が欲しければ、私の邪魔をするでない」

ヘーレムと呼ばれた青髪の少年は見た目に反して古風な口調で言う。

十字架のような光る銀色の瞳が逸谷を睨む。

「へーへー、お前の邪魔はしねーよ」

「さっきから思ってたんデスけど、彼は誰デスか？」

「あ？　お前は初対面だったか…あいつはヘーレム。この間ボスが連れてきたようでな、残留思念を読み取る力を持っているらしい」

具体的にどこまで読み取ることが出来て、どこまで応用が利くのかは逸谷は知らなかったが、とりあえず役には立つだろうと今日は連れてきた。

やや協調性に欠ける性格をしているが、そんなことを気にしていたんじゃ、この組織は纏められない。

「…問題がある奴ばかりだからなー。他人のことを言えた義理じゃ…おわッ！」

話の途中で逸谷は思い切り転倒した。

ゴガッ！　と記憶でもふっ飛びそうな程に頭を地面にぶつけて、逸谷は悶絶している。

しばらく痛みを紛らわす為にゴロゴロと床を転がった後にスッと静かに立ち上がる逸谷。

「……オーミー」

足下には小さな水溜まりが出来ていた。

そして、その水の道はオーミーの濡れた雨合羽に続いていた。

「その床を水浸しにする癖を前にやめろと行っただろーが！　床が滑って危ないでしょーが！」

頭に出来た、たんこぶを押さえながら逸谷が叫ぶ。

「ボクの怪火（ウィリオ・ウィスプ）は水と深い関係にあるから、これは必要なことなんデ

スよ」

「なんデスよじゃねー！　やめないってなら、オレの毒手が唸るぜ！」

「ちょ、ちょっと待って下さい！　それは少し洒落になってマセンよ！」

触れたら即死の病菌右手を振り回して言う逸谷に、その力を知っているオーミーが叫ぶ。

冗談で済ませるには殺傷力が高すぎる。

「…む？」

そのやり取りを無視して作業に没頭していたヘーレムが呟く。

「どーした？　何かあったかヘーレム？」

「…いや、対したことでは無い」

そう呟き、再び作業に没頭し始めた。

「まあ、いい。それはそうとオーミー！　とりあえずそこに座れ！仲直りの握手をしようぜー！」

「それ仲直りする気ないデスよね、絶対！　こうなったら、この杖『ザ・パラソル』で…」

「…前々から思ってたが、お前はネーミングセンスが悪い！」

ギャーギャーと言い合う、犯罪者コンビ。
それを無視して作業に没頭するヘーレム。
その時、
『そこにいるのは分かっている！　違法聖痕使い達、大人しく投降しろ！』
外から怒声が響いた。
機械を使っているのか、室内にまでよく響く。
「…まさか、隙間の神の応援デスか？」
「…やべー、早すぎだ」
「今更気付いたのか？　存外鈍いな、貴様ら」
さらりと当たり前のようにヘーレムが言った。
「…聞き違いか？　もう一度言ってくれ」
「先程からこちらへ向かう気配を感じていた数は十から二十と言ったところか」
「あ！　さっきの『…む』だな！　そん時に気付いて黙ってたのか！」

「そんなことより、どうする気だ。こんな所で捕まってしまってはボスに殺されてしまうぞ？　右腕様」

先程までの無表情をやめて逸谷を嘲るような笑みを浮かべてヘーレムは言う。

「…オーミーは時間稼ぎ、オレは錯乱、ヘーレムは…先に帰ってろ！」

「了解デス！」

「こちらも了解。クックック…健闘を祈る」

「うっせえ！　さっさと帰ってろ！　オーミー、オレはボスにだけは殺されたくねーんだ。全力を尽くせ」

そう叫びながら憐れな二人は突撃していった。

犯罪者ライフは常にスリリングなのであった。

「…違法聖痕使いの指名手配リストって意味あるんですか？　秘匿だから貼り紙貼れないのに…」

隙間の神の第一部隊『智天使（ケルビム）』に所属する繰上炬深が言った。

第一部隊『智天使（ケルビム）』は戦闘力よりも補佐的な能力を優先して選ばれており、主にトップ、天之原天士（アマノハラソラシ）の補佐をしている。

いつもの炬深は支部との連絡窓口係などの仕事をしているが、今日は手が空いていたので、天士の手伝いをしていた。

「指名手配って言っても、ブラックリストみたいなものだから、貼り紙は必要ないんじゃないかね？」

「そうですね…」

（…底なし沼を自在に造る『マッド』に触れた人間を病死させる『ウィルス』…変な名前ばかり）

指名手配リストを流し読みする炬深。

リストには本名が分かっていない者には聖痕の特徴とそれに合わせたネームがつけられている。

反逆者の場合は本名が書いてあるが、それ以外の隙間の神が危険視している違法聖痕使いは本名が書いていないのがほとんどだ。

「…ん？」

炬深がおかしなものを見つけて声を出す。

ネームは『ゴールド』。

外見特徴が色々と書いてあるところまでは他の人間と同じだが、そ

の後が違う。

『違法聖痕使いでは無く智天使（ケルビム）の人間』である。

と書いてあった。

「あの…普通の隙間の神の人が指名手配になっているんですけど…」

「ん？　ああ、彼ね。先代トップと一緒に見習い時代の私を推薦してトップに仕立てあげた、補佐官だったんだけどね…」

「…反逆者に？」

天士の言葉が過去形であることと、寂しげな顔を見て察した炬深が言う。

「いや、仕事をボイコットして帰ってこない」

「は？」

炬深は目が点になった。

予想外すぎて頭がショートした。

「い、いやいや、補佐官なんですよね？」

「私がトップになってすぐ後に本部から出て、聖女を探して日本中を回るとか言って、全くどこへ言ったのやら…」

「いやいやいや、クビにするべきでしょ！」

「……」

「何で無言？」

「実はね、隙間の神は彼の多額の寄付を受けているんだよね……
何か、彼は大金持ちで、隙間の神には拾われた恩があるから手伝っ
てるだけみたいだ」

「優秀で、大金持ちで、自分勝手って…一体どんな人なんですか？」

考えれば考える程に人物を思い浮かべることが出来ずに炬深が聞く。

「一言で言うなら…」

「一言で言うなら？」

「女誑し…かね？」

ハッキリと天士は言った。

「は？」

もう一度、炬深の思考は停止した。

第三十五話　指名手配（後書き）

おまけ

菌類

逸「フンフン、フフーン」

オ「どうしたんデスか？　気持ち悪いくらいにご機嫌デスね」

逸「気持ち悪いは余計だ。だが、今のオレは機嫌がいいからスルーしてやる」

オ「何してるんデスか？　畑…デスか？」

逸「そうだ。オレの唯一の趣味、キノコ栽培だ。実はオレは地球に優しい男なんだぜ？」

オ「…菌類繋がり？」

逸「まあ、オレは病原菌を操る聖痕使いだし、微生物の扱いに長けていると言うのもあるけどな」

オ「だからデスか。そこに漫画でしか見たことが無いようなグロテスクなキノコ生えているのは…」

逸「え！　このキノコ食えねえのか！」

オ「…食べる気だったんデスか。笑いが止まらなくなったり、頭からキノコ生えたり、面白い展開を期待していマス」

逸「何てこった……いや、待てよ。オレは毒手使い。キノコの毒なんか効かないんじゃねえか？」

オ「…ちょっと」

逸「毒を持って毒を食らうと言う言葉があるから」

オ「いやいや、間違えてマスよ。食らわないデスよ」

逸「いただきます！」

オ「ちょっと！　ええい、瞬間よ止まれ！」

逸「……」

オ「全く、何でボクがツッコミに回らなければならないんデスか……それこそ、悪い物でも食べたんじゃないデスか」

逸「……」

オ「キノコは燃やしときマスか…全く、しばらくはそうやって反省していて下さいよ、逸谷さん」

第三十六話　透明人間

「うわぁ…」

ある場所で高校生くらいの年齢の少女がその中を漁っていた。

その場所は倉庫か物置のようで、埃被った色々な物が乱雑に置いてある。

「…ケホッケホッ…埃っぽいな、もう」

少女はどちらかと言えば、大人しくて目立たなそうな雰囲気で、垂れ目が特徴的でパンダのような愛嬌のある顔をしている。

掃除をしに来たのか、両手には箒とちり取りを持っていた。

「…？」

とりあえず、掃除を始めようと物を退かしていると、何か光る物が転がっていることに少女は気付いた。

「…何これ？」

それは、小さな金の指輪だった。

「行方不明？」

「そうであるよ。棺の後輩の女の子が行方不明らしいのであるよ」

連休明けで少し眠そうな顔でレイヴの話を聞く棺。

だが、いつも通り、胡散臭そうな顔をしており、話半分しか聞いてなさそうだ。

「オレの後輩と言うなら、お前の後輩でもある訳で、親しい後輩なんて少しも心当たりがねえんだが…」

しかも女子だし…と付け加える異性が苦手な棺。

「大体、行方不明ってなんだよ」

「行方不明は行方不明であるよ。学校にも来てない、家にも帰ってこない、素行の良い女の子だったから、何かの事件に巻き込まれたのかもしれない…って話であるよ」

「警察に任せろよ」

きっぱりと棺は言った。

「冷めてるであるね…ドライキャラは濁里だけで十分であるよ」

「濁里？」

「私のメル友であるよ」

何故か自慢げに胸を張りながらレイヴが言う。

「まあ、どうでもいいか。話はそれだけか？」

「まだまだ！　聞いてくれるのなら、あと三時間は話し続けるであるよ！」

「……」

棺はレイヴの言葉を無視して歩いて行った。

「行方不明…ね」

久しぶりの一人の帰り道、思い出したように棺は一人で呟いた。

（衣は何故か休んでるし、違法聖痕使いが絡んでいるのか？）

珍しく休んでいる生真面目な少女のことを考えて棺は思う。

「…いや、何もかもが違法聖痕使いの仕業と考えるのもな」

独り言を言いながら道を歩く棺。

「……ん？」

何故か肩を叩かれたような気がして、棺は後ろを振り返った。

しかし、背後には誰一人おらず、周囲にも人影は一つもない。

「…気のせいか」

そう呟き、再び道を歩き出す棺。

トントン…と今度はさっきよりも強く、棺は肩を叩かれた。

「……」

振り返ると、やはり誰もいない。

（…何だ？）

棺は気になりながらももう一度、歩き出し…

「…ハッ！」

だるまさんが転んだのようにすぐに振り返った。

だが、やはり誰も…

「キャア！」

「……」

…誰もいなかったが、声が聞こえた。

「痛たた…ビックリして尻餅ついちゃった…」

（…どういうこと？）

姿は見えないが、声は聞こえることに首を傾げる棺。

「…あ！　反応してくれました！　私のこと、見えてますか？　神無先輩！」

「……は？」

どうやら、この透明人間は棺の後輩らしい。

丁寧な口調で、声の調子から女であることが分かる。

「…透明人間に知り合いはいねえんだが」

「嘘。やっぱり見えてないですか…しかし、気付いてもらっただけでも感謝しています！」

一瞬、声の調子が暗くなったが、すぐに持ち直して明るく言う見えない少女。

「…どうやら、元々オレの知り合いで、姿が見えなくなったようだな。名前は何て言うんだ？」

何となく察しがついた棺が少女に言う。

「私は高涙です。高涙布津花（タカナミ　フツカ）ですよ、神無棺先輩」

嬉しそうに少女が言った。

「…聖遺物？　何ですか、それ？」

隙間の神、支部にて衣が色雨に聞いた。

何年も色雨の手伝いをしてきたが、聞き覚えの無い単語だった。

「隙間の神が長年探し続けている物だよ。一般隊士には伝えられていないかもしれないけどね」

「…それはどんな物なんですか？」

「そうだね、言うなら聖痕以上の奇跡を宿した物のことだよ。形状は様々で武器として人間に改良された物や本来の形で遺っている物もある…」

「な…」

「ちなみに聖痕装置は聖遺物をモデルに作られているんだよ」

「…なら、聖遺物も強力な聖痕使いに作られた物なんですか？」

「違うよ。逆さ『世界の常識を覆す程の聖遺物』の存在が聖痕使いを生み出したんだよ」

「覚えてないなんて酷いですよ！　ほら、私が不良に絡まれていた時に颯爽と現れて助けてくれたじゃないですか！」

「…悪い、心当たりがありすぎて分からねえ」

「どれだけ人を助けてるんですか！　正義の味方なんですか！」

見えない少女、高涙布津花が言う。

「そういう馬鹿がいくらでもいるように、そういう馬鹿に絡まれる奴もいくらでもいるんだよ。それを見かけてムカついたから殴り飛ばした…別段、珍しいことじゃねえよ」

神無棺は基本的に他人に対する興味が薄い。

照れ隠しでも何でもなく、目について、自分がムカついたから殴り飛ばしただけなのだろう。

だから、その被害者のことなど考えていないし、興味すら無い。

何度かそういう場面に出くわして、馬鹿を殴り飛ばした記憶はあるが、被害者については誰一人、棺は覚えていない。

言わば、棺が興味があったのは加害者の方であり、被害者には声をかけようとすら思わなかった訳だ。

故に、そのことについて、感謝の気持ちを述べる布津花は、鬱陶しいとまでは言わないが、面倒なことは確かだった。

「二日だか、三日だか知らないが、覚えの無い礼を言われても迷惑だ」

「布津花です！　三日ではありません！」

「大体、オレに何でついてくるんだよ。知り合いならレイヴの所にでも行けよ、四日」

「布！　津！　花！」

からかいの言葉に本気で怒る布津花。

いつも衣をからかうような調子で棺はニヤニヤしながら布津花をからかう。

「…何を一人芝居しているのであるか？」

「うおっ！　…レイヴか、突然背後に立つなよ」

声に驚いて振り返った棺がレイヴに言う。

「それを言うなら、独り言を言いながら歩いていた棺の方がおかしいである」

「あ?…あー、さっきまで電話してたんだよ」

レイヴが言ったことを理解した棺が誤魔化すように言った。

レイヴは布津花の存在に気付いていないのだ。

(…どうやら、声も聞こえてないみたいだ。そういえば声が届いたのはオレだけとか言ってたか?)

「電話してたのであるか…まあ、それはそれとして、例の行方不明の子はまだ見つかっていないらしいのであるよ」

「だから、警察に任せればいいじゃねえか」

「警察が探しても未だに見つからないのである。名前は高涙布津花と言うのであるが…」

「「えっ!」」

布津花と棺が同時に驚きの声を上げる。

「棺も家出少女を見かけたら名前を聞いておいてくれである」

そう言うと、レイヴはスタスタと歩いていった。

「…お前、行方不明扱いになってるぞ」

「し、知りませんでした。倉庫で指輪を着けて、今の状況になって驚いて家を飛び出しましたから…」

姿は無いが、声の調子が慌てたものになる布津花。

「…指輪？」

それを聞きながら、どうするか考えていた棺は、ふと疑問に思い、聞いた。

「聖遺物…そんな危険な物がどうしてこの町に？」

「聖遺物はイエス・キリストの遺物と、それを改良した物だ。何せ二千年も前から存在しているんだ、世界中どこにあった不思議ではないよ」

異常な反応を見せる聖痕使い探知機を見ながら色雨が言う。

「形状も様々、ヘタしたらアクセサリーになってその辺に売っているかもしれないよ？」

色雨は冗談半分に衣にそう言った。

第三十六話　透明人間（後書き）

おまけ

メル友

濁「……」

レ『レイヴ・ロウンワードである！　アドレス帳にはフルネームでは無く、レイヴのみでお願いである』

→

メール

濁「アドレスを教えたのはいいけど、あまり機械は得意じゃないんだよね…返信した方がいいか…『了解さ』…っと」

レ『文が短い！　それで私のメル友を名乗ろうとはいい度胸である！』

濁「…誰にも名乗ってないんだけどさ…まあいいや、長いメールね…『…なら、改めて自己紹介をしよう。オレはとある機関で育てられていたが、元々の生まれは～』」

レ『遅い！　それで私のメル友を名乗ろうとはいい度胸である！』

濁「…だから名乗ってないって…えーと」

レ『両手でメールを打つから遅いのである！　おばあちゃんである

か！』

濁「……何故分かった。外見か。外見が古風だから機械にも疎そうって思ったのか」

レ『全くやれやれである。（~ ―~）』

濁「…何さ、文字が顔に見える。でも、これはかなり馬鹿にされている」

レ『どーせ、顔文字の仕方も知らないのであるよな～　（~ ―~）』

濁「……流石に少し頭に来たさ。見ているがいい、レイヴ。参考書を買って勉強してやるさ、努力家をナメるなよ」

レ『（~ ―~）』

第三十七話　聖遺物

「…で、結局お前はどうしたい訳？」

虚空に向かって棺が呟く。

「どうしたら、よいのでしょうか？」

困ったように布津花がそれに答える。

「……」

（…多分、聖痕使いとしてオレみたいに目覚めたばかりなのだろう…説明は…支部に連れていって、色雨辺りにしてもらうか）

腕を組んで棺は考え込む。

今は姿が見えなくなることだけに留まっているが、人の理解と常識を越えた不可思議が聖痕だ。

何が起こっても不思議ではない。

「こんな現象に詳しい奴を知っているから、そいつの所へ行くぞ」

「え？　あ、はい」

少し焦っているのか、少々乱暴に棺は言うが、布津花は特に気にした様子は無く素直に頷く。

無論、棺には見えていないので、声の調子で判断をしているが…

「…そう言えば、指輪がどうのこうの言ってたな」

支部に向かって歩き始めてすぐに布津花の方を…と言うより声のする方を向いて棺は言う。

強く疑問に思っていた訳ではなく、単純に支部に着くまでの話のネタに聞いただけだった。

「はい。ちょっとお母さんに頼まれて倉庫の掃除をしてた時に見つけたんです…おじいちゃんか、おばあちゃんのかな？　金色の綺麗な指輪なんですよ」

現在も手につけているようだが、棺には見えない。

「アクセサリーの良さは、オレには分からねえな」

ファッションには興味がないのか、ため息をつきながら棺が言う。

まあ、棺がファッションを気にしていたなら、まず、その全身真っ赤な私服をやめることだろう。

「あんまり綺麗なので思わずつけてみたら、サイズがぴったり過ぎて外れなくなっちゃって…先輩、私の指って太いでしょうか？」

「…だから、見えねえって言ってるだろ。安心しろ、お前がゴリラみたいな指の持ち主だったら、流石にオレは覚えている」

布津花を馬鹿にするようなデリカシーの無い発言をする棺。

本人はフォローしているつもりだが、異性が苦手で経験不足な為か、相変わらず異性への接し方が病的に下手だ。

「……」

「ん？　どうした？」

実は布津花は怒った顔をして棺を睨んでいるのだが、棺は気づかない。

「…なんでもないですよ。全く」

「？」

本気で気づかなかった棺は暫く首を傾げていた。

「聖遺物が存在する可能性がある地点へ向かってもらいたい」

「…いきなり何の用かと思えば…お前のパシリになった覚えはないさ」

色雨が告げたことに不満そうに濁里が言う。

「探知機は本来、違法聖痕使い探知用だから、聖遺物の探知には向いていなくてね…曖昧な範囲しか分からないんだ」

「…だから？」

「君は敏捷性…と言うより『移動』に関しては隙間の神でトップだと思っている…君は適役なんだよ」

「話にならない。オレは善であろうとは思っているが組織の為に働くつもりは毛頭ないのさ」

暗に隙間の神として働くつもりは無いと語る濁里。

レイヴとの一件で、人を助ける為の努力を続けることは決めたが、隙間の神に愛想を尽かしているのは今でも変わらないようだ。

「私だって出来ることなら君をこき使うような事はしたくないんだよ。だけど、そうも言ってられない状況でね…聖遺物の危険性…戦闘専門の第四部隊『力天使（デュナメイス）』に所属していた君なら知っているだろ？」

「…文献などで見たことはあるが、聖遺物が見つかったなんて話はここ数年聞かないさ」

「私達の聖痕なんて比べ物にならない『純粋な奇跡の象徴』だよ」

「聖剣のような選ばれた者だけが使える聖なる力…みたいな物だった気がするのだが…」

昔本部で見た資料を思い出しながら濁里が言う。

「それは後になって出来た改良型だよ。例えば、キリストのかけられた十字架、『聖十字架』の欠片を剣の柄に埋め込んで聖剣にするとかね」

「生憎、無神論者なので、よく分からないが…それで聖遺物は『武器』では無いのか？」

「武器では無いよ。聖遺物は人を傷つける物じゃなくて純粋な奇跡を起こすだけの物だ」

「一々、抽象的な言い方をするなよ。結局、何が危険なのさ？」

色雨の言い方に苛立ちながら濁里が聞く。

「…その奇跡が『純粋過ぎるんだよ』…もし、聖遺物の奇跡が罪人を裁く…なんて部類の物だったなら、この町は滅ぶ。奇跡とは未知の現象のことを言うんだ」

色雨が静かに言う。

その様子に事の大きさを理解した濁里が頷く。

「…分かったさ。そういうことなら協力しよう」

「ありがとう。既に支部の人間には行動してもらっている。私はあと一人に協力を願ってから探しに行くとするよ」

「あと一人？」

「ああ、君と同い年ぐらいだから、出会ったら仲良くなれると思うよ」

「い、意外と遠いんですね…その、星を見る会って場所は…はぁ、はぁ」

疲れたような声を出し、息を荒げる布津花。

「体力無いなお前」

「わ、私は見ての通り、華奢で運動は苦手なんで」

「だから、見えねえって…どっかで休むか？」

「お願いします…」

出来るだけ早く棺は支部に連れていきたかったが、無理をさせるのも気の毒なので近くの公園で休憩することにした。

錆び付いたベンチに二人で座る。

（まあ、今まで大丈夫だったんだから、少しくらいは大丈夫だろう）

隣で息を整えている布津花のことを棺は考える。

「…遅くなってしまいましたけど、ありがとうございます、先輩」

「何だ？　唐突に…前のことなら覚えてないって」

「いえ、それではなく、今日のことですよ。本当は、誰にも気づいてもらえないって心細くて…」

今まで明るくしていた声を暗くして布津花が言う。

恐らく、楽観的になったり明るくしていたことは不安を誤魔化す縁起だったのだろう…

「…そんな大したことはしてねえよ」

照れ隠しか、もしくは本当にそう思っているのか、棺は言う。

「それでも私は感謝しています！　また後日改めてお礼をしますね！」

棺の話を聞いてないかのように布津花が言う。

「いや、だからな…」

人に感謝されることに慣れていないのか、棺は困ったような顔をする。

そんな会話をしていると、公園に誰かが入ってきたので棺は会話をやめた。

布津花が見えないので、普通の人間に見られると一人で喋っているように見えるからだ。

「そこのお二人、青春してるね。いやはや全く、羨ましい限りだよ。若いっていいね」

しかし、入ってきた人間は普通ではなかった。

その人物は棺と同い年くらいに見える男だった。

腕の先まで覆う黒いポンチョのような服を着て、ズボンの色も黒。

その服装よりも更に濃い黒髪をして、日本人のような顔立ちだが、瞳の色は青色だった。

全体的に黒い印象の奇妙な男だ。

「お前、確か…」

「おや？　覚えていてくれたとは嬉しいな」

棺はこの黒い男に見覚えがあった。

初めて違法聖痕使いと戦闘をした病院だ。

そこで、自販機のジュースがどうのこうの言っていたカフェイン中毒の男だ。

少し会話をした程度で名前すら知らないが、その印象的な格好で棺

はその男を覚えていた。

「…待てよ、お前『お二人』って言わなかったか？」

棺が思い出しながら言う。

「ああ、そうだよ。仲が良さそうでいいね。僕の妹は最近、反抗期でさ…」

「そんなことは、どうでもいい。お前、こいつが見えるのか？」

布津花の姿は見えない。

棺でさえ、かろうじて声が聞こえる程度であり、それで布津花の存在に気づくことが出来た。

だが、先程は布津花は入ってきた人間を気にして黙っていた。

なのに、その存在に気づいたと言うことは…

「見えてるけど？　何？　君見えないの？　おいおい、裸の王様じゃないけど、こんな可愛らしい女の子が見えないなんて君の目は節穴だな」

ニヤニヤと馬鹿にした笑みを浮かべ、黒い男が言う。

それに棺は腹が立つ以前に不気味さを感じた。

「お前は何者だ？」

「僕？　僕は平凡なただの完璧主義者だよ」

いつのまにか手に持っていた缶コーヒーを飲みながら黒い男は笑った。

第三十八話　指輪

「…まあ、そう身構えないでよ。何もしないから」

相変わらず少しも安心できない笑みを浮かべながら黒い男は棺に言う。

「……」

「そうだな…こういう話は知っている？　とある男が王様になる話」

無言で睨む棺を気にせず、黒い男は話を続ける。

「その男は何の才能もない凡人だったけど、とあるアイテムを持っていた」

「アイテム？」

「付けることで自分の姿を消すことが出来る指輪さ、男の名はギュゲース。指輪はギュゲースの指輪と呼ばれた」

棺が反応したことに笑みを浮かべて黒い男は言った。

（姿を…まさか）

咄嗟に布津花が座っているベンチの方を向く。

「ま、実際は創作の中の話だよ。姿を消すことなんてできはしない。

知ってる？　透明人間って光を取り込めないから目が見えないんだよ？」

「？」

「『似たような現象を引き起こす物』なら知っている…って言うか、それを探しに来たんだけど、中々見つからなくてね…聖遺物って言うんだけど、聞いたことない？」

（……まさかこいつ、布津花の存在には気づいているが、指輪には気づいてないのか？）

「ああ、聖遺物って言うのはキリストの遺物だとか、奇跡の力が込められた物だとか、そう言う神聖な感じのする古くさい物って解釈でいいから…」

「…聞いたことも見たことも無いな。骨董屋にでも行けばいいんじゃないか？」

「お、そのアイデアいただくよ。ありがとう。それじゃまたね…えーと」

「…神無棺だ」

「改めてそれじゃまたね、神無月君」

気さくにそう言うと、黒い男は名乗りもせずに去って行った。

「…神無月じゃねえよ」

棺がそう呟いたの時には、黒い男の姿は完全に見えなくなっていた。

「……」

「棺！」

不機嫌そうに黒い男が去っていった方を睨み付けていた棺は、丁度すれ違う感じでやって来た衣に話しかけられた。

「おお、何か久しぶりにあった気がするぜ」

「何を言ってるんですか…そんなことより、棺にも探してもらいたいものがあるんですよ」

「…話が読めねえんだけど…どういうことだ？」

「聖遺物…ああ、形はともかく、古くて神秘的な感じのするものを探してほしいんですよ」

先程の黒い男と同じような説明をする衣。

「お前らもか…まあ、なんにせよお前達に任せようと思っていたんだ、布津花」

そういうと棺は布津花に前に出るようなジェスチャーをする。

「…棺？」

「そこにいるんだよ、お前らが探している物を持った奴がな」

衣の前を指差しながら棺は言う。

と言っても棺も見えていない為になんとなく感じる気配で予想しているだけだ。

「棺、宗教にはまっちゃったんですか？　それとも、とうとう頭が…」

「どちらも違うわ！　つーかとうとうってなんだよ！　前兆か！　前兆が既に出ているのか！」

衣にかわいそうな人を見るような目で見られ、棺がキレて叫ぶ。

「ここにいるだろうが！」

「痛っ！」

ブンッと右腕を一振りし、布津花の（恐らく）背中を叩く棺。

「何で私を叩くんですか、先輩！」

「いや…つーか、触れるんだな」

自分の右腕を見て驚いた顔で棺は言う。

興奮して適当に手を振るっただけなのだろう。

「当たり前です！　先輩、私を幽霊か何かと勘違いしてませんか！」

「…誰もいないのに声が聞こえる」

憤慨する布津花の声に少し不気味そうに、衣が首を傾げる。

「だから、見えねえけど、いるんだよ。そこに、姿を消すアイテムとやらを持った奴がな」

「…姿を消す、そんな聖痕聞いたことありません…信じられない」

「目の前に現れてしまったからには信じるしかねえだろ…現れてはねえか」

矛盾してるようで、矛盾していないことを言う棺。

「そうですね…とりあえず支部に…と言いたいところですが、今は全員出払っているので」

困ったような顔で衣が棺に言う。

「全員総出か…聖遺物って言うのはそんなに危険な物なのか？」

「はい。私もただの一般隊士なので、今日初めて聞いたことなんですが、聖痕使いが世に誕生したことに関わる程の力を秘めているらしいのです」

「……」

「元々、隙間の神は秘匿よりも聖遺物の回収を目的に作られた組織だとも言われている程…だそうです」

（…なるほど、何故聖痕使いが日本にしか発生しないのか、何故隙

間の神はそれを知っているのか、その理由が分かった気がする）

つまり、隙間の神は『その光景』を目撃した人間によって作られた組織だと言うことだ。

ある聖遺物が世界の常識を『作り替える』光景を見て危険な聖遺物の回収、聖痕の秘匿を目的に組織を作り上げた。

それがどれくらい前のことなのかは定かでは無いが、その後、長い間、隙間の神は聖痕を秘匿しながら、その原因である聖遺物も回収し続けてきたのだろう。

「聖遺物は純粋な奇跡を秘めた遺物。言わば奇跡と言う火薬を詰めた不発弾のような物。誤って『起爆』したら、どうなるか…」

どれ程の、どのような影響が出るのかは、聖遺物について詳しく知らない衣自身にも分からない。

しかし、神話の中では無数の人間を滅ぼしてきた奇跡の力だ。

人間の手によって指輪に加工されて多少は力が落ちたとしても…

「…とりあえず、色雨に連絡をしてくれ」

嫌なイメージばかり浮かぶ頭を振り、思考を止めて衣に言う棺。

「分かってますよ。すぐにその後、本部の方に…」

言いかけて衣は固まった。

この公園に先程まではいなかった人間が視界に入ったからだ。

高校生くらいの少女だ。

どちらかと言えば、大人しそうな雰囲気で、垂れ目が特徴的。

パンダのような愛嬌のある顔をしている少女。

「どうし…お前！」

急に言葉を止めた衣を不思議に思い、目線を辿った棺も驚く。

異変に気づいていないのは少女のみで、その少女は首を傾げ、

「あれ？　どうしたんですかお二人とも。私の顔に何かついてますか？」

キョトンとした顔でそう言った。

「お前…布津花か？」

その声に聞き覚えがあった棺は問う。

「はい。と言うか、今更何を言って…」

「姿が…見えてる？」

「はい？」

思わず呟いた衣の声に首を傾げる布津花。

今までは棺達には見えていなかったが、表情豊かな少女のようだ。

「お前の姿が見えるようになっているんだよ！」

「え！　本当ですか！　自分じゃ全然分からないんですけど」

ようやくその事実に気づいた布津花が笑みを浮かべて言う。

今にも飛び跳ねそうなくらいに喜んでいる。

「……」

それとは反対に険しい顔をして黙り込む棺。

（何で急に姿が見えるようになったんだ？　奇跡の不発弾は電池式だったとでも言うのか？）

棺は布津花の姿が見えるようになった理由を考える。

布津花の方はそんな疑問よりも元に戻れた喜びの方が上らしく、未だにフリーズしている衣の手を取って振り回したりしている。

「…ん？　布津花、お前」

ふと、何かに気がついた棺が布津花に言う。

「何ですか？　先輩？」

ニコニコと笑いながら嬉しそうな声で布津花が棺の方を向く。

「『指輪はどうした?』」

棺は短く言った。

この騒動の原因。

支部の人間を総動員させた騒動の本元。

「それならここに…え?」

自分の指を見て布津花は固まった。

その指から指輪がなくなっていた。

「…当てが外れたなぁ」

全身黒で統一した、青い目の男は呟いた。

好物のコーヒーを飲みながらも眉を不機嫌そうにしかめたままだ。

「聖遺物、『ギュゲースの指輪』…欲深い人間が自身の悪事が誰の目にも映らぬように作り出した姿を消す指輪」

人通りの少ない裏路地で缶コーヒー片手に黒い男は言葉を続ける。

「その実態は聖遺物の欠片を埋め込んだ指輪。伝説の聖剣の中には柄に聖遺物の欠片を埋め込むことで完成する物もあるらしいけど、その模倣だ」

一人で話続ける黒い男の前には一つの人影があった。

黒い男の話を聞いていないかのようにずっと無言を貫いている。

「聖遺物、聖十字架の欠片を埋め込んだ指輪。正確には神とか、聖霊とかそういう『神聖な存在に一時的に変質する』こと…それがあの指輪の力」

神聖な存在は神聖な存在にしかその姿を見ることは出来ない。

神の姿が人には見えないように、

存在の『枠』が違うのだ。

（まあ、稀に声が聞こえる奴くらいはいるかもしれないけど…）

ふと、赤い髪に赤い目の少年を黒い男は思い出した。

「それで？　目当ての指輪を盗み出せたのなら、私に用はないはずだが？」

黒い男の前に立っていた人物が初めて口を開いた。

男のような乱暴な口調だったが、声の調子は女のようだった。

「盗人扱いは酷いなぁ、僕は彼女が古びた指輪が指から抜けなくて困っているようだったから、そっとそれを壊してあげただけさ」

両手をぶらぶらさせて何も盗んでいないことを主張する黒い男。

「……」

「そう驚くようなことじゃない。聖遺物を壊すのは簡単だ。不純物を混ぜてやればいい。純粋な物を作り出すより、不純な物を作り出す方がずっと簡単さ」

少しだけ時間がかかったけどね…と黒い男は自分を恥じて言った。

「…詳しいことは分からないが、その指輪を求めて、お前はこの町に来たのではないのか？」

「いや、そうじゃない。僕は聖遺物を手に入れる為にこの町にやって来た。指輪は要らない」

淡々と答える黒い男。

「…言いたいことが分からないが、その聖遺物とは、指輪のことだろう？」

首を傾げながら、女は黒い男に告げる。

聖遺物のことも、

指輪のことも、

黒い男の目的も、
何も知らないかのような反応だ。
「ねえ、いい加減とぼけるの飽きてこない？　『レイヴ・ロウンワード』」
静かに黒い男は女に向かって呟いた。
銀髪に碧眼の日本人ではあり得ない容姿に、学生服を来た服装。
黒い男と向かい合っていたのはレイヴ・ロウンワードだった。
「……」
「もう分かってるんだろ？　僕が求めていた聖遺物は『君』だってことに」
黒い男は何の感情も込めずに淡々と告げた。
レイヴ・ロウンワードは人ではないと…

第三十九話　剣

「……」

レイヴ・ロウンワードは、先日出会った黒い男について思い出していた。

『君を害するつもりは毛頭無い。そもそも、僕は戦う人じゃないからね』

『…どういう意味だ？』

『君と言う聖遺物を求めて来たのは事実だけど、僕は隙間の神じゃないからね。聖遺物ならどれでもいい…と言う訳でも無いんだ』

『……』

『僕は人間か、人外か、そんな些細なことは気にはしない。だけど、他の人間はどうだろうね？』

（…そう悪魔のように私に告げて、あの黒い男は去っていった）

「……」

レイヴは沈黙したまま、どこかへと歩いていった。

「……」

神無棺は目の前の光景を黙って見守っていた。

隣の衣も同様だ。

「…オレをパシったくせに放置するとはいい度胸さ。オレが自分の正義の為にはなりふり構わない人間だって分かってるのか？」

棺達の視線の先にいる色雨に突っかかっている侍のような風貌の男。

棺達は初対面だが、前回の聖遺物騒動の時にも働いていた銘式濁里だ。

普段は低血圧で冷静な顔を不機嫌そうに歪めて、色雨を睨み付けている。

と言うのも…

色雨に言いくるめられ、騒動の時に全力を尽くし……具体的には自身の聖痕を使って町中を何周もソロマラソンしていた。

しかし、

「オレが気づかない内に事件解決とはどういうことさ…いや、何故オレに連絡を入れなかった？」

「電話したけど、電源が入っていなかったんだよ」

「電源？」

「君、携帯電話、充電したことある？」

色雨の呆れたような声に自分の携帯電話を取り出して固まる濁里。

どうやら、充電を忘れていて電源が切れてしまっていたようだ。

携帯電話については未だ、勉強中だ。

「…不覚」

切腹する直前の侍のように言い、濁里は膝をついた。

「…さて、君達。高涙布津花さんの一件はとりあえず解決したよ」

気を取り直して色雨は呼び出した棺達に言った。

「それで、指輪がどこに行ったか分かったのか？」

「残念ながらそれは分かっていない。君が最近になるまで聖痕使いとして確認されなかった理由と同じく、起動していない聖遺物は、探知機に映らない」

「起動している（見えていない）時に探知機に映り、起動していない（見えている）時には探知機に映らないとは皮肉だな」

苦笑をしながら棺が言う。

「既に化石に近い物だ、寿命で自然崩壊した可能性は無いのか？」

「…それはあり得ないと思うよ。聖遺物は例え何千年と経とうと滅びず、ミサイルに直撃しようと壊れない…そうでもなければ、二千年も世界中を旅なんて出来ないさ」

「やけに詳しいな。一応、隙間の神の中でも機密事項なんだろう？」

隙間の神は聖痕の秘匿を目的とするだけの組織ではなかった。

正確にはその聖痕を生み出した混乱の元凶、聖遺物の回収が目的だった。

それ故に日本の各地に支部を置き、探知機を使い、探している。

ただ、聖痕を秘匿し続けると言う訳ではなく、全ての元凶である聖遺物を回収すると言う最終目標がある。

恐らく、その元凶である聖遺物について、隙間の神は何かしら掴んでいるのだと棺は予想した。

その形状、名称、力、現在位置。

少なくとも、現在それが日本にあることを知っているから隙間の神の支部は日本にしか無いのだろう…

「私は…一度だけ聖遺物を見たことがあるんだ」

「隙間の神が探しているやつか？」

「分からない…けど、それを『武器に使ってきた奴』には沢山の同僚を殺された…五年も前のことだ」

「武器に使ってきた？　聖遺物を？」

確かに高涙布津花の一件の原因である『ギュゲースの指輪』も姿を消す力なら、武器に使えば強力だろう。

しかし、実際はどうだ。

高涙布津花は知らなかったとは言え、指に付けても、姿を消され、戻ることも出来なくなるだけだった。

英雄の物語の聖剣のように選ばれた者にしか扱えないのか、それとも本来人間には扱えないのかは分からないが、そう簡単に扱うことが出来ないのは事実。

それを使いこなし、隙間の神を何人も殺した者。

「……」

「聖遺物は奇跡の詰まった爆弾なんだ。制御できる者がこちらにはいない、危険な存在なのを忘れないように…ね」

色雨はそう最後に棺に忠告した。

「…たっく、何なんだよ、あのシリアス顔は」

苛立ちながら棺が言う。

思い出すのは忠告する色雨の真剣な顔。

「ああいうのが、オレは、一番苦手なんだ…」

常に流されやすく、自分の主張はしない、不真面目でヤル気なしスタイルを取ってきた棺にはあの忠告は重かった。

今まで色々あったが、死にそうになったことなど一度もない。

非日常、非現実と言われようと棺からすれば日常の延長線上。

よく分からない友人（衣）に巻き込まれたに過ぎず、巻き込まれる前に自分から首を突っ込んだことも一度もない。

過去に何があったのかは知らないが、そういう熱意とか決意とかモノを押し付けられるのが棺は嫌だった。

そもそも、棺は聖痕には衣に言われて関わっているだけであり、出来れば関わりたくなどなかった。

何故かは自分でも分からなかったが、自分の失った八年前より以前の過去、赤い髪と瞳と言う容姿の理由、自分に宿った聖痕について

『知りたいと思わなかった』時に似ていた。

衣にも言われたことのある棺の異質な部分。

聖痕を宿しながらも一般人に完全に溶け込めた理由。

（それは、多分…）

棺はふと、思った。

それは既に失った八年前より以前のことだろう。

恐らく、十歳以下の幼少の棺は…

「聖痕には二度と関わりたくないと思ったんだろう…普通に暮らしたいと…願っていたんだろうな」

他人事のように棺はそう呟いた。

「はぁ…全く、あいつ人使いが荒いぞ」

落河揺祇はここにはいない色雨に文句を言った。

先日の聖遺物が行方不明なのでそれらしき指輪を見た者がいないか

探すように揺祇は色雨に言われていた。

揺祇の聖痕『虚偽記憶（フォールス・メモリー）』は記憶を上書きする聖痕だが多少の融通は効く。

例えば、上書きする前に『古いデータ』に目を通すことなどが出来る。

「…正直言って気乗りはしないがな。と言うか、あの男…『権天使（アルヒャイ）』と『主天使（ドミニオンズ）』で一応、筆者と階級は同じだと分かってこき使っているのか？」

ぶつぶつと文句をいいながらも適当にインタビューを装い、記憶を覗いていく。

「あ、すいません。インタビューにご協力下さい…」

ふと、視界に入った人影に揺祇が声をかける。

記憶を覗いたり、いじったりするのにも条件がある。

炎などの直接的な聖痕とは違い、精神系は扱いが難しくデリケートなのだ。

怪しまれないように手帳とペンを手に、その人影に近づいた所で…

「…え？」

その人影が凶器をこちらに向けた。

思わず固まる揺祇を無視して凶器は振るわれる。

「！」

慌てて、その凶器を回避する揺祇。

上から雑に降り下ろされた凶器は空を切った。

「何だ、いつの間に…」

困惑したように言う揺祇。

何の前触れもなく、いきなりだった。

いつの間にか先程まで無かった凶器がその人影の右腕に握られており、有無を言わさず、降り下ろした。

距離を取り、落ち着いて揺祇はその人影を見る。

手に握られた凶器は真っ赤な剣だった。

端から端まで返り血を浴びたかのように赤く、柄から先の部分、人を斬りつけるはずの刃の部分は山羊の角のように捩れていた。

剣…と言うよりは先端は槍に近いかもしれない。

斬るよりは側面で殴るか、貫くかで敵を殺す武器。

それを手に持った人物は女だった。

日本人にはあり得ない銀髪に碧眼の…

「まあ、どうでもいいな。筆者の名は落河揺祇…そちらは？」

思考を止めて揺祇は問いかける。

「レイヴ・ロウンワード」

お喋りな普段の姿からは考えられない程に簡潔に感情なく答えた。

「何で筆者を狙う？　無差別か、それとも最初から筆者を狙っていたのか」

「……」

それに対してレイヴは答えなかった。

そして、もう会話することはないと言うかのように、揺祇へ向かっていく。

揺祇は戦闘タイプの聖痕使いではない。

しかも、聖痕装置を使った戦闘訓練もしていない根っからの非戦闘員だ。

純粋な戦闘力は一般人にも簡単に負けるだろう…

だが、揺祇は何故か笑みを浮かべた。

「…条件は満たされた」

静かに揺祇は『勝利宣言』をした。

精神系の聖痕はデリケートであり条件が存在する。

揺祇の『虚偽記憶（フォールス・メモリー）』の条件は一つ、

それは『対象の名前を知る』こと。

揺祇は向かってきたレイヴの腕を掴んだ。

いや、非力な揺祇を見れば触れただけだったのかもしれない。

しかし、条件の満たされていた揺祇の聖痕は『起動』する。

「少し記憶をいじって混乱させる…ぞ！」

微かに静電気のようなものが揺祇の腕から走った。

これで勝負は決まった。

そう揺祇は思っていた。

「……何？」

おかしい…と揺祇は疑問を感じた。

記憶を上書き出来ない。

それどころか、古いデータを覗くことも出来ない。

揺祇の掴んでいた非力な腕を振り払われた。
再び手に持った歪な剣を振り上げるレイヴ。
「何で…」
確実に揺祇の聖痕は起動したはずだった。
かわされてなどいない、ずっと腕に触れていた。
直接的な聖痕、例えば炎の聖痕だったなら、実は防火スーツを着ていたなど理由があるかもしれない。
しかし、精神に直接干渉する聖痕をどのような装備で防ぐ？
それこそ『聖痕そのものを消し去る力』でもない限り不可能だ。
「……」
無言でレイヴは困惑する揺祇に剣を降り下ろした。

第四十話　増援

「落河揺祇が襲われた？」

「そうだよ、昨日ね…あ、怪我の方は特に心配はいらない。無傷だ」

色雨に呼び出された翌日、再び呼び出された棺は驚きながら色雨に聞いた。

聖遺物を探していた落河揺祇が何者かに襲われたらしい…と。

「無傷？」

「ああ、今は寝ているけど一度意識も回復した。頭を殴られたはずなのに頭部に何の外傷もなかったことを不思議に思っていたよ」

昨日、気絶した揺祇が他の隙間の神に発見され、すぐに病院に運ばれた。

今日になってようやく意識を回復した揺祇は色雨に語ったのだ。

「襲ってきた相手は、古くさい奇妙な武器を扱っていたらしい」

「古くさい奇妙な武器…？　まさか」

「聖遺物の可能性が高い。通常の聖痕じゃあり得ない『聖痕を無効化する力』を持っていたらしいからね」

揺祇に教えられた情報を棺にも伝える色雨。

「あからさまだな。聖痕使いを狩るのに嫌みなぐらい『向いた』力だ」

「ああ、恐らく、落河揺祇が聖痕使いだと知って狙ったのだろう…」

隙間の神だとも知って狙ったのかは不明だけど…と付け加えながら色雨は言う。

「…ところで、衣は何で呼ばれてねえんだ?」

ふと、既に来ていると思っていた少女の人影が支部に無いことに気づき、棺が色雨に聞く。

「今回の危険度は高い。衣は関わらせたくない」

「兄心と言うやつ?」

「言うなら、親心だよ」

棺の言った軽口に色雨はそう答えた。

「さて、本題はここからなんだ。襲撃者の特徴…と言うか名前なんだけど…」

歯切れの悪く色雨は言う。

棺に伝えるべきか、今になっても迷っているようだ。

「何だ、名前まで分かっているのか？」

それに気づかず、棺は色雨にそれを促す。

「……レイヴ・ロウンワードと名乗っていたそうだ」

色雨は静かに告げた。

名乗っていたなどと曖昧に濁したのは、衣からレイヴのことを聞いていたからだった。

「……はぁ？」

「最近、町が騒がしいな」

車椅子に座った男、軽根間人（カルネ マヒト）が呟いた。

見慣れた自身の病室には、やたらと世話を焼きたがる初和音実（ハツワ ネミ）もおらず、間人一人だ。

「……」

最近、色々な事件がこの町で起こっている。

この病院での一件、由来達による一件、聖遺物による一件…

全てが特に犠牲者も出さずに解決したが、かつてこの町を守っていた間人は何を思っていただろう。

何も出来ない自分自身が悔しく、解決に乗り出していた者達が羨ましかったのでは無いだろうか…

その時、病室の扉が開く音がした。

音実がやって来たのかと、辛気臭い顔をやめて扉の方を向く間人。

「ハロー、負傷者。はじめまして」

そこに立っていたのは音実ではなかった。

ポンチョのような黒い服を着た、とにかく黒いことだけが特徴的過ぎて他の個性を塗り潰している男。

「誰かな?」

「聖痕使い」

間人の質問に簡潔に黒い男は答えた。

「隙間の神…では無さそうだね」

何となく、直感で間人は理解した。

この者は違法聖痕使い。

隙間の神の敵対者だと…

「そうだとしても君に糾弾は出来ない。一般人に逮捕権がないように、無力な非聖痕使いになった君にはそんな権利はない」

間人の心を抉るような言い方をする黒い男。

「君は今、ただの一般人…だけど、君の足が、弱り切った身体が、癒せれば再び戦えるかもしれないね」

「…何？」

地獄の亡者に手を差しのべるような口調で言われた言葉に間人が反応する。

「君が力を取り戻したいならだけどね」

「取り戻せるのか！」

「ああ、僕の力は『癒し』…ありとあらゆる神話の中で最も有名な奇跡だよ」

蜘蛛の糸を掴むカンダタのように、その言葉にすがり付こうとする間人を見て、黒い男は手を翳す。

不治の病に犯された病人を癒す救世主のように…

「お前は一体…」

うま過ぎる話に少し疑心が宿ったのか、間人が黒い男に聞く。

「名前は幾つもある。だから一番頻繁に名乗っている偽名を名乗るとするよ」

黒い男は笑いながら言う。

「『ベルフェゴール』……怠惰を推奨する悪魔の名前だよ」

そう言い、悪魔の名を持つ男は笑った。

悪魔は優しい。

試練や苦痛など与えない。

ただただ、尽くして、堕落する様を楽しむだけだ。

「レイヴ…」

支部から出て一人になり、棺は呟く。

普段からよく分からなく、謎が多い悪友の名を…

「何を考えてんだか、あいつは…」

ため息をつきながら棺が呆れたように言った。

しかし、それはまるで、いつものようにレイヴの悪戯に呆れている時のような声だった。

実際のところ、棺はレイヴが聖痕使いかもしれないだとか、レイヴが聖遺物を扱うだとか、そういうことはあまり深くは考えていなかった。

ようはレイヴがこのような行動に出た理由さえ分かれば棺は仮にレイヴが宇宙人だろうがどうでもよかったのだ。

この適当さが、棺の短所でもあり、長所でもある。

納得いく理由なら、悪友としてレイヴに協力をする。

納得いかない理由なら、悪友としてレイヴの邪魔をしてやる。

その二択だった。

「…さて、と」

棺は呟く。

「じゃあ、理由を話してみろよ。腐れ縁だ、場合によっては協力しないこともないぜ？　レイヴ」

「……」

棺は目の前に現れたレイヴにいつものような調子で言った。

「どうもです江枕色雨殿。オレは第五部隊『能天使（エクスシアイ）』の令宮祭月（レイグウ　サイゲツ）と言います」

学者帽を被り、サングラスをかけた白髪の男が支部から出てきた色雨に言った。

その後ろには約三十人程の人間が並んで立っている。

「これは一体何事かな？」

事情が飲み込めない色雨が聞いた。

「後ろのは全員第四部隊『力天使（デュナメイス）』の方々ですよ。聖遺物の調査の為に派遣されて来たのですが…まあ、オーバーキル上等って感じだがな」

敬語に慣れていないのか、やや素の口調が混じりながら祭月は言う。

「ちなみにオレは聖痕装置の開発が専門の非戦闘員ですが、後ろの方々の中には聖痕装置を愛用している者も多いんで、そのメンテナンス係って所だ…です」

「…なるほど」

怪しい敬語を聞き流しながら色雨が言う。

「では、まあ、これよりそちらの指揮下に入るんで、よろしくお願いします」

祭月は頭を下げながら色雨に言った。

第四十話　増援（後書き）

おまけ

色「そういえば祭月君、階級は同じくらいで歳もそんなに変わらなそうなのに何で敬語なんだい？」

祭「いや、オレは初対面とかまだ親しくない人間には敬語を使うようにしてるんですよ」

色「ふーん。あともう一つ気になってたんだけど、三十近い人間の聖痕装置のメンテナンスに一人で当たるのかい？」

祭「…それは聞かないで下さい。うちの部隊は人数が簡単に入れて、雑用がメインなんですけど、とにかくハードワークで…これくらいはいつものことだぜ」

色「そ、そうなのかい？　部隊ごとに違うようだね」

祭「ふ、ふふふ…」

第四十一話　優先順位

「実は私は人間じゃないのであーる！」

「……」

割とシリアスにレイヴに訳を聞きにきた棺にレイヴが最初に話した言葉がこれである。

棺は思わず無言になってしまった。

「聖遺物の中の聖剣と呼ばれる存在…まあ、簡単に言えばＲＰＧとかでよく出てくる『生きている剣』なのである。エクスカリバーとかの親戚」

驚く程、いつもの調子で棺に正体を明かすレイヴ。

「…おいおい、少しばかりシリアスになったってのに変わらねえな」

「私は何も変わっていないであるよ。誰かに操られている訳でも、誰かに脅されている訳でもない。今まで通り、いつも通り、普段通りのレイヴである」

言葉通り、レイヴは誰かに言われて何かをしていると言う雰囲気ではなかった。

どこまでも自分本意。

それは暗に、自らの意思で揺祇を傷つけたことを意味していた。

「人間がどうであるかは知らないであるが、私はそう簡単に『優先順位』は変わらないのである」

「優先順位だと？」

「格付け、重要性などは人それぞれである、差別をしない人間なんて存在しない…いや、存在してはならないのである」

自分は人間ではないとレイヴは言ったが、敢えて自分を人間に例えて持論を話し始める。

「何故なら誰にでも平等な人間は誰一人『特別』がないと言うこと。誰も大切に出来ないことは人として間違っている。差別は必要なことである」

「…で、何が言いたい？」

「つまる所、私にとって、棺達との日常も大切だが、それ以上にこの行動が大切だと言うことである」

レイヴはそう断言すると左手を虚空に上げる。

すると、大気に色を塗るように山羊の角のように捻れた異形の赤い剣が現れた。

「なるほど、生きている剣…それがお前の本体って訳かよ…ハッ、聖剣って言うか魔剣だな」

「その指摘は意外と的外れでもないであるよ。どちらかと言えば栄光の剣よりは呪われた剣に近い存在であるのだから」

「そうかよ！」

とりあえず、ぶん殴って考えを変えさせる。

そう思い、棺はレイヴに向かって走り出す。

それを見て、レイヴは軽い調子で剣を降り下ろした。

棺にはリーチが足りずに届かず、コンクリートの地面に剣がぶつかる。

その瞬間、バチッと火花と言うには強すぎる赤い閃光が迸る。

「チッ！」

「聖痕使いなら誰でもいいのであるのでな、ならば、優先順位の低い赤の他人を狙うである」

閃光で目が眩んでいる棺にレイヴが告げる。

「それではな」

最後にそう言い、レイヴは歩いていった。

「恐らく、件の聖遺物は純粋に歴史を重ねてきた物ではなく、武器に改良されたタイプですね」

支部にて、祭月が色雨の話を聞いて言う。

「どうしてそう思う？」

「元々聖痕装置は聖遺物を模して作った物ですから、聖痕装置開発、整備が主な仕事のオレ達は隙間の神に保管されている聖遺物に接する機会が多いんだよ」

そう言うと、祭月は懐を漁って紙束を取り出す。

「そもそも聖遺物は奇跡を溜め込んだ爆弾だが、言うならそれは火山みてえな物なんだ。噴火すれば確かに絶大な威力と危険性を持ちますが、人の手には余る。武器にすることなんて出来ない」

紙束を読みながら祭月は話を続ける。

「ただし、そこに人の手を加えて改良すれば話は別…火山の熱を利用した武器とかな。つまり、積極的に戦闘に使えると言うことは改良型聖遺物と言うことになるんです」

「なるほど」

「剣と言うことは柄に聖遺物の欠片でも埋め込んだ聖剣ってところか…まあ、聖遺物自体が珍しいが、聖遺物の中で言えば、それほど

珍しい種類でもない…大方一般人が操られて暴走しているんだろ、剣から手を放させれば終わりです」

「…大した知識だね」

感心したように色雨は祭月に言う。

歳もそんなに離れていないように見えるのに、色雨が何も知らなかった聖遺物についてそこまで知っていることに色雨は驚いていた。

「…まあ一応、非戦闘方面では天才と呼ばれたこともありますから」

大して自慢気にもならず、祭月は言った。

「…やれやれ、無駄遣いだったであるか」

棺から逃れたレイヴは赤い剣を見ながら呟く。

それほど人通りの多い道ではないが、人目を引いても困るので、レイヴはすぐに赤い剣を消した。

隙間の神に気づかれないように人としての肉体の中に隠したのだ。

これで探知機にはレイヴは反応しない。

この方法でレイヴは長い間隙間の神の目を逃れてきたのだ。

「あまり悠長にはしていられないであるな」

そう言い、レイヴは歩き出した。

「…チッ、あの馬鹿が」

視力の回復した棺は苛立ちながら呟いた。

レイヴをぶん殴って頭を冷やさせるつもりが、あっさりと逃げられてしまったからだ。

「はぁ、やれやれ、一年の付き合いだが、あんな真剣な目は初めてみた…」

棺は一年の付き合い故に気づいていた。

レイヴは表情や態度はいつもの調子だったが、目だけは真剣だったことに。

「一体何があのお気楽能天気をそこまで駆り立てるのかねえ…」

ため息をつきながら棺は一人呟いた。

「……ん？　お前」

ふと視界の端に映った人間に棺は気がついた。

それは…

「補足できましたよ。件の聖遺物」

祭月はタッチパネル式の小型モニターを見ながら色雨に言った。

「本当かい？」

「このオレが開発した新型探知機は聖遺物のみに反応する機械なんで、他の通常の探知機よりは高性能なんですよ」

機械をいじりながら祭月は言う。

「さて、さっさと回収して帰るとしましょう」

第四十二話　邂逅

「んー、中々いい感じに暴走し始めているな…」

喫茶店で呑気にコーヒーを飲みながらベルフェゴールを名乗る男が言う。

店内にはまだ昼過ぎだと言うのに誰もいない。

実はこの店も含む、この一帯はレイヴを追い込んで、戦闘を行う場所に選ばれており、記憶操作と情報操作により辺り全て無人となっていた。

滅多に使うことを許されない聖痕装置の効果であり、特殊な電磁波を撒き散らすことで作動する。

そのような物が使われることから、隙間の神がそれだけ聖遺物を危険視していることが分かる。

一般人は電磁波を浴びて、すぐにこの場から無意識に立ち去ったが、一般人の人払い用の聖痕装置が聖痕使いに効く訳もなく、ベルフェゴールは平気な顔でコーヒーを飲んでいた。

「そろそろ、追い詰められてぶつかる。戦力はまあ、五分五分と言ったところ…かな？」

テーブルにマジックで落書きをしながらベルフェゴールは言う。

テーブルにはレイヴの名前と離れた所に棺の名前、他多数と書かれていた。

恐らく、レイヴと戦うであろう戦力の名前を書いているのだろう。

「…しかし、隙間の神も、ケチ臭いな。抵抗する聖遺物を回収するのに『たったこれだけ』の戦力しか出さないなんて…あんな連中、僕より弱いよ」

他多数にバツ印をつけて、顔を曇らせながらベルフェゴールは言った。

「見つけましたぜ」

祭月がレイヴの目の前に立って言う。

学者帽を外し、気だるそうに頭を掻いている。

「まあ、これでオレの仕事は終わりました。後は武道派の皆さんがやっちゃって下さい」

面倒くさそうに力天使達に祭月は指示を出した。

「……」

それを無言で色雨は見つめていた。

祭月は隙間の神としての命令を果たすこと以外には興味がないのだ。

犯罪者の言い分も罪状も、この命令が正しいかどうかにも興味がない。

正義としてではなく、仕事として隙間の神に尽くしている。

こちらの方が正しい形なのだろう…

だが、

「妹の友人を私が…」

それは世界よりも優先している大切な人の一人である妹を悲しませることにはならないか…

「グアアアアー！」

色雨が迷っていた時、悲鳴が上がった。

見ると、レイヴに向かっていった力天使の一人にレイヴの持つ赤い剣が突き刺さっていた。

「なっ…」

「…喚くな、である。血も傷もない。命に別状はないである」

レイヴの言うように引き抜いた赤い剣には血はついておらず、刺された力天使の方も気絶しているが、無傷だった。

「ほんの少しだけ『奇跡を喰った』だけ、であるよ…ごちそうさま」

「喰った…？」

「そう」

棺達に普段見せている笑顔とは違い、冷めた笑みを浮かべてレイヴが言う。

「クソッ、調子に乗るな」

力天使の中の一人の手から炎が放たれる。

聖痕によって生み出された炎は意思を持つかのようにレイヴに向かっていく。

「だから無駄だって」

それをレイヴは剣を軽く横に払うだけで防いだ。

炎は剣に触れた瞬間、風景に溶けるように消えた。

「奇跡とは人間が聖痕と呼ぶ力のこと。私はそれを喰らい取り込む聖剣（魔剣）『ダーインスレイヴ』…である」

「聖痕を無力化する力……君は聖遺物に操られているのではなく、聖遺物そのものなのか…」

レイヴの口振りに色雨がレイヴの正体に気付いた。
聖痕使いの聖痕とは異なる力を扱うレイヴは人間では無いと…
「その通りである。聖痕は私には効かない。悪いけれど大人しく私に食べられてくれない？」
「それは、遠慮したいな。聖痕が効かないなら、聖痕装置を使うとか手段はまだあるんだよ」
色雨の言葉と共に力天使達が手に持った聖痕装置を構えた。
「……」
それに無表情でレイヴは剣を構えた。

「コーヒー…いや、カフェインが切れた…」
ふらふらとふらつきながらベルフェゴールが言う。
飄々としたマイペースな態度を崩し、顔がかなり青ざめている。
「…マズイ、禁断症状だ…どこかで缶コーヒーを……うん？」

「これは聖痕装置？　一体何が…」

ベルフェゴールの視界に柔らかそうな栗色の髪の少女が入ってきた。

（…聖痕使いの子？）

栗色の髪の少女、江枕衣と面識のないベルフェゴールは青い目で見た。

ベルフェゴールは普通の聖痕使いとは違う異質な所があり、聖遺物や聖痕使いを一般人と区別出来ることもその一つだ。

だが、特に興味がなかったのですぐに缶コーヒーの自販機を探す作業に戻った。

「あ、あのあなた、聖痕使いですよね！　派遣された隙間の神の方ですか？」

「うぇえ！」

完全に思考から離した時に話しかけられたので思わず変な声を上げるベルフェゴール。

「ごめんなさい、いきなり…あの、何が起きているか分かりませんか？」

「え？　あ、ああ…聖遺物の回収に苦戦しているようだから、本部から派遣されたんだ」

（びっくりした…完全に意識の外だった。何か僕を隙間の神と勘違いしているみたいだから、そのままにしておくか）

「そうなんですか！　私、何も聞いてないんです…やっぱり、兄さんが…」

「……」

（うーん、お兄さんに嫌われちゃってるのかなぁ？　それは気の毒だな）

「すいません、出来れば、現場に連れていってくれないでしょうか？」

「…え？」

第四十三話　魔剣

「兄さんは自分の見ていない所で私が怪我するのが凄く怖いみたいで…過保護なんですよ」

「そうなんだ…まあ、僕も妹がいるから、そのお兄さんの心配する気持ちは分かるよ」

歩きながらベルフェゴールと衣は話していた。

衣はベルフェゴールが本部から派遣された隙間の神だと完全に信じきっているようだ。

「ベルフェゴールさんは妹さんがいるんですか？」

「うん、まあ、たくさんいるよ。今は」

「今は？」

（…複雑な家庭なんでしょうか？）

何となく含みを感じたその言葉に衣が反応する。

「ま、心配する方の気持ちも分かってあげようね」

「…分かりました」

聞いてはいけないような気がして、衣は詳しく聞こうとはしなかっ

た。

「…強いね」

壊されてしまったウリエルを手に色雨が言う。

視線の先の気絶して地に転がる力天使達の中央にレイヴは立っていた。

「年の功であるよ。こんな姿でも五十年近くは生きているのであるからな」

生きている剣が言う。

その姿は先程までとは変化していた。

綺麗だった銀髪が濃い鈍色へと変化し、頭に山羊のような角が二本生えていた。

「…しかし、生きている剣と言う割に予想よりも人間に近い姿だね」

「剣が本当の姿であるよ？　この姿はイメージとかを元にして作った偶像『贖罪山羊（スケープゴート）』…萌えるであろう？」

ふざけた調子で自分の角を指差して言うレイヴ。

「どうかな…そう言うのは私はよく分からないよ」

困ったような顔をして色雨が言う。

「…さっきから思っていたのであるが、何で本気で戦わないのである？　お前は聖痕使いであろう？」

「バレてたか…色々と事情があって私は聖痕を使うことが出来ないんだよ。だから私が聖痕使いであることはみんなには秘密ね」

悪戯がバレた子供のように苦笑しながら色雨が言う。

「事情…であるか。どうせ『古傷』が傷んで聖痕が使えないとか、そう言う理由であろうが…」

「ま、そんなところ」

「…フン、疑問は晴れたである。悪いが私は貪食でな…その奇跡、喰らわせてもらうである！」

話はこれまで…とレイヴが剣を片手で構え、色雨に向かって走り出す。

色雨の手には壊されたウリエルしかなく、周りの味方の手助けも期待できない。

「……」

色雨は戦意喪失したのか、構えすらしなかった。

その瞬間、

ギィン！　と金属同士がぶつかる音が響いた。

色雨が剣を受け止めたのではない。

突然、割り込むように飛んできた鉄パイプをレイヴが剣で弾いたのだ。

「…なあ、なあおい棺！　今のスゲーオレ格好よくなかったか？　マジヒーローだろう？」

「台無しだよ」

鉄パイプが飛んできた方をレイヴと色雨が向くと二人の男が立っていた。

一人は赤髪と赤眼が特徴的な不良のような風貌の男、神無棺。

冷めた目でもう一人の男を見ている。

もう一人の興奮した様子の男は…

「なっ…」

驚いた声を上げたのは色雨の方だった。

明るい性格で、車椅子に乗っていたが、少しも陰を感じさせなかっ

た男。

軽根間人だった。

しかし、今は車椅子などには乗っておらず、自分の足で立っている。

「お久しぶりだな、色雨。見舞いにあんまり来ないから寂しかったぞ」

「間人…なんで、君は…」

「まあ、足のことなら後回しだ。悪魔と取引をしたとでも思っていてくれよ」

病院にいた時よりも更に明るく、活発に間人は笑う。

「とりあえず、あの馬鹿をいじめて頭を冷やさせるのが先だ、色雨」

棺がレイヴを指差して色雨に言う。

レイヴはそれを黙って見ていた。

「さて、なら三割増しでパワーアップして復活した、正義の味方、軽根間人の聖痕を見せてやるよ！」

間人が叫び、両腕を広げると周囲の鉄パイプや看板などの『金属』が浮かび上がった。

その全ては間人に引き寄せられるように集まり、間人の周囲を回っている。

「オレの聖痕は『磁気浮上（マグレブ）』。磁力を操る聖痕だ！」

間人が虚空で腕を振るうと同時に金属は全て、レイヴに放たれた。

レイヴの前に聖痕は無効化される。

金属を浮かばせている磁力（キセキ）はレイヴに喰われてしまうだろう。

だが、その『勢い』は止まらない。

磁力ではなく、物体の運動は何の奇跡でもないごく平凡なことなのだから。

「クッ…」

強引にレイヴは金属を全て叩き落とした。

聖痕を無効化する力は後に付属された力に過ぎない。

本来の剣の力はその強度。

そして、生きている剣そのものであるレイヴが自分自身を使いこなせないはずがない。

だが、

「隙ありだ。この馬鹿！」

その間に近付いた棺がレイヴに弾かれた鉄パイプの一つを手にして

振るう。

「チッ！」

ガキィンと金属同士が触れ合う音が響いた。

「たっく、何なんだよその格好は、山羊か？　またコスプレかよ」

「コスプレではなく、直に生えているのであるよ？触ってみるであるか？」

そう会話をしながらレイヴは剣を振るい、棺は鉄パイプを振るう。

「悪いけど、女にコスプレさせるような趣味はねえんだよ。女は外見じゃなくて中身だろ？」

「女性恐怖症がよく言う…と言うか、女相手に鉄パイプ振りかざすのはどうなのであるか？」

「お前を女扱いするつもりはねえんだよ。オレはな」

ガキィンと再び金属同士が触れ合う音が響いた。

双方に敵意はなく、喧嘩相手にぶつけるような感情を向け合いながら二人は得物を振るい合った。

「友人と元同僚…さて、オレはどっちの味方をすれば良いのさ」

甘酒と刀を持った侍のような男、銘式濁里（メイシキ　ニゴリ）はそれを少し離れた所から眺めていた。

「善良な判断としてはレイヴを捕らえる側だけどさ、隙間の神に従う義理もないしな…」

悩みながら行動を起こすことが出来ない濁里。

「今はあの赤いのに任せるしかないか…」

ガキィンと何度目かの音が響く。

「痛てて…手が痺れた」

「喧嘩慣れしているとは言っても所詮はただの高校生…五十年近く生きてきた剣である私には敵わないであるよ」

「ゲッ、お前老山羊だったのかよ」

痺れた手をぶらぶらさせながらレイヴに言う棺。

「剣自体が作られたのは更に昔であるが、自我と姿を手に入れたのは五十年前であるよ」

「自我を手に入れた？」

「本来の聖遺物はただの『物』である。ただの者が奇跡の力を蓄積したのが聖痕使い。ただの物が奇跡の力を蓄積したのが生きている聖遺物である」

「なるほど…」

「ついでに言うと、私はその中でも更に特殊な聖遺物でね、奇跡を取り込んで、更に蓄積することが出来るのであるよ」

赤い捻れた剣を振りながらレイヴは言う。

レイヴの言葉と共に剣が赤く光り出す。

「まさか、その為に…」

「そうである。隙間の神から奪って蓄積した奇跡を、『引き出す』ことも出来るのである。こんな風に」

その瞬間、レイヴの剣から赤い光が放たれ、棺は包み込まれた。

第四十四話　大切なモノ

「また『無駄遣い』だったであるか…」

放たれた赤い光によって起きた土煙を眺めながらレイヴは呟いた。

無駄に体力を使ったことの後悔と言うよりは、蓄えた金を使いすぎた後悔に似ていた。

「あとは、倒れた隙間の神から奇跡を奪って…」

「奪って…どうするつもりなんだ？」

レイヴによく知る声がかけられた。

赤い髪に赤い瞳、服装も赤で統一した不良のような顔付きの少年、神無棺だ。

身体は無傷だが何か聖痕のような不可思議な力が働いているのか、顔色は悪く、ふらついている。

周囲には色雨達隙間の神もいるが、全員棺と同じように顔色が悪い。

「…やれやれ、私としてもお前をそう何度も傷付けるのは正直、気が進まないのであるが」

「おいおい、悪役に成りきれてねえぞレイヴ。そこは豹変して問答無用でオレを殺す場面だろ」

表情が読めないが、少なくとも楽しそうには聞こえないレイヴの言葉に棺は呆れながら言う。

「前にも言ったであろう。優先順位である。何かを優先しているからと言って、他の何かの大切さが無くなった訳ではないのである」

「なるほどな。つまりお前にとって、この騒動はオレなんかより大切なことだって訳か、妬けるなあ…いい加減話せよ、何がそんなに大切なんだ？　お前は何がしたい？」

ふざけたような口調で話しながらも目だけは真剣にしてレイヴを見る棺。

「…ある一人の大切な親友がいた。殺人の為に人間に造られ、人を殺し続けて赤く染まっていった聖剣に笑顔をくれた親友である」

「……」

「親友は身体が弱かった。いつも私に元気に笑ってくれたが、日に日に弱って、やがて笑わなくなってしまった…」

感情を圧し殺したかのような無表情でレイヴは言う。

「親友を救う為に私に何か出来ないかと、悩み抜いた結果。私は『奇跡を集める』ことを思い付いた。聖痕などと呼ばれ、加工されているが、本来は人を世界を救う力。親友を救うことができるかもしれない」

「…それで、隙間の神を襲った訳か。ありがちな台詞だが、誰かを

救う為に別の誰かを傷付けるのはどうなんだ？」

「『命は平等じゃない』…それは皮肉でも冗談でもなく真理である。本当に大切な者なら、他のどうでもいい者のことなど気にならないはずである。平等を掲げる者は全ての者の価値が等しく、大切な者がいないと言うことである」

「ヤンデレかよ。まあ一理あるが、それが自分以外に受け入れられないってことは分かっているよな……たっく、言えばこんなどうでもいい力なんて幾らでもくれてやったってのによ」

棺は心底呆れ、軽く失望したようにため息をついた。

「とりあえずお仕置きだ。そのあとでその親友って奴を救おうぜ！」

棺はそう叫ぶとレイヴに向かって走り出した。

棺は走る。

いつも面倒なことに巻き込もうとするくせに、こういう時に限って棺を遠ざけようとするこの馬鹿者にお仕置きをする為に走る。

レイヴからかけられる迷惑など、今更過ぎて拒む気もないと言うのに…

そう思いながら、棺はレイヴに向かっていく。

「はーい、ストップ。皆さん頭を冷やせよー」

その時、脱力するような緊張感のない男の声に棺は思わず足を止め

た。

棺とレイヴ、色雨達隙間の神が声の方を見ると、少し離れた場所に一人の男が立っていた。

特別珍しい格好をしている訳ではなかった。

地味すぎて逆に目立つ訳でもなく、何と言うか、殺人犯として報道されたら十人中十人に意外に思われそうな平凡な男。

「あいつは…」

色雨が呟いた。

この場で色雨だけがその男を見たことがある。

「はぁ全く、仕事増やすなよなー。どんどんどんどん予想外なことが起きて困った困ったー」

面倒くさそうに男はため息をついた。

「…自己紹介でもするか、オレは違法聖痕使い組織、反逆者（レベル）のボスの右腕、逸谷不戒（イッタニフカイ）だ」

「反逆者…江枕氏、オレの鈍い記憶が正しければ例のトップにマークされている組織では？」

「その通りだよ、一度会ったこともある」

「…うへぇ、最悪。デスクワーク派は現場に出てくるものじゃないですねぇ」

心底嫌そうな顔で祭月は言った。

「しかし、何でここであいつが出てくる？」

逸谷の方を見ながら色雨が呟く。

「何なんだ、お前は？」

レイヴが逸谷に剣を向けて聞いた。

それに対して逸谷は何故か深いため息をついた。

「レイヴ・ロウンワード…お前がもう少ーしだけ、大人しくしててくれれば、オレの仕事も楽だったんだけどなー」

「どういう意味だ？」

レイヴの代わりに棺が逸谷に聞いた。

「あー、お前がもしかしてうちのオーミーをいじめてくれた奴？赤い髪だから分かりやすいわ」

「あの病院であった奴の仲間かよ…」

自称魔法使いを思い出しながら棺が言う。

「そうだぜー。オーミーを知ってるお前なら話は早い…お前さ、疑問に思わなかったのか？　何で『あんな場所』でオーミーと遭遇したのか」

あんな場所…を強調して逸谷は言った。

「…あんな場所？」

棺は首を傾げた。

オーミーと遭遇したのは、そんなおかしな場所ではないはずだ。

夜で人がいなかったのは、まあ置いておくとして、

それ以外はただの病院だったはずだ。

『病院』

「…まさか」

「気付いたか？　そうただの病院だ。特別価値がある人間が入院している訳でもないただの病院だ。『オレ達にとっては…な』」

そう言い、逸谷はレイヴを指差した。

「『あの子』が入院している病院か…」

レイヴは呆然として言う。

「その通り。つまり、あの時のオーミーの仕事はレイヴ・ロウンワードにとって重要な少女を誘拐し、レイヴ・ロウンワードをオレ達の組織に引き込むことだったのさー…ま、予想外なことが起きて失敗しちまったけどな」

逸谷は今度は棺を指差して言う。

「何で私のことを…」

「おいおい、オレ達をナメるなよー。情報量なら隙間の神にも負けないぜ？　お前がうちのボスの目に止まってから居場所を特定するまで、数ヵ月と経っていないぜ…」

「…では、あの子の容態が急変したのも」

「無論、オレが毒手でやったことさ。元々は死なねえ状態を保ったままで病菌を止めて、人質にするつもりだったんだがー…ま、結果オーライだ」

ヒラヒラと手を振りながら逸谷は言う。

「さて、どうする？　ちなみに一度でもオレの病菌が体内に入り込んだ奴はどこにいようが、オレの意思一つで発病して、病死する…ただ、こうして立っているだけでも、立て籠り強盗が少女のこめかみに拳銃を突き付けている状態だー」

「なら、そのお前が死んだら意思は無くなるんじゃないか？」

少し得意気に言う逸谷に色雨は冷静に敵意を込めて言った。

手には壊れたウリエルとは違う拳銃のような形の聖痕装置が握られている。

色雨だけではなく、周囲の力天使達も各々の武器を構えている。

倒すべき敵が、レイヴから逸谷へと変わったのだ。

「あ、あらら？　ちょっとちょっと、一対…ざっと三十以上？　オーバーキル過ぎるだろ！」

一変して焦ったように逸谷が言う。

「さて、どうする？　大人しく撃たれるなら、命だけは保証してあげるよ？」

「ちょっ、大人しく撃たれるって…あ、待て待て、撃つな！」

逸谷が慌てて言った瞬間、パァンと乾いた音が辺りに響いた。

銃声…と言うには小さすぎたその音は、力天使達の聖痕装置から放たれた音……ではなかった。

色雨はその音の正体に気付いていた。

何てことはないが、意味不明だった。

音の正体は逸谷が慌てながら手を叩いた音だった。

ドサッと今度は色雨のすぐ近くから音が聞こえた。

続いてドサッドサッと次々と音が辺りに響く。

逸谷に武器を向けていた力天使の半分が地に伏した音だった。

「これは！」

近くに倒れた一人の首を見て色雨は気付いた。

首についた絞殺されたかのような痣。

このような死体を見たことがある。

「だ・か・ら、さっき言っただろー？　ただ、こうして立っているだけでも拳銃を突き付けている状態と同じだってなー」

そう言い、逸谷は笑った。

色雨が初めて見た、外見だけは平凡な逸谷の異常性を表す歪んだ笑みだった。

「今の全部、あいつがやったのか？」

逸谷の聖痕を知らない棺が色雨に聞く。

「うん。あいつは触れた人間を病死させる病菌を操る聖痕を持っているんだ……だけど、いつのまに」

「オレの聖痕『薬剤耐性（ドラッグ・レジスタンス）』の本質は、感染することでも殺傷することでもなくではなく『伝染すること』だ…オレの病菌は感染者に触れた者にも伝染し、更に広まる」

「そうか、だから…」

「そう！　だから、感染させた後にすぐ殺さず、放置して広めたのさー…我慢できずに殺しまくるのはただの獣だ。人間なら、理性を持って殺人を犯す人間ならば利用してから殺すとボスはオレに教えてくれた」

ここにはいない誰かに心酔しているような口調で逸谷が言う。

それに色雨は聖痕装置を向ける。

「解説ありがとう。おかげでお前と感染者に触れなければ死なないことがわかった…死体に触れず、この距離からお前を攻撃すれば何も出来ないだろう」

色雨の言葉に動揺していた生き残った力天使達も逸谷に武器を向ける。

「またこのパターンかよ。皆さん、少しは自分で考えろよなー、ここに隙間の神が約二十人、イレギュラーが二人、全員オレの敵な訳だがー」

全員を見渡し、人数を数えながら逸谷は言う。

そして、呆れたように軽く笑うと…

「さて、この中に発病させなかった感染者は何人紛れ込んでいるでしょうか？」

この場にいる全ての人間を凍りつかせる言葉を静かに告げた。

「さーさーパニックの始まりだ。パンデミック、スタート！」

第四十五話　黒い癒し

「う、うわあああああ！」

一人が悲鳴を上げた。

自分が感染しているかもしれないと言う不安に耐えきれなかったのか、誰かから伝染させられるかもしれないと言う疑心が生まれたのかは分からないが、それがきっかけだった。

「来るな！　オレに近付くなよ！　殺すぞ！」

「あ、ああ、オレさっき死体に触れちまった…」

「死にたくない、死にたくない、死にたくない！」

傷口から入り込んだ病毒が全身を回るように、パニックは広がっていく。

力天使はまだ戦える人間が二十人以上存在したにも関わらず、誰も逸谷に武器を向けなかった。

否、向けれなかった。

現在、逸谷の言う感染者は逸谷の気まぐれで生きていることになる。

それが、自分かもしれない以上、誰も逸谷に逆らうことが出来ないのだ。

感染しているかどうかを区別する手段はない。
そもそも、錯乱している者達に近付いただけで、同士討ちに合うだろう。

「…くそっ」

人間の心理をついた上手い手だ…と色雨は思った。
解毒剤のない病毒を操ることで、死の恐怖から人間も操る。
もしかしたら、全てハッタリかもしれない。
なのに、その可能性を誰も信じられない。
人間誰しもネガティブな所が必ずある。
良い方に考えると同時に最悪の可能性を思い浮かべてしまうのだ。
棺とレイヴ、祭月などはパニックに陥っていないが、周囲の状況に動揺してしまっている。

「無様だなー。一応、プロだろうがー」

パニックに陥る者達を馬鹿にしたような目で見ながら逸谷は言う。

「さて、オレは人を殺すのに何の躊躇もしない殺人鬼だが、無価値な殺戮はボスに禁止されているんでな、とっとと仲間に入ってくれるなら命を助けても……って、うおっ！」

逸谷がレイヴの方を向きながら言いかけた時、いきなり何もない空間から刀が現れて、逸谷に独りでに斬りかかった。

慌てて逸谷はそれを後ろに下がり、回避する。

「…誰を敵とするか迷っていた。だが、お前が現れて迷いがなくなったさ！」

刀と甘酒を持った侍のような格好の男、銘式濁里（メイシキ　ニゴリ）が空間を通り抜けて現れた。

「おいおい！　だーかーらーさー、後ろの連中がどうなっても…」

「悪いが、オレは隙間の神じゃないさ」

焦って言う逸谷にいつも通り冷静に言う濁里。

そして、逸谷を捕らえる為に刀のような聖痕装置を振るう。

「ちょ、丸腰の相手に刀を振り回すなよ！」

「感染すれば確実に死ぬ病毒を自在に操れるとは言っても、感染しなければ意味はないさ！」

そう言うと同時に濁里は刀の柄で逸谷を殴った。

頭を殴られ、ふらつきながら逸谷は後ろに倒れる。

「やったのか？　意外と肉弾戦は苦手とか？」

あっさりと倒れた逸谷に、それを見ていた棺が首を傾げた。

「濁里…」

「レイヴ。まあ、色々と言いたいことと聞きたいことはあるんだが…後回しさ」

倒れた逸谷に刀を突きつけながらレイヴの方を向いて濁里が言う。

「今すぐ病毒を解除しろ。殺人鬼とは言っても自分の命は惜しいだろ？」

「…確かに、これは死ぬかもなー。オレにはＲＰＧの勇者みてえに秘められた力なんかねーし」

諦めたかのようにため息をつきながら逸谷は言う。

「お前には話してもらわねければならないことが沢山あるんだ、すぐに…」

「だがよー…」

逸谷が濁里の言葉を遮って言う。

首に突きつけられている刀を見る。

「殺人鬼にもプライドってやつがあるんだよ！」

そう叫ぶと、逸谷は突きつけられていた刀を素手で握り締めた。

「なっ…」

「ハハハッ！　殺人鬼が命を惜しむだと？　馬鹿言うなよ。『命が軽い』から殺人鬼なんてやってるんだろうがよー！」

聖痕装置とは言え、刀を直接握り締めたことで手から血を流しながらも逸谷は、笑う。

殺人を好まないと言い常人であろうとした部分が消え去るほどの、狂気的な笑みだった。

逸谷は刀を握り締めていない方の手で濁里の首を掴もうとする。

触れた瞬間に生死を逸谷に左右されてしまう毒手だ。

「くそっ！」

刀を手放し、濁里は自分の力を使い、逸谷から瞬時に離れた。

「ハハッ！　おいおい忘れ物だぜー？　オレにくれるのか？　ハッ、いらねーよばーか」

刀を投げ捨てて狂ったように笑う逸谷。

「やべーよ。ボスの命令が全部どーでもよくなってきちまう！　あー最近人殺してなかったからなー…あー人殺してー」

「レイヴ、あいつの聖痕を無効化できるか？」

「その前にパニックを……いや、病毒に犯された人質を解放しないと…」

棺はレイヴに聞くがレイヴは人質が気になり、戦うことが出来ない。

「さっさと終わらせて帰って頭冷やすかー…ハハッ！…ん？」

逸谷がそう笑った時、逸谷の視界に何かが映った。

「おいおい、今度はどちら様だよ。また助っ人ー？」

「その通りです！　助太刀に来ましたよ！」

逸谷の言葉に柔らかそうな栗色の髪をした低目の背の少女、江枕衣が答えた。

それを見て、色雨は驚き、棺はため息をつく。

「何でこの状況でお前が来るかな……待て、その後ろに立ってる奴…」

棺は衣に離れるように忠告しようとして、その後ろにいた黒づくめで目だけが青い男に気付いた。

「こんにちは、どうやら、めんどくさい状況になってるみたいだね」

「お前、何で衣と…」

「そんな威嚇するような目はやめてよ。せっかく僕が救ってあげようと思ってるのにさ…全く、怠惰を推奨する『ベルフェゴール』の

名前に相応しくない、働きだよ」

困ったような顔でベルフェゴールが言う。

「はぁ？」

「今、胡散臭いと思ってるでしょ…見てろよ、僕の聖痕をさ」

棺を見ながらベルフェゴールが手を空に翳した。

瞬間、ゾワッと棺は全身に鳥肌が立つのを感じた。

ただ、寒気を感じただけではなく、息苦しさまで同時に感じた。

何をしようとしているのかは分からなかったが、それをやめさせようと棺が叫ぼうとした時、

「…ああ、ご心配なく。見た目がちょっとだけ有害だけど、身体には悪くない癒しの奇跡だから」

そうベルフェゴールが棺に言った。

言葉とほぼ同時に何か黒い物がベルフェゴールの手から噴き出し、錯乱している者達を包み込んだ。

光化学スモッグのような、有害で身体に悪そうな黒い煙霧だった。

癒し…とベルフェゴールは言ったが、素人でさえ触れるのを恐れるような有害なのが一目で分かる程に毒々しい煙霧だ。

「おい、お前！」

「だから、気持ちは分かるけど、アレは癒し。消毒水よりも身体に優しい、癒しの風さ」

棺の言葉にベルフェゴールはふざけた調子で言う。

「しかし、癒しと言うものは奇跡の象徴だが、それを極めると神への最大の冒涜になる。医学を極めて死者すら蘇らせ、神の怒りを受けて死んだ『アスクレーピオス』の話は有名だね」

癒しは救済だが、極めると神への冒涜になる。

不治の病は奇跡で救うことが神に許されても、死を免れることは許されない。

それ故に、ありとあらゆる奇跡を起こした救世主達は死んだ。

神の如き癒しを使い、死を拒絶することは神から最も忌諱される悪行なのだ。

だから、ベルフェゴールは救世主ではなく、悪魔と呼ばれる。

「…おいおい、マジで病菌が消えてるんだけどよー」

思わず、口を滑らしてしまう逸谷。

その目線の先は先程までパニックに陥っていた者達。

「ちなみに、病院の人質も既に癒してあるから」

逸谷を見てベルフェゴールが言う。

「旗色悪いな…撤退だ！」

「待て！」

そう言い逃げ出した逸谷を正気に戻った力天使が追いかけていった。

「深追いはしない。もう、彼には戦う力は残っていないでしょう？」

呆れたように呟きながらベルフェゴールが自分が救った者達に手を翳す。

瞬間、先程よりも更に禍々しい黒い煙霧がベルフェゴールの手から噴き出した。

棺はそれに再び寒気を感じたが、何も出来ない。

自分が救った者に向けることなどあり得ない程の害意を含んだ攻撃。

それは横から飛んできた、尖った金属片が腕に突き刺さったことで中断された。

「痛いなぁ…何するの？」

「お前こそ何をしようとしていた」

突き刺さった金属片を引き抜きながら言うベルフェゴールを軽根間人は敵意を込めた目で睨み付ける。

「救ったかと思えば、自分の手で壊そうとする…お前は誰の味方がしたい？」

「僕は誰の味方でもない。僕は平等だ。誰であろうと平等に救うし、平等に傷付ける」

ベルフェゴールは迷いなく言い切った。

それを見て、棺はレイヴの言っていた優先順位の話を思い出した。

どんな人間だろうと平等じゃない。

赤の他人より大切な者の方が大切なのは真理。

平等な人間と言うのは誰も特別な人間がいないと言うことになる。

それが、目の前いる人間なのか。

「まあいいや。こんな傷、唾でもつけていればすぐに治るし、今日はもう帰るとするよ」

ベルフェゴールがそう言って金属片が突き刺さっていた腕を振る。

だいぶ深かったその傷は、ほとんど治りかけていた。

「それじゃあね、神無月…じゃない、神無棺君」

最後に棺の方を向いてベルフェゴールは言うと、黒い煙霧に包まれて消えた。

第四十六話　橋上にて

「ベルフェゴール…か。場を掻き乱すだけ掻き乱して帰って行きやがったな」

「結果的にはそれが良かったのかもしれないね…あの毒使いの方も現在、力天使が追っているし…」

棺のため息混じりの言葉に色雨は言う。

「ふん…それで、まだ色々とやることが残ってんじゃねえの？」

レイヴの方を見ながら棺が色雨に言う。

まだ、この騒動の始めたレイヴに対する対処を聞いていない。

逸谷やベルフェゴールのせいであやふやになっていたがレイヴが隙間の神を傷付けたことに違いはない。

「そのことか…利用されようとしていた訳だから情状酌量…だけど、聖遺物…だしな……祭月君はどう思うかな？」

聖遺物は回収。

しかし、生きていて、しかもその行動には悪意は込められていなくて…

特殊過ぎるケースに色雨が頭を悩ませて近くにいた祭月に聞く。

「オレですか？　…そうですね。聖遺物として処理するなら回収して解析、もしくは封印。聖痕使いとして処理するなら今回のはギリギリセーフで拘束はなしってところでしょうかね」

隙間の神の定める法は人を傷付けることなどは勿論のこと、聖痕を秘匿しないことも重罪になる。

その点だけで言えば、聖痕使いのみを人の少ない所で狙い、必要以上に聖痕を使わなかったレイヴは罪には問われないのだ。

人を傷付けた点でも人質を取られていた（厳密には取られる前に暴走した訳だが）ことを考えればそれほど重い罪ではない。

問題はレイヴを『物』と見るか『者』と見るかだ。

色雨個人の判断としては、レイヴを者として見たいところだが、この場には祭月など別の隙間の神もいる。

「いいんじゃないですか」

それをどうするか…と色雨が悩んでいた時に祭月が呟いた。

「別に、いいんじゃないですか？　そこの…レイ…？さんを拘束しなくても」

「何故？」

「放置しても危険そうには見えないですし、何より、拘束するには骨が折れそうなんでな。オレが上には適当に報告しときますよ…」

欠伸をしながら祭月は色雨に言った。

善意…と言うよりはただ、単純に職務熱心ではないだけのようだ。

「では、よろしく頼むよ、祭月君」

「はいはーい、江枕氏……んん？」

祭月がそう言いかけた時にその横を小さな人影が通っていった。

「あれ？　何でレイヴさんがここにいるんですか？　それに棺、さっきの黒い人は隙間の神ではなかったんですか？　色々と事情を説明して下さい！」

色雨のせいですっかり蚊帳の外にいた衣だった。

棺達に少し怒りながら説明を求めている。

「私の妹だよ。少し危なっかしい所が不安だけどね」

祭月が衣を見ているのに気付いた色雨が言う。

「んんー？　どこかで見たことがあるような…」

首を傾げながら祭月は独り言のように呟く。

「衣はこの町を離れたことはないはずだけど…この町に来たことが？」

「いや、この町に来たことはないのですが…他人の空似ですかね？」
そう言うと祭月はもう興味は失ったかのように歩き出した。

「一件落着か…」

「そうであるな…一先ず、私はあの子の無事を確かめてくるである」
いつのまにか山羊のような角を引っ込めたレイヴが棺に言う。

「そうか、まあ、何か必要だったらオレを呼べ」

「分かったであるよ」
レイヴは棺に言うが、何故か中々病院に向かって歩き出さない。
言葉を選ぶように無言になりながら棺を見ている。

「どうした？」

「今日の出来事で、私の評価が五段階上がって友達から親友になったであるよ」
いつもとは違う穏やかな笑顔でレイヴは言って歩いていった。

「何だそりゃ…」

呆れたような顔をした後に棺も歩き出す。

「あれ？　棺もどこか行くんですか？」

それを見ていた衣が棺に聞いた。

「ちょっとな…」

衣達と別れた後に棺は川に来ていた。

この町に唯一ある川だが、流れが速く、深いことで、遊泳禁止になっており橋が先日老朽化して壊れてしまってからは近付く人はかなり減ってしまった。

だが、棺の目の前にある川には何故か元の木で出来た橋ではなく、石橋が架かっていた。

その石の手すりにベルフェゴールが座っていた。

「どう？　この橋、僕が直したんだよ」

「知るか、原形留めてねえじゃねえか」

橋の上を歩きながら棺がベルフェゴールを睨む。

「僕なりのアレンジだよ。僕は水が大嫌いでね、木の橋なんて恐ろしくて渡れないよ。烏の行水…とは少し違うか」

「ふん。傷を負うのも死ぬのも怖くない…みたいな感じだったくせに水が怖いのかよ」

先程怪我を負っても顔色一つ変えずに治したことを思い出しながら言う棺。

「それは誤解だよ。僕だって死ぬのは怖い。あれは死なないのが分かっていたから冷静だっただけさ」

薄い笑みを浮かべながらベルフェゴールは言う。

「死ぬのが怖くない人間なんていない。死を恐れないと叫ぶ強者は、ただ単に死ににくくなったから、傷に恐怖を感じなくなっただけだよ。死を恐れなくなった訳ではないんだ」

死を恐れない人間はいない…繰り返してベルフェゴールは言った。

「実体験でもあったかのように話すな…」

「うん。まあ、それは置いておこう。そんなことより君は僕に聞きたいことでもあるんじゃない？」

「そうだな。なら聞くぜ。お前、何を知っていて、何をする気なん

だ？」

「質問は考えてした方がいいよ。そんなの、今現在何も分かってないって言っているようなものじゃない」

ベルフェゴールが馬鹿にしたように笑う。

「質問が曖昧すぎてどう答えればいいのか分からないけど…まあ、聖遺物や聖痕を含む全ての奇跡については誰よりも詳しい自信はあるよ」

「そうか。なら教えろ」

「別に教えてもいいんだけどさ…ここは教えない方が黒幕っぽくていいかなぁ…なんて」

「そうか。ならボコる」

棺は極めて簡潔に言うと、ベルフェゴールに向かって走り出す。

「…ええー、何そのエゴイズム。ちょっとやめてよ。僕の戦闘力、兄妹の中で下から数えた方が早いんだからさ」

そう言いながら、ベルフェゴールは黒いポンチョのような服の中に両腕を隠す。

「…ッ！」

瞬時に棺は走るのをやめて後ろに下がった。

考えて動いたのではなく、ほとんど反射だった。

棺の視界に不吉な黒い物が映ったのだ。

「外れちゃったか…僕は臆病者でね。こうした物を使わないと人と戦うことが出来ないんだ」

ベルフェゴールはいつのまにか両腕に武器を握り締めていた。

黒一色の鎖鎌だ。

鎖の長さはどう見てもベルフェゴールの腕程の長さもないが、何故か離れた場所にいる棺に届く程の長さまで伸びるようだ。

「チッ」

ベルフェゴールが右手に持っていた方の鎖鎌を棺に投擲する。

ギリギリ届く長さまで伸びた鎖鎌をかわす為に棺は更に後退する。

接近戦に自信がないのか、ベルフェゴールは棺を近付けないつもりだ。

「君は自分を完璧だと思うかい？」

「何？」

唐突にベルフェゴールが言った言葉に棺が言う。

「人間は欠陥がある。どんな優れた人間にでも人間である限り、欠

陥がある……それは死ぬことだ」

「……」

「人間は死から逃れることが出来ない。その欠陥故に…だから、人間は完璧じゃないんだ」

ベルフェゴールは癒しの奇跡を持っている。

例えどんな欠損だろうが修復することがベルフェゴールには可能だろう。

だが、それ故に死に抗うことが出来ない自分の力を欠陥品だと思ってしまう。

「僕は怠惰な性格だけど、完璧主義者でね。妥協や諦めが嫌いなんだ」

「…それで？　死を超越した超人にでも進化するつもりか？」

「超人じゃない。人間を超えたい訳じゃない。アスクレーピオスのように神に嫌われる存在に『人間から外れた存在』になりたいだけなんだよ」

そう言うと、ベルフェゴールはいきなり鎖鎌で自分の首を掻き切った。

「なっ…」

棺が驚きの声を上げたのはその突然の行動に驚いたからではない。

その傷が十秒と経たずに癒えたからだ。

「どう？　癒しの力も極めれば、ただ気持ち悪いだけでしょ」

「知るかよ」

棺は再び走り出す。

それを見て、素早くベルフェゴールが黒い鎖鎌を投擲する。

「チッ」

棺は鎖鎌をかわす為に横に飛んだ。

ベルフェゴールが直した橋はそれほど幅がないので、危うく川に落ちるところだったが、何とかかわすことができた。

すぐに体勢を調えてベルフェゴールに向かっていく。

「まあ、横に飛んでかわせば少しずつ接近できるかもしれないけど、下は流れの速い川だ。着衣水泳したら溺れるかもよ？」

「オレは空を飛ぶことができるからな。落ちることなんて最初から考えなくていいんだよ」

走りながら棺がベルフェゴールに言う。

「空を飛ぶ…癒しと同様にそれもまた有名な奇跡の内の一つだね」

鎖鎌の片方を引き、投擲した方を回収しながらベルフェゴールが言う。

しかし、鎖を伸ばしすぎたのが仇となり、回収して投擲する体勢になる頃には棺はすぐ目の前にいた。

「足速いね！」

慌てて再び鎖鎌の片方を投擲するベルフェゴール。

狙うは、首。

「当たるかよ！」

棺はそれを頭を横に逸らすだけでかわした。

速度を落とさずにベルフェゴールに接近する。

その時、

「グッ…」

鈍い痛みを感じて棺が呻くような声を上げた。

見ると、棺の脇腹に『投擲していない方の黒い鎖鎌』が突き刺さっていた。

「こういうタイプの武器は両方に注意しないとダメなんだよ？　まあ、ただの高校生にそれは少し厳しかったかな？」

ベルフェゴールが鎖鎌を引き抜きながら棺に言う。

「ク…」

痛みはある。

しかし、出血も傷もない。

やはり、あの鎖鎌も聖痕で作り出した物なのだろう。

「死にはしない。僕、殺しは苦手でね。僕の武器は痛みを与えるだけで絶対に人を死なせないんだ」

鎖鎌を手で遊びながらベルフェゴールは脇腹を押さえながら膝をついている棺に言った。

「痛みも癒してあげるよ。ほら…」

ベルフェゴールは優しくそう言うと棺に向けて手を翳した。

自身が傷付けた人間を癒すだけだが、その仕草はまるで救世主のように神聖なものだった。

だが、

「…ふざけんな、そんな施しなんか受けるかよ！」

その翳した手を棺は掴んでやめさせた。

もう片方の手は痛む脇腹を押さえながらも、ベルフェゴールを睨み

付ける。

「変わってるね、癒しを拒否すると？」

「ああ、いらねえ。癒しだとか、治してやるだとか、『余計なお世話』だって言ってるんだよ！」

棺は片腕だけでベルフェゴールを突き飛ばした。

「やれやれ、なら、もう少し痛め付けて……あれ？」

再び鎖鎌を投擲しようとしてベルフェゴールは異変に気付いた。

『身体が浮いている』

「しまった…さっき手に触れた時に…」

「自由自在に空を飛ばせてやるよ」

立ち上がり、宙に浮いているベルフェゴールを棺は蹴飛ばした。

重さが存在しないベルフェゴールは風船のように弾かれて橋の外へふわふわと飛んでいく。

下は流れの速い川。

「ちょっ、ちょっと待ってよ棺君！　さっき言ったでしょう、僕は水が嫌いなんだって！　泳げないの！　金ヅチなんだよ！」

必死に空中でもがきながらベルフェゴールが言うが、棺は表情を変

えない。

「そうか。なら溺死しろ」

棺は聖痕を解除した。

「恨むよ！　絶対に化けてでるよ！　覚えてろよぉぉぉぉぉ……
……あ」

ベルフェゴールは大声で叫びながら川の中へと沈んでいった。

「…それで？　川に突き落とされたって？　聖痕使いって言っても
相手はただの高校生だろ？」

「情けないわね、お兄様…でもそんな情けない所も好きよ」

棺のいた川からかなり離れた所にベルフェゴールは倒れていた。
何とか川から引き上げてもらったようだが、割りと長い距離を流さ
れてしまったらしい。

「…久しぶりに死を覚悟したよ。いやホントに」

ベルフェゴールは引き上げてくれた二人の人物に顔色悪いまま言う。

「顔色悪いけど、大丈夫お兄様？　人工呼吸してあげましょうか？」

飴の包み紙のような派手で可愛らしいリボンをつけた女が言う。

このリボンの女は元々は不治の病で入院していたところをベルフェゴールに助けられ、『家族』に迎え入れられた人間で、ベルフェゴールに好意を抱いていた。

「いや、必要ないよ、アスモデウス。さっきは助けてくれてありがとう」

にこにこと笑顔を向けてくるリボンの女、アスモデウスに少し辟易しながらベルフェゴールが言う。

「いえいえ、好きな人に尽くすのを辛いと思う女はいないわ」

「んなことはどーでもいいんだよ！　問題はこのバカ兄貴が、隙間の…なんとかですらねえ奴に負けたってことだろ！」

アスモデウスを押し退けて乱暴な口調の十代後半くらいの少女が言う。

背中を大きく開けた露出度の高い服を着ているが普通の服を破いたような格好で色気はない。

「サタン。君は落ち着きが足りない。勝敗に拘るなんてゲームの世界の話だ。現実では生きていれば負けたっていいんだ」

「死にかけたくせに…」

「うっ…」

サタンの鋭い一言がベルフェゴールに突き刺さった。

だが、何とか気を取り直してサタンの小さな頭に手を乗せる。

「相変わらず心配性だな、サタンは。大丈夫、僕は死なない。前にそう約束したからね」

「し、心配してねえよ！　雑魚兄貴！　弱いんだから私を頼れって言ってんだよバカ！」

「ざ、雑魚…」

赤面しながらサタンが叫んだ言葉にベルフェゴールがまた傷つく。

「まあ、お兄様は家でワーストツーよね…一番古株だけど」

「……もういいや。もう研究所に帰ろう」

アスモデウスの言葉に更に傷つきながら、ベルフェゴールが言った。

悪魔の偽名を持つ三人の聖痕使い。

年齢、性別など外見はバラバラの、この三人には共通点があった。

それは三人共に『瞳が青い』ことだった。

第四十七話　後始末

「はぁ…はぁ……たっく、いい加減しつこいっての…ちょこっと暴れただけじゃねえかよー」

棺達の町から離れた場所にある山奥、未だに撒けない力天使達を睨みながら逸谷不戒は呟いた。

「しっかし、久しぶりにやっちまったな…殺人にはまらないように気をつけてるってのに…」

やれやれと僅かに後悔と自己嫌悪をしながら逸谷はため息をついた。

意味のある殺人は何とも思わない。

だが、無意味な殺戮は出来るだけしたくない。

殺人は手段だ。

殺人が目的になってはならない。

それが一般人には分からない逸谷のモットーだった。

「ボスに怒られるかなー…ボス結構潔癖症だからなー……と言うか、それ以前にこいつらを振り払わないとボスに殺されるな」

さて、どうしようかねー…と独り言をいいながら力天使達をもう一度見る逸谷。

「止まれ違法聖痕使い！　探知機を使っているからお前は逃げられないぞ！」

モーニングスターのような形の聖痕装置『ラファエル』を持った力天使が言う。

「キツいなー…とりあえず一人を毒して、それから話術でまた錯乱させるか」

ため息をつきながらそう決めて立ち止まる逸谷。

それに気付き、力天使達も武器を構えて立ち止まる。

その時だった。

突然、地震のように大地が揺れた。

「な、何だ？」

ラファエルを持った力天使が言った。

大地が揺れたのは一時的なもので、すぐに収まった。

何か巨大な物が落ちてきたようでもあった。

「…俺様を散々待たせて、漸く帰ってきたと思えば、何だこの様は？」

傲岸不遜な声が力天使達の耳に届いた。

しかし、声が向けられているのは力天使達ではない。

「ボ、ボス…」

「しかも、任務は失敗したように見える…お前にまだ利用価値が無ければこの場で潰しているところだ」

地毛ではなさそうな金髪、口にくわえた電子タバコ、端正な顔立ちだが、どこか近寄り難いマフィアのような雰囲気を持つ男が言う。

「それはどうも…と言うかボス、助けに来てもらってなんですけど、正体隠してたんじゃないですか？」

「二年も待ったんだ。もうじき俺様も動く。ここにいる奴らはその準備運動に貰うぞ」

「どうぞ」

多大な尊敬と、微かに畏怖を交えた表情をしながら逸谷は言う。

「お前は誰だ。反逆者のボスと言うことは、元隙間の神か！」

「俺様はそこのお喋りとは違って秘密主義でな。自分で考えろ」

電子タバコをくわえた男はそう言った後に何の動作もしなかった。

ただ、突っ立っていただけだったが、聖痕による奇跡を起こした。

バキバキッ！…と異様な音が力天使達の周囲から発せられた。

慌てて、周囲を見渡すと、周囲に生えていた大木が、次から次へと不可視の力で地面から引き抜かれ、虚空で静止していた。

その数、二十から三十。

「観念動力（サイコキネシス）！　だが、何の動作も無しに、ここまで…」

「お前達は聖痕装置で武装して丸腰の聖痕使いと対抗しようとするが、本当の聖痕使いには武器など必要ないんだ」

「く、くそっ！」

虚空に静止している武器が放たれる前に操っている本人を殺そうと、力天使の一人が銃のような聖痕装置を向ける。

その瞬間、音を発てて聖痕装置はへし折れた。

「スプーンを曲げるのは筋力じゃない。必要なのは曲げると言う意思のみ。スプーンだろうが、ビルだろうが同じ労力でへし折れる」

電子タバコをくわえた男が呟くように言うと、力天使達の持っていた聖痕装置が全てへし折れた。

同時に静止していた大木達が動き、尖っていて殺傷力の高い部分を力天使達に向ける。

「ずば抜けた観念動力（サイコキネシス）、二年前…お前まさか、鐘神季苑（カネガミキエン）か！」

へし折れたラファエルを持った力天使が思い出したように電子タバ

コをくわえた男に叫んだ。

電子タバコをくわえた男はそれに肯定も否定もせず、笑っただけだった。

「へー、鐘神季苑って言うんですか、ボスの本名」

力天使達を電子タバコをくわえた男が串刺しにした後に逸谷が聞いた。

一応右腕と呼ばれる存在だったが、秘密主義で疑心暗鬼なボスから本名の話を聞いたことはなかった。

「…隙間の神では二年前に死んだことになっている。生きているとバレたら色々と動き辛くなるんでな」

曖昧に電子タバコをくわえた男『鐘神季苑』が言う。

「死を偽装するなんて一体何したんですか？　大量殺戮とか？」

師匠の武勇伝を聞く弟子のように少しわくわくしながら逸谷が聞く。

「さあな。当時は少しばかり俺様も若かったのかもしれんな」

年寄り臭く季苑が思い出しながら言う。

「つーか、この際だから聞きますけど、ボスって何歳ですか？」

本名を聞いた後なのでせっかくだからと、割と前から疑問に思っていたことを質問する逸谷。

「俺様か？　二十歳だが」

「ええっ！　えっ、ウソ、マジで！　オレ二十三だから年下ッスか！　つーか、どう見ても二十代後半……いや下手したら三十…」

「そうか、喧嘩を売っているのかお前は…」

「あ、やべ、口が滑った、ああ、木を浮かべないで、ああ、狙いを定めないで、ああ、死ぬー！」

「事後処理って本当に大変だね…」

「そうですね…って言うか何でオレだけこの町に残ってるんですか」

支部でいつもの如く、江枕色雨が書類を片付けながら本部への報告書を書いていると、その隣に令宮祭月の姿があった。

「どうもこの町は違法聖痕使いが集まる傾向にあるようだから、配属されたって君が言ってなかった？」

「そうでしたね…まあ、本部で忙しいよりはマシなんかな…」

ため息をつきながら祭月は諦めたように言った。

「…隙間の神の内情は分かったが、ところで、何でオレもここにいるんだ？」

その更に隣にいた軽根間人が言った。

「戦える人員が不足しているからさ。元気そうだし、また協力者になってもらったんだよ」

「相変わらず、マイペースな奴だ。病み上がりの人間をこき使うつもりか」

「いやいや、そんなつもりは全くないよ。無職ニートな友人に仕事をあげただけじゃないか」

「うっ、人が気にしていることを…」

さらりと毒吐いた色雨にダメージを受ける間人。

「何ならそのまま就職してくれて構わないから」

「…考えさせてもらうよ」

「初対面…ではないよな、オレは神無棺だ」

「オレは銘式濁里。元隙間の神で現在はお前と同じ、協力者さ」

ある病院の前で棺と濁里はそう会話をした。

今日、レイヴが自分の親友を紹介したいと棺、濁里、衣に連絡したのだ。

先日、レイヴが事件を起こした理由の親友。

棺達に今まで隠していたのを教えたことから、恐らく棺達のことを信用するようになったのだろう。

珍しく衣は棺を置いて先に行っており、棺は一人で来ていたところ、病院の前で濁里に出会ったのだ。

「協力者？　それが何でレイヴと？」

「まあ、色々とあってな。メル友になったのさ」

話すと長くなるので曖昧に答えて濁里は歩き出す。

「あー、あいつとメル友になると夜とか、かなりうるさいだろ」

一緒に歩きながら棺が濁里に言う。

「メールが早く打てなくて文句を言われているさ」

「機械音痴なのかお前？」

「そうらしい」

聖痕を使って違う場所から甘酒を取り出して、飲みながら濁里が言う。

「何だ、同い年くらいに見えるくせに、酒好きか？」

「甘酒に年齢制限はないはずさ」

甘ったるい臭いを纏いながら濁里が薄く笑う。

「そうかよ。つーか、お前便利な聖痕持ってるな」

「湾曲通路（ワームホール）のことか？　まあ、確かにわざわざ帯刀してなくていいのは便利さ」

甘酒をどこか別の場所に放ってから濁里が言う。

「帯刀…ステレオな聖痕使いもいたものだな」

「素手と鉄パイプよりはマシさ」

「……」

（言われてみれば…オレってステレオ？　って言うか原始人？）

軽くショックを受けながら棺は濁里と共にレイヴに言われた病室へ向かった。

「お、お前、オレ達にこんなことしてただで済むと思ってんのか！」

ボロボロの不良らしき格好の男達が路地裏で叫ぶ。

ナンパついでに、たまたま見かけた可愛い少女を路地裏に連れ込んだのだ。

すると、いきなりこの男が現れたのだ。

サンタクロースのような赤いナイトキャップを被り、アクセサリーを無数にぶら下げたマントを着た男。

帽子を深く被っている為に顔はよくわからない。

「オレは世界全ての少女の味方、白垣散瀬（シラガキ　サンセ）…不埒者など恐れないって訳よ！」

決めポーズを取りながら、散瀬はキラキラと輝く黄金の剣を取り出す。

「げっ、またあの滅茶苦茶硬い剣を出しやがった」

「チキショー、兄貴に言いつけてやるからな！」

頭を押さえながら不良達は退散した。

「…フッ、不埒者は去りました。お怪我はありませんかお嬢さん」

振り返り、座り込んでいた少女に言う散瀬。

「いえ、大丈夫です」

「そうか。それは良かったって訳よ」

キラキラゴテゴテの剣を片付けながら散瀬が言う。

「あの、何かお礼を…」

「お礼？　そんなものを求めるのは心が貧しい人だけって訳よ。これでもオレはそれなりに裕福な訳」

顔は半分隠れているが、それでも優しげな笑顔を浮かべながら散瀬は言う。

「それでも気が晴れないと言うなら……メールアドレスと携帯番号を……って痛い！」

「黙って下さい、不埒者」

散瀬が言いかけた時、後ろから割と大きめな石が飛んできて頭に命中した。

「痛いな…何するんだよ、パイロット」

「誘拐犯であるご主人が、これ以上犯罪を犯さないように阻止したまでです」

いつの間にか散瀬の後ろにいた少女が言った。

ヘッドセットをつけ、何故かメイド服を着た、『パイロット』と散瀬にあだ名で呼ばれている少女だ。

「ちょっと、誤解されるようなことを言わないで……ってああ！お嬢さんはいずこへ！」

「馬鹿やってないで行きますよ。隙間の神に見つかってもいいんですか？」

「…苦渋の選択だけど、あの子は諦めるって訳よ」

そう言い、奇妙な二人組はどこかへ歩いていった。

第四十七話　後始末（後書き）

オマケ

不良Ａ『棺の兄貴、オレ達は少しだけ女の子と話をしたかっただけなんスよ！　襲う勇気なんてないし！　なのにあのサンタみたいな奴が…』

棺「うるせえ、オレをお前達の事情に巻き込むな」

不良Ａ『そんなー！』

第四十八話　親友

「ジャジャーン、この子が私の親友である！」

棺達が言われた病室に入って早々に、レイヴがベッドに座った十二、十三歳くらいの少女の肩に手を置きながら言った。

「は、はじめまして…名残（ナゴリ）と言います」

弱々しく、腰が低そうに少女が頭を下げて言う。

「はぁ、どうも……神無棺です」

「…銘式濁里…です」

それにつられて思わず似合わない敬語を使う二人。

「何を呆けた顔をしているのであるか？」

「いや、お前の親友って言ったからさ、てっきり……なぁ？」

「ああ、お前みたいなのがもう一人いるのかと思っていたのさ」

棺と濁里が曖昧な表情を浮かべて言う。

二人共、レイヴには振り回されているので、親友と言うからにはレイヴに振り回されないような我の強い人間を思い浮かべていたのだった。

だが、名残はどう見ても振り回されるタイプだ。

「ちょっと、二人共レイヴさんに失礼ですよ！」

隣で椅子に座っていた衣が二人に言う。

「…衣、いたんだ」

「最初からいましたよ！　なんか最近、私の扱いが雑じゃないですか！」

驚いたような棺の言葉に衣が叫ぶ。

どうやら、前の騒動の時に蚊帳の外だったことを未だに引き摺っているようだ。

「ハイハーイ！　続いて質問タイムである！　質問がある人は挙手！」

「レイヴ、お前はお前でマイペースだな…いや、何でもないさ」

手を叩きながら言うレイヴに呆れながら濁里が言う。

「は、はい、質問です！」

「ってお前がするのかよ！　普通オレ達が質問する方じゃね？」

何故か質問される側なのに挙手をする名残。

「はい、名残！」

棺はスルーして名残に声をかけるレイヴ。

「えーと、神無棺さん…でしたよね？」

「しかもオレかよ…」

「ひっ、ごめんなさい…」

質問をしようと棺を見た名残が、棺の言葉に怯える。

周りが奇特すぎて薄れて見えるが、棺も赤髪に赤い瞳に赤い服など、割と奇特な外見をしている。

棺は普通に答えたつもりだったが、それが怖かったのだろう。

「謝るなよ、別に怒ってる訳じゃねえから」

「ごめんなさい…」

「……」

（……やり辛い）

周りにはいなかったタイプの相手に棺は困惑してしまっていた。

これでも自分では子供好きだと思っている棺だが、怯えられてはどうしようもなかった。

「棺、名残を泣かせたら、後悔するような目に遭わせるであるよ」

「…お前が怒ってるところをオレは初めて見たぜ」

殺意の込められた目をレイヴに向けられて棺は冷や汗を流す。

レイヴは相当親友思いな性格らしい。

そして、名残を泣かせたら棺はとんでもない目に遭わせられそうだ。

「やれやれ…」

何でこんなにもいつも通りなのか。

レイヴは人間じゃない。

それだけの事実があったのに棺達は変わらなかった。

否、変わらなかった訳ではない。

変わらない関係など、ありはしない。

だが、レイヴが人間じゃないと言う事実によって棺達の関係が悪い方向に変わるとも限らない。

真実を打ち明けたことで、真実を打ち明けられたことで結果的に友情が深まる場合もあったのだ。

「…そういえば、江枕氏。今回の一件を上は割と重く見てるってこと、知ってました？」

仕事をしながら、ふと思い出したように祭月が言う。

「どういう意味だい？　君をここに残したことを言っているのかい？」

「違いますよ。まあ、元は様子見にオレを配置する程度にしか最初は考えていなかったんだろうが、先程連絡が来ました」

事務仕事をする手を休めずに祭月が色雨に言う。

「…なんて？」

「どうも、例の反隙間の神の組織に力天使が全て殺されたらしいんです」

「なっ…」

事務的に言った祭月の言葉に色雨が絶句する。

力天使は隙間の神でも特に戦闘に特化した部隊だ。

逸谷に翻弄されたりしたこともあったが、戦闘訓練を積んだ者達である為に仮に撃退することが出来たとしても『一人も逃がさず、本

部に連絡一つ取らせずに』全てを皆殺しにするなど不可能だ。

「奴らが再びこの町に現れる確率は高い…本部から、更に戦力が派遣されてくるらしいです」

祭月は疲れたようにため息をついた。

「反隙間の神の組織、隙間の神の戦闘部隊、正体不明の青眼の聖痕使い…どうしてこの町にはこれ程聖痕使いが集うのでしょうね？」

「なあ、レイヴ。お前の正体が分かった上で聞きたいことがあるんだが…」

棺が前置きをしてからレイヴに言う。

今、二人は名残の病室から出て廊下にいる為、他の人間に聞かれることはない。

「…何であるか？　今更隠すことはないであるから、何でも答えるであるよ？」

レイヴが珍しくシリアスな顔で棺の方を向いた。

棺がそれを見てから口を開いた。

「お前って、実際は何歳なんだ？」

「んな！」

棺の素朴な疑問にレイヴは固まった。

「いや、外見は同い年ぐらいに見えるが、実際は五十年以上前から存在しているんだろ？」

「うっ！」

「いやいや、存在しているって言うなら、剣として製作されたのは更に前になる訳で…」

「うぐぐ…」

棺の言葉にレイヴが呻く。

言われたくないことだったのか、いつもと立場が逆転している。

それに気付いて段々と楽しくなってきた棺が更に調子に乗る。

「まあ、どのみちオレより年上な婆さんな訳だな」

「…メェエエエエー！」

「痛ぇ！」

山羊のような悲鳴を上げてレイヴが棺を殴った。

「黙って聞いていれば女性に向かって歳だの、婆さんだの、失礼よ！」

「喋りながら殴るな！」

「棺は女心が一ミリも分かっていないわ！」

「つーか、いつのまにか口調が女口調になってるぞ」

「うるさいわよ！　割と本気で怒っているから覚悟するのである！」

「おい、もはやキャラが定まってないぞ」

棺のデリカシーの無さにキレて思わず女口調になったレイヴは、その後しばらく暴れ回った。

「あー、色雨の奴、病み上がりをこきつかいやがって…肩こった」

軽根間人が自分で肩を揉みながら道を歩いていた。

支部の仕事も一段落終わったので、今は休憩時間だ。

久しぶりに入院時代から仲の良かった少女、初和音実（ハツワ ネミ）に会おうとこ

うして待ち合わせの場所に向かっていた。

ちなみに音実は中学生だが間人の婚約者だが、間人は断じてロリコンではない。

「……」

ようやく待ち合わせの場所の公園が見えてきた。

公園の中には人影がない。

いや、よく見ると中央の木の下に小さな人影が一つだけあった。

恐らく、音実だろう。

「しかし、誰もいない公園なんて危険だな。変態に連れさられるかもしれない」

間人が過保護なことを一人呟く。

案外、友人の色雨同様に、大切な者には過保護になる性格なのかもしれない。

「ん？」

考え事をしていて意識を逸らしていた為に間人は気付かなかったが、いつのまにか音実の隣に誰かいた。

なんと言うか、サンタクロースのような格好の男だ。

しかも、音実に話し掛けているようだが、音実が嫌がっているように見える。

「…オレの婚約者に手を出そうとするとは…いい度胸だな」

間人が静かに言うと、すぐに行動に移った。

間人の磁気浮上（マグレブ）で公園の遊具が浮かび上がってその変態に向かっていく。

細かい操作は要らない、ただ浮かばせてぶつけるだけが間人の聖痕だ。

「うおっ！　遊具が浮かび上がった！　何々、ＵＦＯの襲来なのかって訳！」

サンタクロースに似た変態が言う。

「公園の遊具の一部に成りたくなったら、さっさと音実から離れろ」

「ちょ、ストップ！　君は聖痕使いな訳か？」

「はあ？」

「なら、オレと君はお仲間な訳よ。同じ聖痕使い同士仲良くしよう！」

サンタクロースに似た奇妙な男は間人にそう言った。

第四十九話　散瀬サンタ

「それで、お前はただのナンパだと？」

「その通り。この愉快で素敵な散瀬さんは、断じて怪しい者ではない訳よ」

両手を上げて無抵抗のポーズを取りながら、サンタクロースのような変人、白垣散瀬が言った。

「変な人だけど、悪い人には見えないよ」

「…音実がそう言うのなら信じようか」

音実の言葉に頷きながら、間人が言う。

「どうもありがとう。軟派な性格な自覚はあるけど、流石に彼氏持ちに手を出す程に飢えてはいない訳よ。心が裕福なので」

二人を指差しながら散瀬は言った。

「…それはそれとして、お前は聖痕使いなのか？」

「いかにも…な訳。奇跡と言うより手品に近い陳腐な聖痕だけどね」

「隙間の神か？　それともそれに追われる違法聖痕使いか？」

目付きを鋭くしながら間人は散瀬に尋ねた。

惚けた風だが、油断は出来ない。

偽りは見逃さない…と心に決めた間人に睨まれた散瀬は少しだけ考えた後に…

「…どちらとも言えるな。オレは隙間の神でもあり、隙間の神に追われる立場でもある訳よ」

「…反逆者か？」

「それとも違う。説明すると長い。しかし、長く説明する時間はない。オレは常に追われる立場。追跡者は山ほどいる訳よ」

「？」

要領を得ない会話に間人は首を傾げた。

「江枕氏は散歩、軽根氏はデート…でしたか。羨ましいですね」

支部に一人残った祭月が独り言を言う。

「でも、二十歳過ぎて中学生の恋人はちょっと犯罪の臭いがしますね。ロリコンはいけませんよ」

誰も聞いていないのに一人で祭月は頷く。

「子供と言えば、江枕氏の妹さん…どこかで見たことあるんですよね…どこだったかな？」

喉に刺さった小骨が取れないような、歯痒さを祭月は感じた。

あの時は勘違いと思ったがどうにも見覚えがある。

だが、思い出せない。

祭月はこれでも記憶力はよい方で天才と呼ばれることもある男だ。

それ故にそれが無性に気になった。

「うーん……あ。もしかして…」

頭を抱えて記憶を辿っていた祭月がふと顔をあげた。

その時、

支部に設置された探知機が鳴り出した。

「…は？　違法聖痕使い？　このタイミングで！」

一瞬、固まった後に祭月は慌てて色雨に連絡した。

「痛え…痛えよ…」

「…今…何が…」

顔や腕に火傷を負った不良達が道に倒れていた。

不良達だけではなく、あちこちの地面も焦げており、この場で何があったのかを物語っている。

そんな不良達を見下ろす、一人の女がいた。

高級感溢れる服装をして、頭には立派な王冠を被っている『青い瞳』の女。

現実味のない格好をしているが、歴史に語られるどこかの女王がそのままここに現れたかのような、王者の気風を持つ女だ。

「鬱陶しいな。力を持たない出来損ないのくせに目障りだぞ」

ギロっと鷹のように鋭い目で王冠を被った女は不良達を睨んだ。

不良達はそれに怯えたが、身動きする気力はもう残っていなかった。

「なんぱ？　だったか……相手を選んでするべきだったな。不愉快極まりない貴様らをこのまま消すのは簡単だが、あまりモタモタしていると隙間の神に邪魔に入られるな…」

そう言うと、王冠を被った女は懐から一枚の写真を取り出した。

「消すのは一人だ。私は無駄に時間を過ごすのが嫌いでな。綺麗に消して仕事を終わらせるとしよう」

王冠を被った女はその写真を握り潰した。

写真には白垣散瀬が写っていた。

「だから、何でついて来る訳よ！」

「何でついて行くんだ？　音実？」

「面白そうだから！」

道を歩く散瀬…の後ろの道を歩く音実…の後ろの道を歩く間人。

いつのまにか三人は電車のようになっていた。

「だーかーらー、オレは悪い奴らに追われてるの！　悪の秘密組織に狙われてる訳よ！　お嬢さん、オレに触れたら火傷するぜ…」

散瀬が言い終わると同時に音実が恐る恐る散瀬の腕に触れた。

「火傷しないよ？」

「オーマイガッ！　何てこったい、何て純粋なお嬢さんなんだ。ヘイ、マイク。一体どんな育て方したらこうなるんだい？」

「誰がマイクだ」

テンション高めな散瀬に普段はどちらかと言えばボケ役の間人がつっこむ。

「やれやれ、音実も変なのに興味を持ちやがって…」

思わずため息をつく間人。

音実は正義の味方だった頃に間人が最後に救った一般人の少女だ。

偶然、違法聖痕使いが聖痕を使っていた光景を目撃した当時、ただの一般人だった音実は、違法聖痕使いに殺されかける。

そこへ、正義の味方を目指していた隙間の神の協力者である間人が駆け付けた。

隙間の神の協力者をしていたが、間人は協力よりも、人を早く救うことを選んでいた為に駆け付けた時には一人だった。

そして、正義の味方としての力を過信した、または敵を侮った…

もしくは、そもそも純粋に格が違い過ぎた。

理由は色々あるが、結果的に間人は悪に敗北した。
音実を救うことと引き換えに車椅子生活を送ることとなった。

「間人？」

だが、逆に言えば間人が車椅子生活を送る程度で音実の命が救えたと言うこと。

つまり、間人は少しもその時の選択を後悔していなかったと言うことだ。

「さて、音実。いい加減、二人でどこかへ…」

行こうか…と続けようとして間人は言葉を止めた。

「…ようやく見つけたぞ。私にこれだけ気にかけてもらえるなど、貴様は幸せ者だな」

王冠を被った威圧的な女が間人の隣にいる散瀬を睨み付けていた。
王冠を被った女が睨み付けていたのも、言葉をかけていたのも、散瀬の方だったが間人は思わず、その女を凝視してしまった。

「お前、まさか、あの時にオレを…」

名前は何だったか。

確か、あの時にも聞いたはずだ。

正義の味方であったあの時に聞いた敵の名前。

正義の味方としてのオレを殺した敵の名前は…

「私はルシファー。傲慢を推奨する悪魔だ」

王冠を被った女『ルシファー』は言った。

第五十話　黄金

「お前、今度は何をしに来たんだ！」

間人はルシファーに向かって叫んだ。

以前音実の命を狙い、間人を打ちのめした張本人だ。

間人はいつでも聖痕が使えるように警戒している。

逆にルシファーの方はその言葉を聞いてようやく間人の存在に気付いたかのように間人を見た。

「お前は…誰だ？　以前どこかで潰した奴か？　悪いが潰した雑魚を一々覚えていないんだ。私は」

道に落ちた石ころを見下ろすような、無関心な目で間人を見るルシファー。

「何だと…」

「私はそこの男を消すか、もしくは連れ帰る為にここへ来た。自惚れるな、貴様に興味などない。今すぐ私の視界から消えるのなら見逃してやってもいいぞ」

自分以外の全てを見下したような目で間人を見ながらルシファーが言う。

「…馬鹿言うなよ。仮にこの巡り合わせが偶然だったとしても、オレは二度とお前には負けない。オレが正しくある為には、オレが正しくないと思ったことから逃げ出してはならない」

迷いのない目でルシファーを見ながら間人は聖痕を発動させる。

それによって金属が浮かび上がる。

準備する時間がなかったのでごみ箱などの周囲の金属を集めただけだが、それなりには武器として使えるはずだ。

「…なるほど。貴様のことは何一つ覚えていないが、貴様を何故、私が潰したかは理解した。貴様は私が最も嫌いなタイプの人間だ」

無関心な目をやめて、今度は憎しみすら込もっていそうな程の敵意の目でルシファーは睨んだ。

「『力』の使い方を正しいだの、正しくないだのと言うタイプだ。下らないな、正と不正を定めたとして、それを誰が認める？　誰も認めないし、正義なんてものはどこにもない。善悪に拘ることは全て無駄だ」

「……」

「所詮、最初から食い違う価値観なんだ。分かり合うことなど出来はしない……ならば、相手に自分の価値観を押し付けるしかないだろう。力とはその為だけにある手段だ！」

それがルシファーの考え。

他人の為だけに力を使おうとする間人とは真逆。

他人を認めず、自分を認めさせる為だけに力を使おうとする。

「『力』を得ているにも関わらず、そんなことも分からないなら…ここで死ね」

ルシファーは殺意を込めてそう言うと、ルシファーの周囲に人魂が出現した。

「！」

（アレは…！）

それに気付いた間人は、慌てて金属を放つ。

間人に向かって動き出した人魂と間人の放った金属は虚空で衝突した。

カッ…と人魂が強く光った瞬間、凄まじい衝撃と轟音が響いた。

「な…何が…」

白垣散瀬が耳を押さえながら間人に言った。

「オレも詳しくは分からないが、あいつの聖痕は人魂を爆発させることだ。単純だが、その威力がとんでもないことは身を持って知っている」

そういいながら、間人はルシファーが現れてからずっと無言で震え

ていた音実を散瀬に押し付ける。

「お前は音実を連れて逃げとけ。あいつはお前を狙っているようだし、オレの因縁に音実を巻き込むにはいかない」

「…格好いい！　リアルでそんなことを言える人間なんて中々いない訳よ！」

ふざけた調子で散瀬は笑いながら言う。

「あのな、オレはお前達を巻き込まないように…」

「一人で死んで、それがこの子の為になると？　本当に大切な人を悲しませたくないのなら、格好つけずに逃げることも必要だよ」

少し苛立ちながら注意しようとした間人の言葉を遮って今度は真面目な顔で散瀬が言う。

「オレが死ぬかよ。これでも自称正義の味方だぞ？」

「磁力を操るようだけど、肝心の金属（武器）がもう無いんじゃないか？」

「……」

図星な為に間人は思わず黙り込む。

そうなのだ、間人の聖痕は『磁力』

だが、周囲に金属はない。

しかも、細かい操作の出来ない間人は金属を浮かばせて敵にぶつける程度しか出来ない。

必死にかき集めた武器も先程の爆発で吹き飛んだ。

手詰まりだった。

「話は終わったか？　悪いがそこの男は逃がす訳にはいかない」

ルシファーが散瀬を指差して言う。

「私の聖痕は『爆発限界（イクスプロウスィヴ）』。爆発を起こすのではなく、爆発が起きてもおかしくない状況を作り出す聖痕だ」

再びルシファーの周囲に人魂が出現した。

「…状況を作り出す？」

「例えば、空中に一定以上の可燃性の粉塵が存在するなど、その『状況自体が起爆剤となりうる状況』を強制的に作り出す」

火薬やガソリンを用意する必要はない。

その状況自体が導火線で、起爆剤なのだから。

「貴様自身が起爆しろ、雑魚が」

ルシファーの言葉と共に人魂が動き出す。

既に爆発限界（イクスプロウスィヴ）によって間人の周囲は人魂が触れるだけで起爆する、起爆剤となっている。

かわすことは出来ない。

防ぐことも出来ない。

助かる為の手段は『状況を変える』ことだけ。

最初に金属を障害としてぶつけたように。

だが、その方法は間人には使えない。

「…助かりたい？」

そんな間人に能天気な声がかけられた。

「助かるなら助かりたい…あいつを倒して音実を助けたい」

それに間人は間髪入れずに答えた。

「……それは贅沢ってものな訳よ」

困ったように散瀬は間人に言った。

その瞬間、

カッ…と再び人魂が強く光った。

だが、

「何…？」

何故か衝撃と轟音は響かなかった。

ルシファーの視界に入ったのは、焦げた地面でも、惨めな死体でもなく、

黄金に輝く壁だった。

それはシュール過ぎる光景だった。

明らかな異物なのに、空間に直接金メッキで塗装したかのように奇妙な一体感がある。

その黄金の壁は散瀬と間人の前に出現していた。

「何だ…何だ、何だ、これは一体何だ！」

「ヒステリックなのはよくないよ。女性は余裕を持っておしとやかな方が綺麗な訳よ」

黄金の壁が溶けて消えると散瀬がふざけた調子でルシファーに言った。

「オレの聖痕は君の力ように理由や過程なんてものはないんだ。オレの聖痕は『黄金掌握（ミダース・タッチ）』…ただ、オレの手に触れたモノを問答無用で黄金に変えるだけの力さ」

「まさか、地面を黄金の壁に変えて爆発を防いだと言うのか？」

「違う。爆発の衝撃も轟音も爆風も熱も全て触れて黄金に変えた訳よ」

「なっ…」

ルシファーは絶句した。

爆発を黄金の壁で防いだのではなく、爆発自体を黄金に変えた。

あり得ない。

あまりにも不自然。

あまりにも不可解。

あまりにも非現実過ぎる。

「とあるミダースと言う王様には触れたモノを黄金に変える力が宿っていたと言われる。ミダースが触れたモノは石だろうが、枝だろうが、食事だろうが、自分の娘だろうが、黄金に変わった。そこに一つの例外もない」

「くっ…」

「オレの力の本質は『意識して触れずとも黄金に変えること』だ」

例え、握ることが出来ない煙でも、

例え、触れても気づかない音でも、

触れた瞬間に無意識に黄金に変わってしまう。
流石に周囲の大気や塵を全て黄金に変えてしまうと歩くことが出来ない為に多少の融通は聞くのだろうが、
反応仕切れない爆発の衝撃を無意識に黄金に変えてしまうことが出来る。

「もう爆発はオレには効かない」

「…凄い…意外とやるな、お前！　これで助かる。勝てるぞ！」

「…何を言っているんだ。逃げるんだよ。助かる為にオレは聖痕を使ったんだ。さっさと逃げるよ。言っとくがオレは臆病者だぞ」

間人の言葉にテンション低めに散瀬が言った。

第五十一話　強者

「待ち合わせの時間とっくに過ぎているのに、ご主人は来ませんね」

ヘッドセットをつけ、メイド服を着た少女、パイロットはある喫茶店で時計を見ながら言った。

「女の子をこんなに待たせるなんて、女好きな散瀬サマらしくないわね…」

パイロット向かいに座っていた少女がその言葉に頷きながら言った。

海賊のような帽子を被り、アイパッチをした、パイロット同様にコスプレをした少女『キャプテン』だ。

二人共、本名を名乗らず、散瀬が適当に付けたあだ名を名乗っている。

「どうせまた、聖女がどうのこうの言って誘拐しようとして、遂に逮捕されたのでしょう」

無表情だが、あからさまに怒りの感情を言葉に込めてパイロットは言う。

「刺々しいわね…散瀬サマが女の子に声をかけるのがそんなに嫌？」

「嫌とか以前に誘拐は犯罪ですよ」

「別にいいじゃない。浮気を許すのも正妻の寛容よ」

話が全く噛み合わないパイロットとキャプテン。

毒舌家だが、割と生真面目で従順な性格のパイロットとマイペースな性格のキャプテンは性格が合わないのかもしれない。

「そういう問題では…」

パイロットがそう説明しようとする前に、キャプテンが口を開いた。

「だって、私達は誘拐されてきて、彼の傍にいるんじゃない…」

「全く、全く全く…オレは争い事なんて大嫌いだってのに…出来るだけさっさと逃げる訳よ」

「おい、戦うんじゃないのかよ。あいつを野放しにする訳には…」

「オレは正義感よりも命を大事にする訳。君は既に負けた訳。オレの命はオレのものな訳！」

「は…はぁ？　つまり何が言いたいんだ？」

「君が我儘言うなら、君を置いてきぼりにしてでも、オレは逃げる

って訳よ」

「この臆病者！」

散瀬の言葉にキレて間人が叫んだ。

「命の恩人に対して臆病者とは何事……ッ！」

散瀬はその言葉にムッとするが、すぐに意識を前へ向けた。

ルシファーが再び人魂を出現させ、こちらに殺意の込もった目を向けていた。

「随分と余裕じゃないか…だが、その傲りは嫌いじゃない。私は傲慢を推奨する悪魔だからな」

殺意を向けながらも笑みを浮かべるルシファー。

「それはどうも、オレも貴女は好みのタイプだよ……だけど、オレはまだまだ身を固めるつもりはない遊び盛りなので、逃げさせてもらう訳よ」

「逃がすと思うか？　私は強い者は屈服させないと気が済まない性質なんだ」

そう言い、ルシファーは獰猛な獣のような瞳で散瀬を睨んだ。

瞬間、人魂で着火させて、状況そのものが起爆する。

人間の動体視力では反応出来ない速度の爆発だが、散瀬の聖痕は無

意識の内に触れたもの全てを黄金に変えてしまう。
再び爆発は消え、黄金のみが残った。
「無意識に変えてしまうならば不意打ちも意味をなさないか…なら…」
そう呟きながら、ルシファーは人魂を出現させようとした。
だが、突然地面に落ちていたサッカーボール程の大きさの黄金が独りでに動き、ルシファーの攻撃の邪魔をした。
「オレもいることを忘れるなよ。オレの聖痕は磁力。黄金を操ることなんて片手で出来る」
「チッ…」
間人の操る黄金をかわしながら、ルシファーは舌打ちをした。
周りに金属がなかった為に無力になっていたが、間人の磁力を使えば、サッカーボール程の大きさの黄金を砲弾のように飛ばすことが出来る。
加えて、触れたものを黄金に変えられる散瀬がいる限り弾切れはない。
ルシファーはそこまで気づきもう一度舌打ちをした。
「もうやめない？　君の聖痕は強力だが、応用力に欠けている。防がれてしまえばそれまでな訳よ」

ルシファーが手詰まりになったと判断し散瀬が言う。
散瀬は何度も自分で言うように争い事が嫌いなのだ。
このままルシファーが逃げてくれるのなら、散瀬はそれを追うことは絶対にないだろう。

「…ハハッ、応用力に欠けている…か。その言葉は前にあの貧弱にも言われた」

自嘲するようにルシファーは笑った。
諦めたように、同時に何かを決意したかのような目をして言った。

「だが、応用を考え、勝つ為に努力を重ねるのは敗者の思想だ。絶対の勝者とは戦いから何も学ばず、敗北を知らず、何も変わらず勝者であり続けるんだ！」

周囲を埋め尽くす程の人魂が出現した。
四方全てどころではなく、視界を全て覆う程の人魂の大群だ。
ルシファー自身の逃げ場もない程に…

「こんな…こんな近い距離で爆発なんて…君も巻き込まれるよ！」

慌てたように散瀬がルシファーに叫んだ。
自分の命が危ないから叫んだのではない。

自分の近くの爆発は触れて黄金に変えてしまうことが出来る。

だが、ルシファーの近くの爆発は『触れられない』

つまり、助けることが出来ない。

「貴様の聖痕にも効果範囲と言うものがあるだろう。全方位からの同時爆発なら範囲外に到達することができる」

「オレの力は無意識に発動するんだ。意識して抑えない限り、力の効果は切れることはない…だから…」

「よく喋るじゃないか？　図星か？　どちらにせよ、もうじき起爆する」

散瀬の説得にルシファーは聞き耳を持たない。

「ハハッ、私は死なない。死ぬはずはないんだ。私は負けない。負けるはずがないんだ！」

散瀬はルシファーの瞳の中に狂気を見た。

絶対的な強者。

戦いから何も学ばず、敗北を知らず、何も変わらない勝者。

それは言ってみれば『強さ』しか持っていないと言うことだ。

『強さ』しか持っていないのに他人に受け入れられる訳がない。

『強さ』しか持っていない人間はただ、勝つことでしか自分を他人に認めさせることができないのだ。

それ故に勝者であることに拘り、勝利することに貪欲である。

何故なら、それが何も持たない彼女が唯一持っているものなのだから。

「……くそっ、散瀬、何とかあいつを助けることは出来ないか？」

間人は思わず口にしてしまった。

『あいつ』は自分の大切な人を傷付けようとし、自分に重傷を負わせた相手だと言うのに…

「無理だ。既に君に音実ちゃんにオレ自身を守っているんだ…流石にオレの手が足りない」

「くそっ…何でオレがあいつを助けたくなるんだ！」

普段から正義感の強い間人だったが、ルシファーを助けたいと思った理由は憐れみだったのかもしれない。

勝利しか知らず、強さしか持っていないルシファーがこのまま死ぬのが憐れに思えたのだ。

しかし、どれだけ間人達が言おうと人魂が起爆する…

はずだった。

何故か、人魂は光っただけで一つも爆発せず、消えてしまった。
それに気付いた間人は散瀬を見たが、散瀬も同様に驚いている。
地面に黄金が落ちていない為に散瀬の力ではないようだった。

「じゃあ、誰が…」

「おやおや、お困りのようですね。大丈夫ですか？」

他人事を馬鹿にするような無責任な言葉が間人の耳に入った。

「お前、祭月！」

「…呼び捨てですか。江枕氏もそうですけど、あんまり親しくないんですから、馴れ馴れしく呼ばないでほしいですね」

いつも敬語なのは丁寧なのではなく、単なる他人行儀だったのか、
白髪にサングラスが特徴の令宮祭月が言った。
いつも被っている学者帽は外して手に持っている。
そして、その周囲に小さな扇風機のような奇妙な機械が浮いていた。

「助けに来てくれたのか…それは何だ？」

「これは、この間開発した聖痕装置です。名前は……そうですね、
『加湿扇（ヒューミディファイ）』とでも呼んでください」

面倒臭そうに祭月がそう説明した。

「貴様、何をした。何故、私の力が使えない！」

「この機械の効果ですよ。一時的に周囲の湿度を急激に上げる。自然発火系（イロキネシス）の聖痕使いは多いので、前々から考えていたんですよ。言わば、加湿器の超凄い版です」

「そんなもので…」

「これの凄い所は仮に風が強い野外だろうと数十分間状況を維持することなんですよ。状況を乱されれば貴女の聖痕は使えませんね」

「クッ…」

悔しそうにルシファーが唇を噛む。

「さて、どうしますかね。貴女のその目、見たことがあるんですよ。組織的には他の仲間について聞き出した方がいいんですかね？」

本気で悩みながら祭月がルシファーに言う。

同じ青い瞳の持ち主、ベルフェゴールについて聞き出すべきなのか悩んでいるようだ。

「……次は殺す」

そう呟くと、ルシファーは走り去った。

「逃げてくれましたか…オレの仕事が一つ減ってよかった」

殺気を向けられた祭月は場違いに安心したように息を吐いた。

第五十二話　意外な関係

「疲れました…これは追加で給料貰わなければ割りに合いません」

ルシファーが去ってすぐ、愚痴るように祭月が言う。

「うるさいぞ。ぐだぐた言ってないで色雨に今回のことを報告しろよ」

「……新入りのくせに、偉そうですね」

ボソッと小声で祭月が愚痴を言った。

「何か言ったか？」

「言ってません。言ってませんから、金属を浮かべるのはやめて下さい！　オレはか弱い非聖痕使いなんですよ！」

怯えながら、祭月は叫ぶ。

そして、慌てて携帯電話で色雨に電話をかけた。

「全く。そう言えば、お前のことは何て報告すればいいんだ？」

「え？　オレは別に…すぐに帰らせてもらえればいい訳よ」

「そういう訳にもいかないだろう……ん？」

間人がそう言うと、離れた所に色雨の姿が見えた。

さっき電話をかけさせたばかりだが、意外と近くにいたらしい。

色雨は間人と散瀬に気付くと少し急ぎながら駆け寄ってきた。

「見つけた…いや、見つけましたよ。白垣散瀬さん」

色雨はそう、何故か散瀬に言った。

知り合いだったのか？　と間人は首を傾げて散瀬の方を向く。

散瀬は青い顔をしていた。

「やはりでしたか、本部から送られてきた資料に書かれていた特徴にそっくりでしたから…早く本部に」

「わ、私はまだ捕まる訳にはいかない！　オレはまだ死ねないのだ！」

一人称さえ変化する程に慌てながら散瀬は色雨とは逆の方向に走り出した。

それはそれは、ライオンに狩られるシマウマのような必死の形相で…

だが、走り去ろうとした散瀬の前に人影が現れた。

「おっと…危ないですよ、お嬢さん。もっとゆっくりお話ししたいのですが、オレは追われる身な訳…」

平和主義な散瀬は思わず、すぐに立ち止まり、こけかけた人影に手を差し伸べ、早口で言った。

「そんなこと言わず、ゆっくり話しましょう。感動の再会じゃないかね？」

が、その瞬間、散瀬の顔は青を通り越して白くなってしまった。

「そ、天士…」

「はい、私があなたの幼なじみの天之原（アマノハラ）天士（ソラシ）です」

にっこりと笑顔で天士は言った。

「天之原さんは女性だったのか…失礼だけど、気付かなかった」

何故か本部を抜け出し、この町へ来ていた天士の方を見ながら色雨が呟く。

中性的な顔で口調もどちらかと言えば男に近い口調だった為に、乙女のように散瀬に執着する天士に色雨は驚いたようだった。

「本当に失礼ですよ師匠…と言いたいところですが、私も補佐をしていながら全然気付きませんでした」

「おや、お久しぶりです」

横から話し掛けてきた女、繰上炬深（クルジョウ キョミ）に色雨が言った。

「敬語は要りません。私は里帰りしてきた弟子なのですから。師匠」

「…分かったよ。それで、何であの人がここにいるんだい？」

「『捜し人が見つかりそうだから』だそうです。それが彼のことなのでしょう。あの嬉しそうな顔を見れば分かります…鈍感な師匠には理解出来ないでしょうけどね」

普段会えない大切な人に会える喜び。

それを自身とも重ねているのか、穏やかな目で天士を見る炬深。

同時に、いつも自分の好意に微塵も気付かない色雨には毒を吐いた。

「とりあえず座りなさい。話はそれからしよう」

「い、いや、あの…やっぱり無断で本部を飛び出したのを怒ってる訳？」

炬深から見れば会えたのが嬉しそうに、色雨から見れば怒るように天士が言う。

恐らく、どちらも正解だ。

会えたのは嬉しいが、同時に置いていかれたのが腹立たしい。

乙女心は複雑だ。

「怒ってない。何故私が怒る必要があるのかね？」

「それは…」

「ご主人。その人達は？　いい加減悪事が露見したのですか？」

「え、散瀬サマ捕まるの？　刑務所に入れられれっちゃったら、私、手紙を沢山書くからね」

ヘッドセットとメイド服が特徴の『パイロット』と、海賊のような帽子にアイパッチが特徴の『キャプテン』が、間が悪いことにやって来た。

「…散瀬、ちょっと座りなさい。コンクリートの上に正座で」

火に油…と言う言葉の意味を散瀬は改めて知った。

「あ、ああー…実はオレ、海外の暮らしが長かったせいで正座が出来な…」

「座れ」

「はい」

散瀬は犬のように従順に大人しく座った。

「…さて、と。では師匠。我々は支部に戻るとしましょう」

「アレは放置してもいいのかい？」

「二人きりにしてあげましょう…それに、色々と仕事があります」

「仕事？」

炬深の言葉に色雨が首を傾げた。

色雨は唐突に天士から散瀬を捜すように言われ、捜していただけなので、事情を全く知らなかった。

「いくら自由な人だからといって、トップが私情だけで本部を離れる訳ないじゃないですか」

散瀬に会う為…と言うのもあったが、天士にはこの町へ来る理由があった。

「この町は例の『反逆者』が狙っていた聖遺物が存在すると言う理由だけで、襲われた町もあるんです。この町が狙われている可能性は高い…本部より、戦力も派遣されるとのことです」

「分かった。なら、支部に戻らないとね…アレ？」

そういって、ようやく色雨は気付いた。

令宮祭月がいなくなっていることに…

「…と言う訳で、この町は今とても危険な状態なんですよ。皆さん」

祭月は病院にいた。

棺や衣、レイヴ、濁里がいる名残の病室だ。

話の途中で離脱し、ここまで来て、何を思ったか棺達に説明したようだ。

「違法聖痕使いの集団が、この町へ…」

「ええ。江枕氏は貴方達を巻き込まない為に隠しそうなので…」

驚いている全員に祭月は言った。

仮に隠そうと、どのみち巻き込まれるのだから、先に伝えておいた方がいいだろうと言う判断だった。

「江枕氏は人としては好感が持てるのですが、隙間の神としては些か危うい所がありますので…」

祭月は色雨を嫌っている訳ではない。

しかし、面倒くさがりだが任務には忠実な祭月から見れば少しばかり不満があるのだ。

「伝えておくべきことは伝えましたよ…それはそうと江枕氏の妹氏」

「は、はい？」

棺達に伝えた後、祭月は衣の方を向く。

面倒臭そうにしている普段とは違い、珍しく真面目な表情だ。

「五年前にこの町で起きた事件に殺害された隙間の神は…『貴女の保護者』ではないですか？」

第五十三話　五年前の事件

「…やれやれ。空気の読めない発言でしたね」

病院を出た祭月は呟いた。

五年前の事件。

江枕衣にとってはトラウマになっている事件。

それについて今更思い出させたのは流石にまずかったと祭月は思う。

だが、祭月もただ好奇心で尋ねたのではなかった。

「…江枕氏にも言うべきですか…オレ、血を見るのは嫌いですし」

「……」

棺はぼんやりと窓の外を見ながら先程のことを思い出した。

祭月に言われた言葉に衣は動揺し、レイヴは棺と濁里と祭月に部屋を出るように言った。

女同士の方が落ち着かせ易いのだろう…と棺は思っていた。

濁里と祭月は既に帰っていった。

棺だけは廊下で衣が落ち着くのを待っていた。

「五年前の事件か…」

この町で起きた事件らしいが棺の記憶にはない。

恐らく、聖痕絡みの事件だった為に隙間の神によって秘匿されたのだろう。

棺の記憶にはないその事件によって衣は保護者を失ったらしい。

保護者…と言う言い方を祭月がしていた為に、父親なのか母親なのかも分からないが、大切な家族だったのは衣の様子でわかった。

「…棺」

棺がそう考えていると、病室の扉が開き、衣が声をかけた。

「棺に話しておきたいことがあります。少し外に行きませんか？」

「もう大丈夫なのか？」

「ええ、まあ…」

二人は病院の屋上へと来ていた。

広い屋上を見渡して衣が薄く笑った。

「誰もいないようでよかったです」

衣はすぐに本題に入らず、いつもとは違う儚げな笑顔で屋上から見える景色をしばらく眺めていた。

棺も催促するようなことはせず、黙ってそれを見守っていた。

「棺…」

「何だ？」

いつもの元気が失われた目で衣は棺を見つめた。

棺は出来るだけいつもの調子で言葉を返した。

「私には…名前がないんですよ」

そう衣は言った。

（重い過去を衣は持っていそうだったである…）

名残と二人きりになった病室でレイヴは思う。

自分もそれなりに暗い過去があるからこそ、衣にも暗い過去があると分かる。

動揺した衣をレイヴは必死に落ち着かせようとした。

会話出来る程度に落ち着かせることはできたが、それは鎮静剤を打つようなもの…レイヴには衣の傷は癒せない。

「大丈夫…かな？」

不安げに名残がレイヴを見て言った。

「大丈夫であるよ。棺はなんと言っても私の親友であるのだから」

暴走した一件がなければここまでの信頼は棺に抱かなかっただろう…とレイヴは思う。

前も親しかったが、あくまで日常の中の友人であり、悩みを打ち明けたり、衣の傷を任せたりはしなかっただろう。

あの一件を終えて棺とは親友になったのだ。

拒絶されるのを恐れて正体を隠していた自分の悩みを晴らしてくれた瞬間から…

（棺なら…）

「名前がない？　一体どういう意味だ？」

衣の言葉に棺は首を傾げていた。

名前がない。

では、棺の目の前にいる少女は誰なのか？

江枕衣だろう。

「私には本当の名前がないんです。隙間の神に拾われた孤児なんです」

「孤児…お前も…」

「江枕、この名字は兄さんに貰いました。衣、この名前は柔木理念（ヤワギ リネン）と言う人に拾われた時に貰いました」

『柔木理念』と言う名前を呼ぶ時に衣は少し悲しげな表情をしてい

た。

恐らく、その人物が衣の失った家族なのだろう。

「柔木理念さんは身寄りのなかった私にとって、姉であり、母であり、唯一無二の親友でした…」

屋上へ来てからずっと悲しげな表情だった衣が穏やかな顔をした。

「そして、兄さんの恋人でした」

衣は五年前の出来事を語り出した。

～～～～～～～～～～～～

五年前のある日、隙間の神第１８５支部には、三人の聖痕使いがいた。

「それで、色雨は紅茶と珈琲はどちらが好きだったかしら？」

一人は自然な茶髪と人畜無害な顔が特徴的である少女『柔木理念』

「どっちかって言うと珈琲かな？　まあ、どちらも好きだが…」

一人は男にしては長めの髪を一括りに纏め、現在よりも勝ち気な目が特徴的である少年『江枕色雨』

「私は紅茶。砂糖多めにしてね」

一人は柔らかそうな栗色の髪をした優しそうな目をした少女『衣』

支部の『権天使（アルヒャイ）』である柔木理念に、その見習い隊士である江枕色雨、そして数年前に柔木理念に引き取られた衣。

柔木理念は少し前からこの支部の『権天使（アルヒャイ）』として働いており、聖痕使いであることに偶然気付いた衣を保護したのは数年前だ。

その後、江枕色雨と言う少年が隙間の神に気付き、自分を売り込んできたのだ。

聖痕使いであることから、理念は支部で見習いとして働かせている。

支部には他にも隙間の神がいるのだが、今はこの二人以外の隙間の神は丁度本部に行っていて誰もいない。

新型聖痕装置の動作テストらしい。

（…ハッ！　ここはそっと私が退出すれば二人きりにしてあげられるのでは！）

衣は紅茶を飲んでから顔を上げた。

色雨と理念の二人が相思相愛なのは衣の目から見ても明らかだった。

正式に恋人同士になっているのか、どうかは不明だったが、衣は空気を読んで退出するつもりだ。

自分の姉兼親友である理念を誰かに取られるのは少し寂しかったが、相手は自分が兄のように慕っている色雨なので、二人が幸せになるのは衣も嬉しかった。

（よし！）

決断し、衣が口を開こうとした瞬間、

「師匠ー！　ここにいたのですかー！」

セーラー服を着た少女が支部に駆け込んできた。

「…扉は静かに開けろよ。あと、いい加減に師匠はやめろ、炬深」

「学校が終わりました！　ご指導よろしくお願いします師匠！」

「聞いてねーし」

セーラー服を着た少女『繰上炬深（クルジョウ キョミ）』は色雨の言葉に聞く耳持たなかった。

彼女は隙間の神に入る以前からの色雨の友人らしく、色雨が隙間の神に入ってからは自分も入ると言って聞かなかった。

しかし、聖痕使いである色雨とは違い、聖痕を持っていなかった為に色雨に弟子入りして聖痕以外の戦闘手段を学んでいた。

「炬深、前々から言ってると思うが、オレの聖痕以外の武術は護身術だ。教わったところで隙間の神で戦うことは出来ねえぞ」

色雨は聖痕以外にも武術を身に付けていたが、それはあくまで聖痕と共に使って違法聖痕使いを倒す為のものであり、武術のみで聖痕を使う違法聖痕使いを倒せるとは思っていなかった。

「それでも、私の師匠は色雨師匠のみです！　貴方の武術もそうですが、『視界に入る誰もを救いたい』と言う貴方の理想に感動して私は貴方に弟子入りしたのです！」

「そんな恥ずかしいことを何度も言うなよ。全く」

色雨は疲れたようにため息をついた。

「ふふ、理想って少し子供っぽいくらい純粋な方がいいんじゃない？」

「……」

理念が色雨にそう言ったが色雨はムスッとした表情をやめなかった。

「…ん？　あ、衣ちゃん。久しぶりだね？」

「あ、うん。久しぶり。炬深お姉ちゃん」

衣に気付いた炬深が声をかけて、衣が笑顔で返す。

「どう？　衣ちゃん、好きな男の子でも出来た？」

「ええ！　い、いや、私はその…」

炬深の質問に衣は後退る。

「この馬鹿弟子。衣はまだ十二歳だぞ。そんなことある訳ないだろ？」

呆れたように色雨が炬深に向かって言う。

「それはどうかしら。女の子は早熟だから、もしかしたら彼氏とか…」

ニコニコと笑いながら理念が言う。

「何、そうなのか！　衣、異性に興味を持つなとは言わないが、健全な付き合いをだな…」

「…師匠、何を本気になっておられるんですか。冗談に決まっているじゃないですか？」

「え？」

「色雨さん、私は彼氏どころか男友達すらいないよ」

「と言うか師匠、過保護過ぎます」

「……」

衣と炬深の言葉に完全に凍結する色雨。

理念はそれを見ながら笑っていた。

「加えて言うと、おじさん臭い…」

「そうそう、それから色雨って頭も固くて…」

「貴様らー！」

「うわっ！　何で師匠怒ってるんですか！」

「逃げろ逃げろー！」

遂にキレた色雨が炬深と理念を追い回し、炬深と理念は慌てて逃げ出す。

「あはは…」

それを見て衣も思わず笑っていた。

楽しい一時だった。

「さてと、夜の見回りを始めるか」

数時間後、外が段々と暗くなってきた頃に色雨が理念と衣に言った。

町に異常がないか支部の人間で調査するのだ。

「師匠！　私もついて行きます！」

「お前は隙間の神ではないから駄目だ。家に帰れ」

炬深は挙手して主張したが即座に却下された。

「そんな、衣はいいのに、何で私は駄目なんですか」

「本当は衣も置いていきたいんだが…」

「嫌だ！　今日という今日は絶対に一人きりで留守番は嫌だ！」

衣はただをこねるように言った。

衣は理念と二人暮らしなので理念が見回りの日はいつも家で一人きりなのだ。

本当の両親がいない為か、やや寂しがり屋に育った衣にとってそれはとても苦痛だった。

それを見かねた理念が今日だけ衣も一緒に連れて行くように色雨に言ったのだ。

理念と同様に衣には過保護な色雨がそれを断れる訳もなく、見回りだけなら特に危険もないだろうと許可したのだった。

「それでは行くか。ついでに炬深も家へ送っていってやるよ」

「つ、ついで…」

「暗い…」

「怖くなったか？　だから家で待っていた方がいいと言ったんだ」

「意地悪しないの、色雨」

炬深を家へ送った後、三人は見回りを続けた。

「家で一人きりなのも結構怖い…」

「やれやれ」

色雨はため息をついた。

「だけど、こうして三人で歩いていると私達家族みたいね」

理念が自分と色雨、衣を指差して言う。

「みたいじゃなくて、理念と衣は実際家族だろう？　娘と母親で」

「姉妹と言いなさい。私はまだ二十代よ」

色雨の言葉に少し怒りながら理念が言った。

「それじゃあ、色雨さんは私の兄さん？」

「はは…それもいいかもしれないな。オレもお前と同じで家族がいないんだよ。妹が出来るのは大歓迎だ」

衣の頭を撫でながら色雨は笑っていた。

「…色雨。それさ、言葉の意味をちゃんと理解して言ってる？」

「何だ？　何か問題があったか？」

「…まあいいわ。鈍感め」

何か言いたいことがありそうだったが、理念は黙り込んだ。

「？」

「ふぁ～」

色雨は首を傾げて理念の言葉を考えていると、衣が欠伸をした。

まだ十二歳の衣に夜更かしは辛かったようだ。

「眠そうだな、衣。異常も無さそうだし、もう今日は引き上げるか？」

「私もそれに賛成ー。もう疲れたわー」

「私も…賛成…」

色雨の言葉に二人が同意するが、衣は既に目を閉じていた。

それに苦笑し、色雨が衣をおんぶしようと、背中を衣に向けた。

「皆さん、つれないね。夜はまだまだこれからじゃないですか」

馬鹿丁寧な声が夜闇に響き渡った。

無造作に垂らしたくすんだ金髪、右が青、左が赤の瞳をした青年が立っていた。

歳は二十代後半ぐらいで色雨達よりは年上に見えた。

「誰だ?」

「こういう者ですよ」

男が自分の右頬を軽く手で撫でた。

すると、右頬に刺青のような傷痕のようなものが浮かび上がった。

「聖痕…聖痕使いか!」

そう色雨は言ったが、男の聖痕には違和感があった。

普通の聖痕は腕に浮かび上がるが、右頬に浮かび上がっていた。

しかも、聖痕は青く光るものだが、男の聖痕は赤く光っていた。

「違法聖痕使い『遊悪（ユアク）』と申します」

「ッ…やっぱりそうか」

後ろの二人を気にしながら色雨が舌打ちをする。

「いやぁ、今日はいい夜ですよ。獲物は三人も手に入った。どちらから殺しますかね？　やはりここは女性からですか？」

笑みを浮かながら遊悪は理念達を指差した。

色雨はこれほど悪意に満ちた笑みを初めてみた。

この男は人を笑いながら殺せる。

そう確信した。

「女性を殺す時はね。まず首を斬るのですよ。女性の断末魔の悲鳴は甲高くて耳障りですから。先に喉を潰せば、驚く程静かに女性を殺せ…」

「後ろの二人には手を出させないぞ！」

「…今、人が話している途中でしょうが、全く最近の若者は礼儀が

なってないですね」

遊悪はそう言うとため息をついた。

「それで、何？　守るべき者の為にオレは戦うって？　きゃあ、格好いいですね…イヒヒ！」

「テメエ…」

「怒ってるんですか？　おお、怖い。怖いので、そこの二人は殺さずにあなたとは全く無関係な人を殺すとします。イヒヒ」

「待ちやがれ！」

遊悪が色雨を挑発しながら逃げ出し、色雨もそれを追いかけていった。

「色雨！　待って！」

理念は色雨に叫んだが、色雨には届かなかった。

「色雨さんを、追いかけないと！」

「…分かった。走るわよ、衣！」

理念は衣がいることで少し迷ったが、色雨を追いかけることにした。

「…見失ったわね」

理念が覇気のない声で思わず呟いた。

衣の手を引きながら走る理念では、色雨達に追い付くことは出来なかった。

既に色雨の姿が見えなくなってから大分時間が経っている。

（…色雨は無事かしら）

何の連絡も無いところを見ると、未だに追跡中か、もしくは交戦中か、

最悪の場合は…

「…ん。そんなことを考えてはダメね」

嫌な想像を頭を振って理念は消した。

「色雨さんは…」

「大丈夫よ、衣。すぐに帰ってくるわ。私達は色雨を信じて待っていましょう」

笑顔で衣の頭を撫でながら理念は言った。

不安だが、自分は衣の家族なのだ。

衣を不安にさせることは出来ない。

そう自分に言い聞かせ衣に笑顔を見せる理念。

色雨は敵を倒した。

だけど、携帯電話が壊れてしまい、連絡を取ることが出来ないのだ。

そんな想像を信じていた。

「何を信じて待っているのですか?」

だが、その想像はすぐに壊されてしまった。

「な…何で…」

「人間は目に見えないものを信じるものです。信頼、友情、愛情なんかを。信じるのは勝手ですよ。だけどそれは目に見える真実ですぐに覆る」

「…色雨は、色雨はどうしたの!」

「見て分かりませんか? 分かるでしょう? 目に見える真実がほぉら、こんなにたくさん…」

遊悪は自分の服に着いた赤い液体を手で触りながら理念に言った。

「あなたの目には見えないんですか？　ほらほら赤いでしょう？　まるで血のようでしょう？　イヒヒ！」

遊悪は手に服同様に血が着いた物を持っていた。

ブーメランのような形状の武装だ。

ブーメランと言っても子供が遊ぶように改良された物ではなく、もっと原始的な狩猟用のブーメラン。

大木か動物の骨を削って作ったような材質だが、金属ナイフよりも鋭い。

「さて、あなたは覚えていますか？」

「…何を？」

「女性の殺し方を」

「うあ…ああ…」

衣は言葉も発せずに震えていた。
首から血を流す理念は既に生きていない。
「思ったより手こずりましたね。そう言えば、彼女も聖痕使いでした。どうやら戦闘経験が少なかったのは助かりましたが」
「ああ…ああ…」
「それでは、仕上げといきますか」
遊悪はそう言うと、衣の方を向いて近付いてきた。
衣の震える足では歩くことすら出来ない。
それを見て、更に笑みを浮かべる遊悪。
その時、
「待て！」
鋭い声が投げ掛けられて遊悪は足を止めた。
「おや、意外ですね。生きてましたか」
遊悪を笑みを浮かべながら意外そうに色雨に言う。
色雨の服は赤くない所を探す方が大変なほどに血まみれであり、息も乱れ、顔色も死人のようだった。

だが、それでも色雨は殺気を込めて遊悪を睨んだ。

「答えろ！　理念を…理念をどうした！」

「どうしたって、見て分かりませんか？　全く、あなたといい、彼女といい、見てわかることを人に聞かないで下さいよ」

やれやれとため息をつきながら、遊悪はブーメランに似た凶器をくるくると回している。

すると、急に目映い光が色雨の側に集まりだした。

「またそれですか。確か、光を屈折させて集束して放つ聖痕『光波屈折（リフラクション）』でしたっけ？　あなたによくあった単純な聖痕だと思いますが、夜に太陽は出ないんですよ」

「夜に光はないと？　ハッ月の光だろうが、電灯の光だろうが、お前を殺す為に全て利用してやる」

更に集束の速度が上がる。

「…ふむ。ただ集束するだけではなく、自力で生み出すこともできるのですか」

集束された光でもう姿が見えなくなった色雨を遊悪は見つめながら言う。

「ッ！」

そして、色雨はその光を解放した。

放ったのではなく、解放してしまった。

解放された光は霧散する。

普段の色雨なら大丈夫だっただろうが、今の色雨の身体で聖痕を使うのは無理だったのだ。

「イヒヒ！　何ですか、その様！　せっかく少年漫画みたいでゾクゾクしてきたのに」

「……」

不発とはいえ、聖痕を発動した反動で動けない色雨を遊悪は嘲笑う。

「ほらほらほらほら、愛しのヒロインが無惨にも殺害されたんですよ！　悲劇を糧にパワーアップしてみて下さいよ！　ほぉら、奇跡を起こして下さいよ！」

「く…そ…」

「…駄目だこりゃ。すっかり萎えました。見逃してあげますから、せいぜいこの気まぐれと、自分の無様さに感謝して下さい」

ブーメランに似た凶器を懐にしまって遊悪は言った。

「それでは！」

殺意を覚えるほどの悪意に満ちた笑みを浮かべて遊悪は去った。

第五十四話　回想が終わり…

「以上が五年前の事件の内容です。遊悪と名乗っていた男に私達は大切な家族を奪われました」

「……」

「あの事件の後、兄さんは戦闘部隊に入るのを拒み、権天使（アルヒャイ）となってこの町に残り、炬深さんは隙間の神に入って本部へ配属になりました。私は兄さんに引き取られ、江枕衣となりました」

衣の言葉に棺は黙り込む。

色雨は隙間の神として戦うことを夢見ていた。

だが、現在ではその夢を捨てて支部で過ごしている。

その理由は恐らく、五年前の事件で最愛の人を失ったからだろう。

これ以上、家族を失いたくなかったのだ。

だから、柔木理念の遺した衣を引き取り、ずっと傍にいて守ることを決めたのだろう。

「…こんな話をしたところで同情を誘っているようにしか思えませんよね？」

痛々しい笑みを浮かべて衣は言った。

「…は、同情なんてする訳ないだろ？　オレはそんな経験したことないんだ、同情できる訳がない」

「……」

「ただ、まあ、何だ。オレは死なねえよ。それだけは約束できる」

いつもの元気のない衣の頭に手をおきながら棺は出来るだけ明るく言った。

「…棺。ありがとうございます」

「祭月君、それは…本当のことなのかい」

驚愕と僅かな憎悪を滲ませた表情で色雨は言った。

「ええ。まさか、江枕氏達が五年前の事件の当事者達だったとは…」

向かい合って話しているのは祭月だ。

「あの赤い聖痕使いの男は本当に…」

「はい。奴はただの無差別殺人鬼ではありません。五年以上前に本

部から聖遺物を盗み出し、本部からマークされ続けている要注意人物です」

「どうしてだ。私は五年前から奴のことをずっと調べていた！　だが、隙間の神は何一つ、教えてくれなかった！」

「それは…本部には本部の事情と言うものがあるのですよ。隙間の神の本質は、秘匿。同じ隙間の神にも秘匿しなければならない事柄もある」

苦い顔をして祭月は色雨に言った。

「奴の盗み出した聖遺物は通常の聖遺物よりも理解し易く『実用化を考えていた唯一のサンプル』だったのですよ」

「実用化…？」

「つまり、人類の歴史上、『新たな兵器』になり得たかもしれない…と言うことです」

「！」

「作られる理由は様々でしょうが、兵器と言うのは、生み出した時点で『害』なのですよ」

悪ではなく、害。

新たな兵器と言うものはそれだけで人類を、地球を、害する。

「万が一発覚したら大変なことになります。隙間の神と世界の戦争。

隙間の神は目的を見失い、戦力を作るだけの組織になります」

本当は聖痕装置を開発し始めた時点で少し危うくなっていたのだ。

目的を見失った隙間の神に残るのは武装だけだ。

「なるほど、納得はできないが理解はした。その機密を盗み出した為に、奴の存在自体が隙間の神に秘匿されていた訳か」

「ええ。理解していただけて良かったです」

祭月は安心したように深く頷いた。

「だけど、ならどうして今になって君は教えてくれたんだい？」

「奴はただの無差別殺人鬼ではない。ならば、五年前のあの事件には何らかの意図があったはず。そして、その当事者はこの町に揃っている」

色雨を指差しながら祭月は言った。

「…この町に再び現れるかもしれないと？」

「そこまでは分かりません…ですが、近々この町には反逆者達が攻めてくる可能性もある」

「それに便乗してやってくるか…いや、もしかしたら反逆者達の中に奴が交ざっている可能性もある」

「何にせよ、用心に越したことはないです。江枕氏、妹さんもです

けど、男なら年下の女の子は守らないといけませんよ」

祭月はそう言って笑う。

「君はもう少しドライな性格なのだと思っていたんだけど、どうやら誤解だったようだね」

「いや、その考えであっていますよ。本来ならオレは頼まれない限りこんな面倒臭いことしません…」

祭月は手をブンブンと振って否定する。

「…ただ、大切な人を失うのは、やっぱり悲しいことだなって思いまして」

悲しげな顔で祭月は独り言のように言った。

「君は…？」

その悲しげな顔が気になって色雨は尋ねた。

「聖痕装置…暴走事故……聡明な江枕氏ならここまで言えば分かりますか？」

「まさか、君はあの暴走事故の！」

「はい。その唯一の生き残りです。オレが血を嫌う理由は、分かりますよね？」

「ボスー、次はどこを攻めますかー？　もう敵本陣を攻めちゃいます？」

「いや、今まで通り支部を地道に潰す方がいいと思いマスよ。逸谷さん」

あるホテルの最上階の一室で日本地図を見ながら反逆者の一員、逸谷とオーミーが騒いでいる。

中央のソファーには金髪、くわえた電子タバコが特徴の男、鐘神季（カネガミキ）苑（エン）が座ってその様子を眺めていた。

少し離れた場所では青髪と銀色の目が特徴の中学生くらいの少年『ヘーレム』が座って本を読んでいる。

「一々お前達は意見を出す必要はねえんだよ。作戦や計画は全てヘーレムに任せてある。テメエらは酒でも飲んで黙って寛いでおけ」

季苑は二人に言うと、指を鳴らした。

すると、それに合わせるようにホテルの備え付けの冷蔵庫が開き、ワインのビンが浮かび上がる。

「おー！　ボス格好いい」

「渋いデス、流石デス！」

季苑に心酔を通り越して、依存している二人はそれに目を輝かせる。

ヘーレムは本から目を離さなかったが…

「それにしても、このワインもですけど、このホテルって結構高級ですよねー。ボス」

「確かに。四人でもまだまだ広いし、景色もいいデスよね」

「は。無駄なことを気にする奴らだな。俺様はそれなりに金は持っている。言っておくが汚ねえ金じゃねえからな」

ワインを飲みながら少し機嫌よく季苑が言う。

「はー、そっかー、お金持ちなんデスね…この前のアジトも高い山だったし、お金持ちって高い所が好きなんデスか？」

「知らん。俺様は人を見下ろせる高い所は嫌いじゃないがな」

「ボスって、もしかして元々お坊っちゃんだったりします？」

オーミーに便乗して季苑に気になったことを逸谷も尋ねた。

「お前達は財界には詳しくないのか？　『鐘神』と言えばその筋ではそれなりに有名な大富豪の一族だぞ」

酔いが回ってきたのかいつもより饒舌になり、普段はあまり話さない自分のことを季苑は語る。

「そうだったんですか？」

「ああ…まあ、俺様が両親が死んだ後に財産を全て持ち逃げしたから、親戚連中が無事がどうかは分からないがな…ククク」

季苑はそう言うと悪い笑みを浮かべた。

「いつの頃の話デスか？」

「ふむ…十五歳、いや、十四の時だったか？」

「アクティブな青春時代を送っていますね…」

自分も人のことを言える程に真っ当な人生は送っていなかったが、逸谷は呆れたように言った。

「……おい、主」

その時、今まで本を読んでいたヘーレムが季苑に声をかけた。

「何だ？　ヘーレム」

ヘーレムの不遜な物言いは気にせず、季苑は言う。

「レイヴ・ロウンワードのいた町を攻めろ。全ての人間を率いてだ」

「ふむ…それは別に構わないが、理由は何だ？　俺様の頭脳よ」

「私が手に入れた情報によると今、あの町には隙間の神のトップが

いる。これはチャンスだと思わんか？」

ニヤリと嫌な笑みをヘーレムが浮かべながら言うと、季苑も同じような笑みを浮かべた。

「ククク…そうか。あの町に奴が…よくやった流石は俺様の頭脳だ。何か欲しい物はあるか？」

「形ある財に価値はない。私の目的はお前が町を攻めることで果たされるので、物は要らんよ」

「そうか…相変わらず物欲のない奴だな」

季苑がそう声をかけたが、それを無視し、ヘーレムは部屋から出ていった。

「ボスはあいつを随分信頼しているようですが、あいつは何者なんですか？　ボスにまであんな不遜な態度を取る奴は珍しい」

「ククク…信頼などはしていない。奴の有能さを信用はしているがな」

機嫌よくワインの入ったグラスを回しながら季苑は逸谷に言った。

「不遜でも構わない。礼儀も忠誠も信頼も信用も要らない。我々の関係は利害の一致こそが望ましい。俺様にとって、他人とは、使えるか、使えないか…だ」

季苑は笑ってワインを飲み干した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8872n/

スティグマ

2011年11月29日01時47分発行